異世界渡来伝

駄得島　アキト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界渡来伝

【Ｎコード】
Ｎ８７１９Ｘ

【作者名】
駄得島　アキト

【あらすじ】
突如異世界に召喚された霧島高貴。現実で悪を許せないタチの彼は、こっちでも次々と厄介事に首を突っ込み解決していく！唯我独尊な主人公が送る波瀾万丈な異世界ファンタジー！　やっぱり戻した。更新は毎日二十二時～二十六時の間が目安です。よければ読んでいって下さい。　※六日分は諸事情で休みます。

プロローグ

この異世界には八体の精霊が存在する。彼らはその世界に『ノナ』と呼ばれるものをもたらした。

ノナは大気と同じように、目に見えずとも存在していて、その世界に住む人々とは脳や細胞との原子レベルで繋がっている。そして、そこにある電気信号やＤＮＡなどからの情報からイメージを呼び出し、魔法として現出させることができるものである。要するに、ノナは想像を魔法に変えられるのだ。

だが、扱える魔法はノナによって読み取られる者の位置づけ次第。例えば、ノナを使うことで炎の剣を具現化する事が出来る者がいたら、そいつはそれ以外の事が出来ないのだ。例えば、炎を自在に操ったりだとか、水で剣を作ったりだとかをすることがだ。勿論、人によっては風を吹かせるだけだったり、物を浮かせたりと使える魔法が変わる。これが、ノナによる位置付けだ。

そのため、個人差が出るのは必然だった。力無き者、力有る者が明確化された。彼は自分に属性的な面で強く、自分は彼に圧倒的に強いといった相性による強弱の明確化がされた。

また、ノナとその者との相性次第でその魔法の強さが変動するため、それによって相性が崩れ去ることもある。だが、それは稀な例だ。

他にも、『魔石』と呼ばれるものを体内に埋め込むことで、別の魔法を体に発現させることが出来る。それを利用して、自らの力を上げようとする者も出てきた。

そういった向上心の末、この異世界は自然と強者が支配する弱肉強食の世界と成り果て、ただひたすらに戦争を繰り返していた。

だが、八体の精霊たちはこれを快く思わなかった。故に、ある一人の若者に力を貸すことでその争いの頂点をとり、戦いを治め、それから世界を変えるために、徐々に法律と呼ばれるものを作っていった。

それから、地球で言う政府と呼ばれる組織である『アルトレット』を中心に、首都近郊の抑止力となる自警団『エラルド』、地方やスラム街などの人々の味方となる『ギルド』が設立された。

中でも『ギルド』は、世界全体を四地方に分けた上で、その地方ごとに『メインギルド』を置くことから始まった。そして、そこのトップとして『ギルドマスター』を就任。その後、サブギルドをあちらこちらに設置することで、ギルドは暴力沙汰や犯罪を抑制するための施設として広まった。地球で言うと、警察局と交番のような関係だ。

他にも国の商業を執り行なう『寄合所』や治癒魔法を扱える者が集う『病院』、地域ごとの考え方の違いによって『教会』も作られていった。それにより、徐々に世界は形を変えていき、戦争ばかりだった過去とは違い新たな生活が始まったのだ。

そんな中にも、まだ力でどうにかしようとする者もいるにはいた。だが、そういうやつらはアルトレットの働きで捕らえられ、地球と同じように監獄行きとなっていた。これらの施設は、精霊の期待通りに抑止力として機能しているのだ。

これなら後はしっかりしていれば、過去のようなことは起こらないだろうと思い、精霊は一時そこから身を引いた。とは言え、精霊の力を持って世界を変えたのは青年であり、精霊自身はあくまで裏

方として徹していたので、民衆に大きく語られることはなかった。

「――その精霊様の一体が、なんで僕の計画に加担しているのかな？」

異世界人である青年は、今の状況が作られるまでの過程を頭に入れながら、隣にいる全身真っ黒の巨人に語りかけた。

すると、そいつは平然とした様子で言う。

「俺はお前が気に入った、それだけよ。それに、お前なら俺の望む世界を創ってくれそうだからな」

「ご希望に添えるよう頑張るよ」

青年の計画は、今の世の中を潰し、また昔のような弱肉強食の世界に戻すこと。その計画に精霊の一体が力を貸しているというのだから、これほど滑稽な話は無い。

心もとない返事をした後、青年は目の前の扉を開けた。

そこには、まるで映画のスクリーンに映し出されているような映像が流れている。それは暫く機関車内を映していたかと思えば、少し経てばどこかの街中へと視点を変えた。

ランダムに風景、映像が映し出されるそれは『窓』と呼ばれている。サマナーと呼ばれる術者が別の世界の者や物をこの異世界に引き入れるときに使う物だ。今は映像の流れが乱れているが、サマナーが命令を加えることでひとつの映像を固定して映すこともできる。その中で気に入ったもの、もしくはアルトレットに仕入れるように言われたものをこっちに召喚する。それが、サマナーと呼ばれる術者のやることだ。

そのサマナーは無闇に召喚をしないように、アルトレット内で監視されている。だが、今青年は監視を逃れる手立てを持っている。それを頼りに、これから無断召喚を行うという暴挙に出ようとしていた。

精霊は窓を眺める青年を見て、ひとつだけ問いを投げかける。

「それで、良さそうな人材は見つかったのか？　サマナーよ」

「ああ。それなら、早速適任を見つけているんだ」

そう言って、青年は早速『窓』を固定した。すると、そこには一人の少年が道を歩いていた。

日本人らしく、黒髪黒目が特徴の人間だった。黄土色の薄い中央の空いた上着に黒のTシャツと青いジーンズと一般的な格好をしていて、外見にはなんの変哲もない。

精霊はその彼を値踏みをするような視線で見て、口を開く。

「彼がそうなのか？」

「ああ。ここ数日の行動を見てたけど、彼は僕の計画に組み込むにはピッタリの人材だよ。そこで、何処に送ろうかで迷ってるんだけど、ここはまずいよなぁ」

青年は頭を掻きながら、いかにも面倒くさいですといった感じを出した。その言葉に、精霊は同意を示す。

「送る場所は別にした方がいいだろうな。俺の力でお前が召還したかどうかを分からないようにすることは出来るが、やつがこちらの

世界に来た時にノナとの干渉が起こるから、何処に召還されたかは突き止められる可能性が高い」

ノナはこの異世界にいる生物の脳や細胞と繋がっている。だから、地球人をこちらに送ってしまえば、ノナはその人間と接続される。その時に起こるのが『干渉』だ。具体的に言えば、透明な水の中に黒い絵の具が入ったときに黒い絵の具が全体に浸透するように、その人間の頭の中の情報が、ノナを通じてこちらの世界の者の脳に流れ出てしまうのだ。

その干渉も精霊は抑えることが出来る。だが、ノナを使った魔法に長けている者ならば、抑制した程度では召還自体には気付かれてしまうだろう。そこから逆探知の要領で召還場所は特定されてしまう危険性がある。そのため、召還場所はここかた離れた場所を指定しなくてはならない。

それを念頭に置いた上で、青年は口を開く。

「まぁ、直接あっちに送るつもりだし。特に問題はないんだけどね」

生き生きとしてきた青年は、早速右手を『窓』にかざし、頭の中で召還場所をイメージする。すぐ近くに送る場合でないときは、一々場所を頭の中で描かなければいけない。とはいえ、ノナで魔法を発動する際にも想像から魔法を作らなければならないので、その動作は別に苦に感じることはなかった。

そうして、青年はある国を頭に浮かべ、人が誰も通りそうのない路地裏を意識する。流石に人目のつくところで召還しては目立ちすぎるからだ。

転送の準備をしながら、青年は口元に笑みを浮かべて言う。

「君がこちらに来るまで、二週間といったところか。その間に色々手配しとかないとね。君にこの世界のことを教えてくれる人を。僕は暫く接触を避けなきゃいけないから、信頼できるやつが欲しいところだ……」

これから起こるであろうことに思いを馳せながら、実に楽しそうに青年は召還を始めた。

右手を『窓』からずらすと、もうそこには少年の姿はない。これで二週間後には、とある国の路地裏で少年が発見されていることだろう。

「さて、僕は下準備にかかるかな。ディレイ、君はどうするんだい？」

ディレイと呼ばれた精霊は、青年の言葉に考えてから答える。

「俺は『干渉』を抑えなくてはならないからな。そろそろ行くとするさ」

「そうか。それでは、また会おう」

青年は、その言葉を最後に、開いていた窓を閉じた。

プロローグ（後書き）

地の文改訂。

第一話　召喚、その後

霧島高貴がひったくりを取り押さえるのに、さほど苦労はしなかった。

犯人は逃げる際に慌てていたため、走っている足がもつれていた。それを見て、霧島はちょっと足を引っ掛けてやったのだ。犯人はそれだけで大転びし、痛みでその場にうずくまる。普通、犯罪者というのは痛みをこらえてでも逃げるものだと思うだろう。しかし、こいつは犯罪をしたことがないのか、そういう意識が薄いのか、捕らえるまで抵抗らしい抵抗を見せなかった。

流石に霧島が警察を呼ぼうとすると慌てて弁明を始めたが、彼にとってはそういう言い訳だとか、反省だとかはどうでもよかった。

ひとまず盗まれたものを元の持ち主に返し、霧島は警察の到着を待つ。犯人は泣きそうな顔をして逃がしてくれと喚くが、霧島に逃がすつもりなんてない。加えて、彼が逃げ出したとしても、今集まっている野次馬の合間を逃げ出すのは不可能だろう。

数分して、パトカーのサイレンが聞こえだす。霧島がこれを聞くのももう何十何回目になるため、「やっと来たか」といった感想しか出なかった。だが、犯人は力が抜けたような表情を、野次馬はそれぞれ興味がありそうな表情を顔に浮かべざわざわしている。

パトカーから降りてきた警官はその野次馬の間を進むのに、表情を面倒くさそうに歪める。そして、霧島の顔を見るなり、その景観は親しげに顔を綻ばせてきた。

「やぁ霧島君。まいどまいどありがとうね」

「いえ、これくらい当然ですよ」

警官の言葉に対して霧島はマニュアルに載ってそうな返しをし終え、他の警官に犯人が取り押さえられたのを見届ける。すると、「それじゃあ、これで」とその場から退場した。

「ああ、霧島君！　ちょっと待ってよ！」

引きとめようとする声には耳を貸さず、霧島は先程警官が苦戦していた人ごみを難なくすり抜ける。これももう何度目にもなるので、いい加減に慣れてきていた。

霧島高貴は、いじめや犯罪の類が大嫌いな人間である。

ものごころついたときから、そういうものに対しては偏見や反感を覚えており、自分の力が及ばぬと分かっていてもそれをなくそうとしてきた。

いじめられている同級生がいれば、使える手段を持っていじめっ子を徹底的に叩いた。

時にはそれが大きな問題を呼ぶこともあったが、大人は「まぁ大きくなったら現実を見るだろう」とたかをくくっていたらしい。やる事なすことを特に咎めてはこなかった。

だが、むしろその『悪への嫌悪感』というべきものは、その期待を裏切り年をとるごとに酷くなっていった。

犯罪やいじめを消し去るために、自分の頭の及ぶ限りのことを尽くすほどになっていた。

その対処のために自分から進んで勉強をしていたため、自然と頭は良くなっていった。それの賜物なのか、小学校の高学年くらいのときには、既に達観した自己というものを確立していた。

そうしているといつも、友達から何故そんな事をし続けているのかと聞かれることがある。その度に、霧島はいつも「嫌いだから」と答える。

だったら見て見ぬふりをすればいいと言われるが、霧島にとってそれは無理な相談だった。

例えるなら、霧島にとってそういうのを見た時にわきあがる感情は、本当に言いようもしれない嫌悪感なので、無視することが出来ないでいるのだ。

だが犯罪の対処をしていくにつれ、本当にこんなことをやって意味があるのかだとか、理由ありきの行動に自分個人が妨害をしていいのかだとか、青少年にありがちな、複雑な思考回路に達したことはある。

以前、霧島はその話を父にしたことがあるが、父は笑ってこう言った。

「そりゃあ、いい事にはちげぇねぇさ。結果的に、お前のやっていることは人を守ることと同じなんだからよ、意味がないわけがない。今まで通りで生活するもよし、それでも自分で気に入らなくなったら止めるもよしだ。でもな、そう思えるのは大切なことだっていうのは覚えておけ。人間、誰が相手であっても気遣いができなくなったらおしまいだ」

そのときは妙に納得したのを覚えているが、結局、自分が何に納得したのはわかっていなかった。

とはいえ疑問が少し晴れたのも事実なので、霧島は今までよりも積極的に人と接したり、犯罪を蹴散らしたりしてきた。

そんな、ある日。霧島が大学からの帰路についていた時だった。

家に向かって道を歩いている途中で、突然に重い目眩に襲われたのだ。

思わずよろけ倒れそうになるが、なんとか踏みとどまった。続けて横にふらふらと歩き壁にもたれかかる。

そして、この症状に何らかの病気にかかった可能性を見出し、携帯電話を取り出し救急車をを呼ぼうとした。

だが、それと同時に頭痛のようなものにも襲われ、その痛みに思わず携帯電話を放してしまった。

（な、んだ！　これは――！）

急いで拾おうと屈みこむが、襲い掛かる頭痛と目眩に耐え切れず、携帯に向かって伸ばした手を頭にあてた。

一体これがなんなのか理解出来ないまま、とうとう霧島は道路に倒れこむ。

（誰かいない、のか――？）

もはや目をあけることも辛くなってきた状態で、霧島は必死にあたりを見渡した。

だが、視界には誰一人として人間はいなかった。思わず表情を歪め、歯を食いしばる。

（くそ……）

そして、とうとう病気に似た症状に負け、力を抜いて目を閉じた。

直後、まるで目を閉じるのを狙ったかのように、霧島を中心にし

て道路の上に紫を帯びた黒い穴が出現した。
その黒い穴に、底なし沼に沈むような感じで霧島は段々と飲み込まれていく。

この途中、誰もこの道を通る事無く、誰も助ける者もなく、霧島は黒い穴に飲み込まれていき、やがてその場から消えてしまった。

◆

霧島は目が覚めたら、何処かの路地裏のような場所で、壁にもたれて座りかかっていた。
暫く死んだように気を失っていたが、瞼に重さを感じながらも目を開け始める。夢うつつな気分でいると、さっきの事が脳裏をよぎった。それがスイッチとなって、思考がスタートする。

（俺は、確か倒れて――）

そう思いながら、まだ眠たげな目を右手でこすった。時間が経つにつれ、先ほどの記憶だけでなく、今までの事も鮮明に思いだせるようになった。
そして、周りの景色を認識出来るくらいに視界が回復すると、霧島は辺りの景色が先程と全く違う事に驚いた。咄嗟に辺りを見回す。

「何処だここは……寝ている間に連れて来られたのか？」

この突然の出来事に、どうしてこうなってしまったのか考え出し

た。まず霧島が思い浮かべたのは誘拐だった。だが、誰かがここに連れて来たにしても、可笑しい点が多々あった。例えば、何故屋内でなく屋外なのかとか、辺りに人一人いないのかとか、だ。

霧島は覚めたばかりの頭を働かせるが、いくら考えても理由が分かる訳がなかった。ここに移動するまでの過程を見ていないのだから。やがて霧島は考えるのを止め、再び壁にもたれた。そして、こういう時こそ冷静になるべきだと自分に言い聞かせる。

数秒経ち、多少は気分が落ち着いた霧島は、再度辺りを見渡して考え始めた。

（何よりも、まずどうやって家に帰るかだな……。ここが何処かも分からないし、情報を集める意味でも一旦人がいることろに行かないといけない）

壁にもたれていた重い腰を持ち上げ、足を動かし路地裏から出る。すると、活気溢れる町並みがそこにはあった。そこを行き交う人々は皆楽しそうな顔をしていて、一人だけ重い気分を抱えている自分が場違いなんじゃないかといったふうな印象を受ける。その温度差に少したじろいだが、すぐに足を一歩前へ踏み出した。

まず、見渡す限りの街の様式を観察し始めた。すると、煉瓦造りの建物がメインに建っていて、いつも自分の周りで見るような雰囲気の場所ではないことが分かった。

あまり外国の建築様式に詳しい訳ではないが、アスファルトの道路やコンクリートの建物があるような雰囲気は微塵もない。その上、街灯のようなものがあったり、車が全く通っていなかったりしているので、日本であるのかどうかすら疑わしかった。

（これは一体、どういうことだ――？）

目を閉じている間に一体何が起こったのか、霧島に理解できる範疇を超えていた。なので多少の混乱を覚えた。少なくとも、ここが日本でない可能性がある。

それを意識した瞬間、先程のような重いものではないが、目眩が起きたかのような感覚に襲われた。少しふらつきながら、壁にもたれ深呼吸をする。

そして、少し落ち着いたと感じたらそこを後にした。

現実はまだ受け止めきれていないが、霧島はとにかく行動しようと思った。その第一歩として、歩きながら周囲の人の会話に耳をすませはじめる。

風景からではなく、話されている言語からここが何処なのか知ろうと思ったのだ。

とは言え、霧島は外国語に関しては英語とフランス語が精一杯なので、それ以外ならどうしようもなくなる。

しかし、その心配は杞憂に終わってしまった。

霧島はそこで耳にした会話を聞いて思わず「あれ？」と思い首をかしげる。そして、今聞いたものが間違いかどうかを確かめるために、二度聞きしようとその場に立ち止まった。

霧島の耳が捉えた会話は、店先で二人の男が何かで口論しているところであったが、問題は状況や口論の内容ではない。今霧島が聞いた限りでは、その二人は日本語で喋っていたのだ。

（どういうことだ……？　ここは日本なのか？）

頭の中に眠る知識と現実に起こっている不可解な出来事がいがみあい、霧島の頭を混乱させた。

霧島はなんとか慌てないようにしようと、目を閉じて深呼吸をする。

とりあえず、言語が分かることは把握したので、それは大きな進展になるだろうと考えた。

そうしてボーッとしていると、後ろから誰かがぶつかってきたので、少しよろめいた。

「ああ？　どこ歩いてんだよ、お前」

その際に後ろから声が聞こえた。喋り方から察するに、おそらく不良だろう。

霧島は体制を治しつつ振り向くと、そこにはガラの悪い三人組が突っ立っていた。彼らは因縁をつけるようにこちらの表情を伺っている。

三人組はジッとしている霧島を見、その内の一人が顔を歪めて口を開く。

「おいおい、人にぶつかっておいて謝りもなしかよ。どんな教育を受けてきたんだお前」

ぶつかってきたのはお前の方だろうが、と霧島は心の中で毒づくが、決してそれを表には出さない。その反対に、少し卑屈になったような態度で三人と向き合う。

「ああ、申し訳ありません。ぼうっとしていたもので」

「いやいや、それじゃあすまねぇよぼっちゃん。有り金全部差し出しな」

自分より弱そうな者が相手だからか、味方がついているからか、その不良は顔を近づけて眼を飛ばして来ていた。

霧島はそれを見て、「あーあ、どうしようもないろくでなしがやってきた」と頭の中で呟き、からまれたことをめんどくさく思った。

そして、ため息をつきそうになるのをこらえつつ、出来る限り友好的な微笑を浮かべて言う。

「断る」

殴った。

顔を近づけてきていた不良の顎に、右ストレートを叩き込んだのだ。男は急に支えを失ったかのようによろめき、頭をふらりと回した後、無様に地べたに倒れこむ。

「ッ、テメェ――！」

仲間がやられたことに対し、他の二人は憤りを感じたのか表情を強張らせた。

一方霧島は早速一人をのして鼻息を鳴らすと、格闘技ならば負ける可能性は低いとかたをくくり、二人の出方を伺う。

だが、向こうの二人は霧島の予想外の行動に出た。

向かって右側にいる不良が左拳を握り、今にも殴りかかってきそうな態度を示すが、すぐに殴りかかってくることはしなかったのだ。

それを眉を潜めて見ていると、不意に、その拳の回りに光が集ったのを目撃する。すると、その拳が突然炎を帯びるのを霧島は見た。

「なっ――！」

驚きに大きく目を見開くが、硬直している場合ではないとすぐに思いなおした。拳を構え、二人の男と向き合う。

その様子を見て、二人の表情に余裕が戻る。

「ふん、お前は魔法を使えないのか？　それでよく強気に出られたもんだ」

「魔法……？」

思わず聞き返すが、相手はもう会話は終わりだといわんばかりに炎の拳を霧島に向けた。

炎は纏っていたが、パンチ自体は先ほど霧島が放ったようなストレートだ。右に体を動かしてそれをかわす。その際、拳を纏っている炎から多少の火の粉が散り、多少の熱気が伝わった。

同時に拳にまとわりついていた炎は塊となり、前方へ射出され、建物の壁にぶつかり爆発を起こす。

それで、周りにいた人に妙な喧嘩が起こっている事が伝わったらしい。自分達が被害を受ける前にと、人々が一目散に逃げていく。

霧島は横目で炎がもたらした被害を見、少し怯みそうになった。だが、すぐに体を不良の方へ捻り、その回転に拳を乗せ、不良の顔面にパンチを叩き込んだ。

不良はそれでよろけながら後ろに下がったが、意識を失うことはなかった。むしろ、その後霧島を睨みつけ、再び拳に炎を纏わせる。

霧島は仕留めきれなかったことに後悔しつつも、次の攻撃を流せるように目をみはった。

その、一刹那。

「はーいそこまでー」

不良の立っていた場所が崩れ、砂利が上方向に巻き上がった。まるで花火のような勢いで上がったそれに巻き込まれ、不良たちは体中を傷つけながら吹っ飛び、仰向けに倒れる。

またもや目の前で起こった予想外の現象に霧島は目を見張り、視線を自然と不良達の向こう側へ向けた。

そこには、がたいのいい身長百八十センチくらいの男が立っていた。年齢は三十後半といったところか、渋めの表情をしていて、服装は濃い緑色のマントに黒服と黄土色のズボンで、髪は茶色い。

霧島はその外見の中で、腰に剣を差しているというところに目が行き、目を丸くする。銃刀法違反という言葉が頭を掠め、法律はどうなっているんだと思った。

その男の方は、霧島と目が合うなり、軽く微笑んで軽快に話しかけてくる。

「よう、大丈夫だったかい？」

その言葉を聞いて、霧島は初めて、この人によって助けられたのかと思った。

第一話　召喚、その後（後書き）

１１／１７文章改訂

第二話　一難去って

とは言っても、あまりにも唐突のことに、どう反応していいのかわからなかった。ひとまず、霧島は男の言葉に「ええ、まあ」とだけ答えておく。

（一体、何が起こっているんだ？）

まず、目の前に倒れている不良は『魔法』と言った。それは、本来存在し得ないものであるはずだが、さきほどこの男自身が引き起こした現象が、魔法は存在すると物語っている。

本来、ゲームや漫画小説内で見るものとして定着している魔法が存在することを念頭に置くと、ここがどこなのかという疑問に対する答えは、霧島の中では自然と出ていた。

（異世界……なのか？　ここは）

一方、男の方は霧島が悩んでいるのもいざ知らず、気楽そうに口を開く。

「それにしても、とんだ不運だったな。こんな不良が今時いるなんて、化石もいいとこだ」

「そうですね。本当に危なかったです」

霧島は考え事をしながらだからか、返事は若干適当な雰囲気があった。

それを気にせず、男は続ける。

「ところで、お前は何で襲われてたんだ？」

「ぶつかったら、いきなりいちゃもんをつけてきたんです。……あの、ところでここがどの辺りだか教えて頂けませんか？」

「ここか？　アリア共和国の、ギルド近くだから、シクラ通りだろうなぁ」

男は親切にも答えてくれたが、霧島からしたら通りの名前を言われても理解できないので、国名とギルド（おそらく建物の名前）という名称を頭に入れておいた。

そして、会話が不自然にならないようにと口を開く。

「その、ギルドというのはここからどうやったら行けますか？」

「ああ、それだったらひとつ向こうの道沿いを歩いてたら、一際でかい建物が見つかるはずだ。それがギルドだよ」

「分かりました。どうも有難うございます」

頭を下げてお礼を言い、下手な事を聞かれる前にと、霧島はそそくさとその場を立ち去ろうとした。だが、男はそこで何かを思い出したような表情になって、霧島に問いかける。

「そういえばな、坊主。ひとつ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「？　なんですか？」

初対面の相手に聞きたいことと言われても想像つかなかったが、

道を教えてくれたり助けてくれたりしたので、答えれるなら答えようと振り返った。
そこで、男は空とぼけた口調で言う。
「今、霧島高貴という奴を探してるんだ。何か心当たりはないか？」
「――――！」
霧島はそれを聞いて、思わず身構えた。
日本どころか知っている土地でもないところにいる見ず知らずの他人が、自分の名前を知っていることに背筋が凍る思いをしたのだ。
これが身近ならすぐに「俺です」と答えれる問いだが、状況が違うので霧島はどう答えたものかと、一瞬だが思索した。そこから出来るだけ早めに言葉を繋ぐ。
「申し訳ありませんが、知りませんね。何でそんなことを？」
口調、顔色、共に問題はないはずだと自分に言い聞かせ、男の問いに答えた。
「いやな、霧島高貴ってやつを見つけたら連れて来いっていう依頼を受けてるんだよ。俺はそういう仕事をしてるんだ」
すると、突然言って聞かせるように自分語りを始めた。訝しげに眉を顰める霧島を目に、語りを続ける。
「だが、まずな、何でそんなことをしなきゃいけないのかって疑問だったんだよ。地球人の無断召喚は政府の監視の元じゃ不可能なはずなのに、相手は『誰かが地球人を召喚したから、早めに捕まえて来て欲しい』とだけの命令だったからな」

『地球人』という単語を聞いて、霧島はここが本当に地球ですらないことが分かった。

その上で、目の前の男が自分から言っている言葉を少しずつ記憶していく。どうやら、霧島は自分がこの世界に『召喚』されたらしいことは分かった。

そして、どうせならもっと喋って欲しいと思いながら男の言葉を待った。男は頭を掻きながら言葉を繋ぐ。

「まぁ、その時はどうせ地球人なんていないだろうなぁ、とか思いながら来た訳だが。どうやら、本当にいたようだな？　霧島君」

「え、何で――」

その言葉に、霧島は再び硬直した。何でばれているのか分からないといった風だ。男はにやけた表情のまま、してやったりという感じのまま続ける。

「地球人を召喚出来る奴は、この世界では管理下に置かれているから、普通は地球人の召喚ができないんだよ。さっき似たような事を言ったろ？

そんな中で地球人がいるかもしれないってこの世界の住人に言ってみれば、普通は驚くはずだ。なのに、お前ときたら平然とひとつ返事で返してきた。それは自分が地球人ですって言ってるようなもんだ」

男の説明を聞いていく内に、霧島は事態が飲み込めた。つまり、さっきの質問に対して、こっちの世界の事情を知らない霧島がどう答えようがばれていたのだ。

説明が終わると、男は霧島に向かって近づこうとしてきた。反射

的に二、三歩後ろへ下がる。

それでもまだ近づいてくるので、霧島はとうとう背を向けて走り出した。自然と捕まる訳にはいかないという意識が働いたのだ。遠ざかっていく背中を見て、男は腰の剣を抜き地面に差し込む。

すると、その刺さった箇所を機転に地面が割れはじめ、亀裂が入った。その亀裂は出来ると同時に霧島の方へ追いつこうと、一直線に伸びてくる。

霧島はそれを振り切ろうと走る速度を上げるが、亀裂の速度の方が早いため、撒こうと思っても蒔けそうになかった。

なので、霧島は亀裂との距離がギリギリまで縮んだところで右に飛び、それをかわすことにした。結果、少し転んだ上、亀裂が起こることで飛んできた、多少の石礫を体に受けたが、大怪我に繋がることはなかった。

後にどこかで爆発音みたいなのがしたのは、どこかに衝撃波がぶつかったためだろう。砂利が不良を巻き上げ、上方向に散乱していたさっきの光景を思い出した。

それを見て男は舌を打ち、剣をしまって足を進める。転んでいる今の内に距離を詰め、さっさと捕まえることにしたのだろう。

当然、それを見て霧島は早く逃げようと思った。急いで立ち上がって、おぼつかない足取りのまま走り出す。

そこでさきほどの路地裏が見え、奥を見やると向こうへ続いているのが分かった。こっちは大体の住人が非難しているため人がいないが、向こうには人ごみがあるため、それに紛れて逃げ切れば男を蒔けるのではないかと霧島は考える。

だが、追いつかれて先ほどの魔法を打たれてはもうかわす余地がないということも、念頭に置かなければならなかった。しかし、それでもと霧島は考える。

（一か八か――！）

必死に地を足で蹴り、九十度近い方向転換をして路地裏に逃げ込んだ。男はそれを見て焦りの表情を浮かべる。

「逃がさねぇよ！」

そうして、男は霧島を追いかける。霧島もそれを見て急いで走っていくが、なんとも情けないことに、そこで足がもつれて転んでしまった。

自分でも思わない事態に参ったが、休んでいる暇はなかった。段々と影が近づいてくる。

「全く、ヒヤヒヤさせやがって……」

男の呆れたような声が聞こえたので、首だけそちらに向けると、すぐそこに男の姿があった。これでは立ち上がって逃げたところで、すぐに捕まってしまうだろう。男はその逃げられる可能性を考慮してか、剣を鞘へは納めない。

万事休す。そんな言葉が脳裏をよぎったが、霧島に諦めるつもりは毛頭なかった。

（くそ、何とかならないか……？）

と、そこで霧島は、右腕にあった何かの感触を感じて、ある事を思い出した。それと同時に、男の手が霧島の手を掴もうと伸びてく

る。
瞬間。霧島は右袖に隠していた仕込みナイフを取り出し、闇雲に一回だけ振り切った。すると、それに怯んだ男は慌てて手を引っ込める。

「っな、あぶね！」

流石にそんなものを持っているとは思わなかったのか、男は完全に驚いた様子で霧島を見る。そして、彼はすぐに霧島の背後に目をやった。
そこには、金髪青眼の剣士が、剣を構えて迫っていた。

「チィ！」

男は対処すべき対象を剣士へと変え、互いに剣をぶつけて鍔競り合う。霧島はその頭上の光景を一目見やって、すぐに味方してくれた剣士の方へ逃げた。すると、そこにはもう一人、紫の髪に緑のローブを羽織った、いかにも魔法使いな格好をした好青年がいた。

緑ローブの好青年は霧島に少し微笑みかけると、懐から三つのボールを取り出し、それを目の前に投げる。すると、ボールは破裂し中から煙が沸いてきた。その動作を合図に、霧島の手を引っ張って路地裏の向こうに逃げていった。剣士もそれに合わせて逃げる。
霧島を追いかけていた男は、すぐにその煙を払い向こう側を見たが、そこには既に霧島の姿がなかった。

逃がした。それを悟り、急いで追いかけようとしたが、不意に後ろから声がかかったので振り返る。
その人の事を観察すると、怒ったような目つきでこちらを見てるのが手に取るように分かった。同時に、なんでその人が自分の事を

呼んだのか気になり、声をかける。

「一体何の用だ？　俺は急いでるんだが……」

「どうした、じゃないんだよおっさん。あれやったのあんただろ？」

そう言って若者が指差した先には、砂利と共に散らばっている商品棚があった。どうやら露店を開いていたらしいことは、男にも分かった。加えて、さっきの魔法の被害を受けたのがあれであることも。

次いで、何でこの若者が怒っているかを悟り、男は苦笑いを浮かべる。それを見た若者は一言だけ告げた。

「弁償、してもらえますかね」

今お金を少ししか持ち合わせていなかった男は、今の所持金とバイトを請け負うということで手を打って貰った。

◆

「いやはや、危ないところでしたね」

逃げ切ったところで、緑ローブの男はそう言い安全を確認する。それを聞いて、霧島は少しホッとなった。そうして、霧島は二人に向かってお礼を言う。

「あの、助けて下さって有難うございました」

「いえいえ、構いませんよ。ところで、貴方は霧島高貴君で間違いないですね？」

「……」

また、だ。霧島は再び逃げ出そうかと思ったが、今度は二人いる。いくら隣に人混みがあるからといって、逃げ込んだところですぐに追いつかれるだろう。

加えて、少しは落ち着いて頭の整理も出来てきはじめていたので、少し冷静になって対処することに決めた。

「そうですが、あなた方は？」

その霧島の問いかけに、緑ローブの青年は深々と頭を垂れて言う。

「これはこれは、申し遅れました。私、アイン・ハーベストと申します。こちらは付き添いのラック・カイト」

「あれ？　俺ってそんな立ち居地だっけ？」

「ラック。どうでもいいところで反応しないで下さい」

「……へーい」

ラックの介入は想定していなかったのか、敬語が崩れ罵倒に変わった。それを聞いてラックが返事をするのを聞くと、すぐにまたへりくだった態度に戻る。

「失礼。さて、助けた矢先でなんですが。貴方にはついてきて欲しいところがあるのです」

「……どこ、ですか？」

「ギルドと呼ばれる場所ですよ。そこで、貴方の身に何が起きたのかを説明致します」

「目を覚ましたら俺がこんなところにいた理由を、ですか？」

「はい。元々、私たちは『寄合所』に現れた依頼主より、そのように仰せつかっています」

怪しい。会話の流れで、霧島はそう思った。

だが、この場合怪しいと思えるのはその依頼主の方で、この二人ではない。そうであっても、わざわざ説明してくれるという話を逃すと、この先どうすればいいのか、本当に分からなくなる。

少なくとも、さっきの男のように、急に連れて行こうとするのよりはマシだろうと思えた。というか、思いたかった。

そこで、ひとまずという風に霧島はひとつ尋ねる。

「『寄合所』というのは、どういったところなんでしょうか？」

「住民の依頼を請け負う場でもあり、この世界の市場を牛耳っている組織です。依頼を請け負う組員の特徴としては、普段は『～屋』と言う風に名乗ってくることでしょうか。ちなみに、私は『案内屋』。そして彼は『狩り屋』と言います。

私たちはその名の通りの仕事をこなしていくのが通常なのです」

「じゃあ、今回あなた達が来たのは？」

「私は『案内屋』ですからね。ラックは『狩り屋』ですが、暇があったのと、ちょっとした付き合いがありまして、手伝ってくれると申し出てくれたのですよ」

アインはそう説明し、「これで構いませんか？」と確認してくる。霧島は、一応の理解が出来たのでそれに頷いた。

「宜しい。では、行きましょう」

第三話　ギルドにて

霧島はその後、二人に連れられギルドにやってきた。

後で聞いた事だが、ギルドとは自治組織のひとつで、いわゆる警察と市役所をごっちゃにしたようなところだとか。

この世界は四地方に別れていて、その地方ごとにメインギルドなるものが存在し、それらギルドの管轄化にある小ギルドがこの世界にいくつも設置されているという話を、アインから聞いた。

今から行くのは小ギルドの方で、『ローレイン』という名前のところらしい。暫く歩いて、それらしい建物を見つける。

回りの建物と同じレンガ造りであり、目を引くものと言えば建物自体大きさと、二階正面にある大きめの窓と、一・五メートルくらいの柵がついているベランダくらいしかなかった。

その建物を見て、確認するようにアインに問いかける。

「あの建物がギルドなんですか？」

「ええ、そうです。アリア共和国のギルド『ローレイン』。ここで一日二日、世話になろうと思います。礼儀に関してはまぁ、最低限の敬語ができれば問題ないでしょう」

心の内を大体は見透かしているかのような言葉に頷きながら、「気楽にな」と声をかけてくれるラックと共にギルド内へと入っていく。そこには役所らしい受付の風景があった。カウンター手前に並べられているソファに待機している人達は、こちらの方を軽く見たが、すぐに視線を逸らす。どうやら、あまりかかわろうとはして来ないようだ。

「我々はこのまま奥に向かいます。待たせている人がいるんですよ。……あぁ、靴は脱がなくて結構です」

いつもの癖で靴を脱ごうとしたのを見てか、アインが霧島の動きを止めた。回りを良く見ると、確かに靴箱らしきものは置いておらず、始めから土足で歩き回ることを前提にした建物らしい。

人二人とちょっとの幅の廊下を歩き、二つ目の扉の前でアインの足が止まり、体の向きがその扉のほうへと向かう。そして、軽いノックの後に返事が帰ってきた。

「はーい、どちらさん？」

「アイン・ハーベストです。手筈どおりやってきました」

「ああ、アンタか。入っていいぞ」

部屋の中から応答するその声に、アインは扉のとってに手をかけ、扉を開けた。どうやら中は事務室のようで、入っただけで気持ちが引き締まるような空気がある。

中に入ると、事務机の周りにいる二人の人がこちらを見て会釈してきた。その内、二十代後半くらいの赤髪の青年がこちらにやって来る。

「アーク・ロットだ。ここのギルドのまとめ役をやっている。宜しくな、霧島君」

「はい。宜しくお願いします」

どうやら、既にほとんどのことは話されているらしい。霧島から

改めて話さなければならない事はなさそうだった。求められるとすれば、召還時の状況くらいだろうか。

続いて、アークがもう一人の、二十台前半くらいの、若々しい緑髪の青年を紹介する。

「あいつはエフォード・リー。俺の仕事の補佐をやって貰っている」

今の今まで書類に目を通していた彼は、アークに紹介されると顔を上げて会釈した。霧島もそれに答えるようにおじぎする。

そして、アークは早速用意してある部屋まで案内すると申し出てくれた。疲れているであろう自分への配慮と受け取り、霧島とアインとラックは特に言葉を言うことなく付いて行く。

部屋は二階の、緊急来客用に用意されている部屋へと案内された。ホテルよりも広いが、内装に関してはそこまで大差ない。必要最低限の家具があるだけだ。無論、だからといって何かと文句を言うつもりはない。

「何かあったりしたら、すぐに呼んでくれ。俺かエフォードか、レミリアの誰かが飛んでくるから。……ああ、レミリアってのは青い髪の女だからな」

「分かりました」

決まりきった言葉同士の掛け合いを終え、アークはまた下の事務室へと戻っていった。それを見ながら、アインがラックにむかって口を開く。

そして、三人共部屋に入り、それぞれ椅子やらなんやらに腰掛けてから話を始める。

「あの、とりあえず俺が何でここにいるのか、っていうのを聞いてもいいですか？」

「ええ。大体の原因は分かっていますから。単純明快に言えば、あなたはサマナーと呼ばれる魔法使いに召喚されたのです」

まさに召喚師の代名詞とも言える名前が出てきて、霧島はそのサマナーの詳細を求める。

「他の世界にある物資、若しくは人をこちらの世界に呼び寄せる。それが、サマナーと呼ばれる術者の力です。なので、貴方はそのサマナーに召喚されてしまった、と考えるのが妥当でしょう」

これは、先ほどの男が言っていた召喚師についての話だろう。そこで、続けてサマナーのことに聞こうかと思ったが、その前にひとつだけ、というふうに話題を転換する。

「そういえば、あなた達二人を遣わしたのって、誰なんですか？」

「それが分からないんですよねぇ。貴方をこちらに召還した人の間者である可能性もあれば、召還を察知して、右も左も分からないであろう貴方に同情して私どもを遣わした可能性もある訳で、現状でどちらかということは言えません。

それについては、とりあえず引き受けるだけ引き受けて、貴方に出会ってから考えをまとめようとするつもりでしたが……」

どこかはっきりしないような物言いで、アインは悩むような姿勢を見せた。

それにより一時話題が切れてしまったために、霧島は今度は別の質問を提示する。

「ちなみに、俺が元の世界に帰るにはどうしたらいいんですかね」

「貴方を召還したサマナーに、もう一度元の場所へ転送してもらえば戻れます。別のサマナーでは貴方を戻せません。

なので、当面の目的としては貴方を召還したサマナー探しということになるんですが、まぁそれはお偉いさんに任せましょう」

「？　何で人任せなんですか？」

「そりゃあ――」

アインは何か言いかけた後で、「ああ」と思い出したように呟く。

「貴方は地球の人間ですから、知らないんでしたね。

先の質問に候補として挙げましたが、少なからず貴方が何者かに召還されたということを知っている者はいます。正確には、感知したということですが。

アルトレットの人間ならば、それを即座に知り対応するでしょうし、何より世界で一人の人間を探すなど我々だけでは不可能ですから、まずは政府に探すのを任せて、手がかりを見つけてくれるのを待った方が余計なことをせずに済みます。なので、暫くは様子見ですね」

その理屈を聞いて、霧島はなるほどと納得してその話題は切り上げとなった。だが、新しくアルトレットと呼ばれる単語が出たところを、決して見逃しはしなかった。

「その、アルトレットというのはどういうところなんですか？」

「この世界の立法機関です。建物の名称はアルトレット議事堂ですが、まぁ政府とか国会とか、そういった感じで受け止めて下さい。加えて、先ほどの話に付け足すならば、アルトレットには全てのサマナーが集められています。だから、もう見つかっているかも知れません……が」

期待を持たせるような言い方をした後で、少し間を空けて続ける。

「アルトレットの監視下から免れているサマナーがいる可能性もゼロではないでしょうし、そこはもう様子を見るしかないですね。なので、霧島君には申し訳ないのですが、暫しお待ち下さい」

「分かりました」

そこまでの説明を聞いて、霧島は頷く。それを終えると、「さて」とアインは立ち上がった。

「他に聞きたい事がないようでしたら、私は一時退席させて頂きたいのですが……宜しいでしょうか？」

「ん？　何処に行くんだ？」

今のアインの言葉に、今まで黙っていたラックが口を挟んだ。その問いに、アインは穏やかに答える。

「寄合所に戻るんですよ。霧島高貴がいたこと、依頼は続行である、と報告しなければなりませんので。あぁ、後ついでにあの時の彼がどうしているか見てきますよ」

「あの人は誰なんですか？」

「我々と同じ、『寄合所』の者なんですが……どう見ても襲われている風だったので、あの時は手を出した、というだけですよ。それでは、私はこれで。後、ラックは彼に魔法を教えておいてください」

「あいよ、いってらっしゃい」

ラックの返事を待つ事無く、私は急いでいるんだ、と主張しているかのような感じでアインはさっさと行ってしまった。

霧島としては、この一日の内にもう少し込み入った事を聞きたかったが、暫くの同行は決定事項のようだし、この程度のことで用事のある人を引き止めるほど子供でもないので、何か言う事もなかった。

ラックはアインが出て行ったことを確認し、霧島と向き合う。

「アインはああ言ってたけどよ、どうする？　疲れてるんだったら、今日一日はゆっくりしてもいいんだぜ？」

あまりラックの声は聞いていなかったが、霧島から見てこちら気遣かってくれているところが、事務的なアインと正反対だなと思った。

だが、霧島には休むなどこれっぽっちも考えておらず、今は魔法を使ってみたいという意思の方が勝った。

「いえ、大丈夫です。ラックさんさえ宜しければ、ご指導をお願いします」

「……いざ正面から敬語言われると、こそばゆいな。ま、いいけどよ」

霧島の言葉に独り言のように反応したラックは、座っていた椅子から腰を離すと、親指を外に向けて言う。

「んじゃ、行きますか。今なら庭が開いてるだろ」

第四話　出会いと不穏

「それじゃあ、早速始めるか」

ラックに誘われ、ギルド内の庭に出てきた霧島は、早速魔法を習う事になった。

だが、詳しい理論となるとラックは口で説明しきれるほど覚えていないらしいので、簡単に運用だけという形になる。

「まぁ、まずは覚えている限り教えてくから。覚えてくれよ？」

「分かりました」

霧島の返事に、ラックは改まって言葉を続ける。

「よし、じゃあまずはノナの説明から入ろう。

この世界には、大気と同じような感じでノナっていうのがあるんだ。それは脳から想像を読み取って、魔法として体現する力を持っている」

「つまり、思い描いた事を現実にするってことですか？」

それは結構範囲が広いように思えたので、霧島は疑問を口にし問いかけた。

ラックはその言葉に、弁明するように口を開く。

「いや、と言ってもな。想像できる……と言うか、体現出来る範囲は個人差がある上に結構狭いんだ。

学者とかアインに聞いたら、ディーエヌエーとかがなんとかかん

とかって、込み入った事を言ってくれるけど。
基礎って言ってもやっぱり曖昧なんだが、ノナを圧縮させて光の球体を作るだとか、シールドを張るだとか、単純な魔法だったら全員出来る。
ノナはただの魔法の媒体じゃなくて、魔法そのものになるっていうことだな。
問題はそこからだ。誰かが炎を使いたいと願ったとしよう。けど、ノナによるそいつの位置づけが氷の魔術師だった場合は、そいつは炎のイメージを具現化させることが出来ず、氷の、更に限られた範囲でしか魔法を体現出来ないんだ」

霧島は本当に曖昧な説明だなと思いながら、気になったことを問いかける。

「その、ノナによる位置付けっていうのは、本人には分からないんですか？」

「分からない。だから、今日は魔法自体を体現できればそれでいい。じゃ、早速魔導弾を作ってみてくれ」

ラックはそれだけ告げて、目で霧島の眼前にある岩を示す。あれを破壊しろ、と言うように。
想像しろとだけ言われてほっぽり出されるというのは、霧島からしてみたらいささか不安ではあった。だが、駄目もとでやってみようと思い、頭の中で直径十センチくらいの球を想像する。

自分の目の前にその球が出現する様子を、出来るだけ具体的に、アニメのように頭の中で作りだすと、変化は早めに訪れた。
所詮想像でしかなかった光の球が、その想像の通りに具現化し始めたのだ。視認出来るほどに明るい小さな光の粒子が、ものの数秒

でそれを構成していく。

それを見て、ラックは顔に笑みを浮かべて言った。

「ちゃんと集中しろよ？　じゃねぇと暴走ちしまうからな」

「はい」

霧島は光球から逸れかけた意識を戻す。今度は完成した光球を、狙いがぶれないように集中しつつ岩に向けて放った。

それは見事狙い通り岩に命中し、岩を爆砕する。

土埃や砂利も同時に舞ったが、距離があったのでそれを防ぐために目を瞑ったりとかはしなくて良かった。

魔法を使い終えたのを見て、ラックは表情に笑みを浮かべて言う。

「おーけーだ。思ったより簡単だったろ？」

「ええ、まあ。でも、楽しいですね」

「はっは。そりゃあそうだろうな。俺も最初はそうだったよ、面白くて仕方なかった」

ラックの言葉に、霧島も笑って答える。直後、ギルド内から何故か慌しい音が聞こえてきた。

「なになに！？　何の音！？」

どうやら、今の音で驚いた人がいるらしい。近所迷惑だったか、と今更ながらに思った。

誰がやってくるのかと待っていると、この庭とギルドの境に当たる渡り廊下に一人の少女が現れた。

霧島と大体同い年くらいの少女で、赤いシャツに青い上着と白の短パンといった服装だ。未だ幼さが残っているような顔立ちに、艶のある黒髪はポニーテールになっている。

ついでに先ほど出会った男と同じように、こちらも帯刀していた。霧島は今更武装に突っ込む気はないが、室内でくらい刀は外しておいてもいいんじゃないかと思った。

今の爆音で飛んできたであろう少女は、庭の状況を一目見た後、何処か想像と違ったのか力が抜けた雰囲気になった。

そこで、その少女は霧島に向かって話しかける。

「あの、今の音は一体……？」

「悪い、ただ岩をぶっ壊しただけなんだ。何も起きてないから安心してくれ」

「えぇ！？」

霧島の言葉に、無駄足させられたからか少女は少し大袈裟に声を出した。そして、むしろ何か起こっていた方が良かったかのような溜め息までついた。

お陰で音を立ててしまったことに対して霧島は少し罪悪感を覚え、もう一度「ごめん」と謝る。

「いえ、いいわよ。私が勝手に勘違いしただけだし。それで、貴方達は？　昨日は見なかったけど」

「おっしゃる通り、今日来たばっかりだよ。ギルドの人から聞いてないか？」

「んー、そう言えばお客様が来るって言ってたのを聞いた気はするけど、私はここの人じゃないから詳しい事は知らないわ」

「あれ？　そうなのか」

霧島は対応している時、てっきりギルド関係の人かと思ったが、違うと聞いて思わず声を出した。

「そうよ。私はリナ・ホーストンって言うの。宜しく」

リナの名乗りに霧島は声を出そうとしたが、ラックの方が少し早くに口を開く。

「俺はラック・カイト。んで、こっちは地球人の霧島高貴だ」

「！　地球人！？」

リナはラックの紹介に、目を大きく見開き二度目の驚きの声を上げる。

霧島がさっきの男の話を聞いた限りでは、これが普通の反応らしいので、そのことに対しては深く言わずに「そうだよ」とだけ答えた。

それを聞くと尚一層のこと驚いた様子で、リナは口に右手を持っていく仕草をする。

「でも、地球人の召喚って禁止されてるはずじゃ……」

「それが良く分からないんだよ。気付いたらこっちにいたんだ。サマナーっていうのにも会ってない」

「ふぅん……」

霧島が一応言うだけ言ったが、リナは実感が沸かないらしく微妙な返事を返してきた。

そこで話が終わりそうになったので、霧島はついでにひとつ聞きたいことを質問する。

「ところで、リナさんはどうしてここに？」

「リナでいいわ。私はここに仕事で来ているはずのお父さんを探しに来たの」

「お父さん？　行方不明なのか？」

「違うわ。仕事を手伝おうかなーって思ったのよ」

「？　手伝いだったら、出かけたところを追いかけなくても直接頼めばいいじゃないか」

「頼んでるわ。でも、ついて来るなの一点張り」

リナの言葉を聞いて、霧島はそれはそうか、と思った。どうかんがえても、仕事に娘を連れていく父親なんて、普通は聞かない。

霧島が黙ったのを見てか、今度はラックがリナに問い掛ける。

「ところでよ。見つからなかったら見つからなかったで、家に帰ってなくていいのか？　親父さん、仕事終わって家に帰ってお前がい

なかったら心配するだろ」

「始めはそうだったんだけど。最近は、私が追いかけてるの分かってるようで毎回ギルドに寄ってくれてるの」

「……それ、本末転倒じゃねぇのか？」

「う、うるさいわね！　分かってるんだけどお父さん変にドジばかり踏むし、今日こそは手伝いが出来たらなって思っちゃって、追いかけて行かずにはいられなくて……」

霧島は、良くとれば親思いととれる発言を聞いた。

そして、不意に外側から聞こえた騒がしい声に、今度は耳が傾く。

「何の騒ぎだ？」

その霧島の言葉に、ラックとリナも回りの雰囲気に気付いたのか、ギルドの外側に視線を向けた。

三人の目が捕らえたのは、何かのデモ運動のようなものだった。

先頭を行く人が持っているプラカードに目をやると、『王政反対』と書かれている。霧島はそれを見て、記憶と食い違う部分を見つけた。この国の名前が『アリア共和国』だったはずだった。

本来、共和国というものは、王様や皇帝といった君主を据えずに政治を執り行う国である。指揮官として何者かを置く事はあるだろうが、プラカードの指し示すところが王政である以上、共和国なのに独裁者がいると考えれる状況だった。

（なんなんだ？　これは）

その様子に、多少なりとも不安要素を感じた霧島は、アークに質問をするべくギルド内へ走った。

第五話　アルトレット卓上会議

同刻。アルトレットでは緊急召集がかかっていた。
当然、地球人――霧島高貴のことについてだ。

この世界の最高法機関であるアルトレットの監視の元でこのような事態が起こり、お偉い様方は目くじらを立ててサマナー達を尋問している。
だが、それを今突き止めるのは無理な相談だった。

本来なら誰かが魔法を使えば、その場にどんな魔法を使ったかという痕跡がノナに残る。それを解析できる者に解析させれば、誰がどんな魔法を使ったか突き止める事は出来るのだ。
だが、今回はその痕が見られないため、誰が『窓』を使い地球人を召喚したかを突き止める事が出来ないでいる。
加えて、痕跡が残っていない原因すら分かっていないので、そんな中で数あるサマナーから今回の召喚師を見つけるのは無理だった。

言うなれば、殺人事件の捜査で指紋の無い凶器のみを手に犯人を捜すようなものだ。
そこで、アルトレットは今回の会議でサマナー捜索の方針を決めるべく、会議を開くことにしたのだ。

ギルドマスターの一人であるキル・ゴッセルもまた、その会議に呼ばれた参加者の一人である。服装は青を基調とされた正装だが、頭には赤い帽子が乗っかっていた。
他、この召集により集まったのはキルを含むギルドマスター四人全員と、エラルドから四人、アルトレットから十人の計十八人が来ている。

高価そうな石で作られた馬鹿でかい縦長テーブルを挟むように席が9×2置いてあるので、これで全員なのは間違いなかった。
後は、テーブルの向こう側に大きな椅子がひとつあり、そこに老人が一人鎮座している。

ただ、上記の問題だけならこれだけの人数を集めなくても良さそうだが、時期的には定例会議のタイミングと重なるとのことで、二つともこの日に行うことになったのだという。
本来の予定を繰り上げてでも今回の問題に当たろうとしているのか、とキルは思った。

「なぁ、ベクター。お前、地球人が何処に召喚されたのか分からないのか？」

キルはそこで、隣に座っている黒髪に黒いスカーフの、二十代後半くらいの男に問い掛けた。
ベクターはそれに、静かな声で応答する。

「ある程度の目星はつけている。今日はそれの確認もしたくてやってきたんだ」

「……そうか」

それを聞いてキルは納得したふうに口を閉じた。今日の会議には『干渉』を抑えるために動いた精霊も出席する予定らしいので、詳しい話はその時にでも聞こうと考えた。
そうして、キルが今日これからのことに頭を巡らせていると、「静粛に」という声が耳に届いた。会議の始まりだ。

「えー、それでは、『地球人違法転送対策会議』を執り行いたいと思う。皆のもの、静粛に」

進行役の老人の声に、全員が沈黙で答えた。その様子を見て満足したのか、「よろしい」と声を出す。

「さて、今日呼び出しをした理由はもう存じていることだと思う。今回行われた地球人の無断召喚は、非常に許し難い行為だ。よって早急に犯人確保に乗り出していきたい」

老人の声が響く。するとそこで、会議に参加している一人の手が上がった。外見からして若々しく正装の色が緑なので、エラルドに入った新人だと一目で分かった。

老人は今にも閉じてしまいそうな目を持ちながらも、その手を見逃さずに話を進める。

「お若いの。何か質問かな?」

「その、地球人の無断召喚というのは、そんなにも危険な事なのですか? 早く見つけなければならない、というのは理解出来るのですが、危険とまではいかないのでは……」

その問いに、老人は「成る程」と大きく頷いて答える。

「確かに、聞いただけでは危険に思えないかもしれない。だが、実は地球人を召喚するという行為は非常に危なっかしいものなのだ」

「と、申しますと?」

青年は更なる説明を求め、老人はその追及に応じた。

「地球人を召喚した際に『干渉』が起こるのは言うまでもないな？世界外の生命体の出現により、ノナに乱れが生じることだ。ここで思い出して欲しいのは、ノナは我々が魔法を使う時に脳と繋がっているということ。そのせいで干渉が原因でノナの乱れが起こったときに魔法を使っていた者がいた場合、それが原因で脳にダメージを負ってしまう者が出るのだ」

「え……！」

質問をした男は老人の言葉を聞いて、見るからに分かりやすく驚いていた。キルはこれが初耳ではないので、別段反応はしなかったが。

老人の言葉が続く。

「今回のサマナーは自身が突き止められないようにするための工夫をしている。もし、これを機会にまた地球人を召喚した場合、その被害は更に拡大する。この世界は地球とは違って、魔法を安心してつかえなければ私生活にも影響が出る。よって、迅速に今回の事件を起こしたサマナーは捕らえなければならない。理解出来たかな？」

「はっ！　お時間頂きまして、申し訳ありませんでした！」

その言葉を最後に、青年の発言は終わった。老人はそれを見届けると、再び十八人の参加者に向けて言葉を投げる。

「さて、今の事を知っていた者も知らなかった者も、理由の一つとして今のものが挙げられる。これだけでも、今回のサマナーを野放しにしておく事がいかに危険か分かってくれたかと思う。

だが、このままサマナーを当たっていても埒が明かないので、ベクターに捜索隊の手配をして貰った。首尾の方はどうなっている？」

「は。アリア共和国を中心にして周りの数カ国に私の部下数十名を配置しております。見つけ次第連絡が入るものと見て間違いありません。そこで、念のため『干渉』の抑制に当たっていた精霊から話を伺いたいのですが、宜しいでしょうか？」

老人の言葉に慣れた感じで答えるベクター。その要望に老人は首を僅かに縦に動かし、口を開ける。

「大丈夫だ。今回の抑制に貢献した精霊を既に呼んである。ディレイよ、姿を見せて頂けますかな？」

「……了解した」

直後、老人の背後に漆黒の巨人が現れた。深淵の淵から這い出てきたかのような雰囲気を持つ彼だが、言葉がくぐもっていたりなどしておらず、発音はしっかりとしていた。

ディレイが現れた事を確認したベクターは、早速ディレイに向かって問いかける。

「ディレイよ。地球人が召喚されたのはアリア共和国周辺で相違ないな？」

「ない」

「ならば、もう少し正確な範囲を測ることは出来ぬだろうか。より正確な情報を頂ければ助かるのですが」

「それは難しい。『干渉』に対応するのが早かったからと言って、『窓』から遠くに召喚されている今回のケースの場合、正確な地点は求められない。召喚場所が『窓』により近い場所ならば、特定は可能だったのだが……」

「そうですか……。分かりました。お答え頂き、有難うございます」

ベクターはそれを聞いて、発言を終了させた。

老人もそれを見て話題を変える。

「さて、続いてこのアルトレット内部に匿っているサマナーの尋問の方なのだが、これが非常に難航している。

誰も『窓』を使用していないとの一点張りでな。事実現時点で怪しい者が見つかっていないという困った状態になっているのだ」

「爺さん！　もうそんなじれったいことしねぇでよぉ、厄介になるんなら全員殺しちまえば済む話じゃあねぇか！」

発言権を得る事もなく、ギルドマスターの一人である異様に図体のでかい男が口を出した。それを聞いて、キルは思わず舌を打つ。

（またかよ……人が真摯に話を聞いているっていうのに）

キルだけでなく、その言葉を聞くなり会議中が呆れたような雰囲気になった。唯一、先程の新米だけがそのセリフに憤る。

「な、何を言っているんですか、ガンツさん！　いくらなんでもそれは――」

「いい。黙れ、お前」

「え！？　で、ですが……」

直後、すかさず隣にいた気難しそうな奴が止めるが、ガンツの勢いは止まらない。自分の意見に若い奴のケチが入ったからか、鼻で笑うように言葉を紡ぐ。

「いいや！　殺してしまうべきなんだよ、んな奴らはよぉ！　どいつもこいつも、しらばっくれりゃあ事が穏便に済むと思っていやがる！　黙ってれば、相手は呆れてそのうち自分につっかからなくなるだろうと思っていやがる！　ああ、いけすかねぇ！　なんだったら今からいって俺自らぶっ殺しに――うっ！」

ガンツがそうやって勢いづいてると、悲鳴を境に急に電池が切れてしまったかのように止まり、苦しそうに硬直して倒れていった。その隣には、注射器を手にしている女性が一人いる。

その一部始終を眺め、キルは軽く声をかける。

「毎度毎度の事だが、悪いな。俺の魔法じゃ穏便に済ませれない」

「別にいいわよ。たまに薬の実験になるし、むしろ助かるわ」

女性はあくまで陽気に、体を痙攣させながら失神しているガンツを見て言った。それはそれで問題がある、とキルは思ったが、自分が実験の対象になるのはごめんなので静かにしていた。一連の流れを見終わった老人は、続きを話す機を今と見て言葉を続ける。

「まぁ、オホン。そこで、貴方がたにひとつ呼び掛けたいことがあるのです」

呼び掛けたいこと。
おそらく、ガンツの耳にも通しておきたかったことだろうが、今となってはガンツが目覚める前に会議を終わらせることを優先しているようだ。
その意を汲んでか、話の早さに異論を唱える者はいない。そして、老人もすぐに口を開いた。

「これは憶測でしかないのだが、もしかしたらアルトレット内で管理している以外――外部にサマナーがいるのかもしれない、ということだ」

「……成る程。一理ありますね」

アルトレット所属の、真面目そうな女性が老人の言葉に同意を示した。だが、流石若手というべきか、また青年が異論を唱える。

「ち、ちょっと待って下さい！　全てのサマナーはアルトレット内に匿われているはずじゃあ――」

「だから。黙れ、お前」

何度も隣で喚かれてうっとうしく感じているのか、その気難しそうな男は強めの口調で青年に命令した。
それを「よい」とたしなめ、老人の言葉が再開する。

「確かに、そうだ。我々は精霊と共に世界中からサマナーの才能を持つ者を探し、アルトレット内に連れてきた。だが、今回のサマナーはどういう訳か残留ノナを消すことが出来ている。
我々の監視を逃れるためにその方法を使われていたとしたら、そいつは普段も自分がサマナーであることを隠して生きているのだろ

う。そのためにサマナーとして監視下に置けていない可能性があるのだ」

「サマナーが自分がサマナーであることを隠し、そこいらに潜伏している可能性がある……ということですか」

「そうだ。もういいかね？」

「は、は！　何度も申し訳ございませんでした」

「うむ。――さて、このことを踏まえて、貴殿らに頼みたい事があるのだ。サマナーの事は我々アルトレット、地球人の方はベクターに任せ、各自で『残留ノナを消す』魔法、若しくはそれに近い魔法を扱える術者を探し出して欲しいのだ。時は一刻を争う。是非とも急いでくれ」

それを聞いて、この場にいる十七人とも要件を了解した。おそらく、定例会議の方が終われば、これから大規模な人探しが始まるだろう。

それによってこの事件にケリがつく事を祈るべく、老人はさっさと次のプログラムに進んだ。

第六話　魔石『ノナタイト』

アルトレットが会議を進めている頃、霧島はアークから情報収集をしていた。そこで、ひとつ気になる単語が浮上したらしく、それについての質問を投げていた。

「ノナタイト？」

「ああ、『魔石』と呼ばれている物質の一種でな。この国にやってきた王様まがいの奴は、アルトレットにいる誰かのくちぞえでそれを回収しにここへやってきた」

あれから霧島と、勢いに乗っかってついて来たラックとリナはアークの話を聞いていた。

聞くと、この国に王様と呼ばれる者がやってきたのは今から約四ヶ月程も前で、それからこの国の採掘権を取り上げ好き勝手にノナタイトを掘り出しているらしい。

霧島は、アインを質問攻めにした時と同じように気になったことを順に聞いていく。

「その、ノナタイトというのはどんなものなんですか？」

「簡単に言えば、魔力を上げることが出来るんだ。

魔石の中には、新たな魔法を発現させるものもあるんだが、そっちは使う事にリスクがつくのにノナタイトはリスクがない。

手頃に簡単に強くなれちまうもんだから、ノナタイトの鉱脈のある国では輸出禁止令が敷かれているって代物だ。

そうなると鉱脈のないところでは手に入りにくいものになるから、希少価値の方もばかでかくてな。これひとつで強者にも金持ちにもなれる、危険なものだ」

「それを、アルトレットで欲しがっている奴がいるってことですか」

聞いている限りでは、起こって当然の騒ぎのように聞こえた。嫌に大々的だが、悪人の間では真っ先に仕入れの対象になっていそうなものだ。

だからか、霧島はあの王様がそれだけのために来た訳ではないのだなと思えた。ただ採掘権をとられたというだけなら、『王政反対』などというプラカードは上がらない。

「アークさん。王様まがいのその人は、もしかしてこの国の政治や方針なんかにも口出ししてきたりしていますね？」

それを聞いて、アークの目が動いた。図星だなと霧島は思った。霧島は今の問いに対しての答えを口から聞くべく、アークが喋り始めるのを待った。

アークは霧島の問いに、まるで愚痴を零しているかのような雰囲気で答える。

「あぁ、そうだ。何かの対策のためにこのような事を呼び掛けましょう、といったことを実践しようとしたらすかさず横槍をいれてきやがる。

何で口出ししてくるんだって聞いたら、王が政治に口を出して何が悪い、とか私に逆らえばアルトレットが貴様らを潰すべく動いてくるだろう、とか言って好き勝手だ。正直、うんざりしているのさ」

その言い分を聞いて、霧島は納得したように「成る程」と言った。

「そいつを叩く事は出来ないんですか？」

「ああ、そうだな。本音としては叩いてやりたいが、生憎俺が真っ向から戦えばアルトレットにいるあいつの上司に国ごと潰されかねんってのが、またじれったい話だ」

霧島はそのアークの言い分を聞いて少しものを考えるような仕草を見せると、またアークに話しかける。

「アークさん」

「何だ？」

「協力させてください」

「……は？」

軽く呟いただけのような霧島のセリフを聞いて、アークは口をぽかんと開けた。リナとラックも今のを聞いて、霧島の後姿を訝しげな目で見ている。

一方の霧島はアークの反応が薄いことが気に召さなかったのか、少し眉を顰めたかと思うと口を開いた。

「その王を追っ払いたいんですよね。良かったら協力させて頂けませんか？」

「はあ！？」

今度はちゃんと霧島の言葉の意味を汲み取ることが出来たらしく、

アークは驚いた。顔は思いきり歪み、顔面全体を使って訝しさを表現している。

「お、おい霧島？　お前何を――」

ラックの控えめな声が霧島の耳に届いたが、当人はアークから視線を逸らそうとしない。

アークの方はアークの方で、今日やって来たばかりの赤の他人がいきなりこんな事を言い出しているので、思いきり対処に困ったという風に戸惑っている。

それから数秒、四人共動きは見せなかったが、やがてアークが溜め息をついてから口を開く。

「駄目だ。今日来たばかりのお前を巻き込む訳にはいかないんだよ。近いうちにアルトレットから誰かがお前を探しに来るはずだから、それまでの間俺がお前を預かることにしてるんだ。

そんな状況で、しかも何の策も無しに危険な所に連れて行く訳にはいかない」

「……そうですか」

霧島はこれ以上何を言っても無駄そうだと思ったのか、アークに食い下がるのを止めた。

そして、この部屋を後にし与えられた部屋へと戻る。ラックとリナは、計らずとも霧島に振り回されて終わった。

◆

アインは、先程霧島がいた町並みにいた。喧嘩により起こった被害はいつのまにか魔法で修復され、活気も戻りつつある。
そんな中、全く幸せそうでない奴が一人いた。

「……何をやっているんですか？　アベル・ホーストン」

「バイトだよ。みりゃ分かるだろ？」

若干呆れた風なアインの言葉に、アベルは投げやりに答えた。これ以上喋りたくないといった感情も混められていそうだったが、構わずアインは続ける。

「私の耳が確かなら、ベクター・ヒュルクの依頼でここに来ているのですよね？　そんな重要な案件の最中に、何を馬鹿丁寧に弁償しているんですか、貴方は」

「あーもう、うるせぇよ！　何もせずにここを離れるとか、後味悪いだろーが！　良心が痛むんだよ畜生！」

「……」

アベルのやっていることは間違いではないが、今の状況での選択としてはアインを呆れさせるのには十分だった。
アベルはアインやラックと違い寄合所の正組員なので、依頼中に起こった被害には手当が出され、寄合所の方で相応の処置をとってくれるはずなのだ。それなのに、アベルはその道を選ばず自分で弁償しようとしている。

アインはその生真面目さに馬鹿馬鹿しいといった印象を持ったのか、溜息を一つついた。
その様子をアベルは苦い顔で見て、次に人が通り掛かるのを見るや全く売れなさそうな営業トークを始める。正直、見るに耐えない。

「取り敢えず、明日貴方のところに霧島高貴を連れて行けば宜しいのですね？」

「ん？　あぁ、悪いな」

「構いませんよ。アルトレットの方でそのように方針が決まっているのでしたら、従ったほうが懸命そうですから。
私の方の依頼主からサマナーを追うためにも、霧島高貴を手元に残しておく事は考えましたが、期待薄そうなのでねぇ。
では、私はこれで」

アインはアベルに一礼すると、そそくさとその場を立ち去った。

◆

「城に行くぅ！？」

「はい。何かもう、そういう奴がそこにいるってだけで気分悪いんでちょっと行って来ます」

霧島の言葉を聞いて、ラックは思いきり驚きの声を上げた。

行くための動機もそうだが、怖いもの知らずの無鉄砲さにただただ唖然としていた。

加えて、霧島の中ではもう決定事項らしく地図で城の位置を調べ始めている。

これをもしアインが見たら、ばっさりと意見を切り捨てられるのだろうが。

一方のリナは霧島の様子を眺めていて、いつの間にか乗り気になっているのも問題だった。

「おい、リナ。何でお前はそんなに生き生きしてるんだよ」

「だって、これを成功させればお父さんを見返すチャンスじゃない。逃す手はないわ」

「……」

二人の若い人間を前に、ラックはすっかり流れに身を任せるままになっていた。

（こいつ等、絶対言ってもきかねぇタイプだよな……どーしよ。今の状況をアインに知られたら滅茶苦茶怒鳴ってきそうなんだけど。

でも、どうやって止めれば……）

ああだこうだ、ラックは頭の中でどうにかこの二人を止める術はないものかと思いつめるが、何もいい考えが思い浮かばない。

そんな中、リナと霧島は城までの道のりを相談をしながら荷物を纏めている。

ラックはそれまでどうにかして止めようと声を投げていったが、

二人とも聞く耳持たずで、とうとう、出発する事になってしまった。

ラックは霧島を見張る役目があるので強制参加。よって、三人での旅路である。

「いいか？　絶対に危ない事すんなよお前ら。一応年長だけど責任取れねーからな？」

「分かってますよ。じゃ、行こう。二時間も歩けば着くから」

「思ったより長いのね。しかも、城なのに森の中って……」

「確かに変わってるな」

人の話を聞いているのかいないのか、二人はさっさと先に歩いていった。

その様子を不安げに見守りながら、ラックもまた歩を進める。

三人がそうやって出て行くのを、見ている存在がある事を知らずに。

第七話　アリア国王

霧島達が出て行った頃レミリアが玄関に寄ると、そこに外へ出て行こうとするエフォードの姿を確認した。何やら切羽詰まったような雰囲気だ。

それをみて、レミリアは訝しげに表情を歪めると、エフォードに声をかける。

「エフォード。そんなに急いで何処に行くんだ？」

エフォードは突然後ろから声がかかってきた事に吃驚したらしく、体を跳ねさせると首を後ろに回す。

「レミリア……驚かさないでくれ」

「悪かった。それで、何処に行くんだ？」

「あ、あぁ。姉さんからさっき連絡があって、急に帰らないといけなくなったんだ」

エフォードには一人の姉がいるというのは、ギルド内で知らない者はいなかった。レミリアの印象では、清楚と可憐という言葉がピッタリ当て嵌まるような人だと聞いていた。

それを聞いて安心したのか、レミリアは顔に安堵の表情を浮かべ口を開く。

「そうか。そういえば、お前は最近自宅に帰ろうとしていなかったな。

こんなことを言うのもなんだが、最近は物騒だから、しっかり姉

を守ってやれよ？」

「……はい。有難うございます」

レミリアの心遣いにか、エフォードは一礼してその場を立ち去った。

玄関でそれを見届けると、レミリアは早速アークの所へ行きエフォードの事を告げようと思った。

◆

大体二時間の時が経過する間、霧島たち三人は何事も無く道を歩いていた。

「ねぇ、後どれくらい？」

「もう少しだよ。城壁が見えてくるはずだから」

リナの問いかけに霧島が答える。このやり取りも、数回行われた。ラックは二人の様子を見つつ、これからどうなるかということに頭が向いている。

その上で、念のためという感じにラックが霧島に問う。

「霧島、お前これからその城に行ってどうするつもりなんだ？」

「とりあえず話をしてみます。アルトレットがどういうところか知

りませんが、訴えてみてどうにも出来そうにないかを見てみるつもりです。どうにも出来そうにない場合は、一旦退きますけどね」

「あれ？　退くんだ」

勢い良く出てきた割には小さいなとでも思ったのか、リナは予想外の答えを聞いたという風に言った。

霧島が言葉を続ける。

「流石に自分一人でどうにかなるなんて思ってないからな。退いた後はいづれ来る迎えにアルトレットまで連れて行って貰って、それなりに地位のある話の聞いてくれそうな人を探してこのことを言う。それでなんとかなるだろう」

「まぁ、無理とは言わないが。何処からそんな自信が来るんだ？」

「自信があるとかないとかじゃないんですよ、ラックさん。成功させるんです」

霧島がそう言い切るのを聞いて、とんでもない考え方だな、と思った。

言い回しとしては格好いいかもしれないが、掲げる意思が高すぎてその言葉に現実味がともなっていないからだ。

今更ながらどう頑張ってでも止めるべきだったかと思ったが、霧島本人に無理して張り合うつもりがない事を知って少し安心していた。

（話だけなら、相手も霧島の言うことを聞くだけで蝿を追っ払う程度の反応しか見せないか……）

ラックはもし自分がこれから出会う王様だったら、と考えそんなことを思った。
そう思っていると、不意に霧島が立ち止まったことに気付いた。
何事かと正面を見上げる。
すると、そこには石で作られた馬鹿でかい城壁が立ちはだかっていた。

思わず目を見張るほどのその大きさに、霧島達は圧倒されて立ち止まる。
ラックにはまるで、これからしようとしている事の難易度の高さを視認しているかのような気分になった。
だが、霧島は同じように感じなかったらしく、むしろ「行くか」と意気込んでいる。それはリナも同じようだ。

ラックはそれを見て驚いているのか、頬を少し引き攣らせていた。
それに気付かず、霧島は方針を決める。

「とりあえず、正門を探すかな……。この城壁を一周すればその内当たるだろ」

「そうね」

そう言った後、三人は城周りの探索を始めた。
良く見ると、城壁周りには木どころか雑草すら生えておらず、堀池の水も綺麗で手入れがしっかり行き届いている。

そうして、辺りを観察しながら歩いていると、角をひとつ曲がったところの奥に城門を見つけることができた。城壁から頑丈そうな橋がかかっており、その傍には馬車が止まっていた。
霧島はそれを見つけるなり、真っ直ぐ橋の方へと歩き出す。

すると、不意に森の方から人影が現れた。
ラック、リナ、霧島の三人共それに気付くや互いに背を合わせ臨戦体制に入る。最も、霧島がこの世界でまともに戦えるかどうかは甚だ疑問だが。

奇襲を仕掛けてきた何者かは、別段顔を隠すなどはしていないが、甲冑を着ているので城の兵士ではないかと疑うのが妥当だった。その状況を把握し、ラックは舌を打つ。

「おいおい……こいつはどういうことだよ」

「それはこっちが聞きたいですよ……」

流石に霧島も今の状況に苦笑いしつつ、ラックの発言を拾った。しかし、リナだけはこの状況でもテンションが下がることはなく、むしろ上がっているように見える。その印象を肯定するかのように、リナは腰にさしてあるレイピアを抜いて言う。

「とにかく、今はこいつらを片付ければいいんでしょ？　じゃあさっさと――」

「はやとちるなリナ。頼むから」

予想以上の突き進み具合に、霧島はリナにストップをかけた。それが気にくわなかったのか、リナは不機嫌そうに表情を歪め抗議に入る。

「なんでよ。戦う意思を見せて来てるんだから、こっちからも応戦すべきじゃないの？」

「だから、慌てるな。こいつらは剣を抜いてはいるが、その気になればいつでも不意打ちが出来た状態でわざわざ姿を曝してやってきたんだぞ？　何か狙いがあるんだ、きっと」

霧島は暴れようとするリナを抑えようと言葉を並べた。すると、城門の方から何かが聞こえてくるのに気付く。

「ほう、中々勘がいいじゃないか。坊主」

その声に首を動かすと、赤い毛皮の上着に王冠と、よくあるファンタジーに出てきそうないかにもな王様姿の男がそこにいた。

そいつの姿を見るなり、霧島は声を出す。

「あんたが、アルトレットから来たっていう――」

「いかにも。つくづくベルン殿には感謝しなくてはな。王になるという、この老いぼれの夢を叶えて下さったのだから」

どこか感慨にふけるようなことを言い終えると、アリア国王は霧島の方を見てニヤリて笑う。

「お前達だな？　私に逆らおうという者共は」

「……何故それを知っている」

アリア国王の言葉に、霧島は内心驚きながらも問いかけた。霧島達はアークと会話をした後、ものの数分でここまでの出発を決意しやってきている。そのため、誰かに知られたとしても伝わるまでが随分早い、と霧島は思った。

霧島がそう思って聞いたであろうことを分かったのか、アリア国王は笑みを崩さずに続ける。

「分かるぞ。お前が地球人だとは知っている。そちらの連絡手段である携帯は確かにこちらの世界には仕入れていないが、こちらの世界にもちゃんと電話代わりになるものはあるのだぞ？
まぁ、今回はそれを使った訳ではないのだが。なぁ、エフォード君」

「――！」

余裕しゃくしゃくといった雰囲気で続く言葉の最後に言われた単語に、霧島のみならずラックとリナも大仰に反応した。
その反応を裏切らず、アリア国王の後ろからエフォードの姿が見えた。アリア国王は上機嫌で続ける。

「お前たちがギルドからこちらへ行こうとしているところが見えたらしくてな。馬車を飛ばして駆け付けたんだそうだ。わざわざそこまでしてやって来てくれるとは、私は上司だけでなく部下にも恵まれているらしい」

軽い説明を聞いて霧島の脳裏に、スパイという単語が浮かんだ。同時に、見られていた事に気付かなかったということに一種の困惑を感じた。

「でも、一体どうやって……道は俺達が先に通っていたはずじゃあ」

「生憎、ここへ通じる道は一本ではない。エフォードはそちらを通ってやってきたのだ」

霧島の言葉を軽く受け流したアリア国王は、咳払いをして次の言葉を言い放つ。

「さて、この者達を地下牢へ入れろ。地球人だけは私からアルトレットに届けるから、丁重に扱いたまえ」

第八話　脅し

霧島達がいなくなったのにアインが気付いたのは、ギルドから与えられた部屋に入った時だった。
寄合所での用事が早く済んだために、あれから二時間と経たずに元の部屋に帰ってきたというのにラックと霧島の姿が忽然と消えている。
それだけで、額に青筋を浮かべる理由としては十分だった。

アークとレミリアによると、リナ・ホーストンとエフォード・リーも、訳有りとはいえギルドにいないという。
現時点の状況が分からない。アインはそう頭の中でぼやくと、すぐにアークに言葉を投げる。

「アーク・ロットさん。最後に霧島高貴、若しくはラック・カイトに会った時、どんな話をしましたか？」

アインのその言葉を聞いて、アークは少し前に霧島が乗り込んできたことを思い出しつつ言う。

「アンタが出て行ったすぐ後くらいに、アリア国王についての愚痴を語ってやっただけだ。
……まさか、それだけでアイツはあの野郎のいる城まで行ったって言うのか？」

「だとしたら、とんだ阿呆ですね。力の差に構わず、手当たり次第に首を突っ込む……今まで痛い目に会った事がないのか、ただの馬鹿なのか」

愚痴を零しながら、アインはこれからどうするかを考える。
まず、追いかけなければいけないのは確実だった。安全にアルトレットに送り届けるためにも、少しも危ないところには置いてはいけない存在だからだ。

「ひとまず、馬車の用意をして下さい。追いかけますよ」

「ああ、分かった。レミリア！　急げ！」

「はい！」

レミリアと呼ばれた青髪の女剣士は、急いで外に出て支度を始めた。
そこでふらりと、アインが何処かへ行こうとしているので、アークはそれを止める。

「アイン、何処へ行くんだ？」

「ちょっとそこらへんを歩くだけですよ。準備に少しかかるでしょう？
もしかしたら、近場にいるかもしれませんからね」

「分かった。それなら俺も行こう」

「いえ。アークさんは残ってレミリアさんを手伝って下さい。後、戦闘時の備えも――」

「部下を数名連れて行くさ」

「では、頼みます」

アインは言葉の応酬を済ませると、休む間無く再び玄関の扉を開ける。

そして辺りの散策をすべく、人ごみの中へと消えて行った。

◆

暫く。

霧島達三人は、あれから抵抗虚しく地下牢まで連れて来られた。

誰もが予想外だったであろう、エフォードの介入を受けたがためだ。

まさかこうなるとは思ってもいなかったがために、三人が受けた衝撃は計り知れない。

今になっても霧島は何か思案しているが、ラックはアインが来るだろうと踏んでいるからか比較的落ち着いていた。

唯一静かでないのは、リナだった。

脱出方法を探るためにか、しきりに牢内をうろうろしている。

実質、この牢屋は地面を刳り貫いて部屋を作っただけのようなものなのだが、それでも地中から道具無しに抜け出すのは骨がいる作業だ。

霧島は魔法で抜け出せばいいのではとも思ったが、ラックによると牢屋の壁に魔法を打ち消す効果があるらしい。

そんな訳で、今三人は全く何もしていない状態だった。

いい加減暇を持て余したのか、ラックは気だるそうにリナに問いかける。

「リナー、何か見つかったか？」

「何もないわ」

「ま、だろうな」

リナはきっぱりとそれに答えるが、一方ラックは自分で聞いておきながら大して興味がなかったのか、ゆっくりとした口調で言った。その応酬を皮切りに、リナはやはり無理だと悟ったか、諦めて地べたに座る。

そして横目で霧島を見やってから愚痴り始める。

「ってか、アンタも何かしなさいよ。ジッと座ってないでさ」

「んー……そうしたいのはやまやまなんだけど。ナイフくらいしか仕込んでないぞ」

「え？　何で地球人がナイフ常備してるの？」

「色々と使うから、かな」

「答えになってないわよ、それ」

しれっとした霧島の言いように、リナは何を言っているんだという風に言った。

「と言うより、こっちの世界で地球ってどれくらい広まってるんだ

？　結構知ってるっぽいけど」

「最近では学校で『地球学』とかいう教科も出来てるわよ。私たちの世界と違って、そっちには機械文明があるから教育材料は多いらしいわ。法律の違いとかも地味に学ぶ。
　その内携帯電話がこっちに来るんじゃないかって話も出てるし、義務教育化するのも近いんじゃない？」

「それって地球以外の世界もあったりするのか？」

「あるらしいけど、今のところは地球に視点を置いてるみたい。詳しいところはサマナーじゃないから分かんないけど」

「あるのか」

　霧島はそもそもこの世界は宇宙上に存在している惑星の一つなのか、というところにまず疑問が行ったのだが、今こんな話している場合じゃなくないかと思って止めた。
　ナイフを手にしたときに牢の鍵を開けれないかとは思ったが、そもそも錠前が存在しなかった。おそらく、ロックの魔法を使える奴でもいるのだろう。

「……魔法って厄介だなー」

　誰にとも無く言った霧島の言葉を、ラックは笑みを浮かべて拾う。

「厄介だよ。人によっては、別次元の扉を開ける奴もいるらしい。それを利用した牢獄もある」

「別次元に罪人をしまいこむって事ですか？　それは怖いな」

霧島はラックの言葉に簡単な感想を述べると、リナが牢の格子から右に続く通路の奥を見ている事に気付き声をかける。

「リナ。何をして――」

「静かに！　……誰か来るわ」

リナの叱声に霧島は一度口を噤み、そこでようやく誰かの足音に気付いた。確かに、通路の右側からこちらにやって来ている。

この城の兵士かと思ったが、それなら甲冑特有の鉄が軋む音が聞こえるはずなので、すぐに違う事に気付いた。

緊張感のある空気が霧島達の動きを縛り、そこに留め置いている間に、足音の主はどんどんこちらに近づいてきた。

少しするとリナの表情に変化が現れ始めたので、霧島はその足音の主が視認出来る範囲に来たのだと思った。自然と体に力が入る。

そして、霧島にも見える範囲にそいつがやって来た時、驚きに目を見開いた。

「エフォード！」

「アンタ、どの顔下げて――」

「……静かにしてくれ。気付かれる」

霧島の反応とリナの突っかかりを流し、エフォードは青いビー玉のようなものを牢の扉に持っていく。それが一体何なのか気になったのか、三人は不思議そうな目でそれを見た。

すると、青いビー玉のような物は青白く光り出し、その光がビー

玉から放たれ扉を覆い始める。同時に、霧島の口が開く。

「それは……」

「解錠するための道具です。少し待って下さい」

「え？」

エフォードの言葉に霧島は聞き間違いかと思い聞き返すが、扉を覆っていた光が消えていくと、今までびくともしなかった扉が開き始めた。少なくとも、嘘ではなかったようだ。

「さぁ、速く出て来て下さい」

霧島は訝しげな表情をしつつも立ち上がるが、それをラックが「待て」と止める。

「どういうつもりだ？　お前、あいつの部下じゃなかったのか？」

「部下じゃない、脅されているだけです。ここに来たのも貴方がたをあの王と接触させないまま助けるため。一度こうして捕まって貰ってから、裏から脱出してもらうためです」

「脅されているっていうのは？」

今度は霧島だ。後者よりも前者の方に突っ込みを入れたのは、霧島ならではというべきか。

エフォードはその問いを受けて、ちらと後ろを見やってから答える。

「この地下牢に、人質として姉さんが捕まっているんです。ギルドにいる私を操り、常にギルドを監視できるようにと……。何度か助け出そうとここに来た事はあるのですが、見つからないままでここにいます」

「国王が来てからの間ずっとですか？」

「はい。ですが、今は関係ありません。正門の馬車は既に移動済み。急いで裏から出てそれで逃げて下さい」

「……」

何処か焦った風のエフォードだったが、霧島は平静としていた。リナがそんな霧島を急かそうとしてくるが、聞かずにはいられなかったのか霧島は更にエフォードに突っかかる。

「エフォードさん。あの偽王がいる中、どうやってここへ来たんですか？」

「？　目を離した隙に、ばれないようここに来ましたが……」

「では、貴方の姉がここにいる事は何で知ってるんですか？」

「あいつが自分から言ってました。というか、何なんですか？　速くしないと――」

質問攻めに対してか、さっさと行かない霧島に対してか、エフォードの声色が段々荒くなってきた。

それとは対象的に、霧島はあくまで冷静だった。それどころか、また口を開きエフォードに問いかける。

「もしかして、俺達を地下牢に放るように言ったの、貴方なんじゃないですか？」

「え……」

それを聞くなり、エフォードは大きく目を見開いて動きを止めた。図星を突かれたかのような表情なので、霧島はその反応を肯定を受け止める。

そして、小声でエフォードに伝える。

「だとしたら、エフォードさん。今言った事が全部本当なら、状況的に貴方がここに来ることはばれてるんじゃないですか？」

「何を――」

エフォードは霧島の問いかけを聞いて、辛うじて声を出した。リナとラックは話を聞いていなかったのか、それを不思議そうな目で見ている。

「本当に、勘のいい坊主だな。それとも、ただ後ろ向きなだけか？」

すると、リナとラックの方の背後から、野太い声が聞こえてきた。霧島達は、その聞き覚えのある声にすぐにそちらの方を向く。

そこには、数人の兵士を連れたアリア国王が立っていた。

第九話　板挟みの葛藤

エフォード、リナ、ラックの三人は、アリア国王の登場に驚きの色を顔に浮かべる。
その中ただ一人、霧島だけはアリア国王に睨むような視線を向けていた。真っ向からの視線を受けて、アリア国王はフンと鼻を鳴らす。

「気に入らんな。実に気に入らん目だ。ただのガキ風情にそんな目で見られる日がこようとは思いもしなかった。本当ならすぐにでも土下座をさせて謝らせるところだが、まぁいいだろう」

完全に見下した口調で語る彼の口は、もはや言葉遣いというものを忘れたそれになっていた。おそらく、本性を出しているのだろう。
それを見て、霧島はひとつ問いを投げかける。

「貴方、一体何なんですか？　聞いた限りの目的だけをやるなら、王様になるだとか、エフォードさんにここまでする必要はないでしょう？」

霧島の言うここまで、とは人質を使ってエフォードを操る事だろう。アリア国王もそう踏んだのか、「あぁ」と言ってから答える。

「確かにな。私はベルン殿に頼まれてノナタイトをここで集めてるだけよ。
王様になっているのは、私の夢だったからな。権力を使って叶えてみただけだ」

「夢？」

霧島の訝しげな問いに、アリア国王は「そうとも」と答える。

「いずれは王様としてこの国を「アリア王国」へと改名し、独裁政治を行うつもりでいる。

逆らおうとしても、こちらには魔法を強化する大量のノナタイトがある。誰も私に逆らう事が出来ない、力で全てをねじ伏せる真の絶対王政だ。

ハッハッハッハ。素敵だろう？　地球人君」

誇らしげに夢を掲げるアリア国王だったが、それで人の反感を買っているとは思いも知らないようなほがらかな笑いっぷりだった。

正直、霧島からしたら反吐が出そうな話だ。今すぐにも消し去りたいと思っているが、まだ話は終わってないのでと堪える。アリア国王の言葉が続く。

「エフォードに関しては、先ほどそいつ自身が言ったとおり。反乱分子に対して監視の目をつけるのは当然であろう？」

そして、視線の先をエフォードへと移し、邪悪な笑みを浮かべる。

「まさか、目を離してやった隙に本当にここへ来るとはな。

こいつらを助けるついでに姉も助け、皆仲良く馬車で帰って貰うつもりだったんだろう？　そこの坊主もそれに気付き、私がそれに気付いてないはずがないと思ったんだろうな。私自身が姉がここにいると言ってやったのだから」

「な、何を――」

アリア国王の言葉に、エフォードは困惑からか、それとも本当に理解が追いついていないのか、何かを聞き出そうと声を出した。少なくとも、錯乱しているのは間違いなさそうだ。声が続いていない。

そのエフォードの様子を見て、アリア国王は部下の兵士に何かを合図する。

すると、彼らの後ろから腕に手錠のようなものを嵌められている女性が一人、兵士に連れて現れた。

緑の長髪と青い瞳に、美しく整った目鼻立ちにほっそりとした体型を持った女性だ。服装は貧相なドレス一着だったが、女性の雰囲気が削がれるほどではなかった。

その女性の姿を見て、エフォードは堪えきれずといった風に声を上げる。

「ミラ姉さん……！」

エフォードが声を出すが否や、ミラと呼ばれた女性がこちらに何か言おうと口を開けたが、それを制するようにアリア国王の腕がミラの目の前に現れた。

そして、エフォードの方を見てゆっくりと口を開ける。

「と、感動の再開の前にエフォード。お前には言っておくべきことがあるよな？」

その言葉で、エフォードの体が跳ねた。これから言われることと言えば、姉のことにほかならないからだ。

アリア国王はそんなエフォードの様子を見て、口元を緩める。

「本当なら、この時点で貴様の姉を殺すことも出来る。だが、今なら特別にチャンスをやらなくもない」

「……？」

思ってもないことを言われたからか、エフォードの目が不思議そうなものを見る目に変わった。だが、それでも不吉な雰囲気は拭いきれなかった。この状況でアリア国王だけでなく、付き添ってきた兵士達が口の端を吊り上げているのだ。

その期待に答えるかのように、アリア国王はエフォードに告げる。

「そこにいる奴らを殺せ、武器は牢に入れるときに奪ってある。あぁ、地球人だけは気絶させろよ？　それが出来たらこの女を助けてやる」

「――！」

エフォードの表情が、見るからに強張った。霧島達も驚いたような反応を見せ、アリア国王はそれを見て愉快な気持ちになったかのように含み笑いをする。

しばしの沈黙の後、エフォードは黙っていたが、やがて霧島達の方に正面を向けた。それを見て、霧島はハッとなり「エフォード？」と問い掛ける。

すると、少し俯いた状態でエフォードは小声で言った。

「すみません、皆さん」

刹那。エフォードが腰に差していた剣を抜き、霧島に切り掛かってきた。

「霧島ぁ！」

それに対し、素早くラックが反応した。霧島の服を掴み後ろに退かせ、エフォードの剣をかわさせる。そして、右掌を、まるで剣を掴んでいるかのような形にした。

直後、辺りから光の粒子が集まり形を成し始めた。それはラックの手に合わせる様に剣を模る。

「これは……」

側でその様子を見ながら、霧島は声を出した。ラックは彼に「ちょっと待ってろ」と告げてエフォードと向き直る。

そして、魔法により生成された青白い魔法剣は、そのまま剣としての仕事を開始した。

ラックは一気にエフォードとの間合いを詰めると、左から右へ魔法剣を振るう。エフォードはそれを後ろに退くことで避け、剣を両手で持ち右斜め上段から振り下ろす。

それにタイミングを合わせるかのように、ラックは左手を突き出し正方形状のシールドを張ることで剣戟を受け止めた。攻撃を受けた事でシールドを形成しているノナが、火花のように散っていく。

だが、エフォードの攻撃はシールドを削りきるに至らず、途中で勢いが潰えた。火花の散りようが控えめになっていく。ラックはもうシールドの方へ力をかける必要が薄いと感じたのか、右手に力を込め、魔法剣をエフォードに向かって振るう。

対しエフォードはラックが右手に力を込めるのを見た瞬間、次の手を打った。まだ宙に残っているシールドと剣を合わせながら、剣をスライドさせつつ体をその反対へ持っていき、迫ってくる魔法剣に剣を会わせ受け止めたのだ。それを機にシールドの競り合いから

剣同士の競り合いへと移っていく。

ラックもそれに合わせるように、シールドを消し左手も魔法剣の柄へと持っていく。互いに両手を使った、剣同士の鍔迫り合いが始まった。

体中に力が籠もっているのが分かる。険しい表情、掌に柄の模様が付きそうになるほど力が入っている腕、地に踏ん張っている足、どれを取っても二人の間に加減はない。ラックの魔法剣から散る光が、さらにその光景に迫力を持たせていた。

一見、その勝負は互角のように見えるが、実際はラックが徐々に押している。ノナを媒体にする魔法は、使用者の気迫をも魔法の力にするため、削れているように見える魔法剣はその実、ラックの血気滾る気迫を感じ取りその攻撃力を上げているのだ。

「――ウッ、ラァァァアアア！」

やがて、ラックはその魔法剣を振り切り、剣ごとエフォードの体を吹き飛ばす。その際、一塵の風が舞い、アリア国王達を撫でる。

見てみると、ラックの魔法剣は先ほどよりも太めになっているのが見て取れた。だが、競り合いが終わったからか魔法剣は少しずつ元の大きさに戻っていった。

このまま剣同士で勝負を続けていたら、間違いなくエフォードは勝てない。それを悟ったか、彼は攻撃方法を変えた。剣から右手を離し前に突き出し、目の前に緑色に染め上げられた三日月状の刃を出現させる。数は四つで長さは五十センチメートル強。

それらは順に、軌跡を描きつつラックに襲い掛かる。ラックは魔法剣を右手に持ち構え、左手に魔弾を用意する。まず頭に向かって

来た一つを魔法剣で持って側面から叩き割り、腹部を狙う二つ目とは競り合う。三つ目には左手の直径五センチほどの魔弾を放ち側面にぶつけ爆発させ、その衝撃で軌道をずらし壁に激突させた。最後の四つ目の刃には競り合っていた二つ目を弾き、ぶつけ、相殺。

「そんな……」

その戦闘能力を見て、エフォードは愕然とする。ただ魔法剣が強いだけではなく、そもそもラックは『狩り屋』として様々な戦闘をこなしてきているため、経験量が違うのだ。

目に見えて、しかもこの狭い場所では自由自在に動く刃であっても、襲い掛かってくる向きが決まっているために、ラックからしたらこの程度を弾くのはお茶の子さいさいだった。

「どうした？　この程度か、ギルドの人間ってのは」

ラックはそのエフォードを嘲るように言ったが、ギルドメンバーの一人や二人が弱いというのは、実際珍しくもなんともなかった。

そもそも、ギルドの人間が解決する揉め事と言うのは、戦闘よりも人の話を聞いたりする方がメインだ。人同士の荒事があったとしても、大体当人同士が殺し合い、引き分けか片方が死ぬかの後でギルドに連絡がかかるので、仲裁に入る機会はこれといってなく、戦闘経験がない人が多くても、さして話題に上がるほどではない。

だが、それを知らないのか、アリア国王はエフォードの押され具合に腹を立てている。

「何を押されまくっているのだ、エフォード。姉がどうなっても知らんぞ？　ん？」

出来の悪い子供に言い聞かせて躾けようとしている親みたいに、アリア国王は言葉を、気持ちを強調させた。

エフォードはそれを聞いて「わ、分かっています」と返事をしているが、負けしか見えない戦闘と後ろから迫る恐怖との板ばさみで、もはや精神的に参っているのは目に見えている。

普通なら付き添いの兵士を助太刀に出しても良さそうなものを、アリア国王はただ見ているだけで何もしない。今すぐにでも目の前のラック達を消し去りたいはずなのに、何もしない。

どう考えても、今のエフォードをなじって楽しんでいるだけだ。

「……」

ラックはそれを見て、どうにかしてやりたいという気持ちの方が強く出ているが、下手に歯向かえばミラが殺されてしまう可能性が増えるだけのようで、迂闊に踏み込めないでいる。

どうすればいいのかと自問するが、やはり答えは出ない。今はとにかく、出来るだけこの戦闘を長引かせ、何かが起きるのを待つ以外なかった。

そうして、再び互いにやりあおうとした時。

後ろから、霧島の声が聞こえてきた。

第十話　決死の潜入

「駄目だ、話にならない」

突然響き渡る霧島の声。ラックだけでなく、エフォードやアリア国王達も霧島のいる方を向いた。それに呼応して、リナの言葉が続く。

「何よ。やってみなきゃわかんないじゃない」

「いいや、分かる。無理だ無理。ほら、女の子は牢の中にでも隠れてろ」

「――！」

どういった状況かがラック達には読めなかったが、喧嘩をしているのは間違いなさそうだった。リナは今の霧島の言葉が相当頭にきたのか、そっぽを向いて投げやりな言葉を放つ。

「はいはい、分かりました。せいぜい一生懸命考えて、あんただけ殺されちゃえばいいんだわ！」

そうした少しの言い合いの後、リナは本当に牢の中へ戻って行った。存外短気なのか、扉を閉めることすら忘れている。

アリア国王含むその他陣はその様子を見て、揃いも揃って「お前達は何をやっているんだ？」と言いたげな表情をしていた。

そして、今の口喧嘩の当事者である霧島は、改めてという風にア

リア国王の方に向き直り咳ばらいをする。

「えー、お騒がせして申し訳ありません。どうぞ、続きをお願いします」

「あ、あぁ……」

ラックはそう答えたが、いかんせん戦闘をどうでもいいことで中断することになってしまったせいか、続きをするつもりになれないようだった。それはエフォードも、アリア国王ですら同じ雰囲気だろう。あまりにも今のは場違いすぎる。

霧島はそれを悟ったのか、右手を顎に持って来て何か考えるような仕種をすると、冷静になった事をアピールするかのような声色で続ける。

「では、失礼ながら。アリア国王に一つお尋ねしてもよろしいですか？」

「何？」

霧島が放った言葉に、アリア国王は怪訝な顔を見せるが、それに構わず彼は喋るのを止めない。

「貴方は先程言いました。絶対の力を持って、絶対王政を作り上げると」

その言葉に、アリア国王は訝しげな表情を作った。確実に霧島のことを変人だとでも思ってそうな目だ。

「それが今更なんだというのだ、坊主」

「ああ、いえ。だとしたら、非常におかしな話だな、と思いましてね」

「……なんだと？」

話を続けていく内に、霧島の声色はアリア国王を嘲笑うかのように、アリア国王の声色は敵意を剥き出しにするように変化していった。

加えて、更なる変化が続く。

「だってそうでしょう？　貴方は絶対王政を成し遂げるために獲た力として、ノナタイトを誇示していますが。

結局今の状況で貴方は私達を攻撃してこようとして来ないじゃないですか。

みて分かると思いますが、エフォードさんはもはやラックさんには勝てない状況ですよ？

なのに、さっきから始末を部下にやらせてばかり。ひょっとして、貴方、自分で手を下したくても下せない……魔法が攻撃向けじゃないんじゃないですか？」

霧島が最後の言葉を口に出した瞬間、ラックは、アリア国王はただ楽しんでいるだけだぞ、と訂正するつもりで口を開こうとした。

だが、そうしようとした時、アリア国王の体が跳ねたのをラックは見た。図星を突かれたであろう反応だった。その反応を見て、霧島はニヤリと笑みを浮かべる。

そこに、更に追い打ちをかけるべく霧島が口を開く。

「それで偉ぶっちゃってるんですか。その上、わざわざ王様という位につくのに、こんな辺鄙なところにしか城がなくて、それですら

上司の力添えがあってからこそ？
恥ずかしい話ですね、全く。俺だったらあまりの恥さらしっぷりにまず立ってられませんよ」

「――ッ！　お前、言わせておけば！」

直後、巨大な球体が出現した。それは霧島が作った事があるようなノナの塊でしかないわけだが、それにしても大きい。
ミラや城の兵士は、その様子を見るなり巻き添えを喰らわないように壁側に寄った。一瞬、霧島はミラが壁側に寄ったのを見て、少し微笑んだが、すぐにアリア国王と向き直る。

そして、アリア国王はそのプライドを持って、自慢げに顔中で笑うを表現し口を開く。

「どうだ坊主！　今の貴様に、これだけの大きさを持つ球体が作れるのか！？　ははっ、作れないだろうな！
何故なら、魔法とは長い間の鍛練と時間、そして気迫次第で強くなるもの！　貴様のような奴には、たどり着くことが出来ない境地よ！」

魔法が完成したのならさっさと撃てばいいのに、アリア国王はよほど霧島に負けを認めさせたいのかわざわざ長い口上を述べてきた。
霧島も霧島で、最後までその口上を聞いてやった上で、呆れたように溜め息をつく。

「つべこべ言わずに放ったらどうだ？　そのヘナチョコ弾をよ」

「――ッ！」

てっきり土下座でもするとか期待していたのか、アリア国王は霧島が見せた反応に怒るというよりは驚愕の感情の方がでかそうな表情を作った。

「こ、この期に及んでまだ、まだ貴様は謝罪をせんのか！　ああ！？」

どうやら、攻撃して霧島を粉みじんにするよりも、傷ついたプライドの回復が優先なのは変わらないらしい。恐るべき執着心だな、と霧島は思った。

だが、霧島はそれをうっとうしくは思わなかった。状況が状況だったからだ。

そこでふと、アリア国王が直径一・五メートル程の魔弾を生成しているその横に視線をやる。すると、今度は霧島がその顔に笑みを浮かべた。

それを見て、アリア国王は戸惑いを覚える。

「な、何だその顔は……」

「いえ、失礼。それより、ひとつ貴方に忠告しておくべきことが出来たようです」

「何？　忠告？」

「はい。――そうですね。それを放つ前に自分の左側を確認したらどうだ、大変な事になってるぞ、といったところでしょうか」

アリア国王は霧島の言葉を聞いてその態度に腹を立てたが、気になったのか結局横目で左側を見遣った。

すると、ミラがそこにいなかった。

「――！？」

それを確認するや否や、ものの一秒足らずでその表情を一変させた。今までみてきた中で、アリア国王の驚いた顔を見るのは始めてだったが、目と口の開き方が尋常ではなかった。

刹那、アリア国王の魔法への集中力が切れ、魔弾の形が大きく歪む。

「っ、しま――」

「伏せろ！」

アリア国王が「しまった」と言うや否やの時での、ラックのいち早くのかけ声。お陰で霧島、ラック、エフォード、その他は次に起こるであろう爆発に備える事が出来たが、アリア国王は当事者なのでそうはいかなかった。イメージが崩れたことによりノナが暴走を始め、そのダメージはアリア国王の脳に直接響いた。

「ぬ、あああ、ガガ、バダ、ギギグギ、ゲゲゲゲィァァアアアア――！」

叫び声の途中で痛みに堪えようとした節があったが、結局耐えかね絶叫する。

そして、その最中に魔弾は暴発。大きな爆発を起こし辺りにいた人全員を巻き込んだ。

だが、ここは地下牢で、周りに飛ばされてしまいそうなものもなかったので、危惧するのはこの洞窟が崩れないかどうかだった。

暫くそれを心配して様子を見ていた霧島だったが、どうやらそれも行き過ぎた心配だったようで、崩れるようなことはなかった。アリア国王は反動からその場に倒れ、体中を痙攣させている。

それを傍観していた兵士達は、次は我が身と思ったのか一目散に逃げ出して行った。何をしに来たのだろう、と今更ながらに霧島は思う。

そして、それを見届け終わった後、霧島はだれにともなく言う。

「もう出てきていいぞ。ヒヤヒヤさせたな」

「……？」

言葉を聞いて、ラックとエフォードが誰に言っているのか計りかね、反応すべきか迷っていると、不意に「全くよ」とどこからともなく声がした。

同時に、先程ミラがいた位置に、何かを払いのけつつリナとミラの姿が現れた。ラックとエフォードはその光景を見て大きく目を見開く。

「お、おい霧島？　これは？」

「透明マント、です。リナの魔法が、触れた物を透明に見えるようにする、といったものだったので、一度牢に戻って貰い、中にあった毛布にその魔法を使わせることで、透明マントを作って頂きました。

その後は見ての通り、俺が時間稼ぎしている間に透明になったリナにはミラさんに近づいてもらい、マントをミラさんにも被せ二人とも透明になったところで帰ってきてもらう。

それをアリア国王に目撃させる事で、魔弾への集中力を切らさせ

て暴発させる……そういう作戦だったんです」

「じゃあ、今までのは――」

ラックの問いかけに、霧島はあっさりとした雰囲気で告げる。

「全部演技ですよ。アリア国王の性格をついての暴発も、ミラさんの姿を消すことで魔法にたいする集中力をなくせば暴発させることが出来そうだったからやりました。多少賭けでしたが、まあ上手くいってよかったです」

「……」

霧島からの話を聞いて、ラックはただ唖然としていたが、エフォードはミラを見つめていた。

リナの後ろにいたミラも、その視線に気付き微笑む。エフォードからしたら、暫く振りの笑顔だろう。

「姉、さん……」

ポツリ、といったような小さな声だったが、それはミラに届いたようで、ミラもまた口を開く。

「……エフォード」

全てを許すかのような、優しい声色がエフォードの耳に届く。それを皮切りに我慢が効かなくなったのか、エフォードはすぐに走り出しミラに抱き着いた。ミラはそのエフォードを宥めるように、その頭に掌を乗せ、撫で始める。

それに答えるように、エフォードはまた声を出す。

「姉さん……俺……」

「いいのよ、もう終わったわ」

「……はい！」

盛大に大きな、後で思い出したら恥ずかしくなりそうなほどの波声がエフォードの口から出た。それからは、エフォードの体は少し震え出し、頬からは涙が伝ってきている。それだけで、霧島達がその光景から目を逸らす動機としては充分だった。

ラックはそれを見て薄く笑みを浮かべると、ゆっくりと口を開く。

「なんかなぁ。こういうの弱いんだよな、俺」

「いいですよねぇ」

ラックの独白に一言返事をした後、霧島はリナに話かける。

「それにしても、良くあんなに早く移動出来たな。俺が思っていた限りではもうちょっとかかると踏んでいたが」

「どっかの馬鹿が壮大な音を立てて魔法を使ったり、怒鳴り散らしたりしていたお陰で、足音を消すまでもなかったからよ。ミラさんなんて、近づいて毛布を被せるまで気づいてなかったわ」

その後に、「後、アンタはちょっと空気読みなさい」と注意されてしまった。

指摘を受けた霧島は、口に言葉を出すことなく物思いに耽る。

（兵士達は俺とアリア国王の切羽詰まる状況に見取れていたしな。確かにちょろいといえばちょろいか）

霧島本人は、実際はリナが間に合わず魔弾が放たれていたらどうなっていただろうと危惧していたが、それはまた別の話だ。

そして、霧島はふとアリア国王の様子が気になり振り返ろうとした。

すると、その時になってようやく背後に誰かが立っていたのに気付いた。

第十一話　命がけの競り合い

「――！？」

驚きと同時に、思わず仕込みナイフを抜く。それを見て、男は陽気に口笛を吹いた。

その男は、燃え上がっているかのような逆立った赤い髪に、黒い瞳を持っていた。赤いマントに身を包み、その下には何を着ているかが分からない。ズボンには青いジーンズのようなものを着用していて、茶色の革靴を履いていた。

「……お前は、誰だ」

喉から絞るように辛うじて声を出すほど霧島は切迫していたが、相手は余裕がある表情だった。ひとまず何をしてくるか分からないからか、霧島はナイフを構えたまま動かない。

その様子を見ながら、男は重々しく口を開ける。

「俺の名前はタングネス。この世界を統べる精霊の一人だ。危害を加えに来た訳じゃねぇから安心してくれ」

「精霊……？　どう見ても人の姿なんですが」

訝しげな霧島の問いに、タングネスは思い出した風に「あぁ」と声を出した。

「そこは、あれだ。仮の姿ってやつだよ。つーか、元の姿が好きじ

やねぇんだ」

この世界を統べる者としては、随分荒っぽい性格だなと霧島は思ったが、そこは言及しないことにした。

そして、タングネスは「それはさておき」と話題を元に戻す。

「まずは、礼を言わせてくれ。このオッサンにはほとほと困ってたんだよ。俺の管轄で好き勝手やっててくれてよぉ」

「知ってたんですか？」

「あぁ、だがリーダーの意向でな。人のやることに直接は手を下すなだと。困ったもんだろ？」

タングネスはまるで友人と話しているかのようなノリで霧島に問い掛けてきた。だが、霧島が深いってコメント出来る訳もなく、「そうですね」と答える。

「それより、彼が目を覚ますまでにここから逃げないと危ないんじゃ――」

「いや、それなら心配いらねぇよ。今しがた、奴へのノナの供給を絶った。もう奴は、無害な一般人と変わらない」

「供給を絶った？」

「ああ、元々、ノナは俺達がこの世界で作ったものだからな。それくらいのコントロールならできるさ」

それを聞いて、霧島はアリア国王の方を見る。もう魔弾を作られ

ないとしたら、驚異になる存在ではないので、霧島は一安心し目を逸らす。

だが、そこで不意に笑い声が聞こえた。全員がそちらの方を見遣ると、そこには、霧島やタングネスが見ていた中で必死に立ち始めようとしているアリア国王の姿があった。

その地獄からはい上がるかのような様子を見て、タングネスを除く全員が身構える。

そして、アリア国王は少し体を浮かせた状態で懐を探り始めたかと思うと、そこから宝石を取り出した。形は整っていないが、ラックの魔法剣みたく青白く光っている。

「ノナタイト……！」

宝石を見た瞬間、エフォードがそれの名前を呼んだ。それをみて、タングネスは舌を打つ。

「成る程な。その手があったか。つくづくうっとうしい奴だ」

「どういうことですか？」

「ノナの供給が止まっているといえど、ノナタイトはノナそのものだからな。例えノナのない空間でも、ノナタイトが一欠けらでもあれば魔法は使える」

それを聞いて、ということはと霧島が頭を働かせる前に、アリア国王が動いた。

アリア国王はノナタイトを媒体にイメージを込め、再び魔弾を作り上げる。流石ノナタイトと言うべきか、先程よりも魔弾の大きさが増している。

まずい。この場にいる全員がそう悟るのに時間はいらなかった。速く逃げたいところではあるが、後方は一方通行だし、牢でやり過ごすにしても、今度こそ魔弾の衝撃で地下が崩れ、出られなくなる可能性もあるので、迎え撃つ以外に選択肢がなかった。

それを踏まえて、タングネスはゆっくりと口を開く。

「おい、ガキ。そのナイフをちょっと貸せ」

「え？　あ、はい」

しどろもどろになりながら、霧島はタングネスにナイフを手渡した。彼はそれを受け取ると、何やら力を篭めるような仕種をする。すると、ナイフが赤い光を帯びてきた。タングネスはそれを確認すると、霧島の手元に戻して言う。

「いいか？　奴が魔法を放った後、あの魔弾にそのナイフを刺すんだ。そうすれば、別のノナが入ったことであの球体は形を失い消滅する。だが、上手く刺せないとお前が死ぬからな？　良く狙えよ」

「……え？」

突然の大役を押し付けられ、霧島は驚きのあまりにタングネスの顔を見た。だが、これは決定事項だと言わんばかりにタングネスの表情は険しかった。

その話を聞いて、ラックは慌てて言葉を挟む。

「いやいや、タングネスって言ったか？　何も、霧島にやらせる事はないだろ？　ってか、人のやる事に干渉してんじゃねぇか！」

「直接手ぇ出してる訳じゃねぇよ、これくらいの手助けなら出来る。それに、これはこのガキじゃねぇと務まらねぇ」

「……何でだよ」

そのラックの問いに答える前に、タングネスはちらりとアリア国王の方を見た。すると、まだ魔弾は構成段階なのか、放たれようとする気配が未だない。

まだ時間がありそうだ、とそれを見て思い、タングネスは早口で説明を始める。

「まず、実態の正確な武器でないと、刺した後にノナが上手く流れず相殺できない可能性があるってことだ。その点で持って、さっきの戦闘で刃が欠けている可能性のあるエフォードと、ノナの産物でしかない魔法剣は取り除かれ、あいつの持つナイフが必須になる。

次に、ノナを付加したナイフには、当然あの少年の指紋やら手垢が付いている。そういった武器にノナを付加した場合、必然的に持ち主が魔法を放つ時に現れるノナと同種になるから、他の人間じゃ扱えなくなるんだよ。

つまり、あのナイフ以外の傷無し武器がここになければ、あいつがそれをやるのは必然なんだ」

「じゃあ、別に撃った後じゃなくてもいいだろ。今を狙えば、少なくとも危険じゃない」

「奴が魔弾を形成している間を狙ったら、別のノナを流したところで、またあのオッサンがノナを流せばそれは追い出されちまう。奴からのノナの供給を受けれなくなった、発射後が狙い目なんだ。――どうだ？　ガキ。覚悟は出来たか？」

タングネスの説明を聞きつつ、霧島は緊張からか唾を飲み込む。
そして、意を決したように言った。

「……分かりました。やります」

「霧島……！」

その言葉に、ラックは思わずといった風に声を出すが、タングネスは「じゃあ、頼むぜ」と言って道を譲った。
アリア国王は未だに魔弾にノナを籠めている。霧島は、その球体が何時発射させるか見極めるために少し距離をとった。

タイミングを誤れば、自分だけでなく回りの者も死ぬ。
その状況で、霧島は一旦深呼吸をする。魔弾はまだ放たれない。
もしかしたら、アリア国王が途中で気を失って魔弾が消えてしまう可能性もあるのだが、例えそうであっても、目が離せるものじゃない。

全てを飲み込もうとする力が、すぐそこにあるのだから。

――、一秒、二秒、三秒、四秒。
五秒、六秒、七秒、八秒――九秒。

刹那、勢いよくその魔弾は放たれた。
霧島は、まるで車の如く迫ってくるそれに対しナイフを突き付ける。魔弾が纏う風圧に押されながらも、声になったかどうかも分からない、勢いだけの声も上げてナイフを刺した。その時に気を抜けば吹き飛ばされそうになるほどの衝撃が霧島を襲うが、辛うじて耐えた。

それは魔弾に突き刺さり、刃と持ち手の部分から赤い光が上下に少し伸び、魔弾を受け止める盾のような感じになる。刃にあった赤い光は、魔弾の中に浸透し始めた。

どうやら、すぐに相殺される訳ではないらしく、暫く魔弾を受け止めなければならないようだ。

「ぐっ……」

両手の力をナイフの持ち手に集め、力いっぱい魔弾と押し合う。その最中、魔弾から伝わる熱に当てられ、喉が渇き出し汗も出てきた。

霧島は魔弾に触れないよう、少し体を前に出し、両手に力を入れやすくなるような体制をとる。足も少し後ろに下げたかったが、そのために少しでも力を抜くと押されそうになった。

「ッハァ、ハァ……」

ノナが流れているのは分かった。魔弾の大きさも少しずつ小さくはなってきたし、その影響か魔弾から放電のような現象が起きているのが確認出来る。

だが、たった数秒堪えるだけで辛さが段々と表に出で来る。それを察してか、タングネスが声をかけてきた。

「ガキ、もうちょっと耐えろ。俺はナイフにもう少しノナを集めて、相殺を急がせてみる」

「……は、はい！」

力んでいるから、声の質は荒かった。加えて、風圧をまともに浴びているからか、疲れているからか、その息も切れ切れになってき

ていた。たなびいている上着と髪が、その風圧の凄さを物語っている。ラック達からは見えないが、おそらく顔はもっと凄いことになっているだろう。

そして、とうとう霧島が少しずつ押されてきた。いくらタングネスのノナが影響で受け止められているといっても、ナイフ一本でニメートル少しある熱球体と押し合っているのだから、負けない方がおかしい。足が地面の上をスライドしていた。

「――ッ！」

無言で力を入れる。まえのめりの姿勢にならないよう気をつけながらも、霧島は目の前の魔弾を止めることだけに集中した。

少しして、タングネスからノナの供給が始まる。そのお陰か、少しだけ魔弾が小さくなり始めた。だからといって、霧島が有利になった訳ではないのだが。

対処に時間がかかっているからか、じれったそうな表情でラックが声を上げる。

「おい、タングネス！　まだ終わらないのか！」

「ノナは綺麗に流れている。だが、いかんせんナイフが小さくて、中心まで上手く流すことが出来ない。あの巨大な球体にノナを行き渡らせ相殺するには予想以上に時間がいる！」

タングネスも必死なのか、言葉に力が篭っていた。霧島が未だに徐々に押されているのを見て、更にノナを流す。その最中にも、霧島の体力は猛スピードで削れている。持ち手を握る手が痛む。

「く……そっ！」

足が赤くなり、腕がブルブルし、熱で体が熱くなってくる。痛い、辛い、熱い。今の霧島の状態はそんな状態だ。普通なら、もう倒れてしまっても可笑しくはない。

そして、その時だった。霧島から伝わるノナが妙に明るみを帯びたのは。

ラック達は気付いていなさそうだったが、タングネスだけはそれに気付く。

「あれは……」

思わずといった風な、小さな声。そして、霧島は更に持ち手に力を籠め、魔弾と対決する。

「――ウォァア！」

本人は気付いているのかいないのか、ノナが光を帯びて少し、掛け声と共に、無理矢理一歩踏み出した。すると、魔弾が何の前触れも無く、音を立てて拡散する。

「……あれ？」

その光景を見ていたラックは、思わずといった風に声を出した。今までそこにあったはずの二メートル強の魔弾が一瞬にして消え去ったのだ。

そして、ラックの声が出たのがスイッチとなったように、霧島の体がぐらりと揺れ、地面に倒れていく。

「霧島！？」

「ちょっと、これってやばいんじゃないの！？」

「エフォード、馬車まで彼を――」

「分かっています！」

四人が口々に何か言う中、タングネスだけは今の光景に目を光らせていた。

ノナと脳が組み合わさったこの世界でのみ起こる現象として、自己防衛本能と呼ばれるものがあるからだ。体が限界に達し脳が生命の危うさを感知した時、ノナがそれに呼応し、その人の魔法を無理矢理発動させるというものだ。

これは、精霊がノナを作った時に偶然出来たシステムであるため、精霊にも詳しいメカニズムが分かっていないが、今、おそらくそれが起きたであろうことは疑いようがなかった。

その上で、今発動した魔法が霧島の魔法であると理解した上で、タングネスにはひとつ思う節があった。

（今発動した魔法……こいつぁ、もしかする、か？）

可能性としては米粒レベルのものだが、わざわざ召喚してまでして一体何がしたかったのか、という問いに対して、今の魔法はひとつの答えになりうるものだった。

タングネスは少し考えると、アリア国王がもう動きそうに無いのを確認して、ラック達に付いていった。

第十二話　これから

次に霧島が目を覚ましたのは、一日が経ってからだった。
そうして目を覚ました後、霧島は暫く自分が何処にいるか、何でこんなところで寝ているのかが気になったが、すぐに全てを思い出した。

（生きてる……ってことは、どうやら相殺には成功したっぽいな。実感ないけど）

頭がはっきりしてきたところで、霧島は体をゆっくりと起こし辺りを見渡す。日が出ているのか、カーテン越しに光が漏れていた。
それ以外には以前と変わりなく、人が一人もいない。

（……移動するか）

心配をかけているのは間違いなさそうなのでと、霧島は皆のところへ顔をだそうとベッドから降りようとした。
だが、そこで部屋の扉が開き、リナが入ってくる。

「あ」

思わず声を出すと、リナは視線を霧島に合わせて硬直した。霧島に実感はないが、リナからしてみたら、一日目を覚まさなかった人間が部屋に入ったら起きていたのだから、驚かないはずがなかった。

「あ、あ、あ……」

ちょっと経ち、リナが何か言おうとするが、上手く言葉が出ない

らしく、口をぱくぱくさせている。
霧島も今のリナの様子に釣られて止まり、お互いに見合ったまま数秒の時が経つ。やがて、リナが焦ったように声を出した。

「ちょ、ちょっと！　起きてるなら言いなさいよ！　すっごく吃驚したじゃないのよ！」

「……無茶言うなよ」

起き上がって直ぐの理不尽な要求に、霧島は務めて冷静に返した。そして、今の声がギルド内に響いたらしく、すぐにドタバタとした喧騒が聞こえ始め、ラック達がリナを押しやって部屋に侵入してきた。

「おお！　やぁっと目が覚めたか霧島！」

安心しきったようなラックの大声に続き、後ろからアーク達が一言一言声をかけてきてくれた。霧島はその言葉に対応しつつも、扉から入ったところにじっとしている三人の方を少し見やる。アイン、タングネス、そして初っ端に霧島を追いかけてきた男だ。

（あの人……一緒にいるけど、アインさんの知り合いか？）

初日にギルドに来た時に霧島が彼の話をしたら、アインは知っている風だったのでおそらくそうだろうと思った。それがあったお陰で、別段、ここにいることに驚きはしなかったが、何の用だろうか、というのが気がかりだった。

そう考えていると、いつの間にか励ましの嵐も止んでおり、三人がこちらに歩み寄ってくる。霧島は、体と頭に未だ痛みが残ってい

るため、座ったまま彼らを迎えた。
まず、アインが口を開けてきた。

「さて……何と言えばいいのでしょうかねぇ。称えればいいのですか？　喜べばいいのですか？　無事を祝うべきですか？　それとも、怒るべきでしょうか」

「……あー」

口調、言葉共に、何処からどう見ても怒っている様子のアインを見て、反応に詰まる。まぁ、勝手に出て行って心配かけて、怒っていないはずがないとは薄々感づいていたが。
すると、アインはその反応を見た後溜め息をついて言う。

「全く、この部屋に誰もいなかった時は呆気に取られましたよ。ここまで突拍子な事をする奴だとは、依頼主に聞いていなかったものですからね」

「本当にすみません。……ちなみに、アインさんは用事が済んだんですか？」

「今は私が喋っているのですが……まぁ、いいでしょう。後に回します。
それらの事について皆さんに話すために、貴方が起きるのを待っていたのですから。
――と、その前に。彼が何か言いたいそうですよ」

「彼？」

霧島は彼、と指されたのが誰か見当もつかなかったが、すぐに初

日追いかけてきた男かと理解する。そいつは霧島の前に立つと、申し訳なさそうな風で言う。

「いやー、わりぃな霧島君。リナの奴、迷惑かけなかったか？」

「？　どういう事ですか？」

「ん？　何だ、リナから俺の事聞いてないのか。そいつぁ失敬したなぁ。

じゃあ、今言わせて貰おう。リナの父親をやらせてもらってる、アベル・ホーストンだ」

「あぁ、貴方が」

それを聞いて、霧島はリナがお父さんの仕事を手伝うために来た、と言っていたのを思い出した。

「そこで、お前の無茶な考えに、負けじと無茶苦茶な家の娘が厄介な事をしなかったかと思ってな」

「いえ、特にそんなことはありませんでしたよ？」

城に行った時一回暴れそうになったのを止めはしたが、責め立てる程の事では無いと思い言わなかった。その霧島の言葉を聞いて、便乗するようにリナが乗っかる。

「ほら、だから言ったじゃないの！　今回は私、ちゃんとしてたんだから！」

「そうみたいだな。頼むから、あんまり肝を冷やさせないでくれよ

？　毎回毎回、お父さんは心配で死にそうです」

（……今回は？　毎回？）

今の二人のセリフに、霧島は思わず突っ込みそうになったが、触らぬ神に祟りなし。特に口を開けずに、今度はタングネスの方に目を向ける。

タングネスはその視線を受け取り、ニヤリと笑みを浮かべると声を出す。

「さて、雑談はそこまでにして貰おうか。言いたい事がたくさんあるんだ」

「おう、わりぃな」

アベルはその言葉を引き際とし、床にどっかりと座る。各自も、椅子やクッションに座ったり、壁にもたれたり、立ったままだったりと話を聞く雰囲気になってきた。

それを見届けると、まずタングネスが口火を切る。

「さて、ガキには悪いが、こっちは今急いでるんでな。さっさと説明の方に入らせてもらう。

最初に、今回の一件についてだが。見ていた限り、最初に手を出したのはどう見てもアリア国王の方だ。

それのお陰か、アリア国王とその上司、ベルン・ベベリア卿には、俺の口添えもあってか多少なり処罰が下されることが決定した。

元々、今回の件は奴独自の犯罪だったらしいからな」

「俺達には、何か言ってましたか？」

「お咎め無しだよ。むしろ、感謝の域だ。これでベルンの奴もちったぁ懲りたらいいんだがな」

まるで今までにも似たような事をやってくれていたかのような口調で、タングネスはベルンの事を語った。そして、早速話題転換が入る。

「んで、次にサマナーの事についてだが。

アインの方の依頼主がバックレやがったようでな。まぁ、元々依頼を投げるだけの役割を持った奴だったってだけの話さ。多分、サマナーとは何も繋がっちゃいないだろう」

それを聞いて、大多数の者は納得したようだった。そもそも、これだけの大事件に発展するのは目に見えているだろうから、一つの役割をこなすだけの捨て駒がいてもおかしくないのだ。

もっとも、それが出来るということは結構な人数が相手になっている、という可能性にも繋がる。それを踏まえて、タングネスは話を続ける。

「今はまだ敵の狙いが完全にはっきりしないが、ガキ。お前を奴らは必要としている可能性がある。

よって、これも俺の口添えだが。お前はアルトレットの保護の元、これから生活してもらいたい」

「……成る程。妥当な判断だな。いつまでも俺達のギルドで匿っていても、いざという時に多勢が来ては対処しずらい」

タングネスの言葉にアークが同意を示す。勿論、霧島にしても異論は無かった。またベルンみたいな奴がいると御免だが、現時点ではアルトレット以外に当てがない。

そこで、ひとつアインから手が挙がった。

「待って下さい。彼を必要としている、と言うのは何か根拠があるのですか？

『干渉』によって大多数の魔法使いを疲労させる……現時点の仮定として挙がっている敵の目的は、これで一時結論が出ているはず」

「そう、そこだ。突っ込んでくれて助かるぜ、アインさんよ。

敵の目的のひとつに、こいつの使った魔法が関係してるんじゃないかと思ってるんだ」

「魔法？　彼は魔法を使ったのですか？　球体を出すようなものではなく、個の魔法を？」

アインはタングネスの言葉に一驚した。こんなにも短期間で自分の魔法を見つけられるということは、想定していなかったのだろう。

そもそも、自分の魔法を発現させるのに年齢は関係無いとはいえ、実際にそれを見つけるのは砂漠の中で一粒の砂金を見つけるようなものだ。一応、ある一定の年齢を過ぎる――簡単に言えば、成人になる際にアルトレットに行けば、その者がどういった魔法を使えるか教えて貰えるが、今のアインからしてみたら驚く他に反応のしようがない。

「ああ。俺の見立てが間違ってなけりゃ、お前が使った魔法が何かは分かる」

「どういう事ですか？」

「いいか、ガキ。お前はおそらく、他人の魔法を強化する魔法が使えるはずだ。

あの時、魔弾に流し込んでいたノナが急激に増加した。俺が与えた以上のノナの量が魔弾に流れていったって事だ。ってことは、お前が俺の与えたノナを強化し、侵食を早めたって考えで納得がいく」

「強化……ですか」

そう聞いて、霧島はまず、人の力を借りなければ戦う事が難しいと思った。魔弾やシールドの強化が出来たとしても、それでもやはりまともに戦うには至らないだろう。

タングネスの言葉は続く。

「簡単に言えば、その力を狙ってお前を召喚した可能性があるって訳だ。

まぁ、当たってるかどうかは分からんが、僅かでも奴らの狙いに繋がりそうではあるからな。

いずれサマナーが接触してくる危険もあるかもしれない。だから、アルトレットの保護に入ってもらう。いいな？」

「はい。ですけど、もし俺一人になった時にサマナーが危害を加えてきた場合、どうやって身を守ればいいですかね」

「それは心配すんな。目の上のたんこぶってやつを取り払ってくれた礼に、ひとつ取り計らってやるからよ。つー訳だから、ちょっと手ぇ出せ」

その霧島の考えを察してか、タングネスは右手を霧島の手の上にかざし、何やら小さな赤い水晶のような物を手渡した。特に輝いてはいないが、思わず魅入りそうになる不思議な雰囲気がある。

「その宝石には、俺の力が籠めてある。それを持っていれば炎を操

るくらいは出来るようになるさ」

「……ポケットとかでも、大丈夫ですか？」

「ああ。万が一無くしたり、遠くに置いていても、俺の名前を呼べば手元に来るようになっているから、安心していい」

流石精霊と言うべきか、魔法に関することをやらせたら何でもありのようだ。霧島はありがたくそれを頂戴し、次の話題に転換する。

「ところで、これからどうするんですか？」

「あぁ、それか。そこのところは、アベルに頼んであるから後で聞いてくれや。

俺はもうそろそろ行かないとだし、アインとラックは一旦寄合所に寄るそうだからな」

「と言っても、中間報告と言いますか。

寄合所の開設者が今回の件をとても興味深げに受け止めていらっしゃるので、何かあったら語り聞かせるようにと仰せつかっているのです」

タングネスの言葉をアインが拾い、霧島に言い聞かせる。さも、興味なさげに溜め息もついていたが、サボるつもりはなさそうだ。

そして、ラックが口を開く。

「んじゃ、さっさと行くか？　早めに済ませて早めに帰ろうぜ」

「そうですね。また、無茶な事をされては叶いませんからね」

「……んぅ」

未だに引っ張っているような雰囲気で皮肉を言われ、霧島は一時反応に困るが、彼の言葉を待たずしてアインが言葉を吐く。

「ま、今回の事がありますからね。正直ジッと待ってくれるのは期待していませんよ。せいぜい、死なないように気をつける事です。では、後は宜しくお願いしますよ。アベル・ホーストン」

「分かってるよ。問題児の扱いならちょっとは心得てるからな」

その応酬を最後に、アインは外に出、ラックは手を振って部屋を出て行った。

タングネスもまた「じゃあな、ガキ。俺も退散するぜ」と捨てゼリフを残し、煙を上げてその場から消えた。まるで忍者だ。

話が終わりを告げたのを見て、アベルが気を遣うように言う。

「それじゃ、暫く宜しくな霧島君。アルトレットはちょっと慣れないかもしれないが、俺の知り合いもいるし、出来るだけ環境には取り計らうよ」

「はい。宜しくお願いします」

そうして、霧島は立ち上がり、ローレインの人達にも「皆さんも、有難うございました」と礼を言った。すると、そこでエフォードが霧島の名を呼ぶ。何処か清清しい顔立ちの彼は、礼儀正しそうにお辞儀をする。

「あの時は言えなかったから、今言わせてくれ。ミラ姉さんを助け

てくれて、有難う。
またいつか会える時が来たら、恩を返させてほしい」

「私からも、助けてくれて有難うございました。今こうしていられるのは、貴方が行動してくれたおかげ。これからの無事を祈っているわ」

「……構いませんよ。俺は俺なりに行動しただけですので。では、これで」

霧島はそう二人に言い、アベル、リナと共に、これからの事に思いを馳せながら外に出た。

第十二話　これから（後書き）

１１／１６　少し直し。

第十三話　雑用係りを決めよう

あれから約三日は経っただろうか。

霧島高貴はアルトレット議事堂と呼ばれる建物で、アルトレットの保護下に置かれた。アベル、リナは何でも屋として霧島の側にいるが、アインとラックは少し寄合所の手伝いをしているらしい。

一方、メインギルドのひとつ『ユニオン』では、キル・ゴッセルがギルドマスターとして活躍するギルドだ。アルトレットのある都市、ノーレから見れば北側の地方であるタイラを統括している。

このギルドマスターというのは、若人の中でも飛び抜けて強い者が選定されるため、たまにガンツのような乱暴者がなることもあるが、キルは知能の方も飛び抜けているためにアルトレットからは結構な信頼を置かれている。

そんな彼は、一時アルトレットから戻りギルドメンバーの一部とすごろくをしていた。ビリに近ければ近いほど、雑用が増えるという条件つきだった。

「んじゃ、俺上がりな」

「っな……キル、お前早過ぎだろ」

「レイジが遅いんだろ？　ローラなんて俺のすぐ後ろだぜ？」

一番で上がりを告げたキルに、レイジと呼ばれた黄土色の髪の男は大袈裟に驚き、回りの者に呆れられた。彼はもう二十代後半に差し掛かろうとしているのに、こういうゲーム事になると必死になる。

それを窘めるように、ローラと呼ばれた黒髪白衣の女性がレイジに声をかける。

「レイジ、そう言ってもさっきからアンタ、サイコロで三より上を出していないんだから、上がれなくて当然じゃない」

「……そりゃ、そうなんだがな。なんつーかこうよ。納得出来ないってかさぁ」

「あんまり嘆かないの。あ、私も上がりね。二位のペナルティは……玄関掃除か。さっさと済ませてくるわ」

「おう。さて、後はノルドとイリリカの三位争いか？」

盤上の状況を眺めて、にやけながら声を出した。そこで、金髪ツインテールのイリリカはムッとなったように頬を膨らませ、声を張り上げる。

「い～や、私が三位だね！　ノルドっちには絶対負けないから！」

「あれ、何で僕がそんなに目の敵にされてるの？」

「ペナルティの内容だ！　ちゃんと見てるだろ！？」

イリリカの言葉に釣られるように、ノルド含める男三名は壁に張られたペナルティ表を見て、「ああ」と彼女の言ったことを理解した。

三位　大浴場の掃除

四位　埃まみれの物置掃除（少しでも！）
五位　例の依頼を引き受ける
――――――――――――――――――――

それを三人が見届けたのを確認し、イリリカは念を押すように言う。

「な、分かっただろ！　私はあの物置に行くのだけは絶対ごめんだからな！」

「じゃあ何で選択肢に入れたんだよ。これ考えたのイリリカだろ」

キルの割り込みに、ふふん、と彼女は腕を組む。

「私が一番で上がるつもりだったからに決まってるだろ？　それが外れた以上、三位のペナルティを逃したら後がない！　負けられない戦いがここにあるのさ！」

堂々と闘志を燃やしての三位宣言。それを聞いて、黒髪眼鏡の好青年であるノルドが弱々しく声を出す。

「あ、あはは……キル君、助けてよ」

「なんでだよ。物置行きたくないなら、勝てばいいだろ？」

「うん、勿論そうしたいんだけど。そうしたら後でイリリカが怖いんだ……」

「……災難だなぁ、お前」

同情するようにキルは声を出し、少し考えるふうに顔を上に上げ、下ろした。

「だったら最下位になったらどうだ？　物置をレイジに押し付けて、三位イリリカ、五位ノルドになるように。レイジに高い目が来るよう応援すればいいじゃねぇか」

『それだ！』

「何で二人一斉に！？　イリリカはノルドに物置に行って欲しかったんじゃねーのかよ！」

「え？　別にそんなこと言ってないぞ。私はただ、物置から外れればいいだけだし、無駄にノルドっちに当たらなくて済む。皆ハッピーだ」

イリリカの言葉に、レイジは言葉に詰まり、今のボード上の状況を見つめた。だが、そこでノルドがふと思い出したかのように言う。

「あれ、でも待ってよ。キル君、五位の受ける依頼ってなんなんだい？」

「だから、これを組んだのイリリカだからよ。俺は知らないんだが」

「え」

それを聞いて、五位をとることにも不安を覚え始めたのか、ノルドはイリリカに声をかける。

「イリリカ？　依頼っていうのは一体――」

「マリヤから、スパーキングする相手が欲しいって依頼」

「！？」

瞬間、ノルドとレイジが凍った。かと思えば、レイジが形相を変えてサイコロを振り始める。

「っしゃあ、六だ！　安心しろノルド！　お前の分までピッカピカにしてきてやるからよぉ！」

「ふざけないでくれ！　マリヤの相手をするくらいなら、三位のままクリアした方がずっとマシだ！」

「何だよそれ！　アンタは四位か五位で決定だろ！？　三位は絶対譲らない！」

「……仲良いなお前ら」

すっかり蚊帳の外にいるキルは、三人にそう言葉を投げかけるが、どうやら届いていないようだ。暫く賑やかな喧騒を陰で見守る事に徹していたキルは、やがて部屋においてある水晶に反応があることに気付く。どうやら、誰かがこのギルドに向けて電話をかけてきているらしい。

（かといってなぁ……ギャラリーがうるさい中電話が取れる訳ないし……）

キルは置いてある水晶を持ち上げ、三人に一言告げてから（まぁ、おそらく聞こえてないだろう）、一旦部屋の外に出る。そして、さ

っきの部屋から大分離れた位置まで来てから、水晶を起動させ声を聞いた。

「くぉらキル！　電話を鳴らしたのだからさっさと出んか！」

「あー、申し訳ないです。ちょっと今ごたついてまして」

キルは水晶越しの相手の機嫌を伺うように声を出しながら、この声の持ち主が誰だったかと記憶を探る。

そして、一人思い当たる人物を見つけた。暫く声を聞いていなかったが、間違いないだろうと踏んで相手の名前を呼ぶ。

「ところで、自宅謹慎中の貴方様が、本日は何用ですか？　ベルン卿」

「どうしたもこうしたもないわ！　今回は、お前の実力を見込んで頼みがあるんだ！」

野太くでかい声が、キルの耳に突き刺さり廊下に反響する。彼は耳を塞ぎながら、近くの客間の扉を開けて中に入り、声が外に出ないよう図ってから応答した。

「今、ですか？　一体どんな頼みなんですか？」

「決まっておろう！？　アリアに放ったあやつを倒し、我輩をこんな目に合わせた張本人を連れて来て欲しいのだ！」

「……それってまさか、霧島高貴の事ですか？」

冗談だろ、と言いたかったが、アリア国王を倒した奴と聞いて、

霧島高貴以外に思い当たる人物など存在しなかった。その裏づけを肯定するように、ベルンは鼻息荒く声を出す。

「そうだとも！　あやつには一泡吹かせんと我輩の気が済まん！　是非とも連れて来て貰いたい！」

「はあ……ですが、アルトレットの保護下にいる彼を、どうやって連れて来いと言うんです？」

「そんなもん、お前任せに決まっておろう！　お前なら今まで通り、全てを円滑に進めてくれるのだろう？」

今まで断定的だった口調だったのに対し、今の言葉の最後だけニュアンスが違った。「君ならきちんとやってくれるのだろ？　ん？　そうだろ？」といった感じだった。

キルは溜め息を堪えつつ、控えめに言葉を返す。

「そりゃあ、出来ないことはないですが。まさか、謹慎中の貴方にも非が来ないようにも取り計らえと？」

「ほう、分かっておるではないか。流石かの有名なキル・ゴッセルだ」

「……褒めて下さり有難うございます」

それが当然だと思っている辺りに、もはや呆れ気味な声質で応答しているが、ベルンに気にしている様子は見られない。

（馬鹿は死ななきゃ治らないってか？　地球人も上手いこと言うね。全く懲りてねぇわコイツ）

いっそのこと断ろうかと本気で思い口を開きかけたが、寸前で踏み止まる。頭の中に、一つの妙案が浮かんだのだ。そこで一つ咳ばらいをし、テンションを普通に戻す。

「ええ、いいですよ。アルトレットに就いているお方の、直々のお願いだ。断りはしませんし、悪いようにもしませんよ。大船に乗ったつもりでいてください」

泥の大船だけどな、と口に出そうとするのを堪え、ベルンの反応を待った。

「おお、そうか！　引き受けてくれるか！　では、必ず成功させてくれよ？　裏切ろうとしても無駄だからな？　アルトレットに申請すれば、お前をギルドマスターから引きずり降ろす事だって出来るんだからな？」

ここで脅しか、とキルは思ったが、それも想定の範囲内だった。ベルンの声を聞き流す感じで耳に通しながら、「分かってますよ」と答えた。それを聞いて安心したのか、軽く溜息をつき、「では、後は頼んだぞ」と電話を切る。水晶から輝きも消えたので、もうこちらの音声が向こうに届くことはないだろう。

彼は溜め込んだストレスを一息に吐き出すと、その部屋の中でボソッと呟く。

「ウォレク」

「ここに」

その呼びかけを待っていたかのような速さで、ウォレクと呼ばれた男が音も無くキルの背後にやって来た。後ろに逆立った青髪に、狐のように釣りあがった目が特徴だった。彼は自身の役割を物語るように、全身を黒い服で覆っている。青い髪を隠すためのフードもあるようだ。

それを感じ取り、キルはウォレクに言葉を投げる。

「先にアルトレットに向かって、霧島高貴がどうしているか見てきてほしい。俺は少し雑用を片付けてから行く。テレポートコインの使い方は大丈夫だな？」

「心配には及びません。既に動作確認は済んでおります」

「そうか。なら、頼む。所在が掴めたら、アルトレット議事堂の五階西側、階段から数えて三番目の部屋で待ち合わせだ」

「御意」

キルのその言葉を引き金に、ウォレクは懐からコインを取り出し、ノナを流す。すると、コインを覆っていた緑色の炎がたちまちにウォレクを覆い、その炎が消えると共にその姿を消した。

キルはそれを見届けると、一先ず先程の部屋へと歩を進める。扉を開けると、歓喜の表情のイリリカと、ホッとしたような表情のレイジと、絶望を味わっているノルドがいた。おそらく、イリリカ三位、レイジ四位、ノルド五位の結果となったのだろう。憐れなりノルド・チェイサー。

水晶を元の場所に戻した後、キルは三人に外出の意を告げるべく口を開ける。

「お前ら、ちょっと用事が出来たからよ。俺はアルトレットに戻るぜ」

「え、キルっちもう行くのか？　少し前に戻ってきたばかりで、すごろくしか出来てねーじゃん」

「しゃーねーよ、仕事だもん。イリリカ、後頼むぜ。レイジも。ノルドは……まぁ、頑張れ」

「そんな、あんまりだ……」

ノルドの悲痛な言葉を背に、キルはこれからの事を楽しみにしながら、雑用を片付けるべく一旦最上階の自分の部屋へと足を進めた。

（さぁて、霧島高貴、か。面白い奴だといいんだがな……）

第十四話　気まぐれ譲渡

「暇だなぁ」

アルトレット議事堂に匿われる事になってから数日が過ぎたが、やる事がひとつもない今の現状は、霧島にとっては苦痛でしかなかった。いつもならこういった休日は、街中を歩き回り何か悪事が起きていないかと見て回るものなのだが、当然そんなことなど出来はしない。

常にテカテカ光る大理石のような石が敷き詰められている床との睨めっこや、いつまでも汚れる事無く真っ白な壁との見合いや、高級を並べ上げたような家具の眺めは一日で飽きた上に、外に出ようとすれば許可がいるという引き篭もり並の生活。

当然、外出許可の申請は出したものの、未だに返事が来る気配がないため、ひょっとしたら永遠にここに閉じ込められるんじゃないかという疑問が巻き起こった。どうしたものかと、指の爪を噛む。

（何でもいいから、何か起きないかなー）

すると、無駄に金の装飾が施された扉が開き、アークとリナが中に入ってきた。何用かと思っていると、他にもう一人連れて来ている事に気付く。やけに長い金髪にウォレク並に目が釣り上がっている、男だ。顔をみるかぎりそこまで年をとっておらず、霧島よりちょっと上くらいだと想像がつく。

その三人が入ってくるのを見届け、霧島は立ち上がり迎えた。

「こんにちは。今まで何処に行っていたんですか？」

「なぁに、ちょっとした気配りってやつだ。外に出たいんだろう？　コイツがいれば許可なんて貰えずともでていけるぜ」

霧島はそれを聞いて驚くと共に金髪の青年の方を見る。青年は瞳だけを霧島の方へ向けると、それについていかせるように体の向きを変え彼と向き合う。

「ブラッド・アーバンだ。エラルドに就いている。今日はアベルに頼まれて、部下の数名を街の警備に放ち、加えて一定距離を開けての身辺警護を頼んである。既にその事もアルトレットに伝えた」

ブラッドの事務的な内容の言葉を聞きながら、霧島は思わず顔を歪めた。たった外を出歩くだけでも、そこまでしなければ聞き入れてもらえないらしい。

そんな心境を表情から感じとったのか、ブラッドは顔をしかめて言う。

「ま、窮屈な思いをしそうだってのは分かるけどよ。アルトレットの頭の堅さは尋常じゃねぇんだ。我慢してくれ」

「……分かりました」

流石にこれ以上突っ掛かると子供っぽいという先入観もあるせいか、霧島は比較的早くその状況を受け入れる。ひとまず言い合いが丸く収まったからか、アベルは霧島とリナを押すように外に出るのを急かした。

そうして、実に五日振りの外だ。直接降り注いで来る日光は眩し

く、思わず右腕を額に持っていく。

眩しさに慣れたところで、今度は辺りの景色を見渡すべく、ぐるりと目を走らせる。

都市の中心というだけあって、市場の賑わいようが、地球に劣らず大所帯だ。下手すれば、人混みのお陰で迷子になる可能性もあるだろう。

（これは、逆に監視の目があった方がいいかもな……はぐれないし）

さっき伝えられた情報を前向きに捕らえ、街を歩き始めようとするアベルについていく。リナはちゃっかりと、アベルと肩を並べて歩いていた。霧島はあまりリナの事に詳しくはないが、五日前に会ったときといい、今のこの光景といい、お父さんっ子なんだなと想像がついた。

そんなことを考えながら歩いていると、不意にリナが声をかけてくる。

「霧島君。何処か寄ってみたいところとかある？」

「んー、特にはないよ」

そもそもの話、ただ中がきついから外に出たかっただけであって、別段用があるから出てきた訳ではないのだ。

その返事を聞いて、リナは少し考える仕種を見せると、続けて言う。

「じゃあ、私達の買い物に付き合ってもらってもいい？　その間で何かあったら、言ってもらって構わないからさ」

「ああ。それで、何処に行くんだ？」

「こっちよ」

「……出来ればどんな店か答えてくれ」

その最後の言葉は聞いてもらえなかったらしく、リナはアベルの後を追いかけて人混みの中へ飛び込んで行く。霧島はそれを見て溜息をつきながら、地球で培ったスキルを生かし人混みをすいすい進んでいった。

やがて二人に追い付くと、丁度そこの店に入って行くところだったので、どんな店かと店先の看板名を見る。

そこには、魔具工房と書いてあった。

次に中を見遣ると、なるほど、変なものばかりが陳列されていた。頭が龍下が馬の生物の置物や、一定時間置きに「寒い、寒い」って言う雪だるまに、舌に眉毛、目まで象られている上に動く飴玉のセット。

それらが並んでいる棚に挟まれた通路を進んで行くと、先行した二人とカウンターらしきところを見つけた。そこには紫の長髪を持ち、大人の色香を漂わわせている女の人がいた。彼女は霧島の姿を見るなり、魅力的な笑みを浮かべ妖艶な唇を動かす。

「あら、いらっしゃい。アベルの連れかしら？」

「はい。あの、貴方は？」

「……カウンターの受付嬢である私に、初対面で名前を尋ねるなんて。プレイボーイ？」

「違います」

年上のアベルを呼び捨てにしているから、どんな人なのかと思ってかけた言葉だったのだが、どうやらあらぬ誤解を植え付けてしまったようだ。

女の人は「まぁいいわ」と話題を切り、自己紹介を始める。

「私はエイラ・シャムレット。見ての通り、魔具工房の店員、もとい店長。もっと違う言い方をすれば、寄合所に所属している『道具屋』よ」

はっきりした女声で、きびきびとした雰囲気だった。

霧島がそれを聞き終わったのを見てか、不意にアベルが乱入してくる。

「どうだ、色っぽいねーちゃんだろ。まぁ、怒らせたら怖いんだけどな」

「ちょっと、あんまりお客様に先入観を与えないで欲しいわね。来なくなるでしょ」

見るからに不機嫌を含んだ言い方だったが、アベルは気にしてないふうで霧島に言う。

「霧島よぉ、この中を少し、リナと一緒に回っとけ。こっちは少しかかるから」

「分かりました」

アベルの言葉に、二人は一旦そこから離れる。後ろからぼそぼそと話声が聞こえてきたが、盗み聞きなど当然するわけがなく、店の陳列棚を眺め始めた。

こうしてみると、中には外見が普通の品もあるにはあるようだった。トランプ、蓄音機、蛙の置物と、種類はごちゃごちゃだったが。

中でも霧島の目を引いたのは、『魔法ヒーローキット』だ。何処からどう見ても子供のおもちゃっぽいやつのセットものだったが、ここは魔法が存在する異世界であり、値段も一際高い。リナには若干ひかれた。

そのリナは、小さい腰ぎんちゃくが気になるようだが、それがどういったものなのから教えてくれなかった。霧島としては自分のお気に入りを紹介した後だったので、解せなかった。

「？　何だこれ」

そこで、ふと店の隅に何かがあるのに気付いた。リナも彼の傍にやって来て、それが何かを見るために二人でじりじりと距離を詰めた。

置いてあったのは、どうやら槍のようだった。長さは一・七メートルほどのそれは、槍先含め全身が青色で、植物の蔓でも象ったような金色の装飾が、長さと位置をばらばらで複数施されていた。まるで刺すという要素を捨てた、儀式や鑑賞用の槍だと説明されたら納得してしまいそうなもので、槍で槍ではない代物に見えた。

「凄いなこれ。色んな意味で」

「うん。私も初めて見た」

目の前に立てかけてある槍を眺め、好奇心に駆られた霧島は、それを手に持ってみようと手を伸ばす。

「坊主！　汚い手で触るな！」

「いっ！」

すると、不意にどこからか声が聞こえたので、霧島は反射的に手を引っ込め首を回す。リナも後ろに目をやったりしている。だが、声を出したであろう老人の姿はどこにもない。

「あれ、気のせい、か？」

「でも、嫌に良く聞こえたわよ。何処かに隠れているだけなんじゃ――」

「おい！　ここだ！　どっちを向いている」

何処かの誰かの面影を探していると、再び怒号が飛んできた。二人共、今度は何処から声が聞こえてきたか分かったようだ。その上で、疑念に満ち溢れたような表情で槍を見つめる。

「……。まさか」

「何だ、喋る武器を見るのは始めてか？」

二人の驚いた様子を見て、まんざらでもないのか、どこか得意げな声色で槍は言った。

霧島とリナは、今のセリフでようやく槍が喋っているという現実

と向き合ったのか、揃って驚きの声を上げる。
そして、その声を聞き付けたのか、すぐにアベルとエイラがやってきた。エイラの方は、青い槍がそこにあったのを見て、納得したように「あぁ」と声を出す。

「カリバーさん。喋ったんですか？」

「おお、エイラ。なに、好奇心の塊を持った少年がわしに触れようとしてきたからの。ビシッと言ってやった。どうせなら、そちらの女子に触れて欲し」

「ちょっと黙って下さいな、カリバーさん。それ以上言うようなら、消しちゃうけど？」

カリバーというらしい、槍に付いている人格に対して、エイラは軽く脅しにかかった。それを聞いて、カリバーは少し黙り薄く光る。

「いやっ、はっはっは。すまんな、つい本音が出てしもうた」

あくまで、先程の発言を撤回せずに押し通すカリバーだったが、それはやってはいけない気がすると霧島は思った。
そして、なんとカリバーは咳ばらいをすると、話題を変えるために自ら鶴の一声を上げる。

「ところで、お前さんがた三人は買い物かい？」

「ええ、まぁ。そうですけど」

一応、という風に霧島がその問いに答えるが、リナは無言だった。ちらと横目で彼女を見遣り、「リナ？」と声をかけて返答を促す。

「……ごめん。喋ったらいけない気がするの」

「アベルさんの後ろにでも隠れておくか？」

「……それも、何か負けな気がするの」

「……」

まぁ無理もないか、と思いながらいると、カリバーは少し口調を荒げる。

「これ、坊主！　そこな女子が喋る前に返答するでない！」

「……」

なんとも言えない気持ちになっていると、エイラがカリバーの方へと歩き始めた。カリバーはそれに気付いたのか、「ん？」と不思議そうな声を出す。

直後、カリバーはエイラに持ち上げられ、フルスイングで壁にたたき付けられた。カリバーは痛覚があるのか、痛そうに喚き始める。

「い、痛いだろーが！　一体何を」

「黙れ、って言っています。黙って下さい」

その言葉は、今までエイラが発したどの言葉とも違う、覇気だとかプレッシャーだかが込められていた。流石に怖くなったのか、カリバーは少しだけ大人しくなる。

それを見て、アベルは口元を緩めた。

「お前、相変わらず無駄に過激だよなぁ」

「うるさいよ」

エイラはアベルの茶々にも良い反応は示さず、さっさとカウンターに戻っていく。アベルは「やれやれ」と口から零しながら、その後ろに着いた。リナもカリバーから離れるように、その二人に着いて行く。

霧島もそっちに行こうとしたが、その前に槍が再び薄く光る。

「やれやれ……年寄りの扱いをもう少し心得んかの。女好き以外全部冗談なのはあの女も分かっておるじゃろうに」

そこが問題なのでは、と問いたかったが、野暮なことだと自分で結論づけた。カリバーは言葉を続ける。

「さて、そこな小僧。買い物なら冷やかしなどせずちゃんと買っていけ。目当てはないのか？」

そう問われ、霧島は足を止めてカリバーの方を振り返った。

「特にはないです。元々、流れでやって来たようなものなので」

「ふむ、ではひとつ聞くが。お主のポケットにあるそれはなんだ」

「え」

霧島はそれを聞いて、少したじろぐが、すぐにポケットにあったタングネスから受け取った宝石を取りだした。すると、カリバーが

息を呑む音が聞こえた。

「ほぉ……小僧。お主、ただ者ではないな？　その色は、タングネスの宝石のはず」

「知ってるんですか！？」

驚きの感情を声に出した霧島に、カリバーはフンと答える。

「当然。槍になってからと言うものの、実に何百年の時を過ごしてきた。それくらいの知識はもっとる」

誇らしげな雰囲気の彼は、「そうじゃな、うむ」と何か考え、立てかけてある状態のまま、柄の方を軸に動き、槍先を右側の陳列棚の方に傾けた。

「ほれ、あそこにカードがあるじゃろう。あれを持っていくといい」

霧島が槍先の方を向くと、そこには確かにカードが立てかけてあった。材質は紙ではないのは確かだが、良く分からない。プラスチックのように固めで、宇宙の一部分を切り取ったかのような絵が裏表にあり、表側はその絵の中心に横三センチ縦五センチの真っ白な長方形に切り取られている部分がある。大きさも、正確にはわからないが、掌より少し小さめなものだと分かった。

「これは、何なんですか？」

「さぁな、知らん」

「はい？」

「知らん言うたら知らん」

自分から進めたというのに、カリバーはあっけからんとした雰囲気でそう言った。そして、霧島が唖然としたのを見てか、笑みでも浮かべているような雰囲気で語り出す。

「それは品名も無いし、用途も分からん。だから、それを使えるかどうかはお前次第。

ひょっとしたら、別の者が使うかも知れんが、わしは、お前がそれを使える方に賭ける。カードを渡す理由は、それだけじゃ」

「……」

その説明を聞いて、霧島は再びカードを眺める。これがどういったものなのか、少し興味が沸いてきたようだ。

「分かったら、持って行け。多分無くても困らんわ」

霧島はそれに突っ込みをかけたかったが、向こうからアベルに呼ばれたので、開きかけた口を閉じる。

そして、名残惜しそうにカリバーの方を少し見やったが、もう一声かかったことで仕方なしに霧島はそこを後にした。

第十五話　家族

エイラさんの魔具工房を後にし、三人は再び人ごみの中へ身を投じた。

と言っても、ただ何か面白い店はないかとぶらぶらするだけのようで、さっきの店以外の予定はないようだった。

霧島は、せっかく外に出たのだからと辺りを散策し、どんな店や場所があるのか観察する。けれど、これと言って目新しいものは見当たらない。魔法の世界だからと言って、やはり住んでいるのは人間に酷似した生態系なので、必要なものにそこまでの違いはないらしい。たまに見る服屋やアクセサリーショップ等に、地球にあるメーカーの商品を取り扱っている店があるが、あれは色んな意味で大丈夫なのだろうか。

唯一違うなと思う点は、機械を取り扱う店がないことだ。リナに牢屋で携帯電話を仕入れるかもという噂を聞いたが、霧島の推測では、おそらく魔法で出来る事は魔法で、機械に頼った方が楽そうだと思われたらその機械が仕入れされるだけであって、そこまで機械文明はこちらに浸透していないのではないかと思った。

現に、あの牢屋に入る前に金属探知機のようなものは設置されていなかった。だから、霧島は隠し持っていたナイフを持ちいれる事が出来た。それより小さい、と言うか、この世界では武器や金属というものの立ち位置はおそらく魔法より下だろうと思われるので、そもそも金属を警戒するということが染み付いていないのだろう。

そんなことをあれこれ考えながら、結構人ごみの中を歩いただろうか。突然小さな悲鳴のような声が耳に届いたので、そちらを見や

る。リナが足を挫いたようだ。

「大丈夫か？」

既にアベルが駆け寄っていたが、霧島も傍に寄り声をかける。リナはそれに頷いてみせたが、少し血が出ている辺り何かが勢いよくぶつかったのだろう。少なくとも、人の足同士の接触、というほど優しいものではなさそうだ。

それを見かねたのか、アベルはリナをおぶり、霧島に着いてくるよう言う。一旦休めるところまで移動するらしい。

人混みから脱出し、店が立ち並ぶ場所から離れていくと、みるみる内にひとの姿がきえていく。アベルの言う目的地に着く頃には、人っ子一人見当たらない場所だった。

ここは商店街の裏手に当たる広場なのか、コンテナの山が積み上げられていて、その隣に砂地の広場がある。道の端には申し訳程度の苗木のベンチと、静かで、ゆっくり出来そうなところであることには間違いない。

「工房に戻って、治癒系の魔具と、ついでに飲み物買ってくるからよ。霧島、リナと一緒にベンチに座って待っといてくれ」

それに頷くと、「じゃあ任せた」と言ってアベルは歩き出す。ひとまず、霧島はリナに肩を貸し、ベンチまで歩いて座らせてやった。

暫く静かな時間が訪れる。たまに通る人や、鬼ごっこでもしているのか、追いかけあっている子供達がいる以外は特になにもない。

こんな状況でも、何処かからエラルドの人に見張られているのかと思うと、少し落ち着かないが。

リナは気にしてない（というか、忘れているのか？）様子で、目

を閉じて風を感じている。心なしか、街を廻っていたときより笑顔だ。

そこで、霧島は何か話題を投げようと思索し、ふと思った言葉を投げかける。

「何か、リナとアベルさんっていい親子だな」

「え、そう？」

思わぬことを言われた、といった表情で、リナはその言葉に反応を示す。霧島は「ああ」と答え、言葉を続けた。

「俺は最近になってあんまり、両親と話なんてしなくなったからな。お互いにこうして心配し合えるっていうのは、見ていていいなぁって思うよ」

「……そう、かな」

「ああ」

なんとなしに、霧島は思った事を言った。普通なら一言くらい怒られそうなものだが、そんな気配はなかった。

変わりに、今度はリナが質問をなげてくる。

「霧島君のお父さんは、どんな人なの？」

「ん？　やけにおおざっぱで、あんまり深い事を気にしないタイプってことくらいしか知らない」

「自分のお父さんなのに？」

霧島の返答を聞いて、リナは意外そうに言ったが、彼は平然とその質問の答えを出す。

「近頃の地球にいる家族はそんなもんだと思うぜ。大体の両親は働き、子供は自分で部屋に篭り勉強かゲームかパソコンか。すっかり、いつまでも一家団欒をしよう、なんて家は減ってるはずだ。俺もそんなもんだよ。ちょっと他の奴らとは違って、俺は普段町内パトロールをしているってだけだが、家族と話すなんて、飯かたまのテレビくらいで、普段は滅多に触れ合わない。皆どこかしらに壁作って、家族間どころか、兄弟姉妹にもびくびくしている奴も珍しくなくなっちまったよ」

「家族って、大体そうなの？」

「いや、ちゃんと仲良くやってるところもあるさ。リナとアベルさんみたいに」

自分の考えの範疇とはいえ、聞く人によっては充分に悲しい話を霧島は淡々と告げた。

リナは、思わぬほど難しい話になってしまったからか、「そっか」と返事をする。それから、物思いに耽るように虚空を見つめた。

そうして、暫く。気付けば、辺りにいた人たちは姿を消してどこかへ行ってしまっていた。霧島はそんなことを気にしてじっとしていたわけではないが、気付いたらそうなっていたのだ。

すると、不意にリナが予想外なことを口にする。

「私ね、実は孤児なんだ」

突然の独白。霧島は一瞬自分の耳を疑い、リナに目をやる。彼女の言葉は続いた。

「物心つく前に、両親が既にいなくなっちゃってて、棄てられていたのを今のお父さんに拾われたみたい」

「……みたい？」

「だって、何で私が一人で外に放り出されていたのかって、本当の理由は分からないじゃない。まだその時、赤ん坊だし、お父さんも私の両親と会ったことないだろうし」

リナは、ぶつぶつとだがその話をするのを続けた。どういう意図があり、何故急にそんな話をしだしたのか、表情から読み取ることが出来ず、霧島はどう反応していいものか迷った。

「……アベルさんってどんな人なんだ？」

一先ず、明るくなって話をしてくれそうな話題を振った。今の空気の中、会話をし続ける勇気がなかった。

幸いなことに、リナはその話題にのってくる。

「いい人だよ。でも、馬鹿みたいにいい人過ぎて、一緒に暮らしていると気を使わずにはいられない。

今ね、お父さんの家には私を含めて十八人の孤児がいるわ。一番上はもう二十三歳とかで、今回みたいに長い間出てる時はその人が子供の世話をしてくれてる。皆、何かしらの理由で両親に育ててもらえなくなって、お父さんに見つけられてやってきた子供達。

そういうの、見つける度に家に連れて来ては育ててるの。何処にそんなお金があるんだ、とか心配しても、笑っちゃっててさ。

だから、私はお父さんを手伝いたいって思ったんだ。少しでも重荷を減らしてあげれたらなって。まぁ、足引っ張っちゃってるんだけどね。……こう思うのって、変、かな？」

「いや、良いことだ」

そう聞かれ、霧島は迷いなくきっぱりと答えた。例え結果が悪くなってしまったとしても、そういった気持ちを持ち行動するということが、悪いことであるはずがないと、本心でそう思った。

リナは、その同意の返事があまりにも早かったからか、霧島の方一旦見つめてから、笑顔を浮かべて言う。

「そう。ごめんね、急に変なことを聞いて」

「変なことなんかじゃない」

咄嗟にそう口から出る。それを言うのが義務であるかのように、一切の迷いを含まず霧島はリナの考えを正しいと断じた。

それで少しは安心したのか、リナは小さく「うん」と答えた。それきり、話題は途切れ、霧島は何か歯痒い思いをした。

そこで、不意に辺りが暗くなった。夜になった、と言うわけではない。何だか、帷がかかったように辺りが少し影に包まれている。

何事かと気になり、霧島は立ち上がってから辺りを見渡す。すると、すぐ後ろに黒ずくめの男が立っていた。

「――！？」

黒ずくめは霧島に気づかれたからか、反射的にダガーを取り出し、

未だ気付いていないリナの首を狙ってくる。
霧島は思わず、リナとダガーの間に右手を突っ込んだ。ダガーはそれに怯むことなくかかって来、霧島の右掌に穴を開ける。

「――イッ、つ！」

リナは背後の違和感に気付き、そこで振り返ると、リナをダガーから身を挺して庇った右手から血が出ているのが見えた。思わず、という風に悲鳴が上がる。
霧島も霧島で、焼けるような痛みに耐えるために歯を食いしばり深呼吸をする。掌がぴくぴくと震えているが、今はそんなものの安否を心配している場合ではなかった。悲鳴で慌てた男が、ダガーを抜こうとしてきたのだ。下手に引き抜かれ、傷口を広げられたらまずい。

「タングネス！」

霧島はそうはさせるかと、体中の力を振り絞り精霊の名を叫ぶ。刹那、どこからともなく炎が出現し、目の前の黒ずくめを追い払おうと燃え盛る。
黒ずくめはそれを見て怯み、ダガーから手を離して後方へ飛び去った。流石というべきか、引き際を弁えている。
霧島は右手に残ったダガーを左手で引き抜き、自分の後方へそれを投げた。これで、黒ずくめはダガーを拾えない。

「霧島君、その右手……」

状況は察しているのか、リナが心配だという表情を浮かべている。だが、霧島はそれに構っている暇は無かった。右手の感覚は既に消えつつあり、体中の水分が汗となって放出されている。

直後、コンテナの上の方で動きがあった。同じような格好をした黒ずくめの男が、次々と出てきたのだ。霧島はリナに肩を貸しながら、その様子を見て、やばいと思った。

リナは足を負傷しており、霧島も右手が使えない。いくら魔法が使えると言っても、炎属性の魔法のみなので、対処されたら他に成す術がなかった。

黒ずくめの仲間が、各々ダガーを取り出し攻撃をしようと身構える。霧島はそれを見て、はっとあることに気付いた。

（まさか、そこから投げる気か？）

今、霧島とリナは歩ける状態になく、タングネスの炎を使って追い払おうにも、これだけ距離が開いていては魔法が届くまでにダガー投げと回避行動の両方をとられてしまう可能性があるため、使っても状況の好転が見込めない。

彼らは、今の奇襲も含めこちらの手を計りつつ、見合った行動をとっている。流石に戦闘慣れしているようで、霧島が今使った魔法の特性をすぐに見破ってきたようだ。残りの魔法は、リナの物体を透明化する魔法と、霧島の強化魔法だが、これらを使ったところでどうにもならないのは明白。

（どうする……どうする！？）

シールドを張っても背後から投げられたりすれば回避出来ない。カードに全てを託すのは危険すぎる。魔弾で弾くのにも、投げられる場所を背後左右含めて把握しなければならないし、逃げれるわけもない。

（……）

霧島は上にいる、ダガーを構えている集団を眺めるべく、視線を這わせる。相手がまだダガーを投げてこないのは、多少なりともリナがどんな魔法使いかと警戒しているのだろう。だが、いずれ痺れを切らして放ってくるはずだ。

そこで、霧島がリナにひとつ、小声で質問を投げる。

「リナ。この道の向こうにある人混みまで、走れそうか？」

「え？　……な、なんとか、頑張れば」

「そうか、じゃあ、行くぞ！」

霧島はそれを確認するや否や、すぐさま足を動かし走り出す。リナも言葉からこれから走ることを察していたようで、霧島について走った。敵は急なことに怯むが、霧島たちに向けてダガーを投げてくる。その狙いは、恐ろしい程に正確だ。

ここで、霧島は再びタングネスの炎を出し、自身の魔法でその炎の強さを上げる。そして、向かってくるダガーに対し、その炎を横殴りに放った。

複数のダガーは強化された炎の勢いに飲まれ、二人のところに正確無比に襲い掛かるはずだったはずが、風圧に押されたかのように横に吹っ飛び隣のコンテナにぶつかる。

ただ単に、炎の勢いに任せた力技でダガーを弾いただけだが、少しでも互いの距離を伸ばしたこの状況で、遠距離攻撃という手段を

奪えたのは好都合だった。

（狙い通り上手くいった。後は、向こうまで走りきる！）

霧島とリナは、それが上手くいったとはいえ過信することなく大急ぎで人のいる場所へと逃げていく。すると、黒ずくめの男たちは追いかけて来ようとしたが、リーダーらしき者がそれを止めた。どうやら、狙いはあくまで二人のようで、他の人へ危害を加えてしまう可能性のある場所へ赴く気はないらしい。

それを幸運に思いながら、二人は先ほどとは違う場所の商店街に出る。それと同時に暗がりも晴れ、元の活気ある明るい町並みが戻ってきたのだと実感した。ひとまず霧島は右手から溢れ出る血を抑えながらも助けを呼び、アベルを途中で拾ってからアルトレットへと帰還した。

第十六話　大胆不敵

「おーお。思ったよりやるな、霧島君」

一部始終をとある高台から見守っていたキルは、霧島の行動に賞賛を与えた。最も、あの黒ずくめをけしかけたのは彼ではないが。

そして、一時退散した黒ずくめが去った方角を見やり、小言を続ける。

「殺しに来たってことは、サマナーじゃないな。かといって、ベルンでもない。あいつは痛めつけるために自分の元に霧島が来ることを望んでいる。……第三勢力登場って訳か。今のところはウォレクに足取りを掴んでもらう事を期待するだけ、だな」

独り言のように今の状況を整理し、被っている赤い帽子に触れ、深く被りなおした。髪の毛も相まってか、相手からしてみると、正面から見た時にこれではキルの目が見えにくい。

それにしてもと、キルは少し考える。

（霧島は上手い事、逃げ切ってくれたみたいだが、まともにやってたら絶対終わってたな。

奴ら、あいつの近くにいたエラルドの隊員十人をあっという間に暗殺しちまった。あの偶然でもって接近に気付いてなかった場合、易々お陀仏だったって訳だ……。

まぁ、正直自分で切り抜けてくれて助かったよ。あの状況で助けるのは流石に無理だったし、この二日間の準備が無駄にならなかったし）

そう考えていると、キルの後ろにウォレクが登場する。毎度のこ

となが ら、こいつはいつも背後に現れる。

「奴らはどうだった？　ウォレク」

「は。途中で奴らは八人共、一人ずつ別方向に分散しました。追っ手を警戒してのことでしょう」

「深追いはしてないな？」

「ご命令通り」

「なら、いい。それが本当なら、八人共追っ手がいないと確認出来るまで、本陣には戻らんだろうからな」

もっとも、ただ金で雇われた捨て駒の可能性もあるが、あんまり深くは追求せず、キルは次に自分がやる出来事に目を向ける。

「ひとまず、俺は一段落つけてくる。後も手筈どおり頼むぜ」

◆

霧島高貴はあの後、アルトレットで治療を受けた。と言っても、魔法で傷口を塞いだだけに他ならないのだが。なんでも、自己治癒能力を高速化させる魔法らしい。

失われた血の量を取り戻すまで、少しの休養が必要と言われたので、今日のところは霧島も部屋に戻り、早めに寝付くことを決めた。

そうして、早速階段を登ろうかと足をかけたところで、後ろから霧島を呼ぶ声がしたので振り返る。

すると、そこには久しぶりに見る緑ローブと金髪青年が立っていた。彼らの姿を見て、霧島はすぐに挨拶を返す。

「お久しぶりです、ラックさん、アインさん」

「ええ。お元気そうでなにより……と、言ってもいいのですが。何ですか？　また何かやったんですか？」

「……今回は俺が首突っ込んだせいじゃないんですけどね」

下手な誤解を産む前にと、霧島はアインの言葉に早めに返答する。それを聞いて、アインは「そうですか」と、納得したのかしてないのか分からないような声で返してきた。続いての台詞は、ラックが奪う。

「それじゃ、どうしたんだ？　その怪我は」

「実は、黒いやつらに突然襲われたんですよ。何でか全然分からないままで」

「へぇ？　サマナー関係か？」

「違うと思います。殺しにかかってきてましたから」

食いついてくるラックの問いに答えながらも、霧島自身、あいつらのことを考えていた。ああやって集団で襲ってきた以上、何か意図があるのは間違いなさそうだが、こちらの世界に来てばかりなの

で、人に殺されるような理由を作ったことなどないし、意味が分からない。

アインはそれを聞きつつ、「おや？」と何かに気付いたような顔をする。

「アベル・ホーストンやリナはどうしたのですか？　ここにいらっしゃいませんが」

「リナはまだ医務室で休んでるし、アベルさんは少しでもって黒いやつらの足取りを掴みに行きました。俺は治療して貰って、これから部屋に戻るところです」

少しふらつきたくなるのを我慢しながら、二人と会話を続けた。暫くして、アインとラックが呼ばれて向こうに行ったので、ひとまずそこで互いに別れを告げる。

（……食うもん食ったし、さっさと寝よ）

霧島は二人が行くのを見届けてから、ゆっくりとした足取りで階段を上がっていった。

◆

ベルン・ベベリアはめんどくさい。性格最低大金持ちで高い地位という三大要素を兼ね備えるデブゴンだ。加えて、サブとして用心

深いが付け加えられている。嫌な奴のなかでも指折りの嫌な奴として、嫌な奴コンテストがあれば三位以内入賞間違いない。

そいつが今、自分をどんな状況に陥れているか、キル・ゴッセルは考える。

まず、霧島高貴を誰にもばれる事なく連れて行かなければならない。正直、この時点で誰かにこのことをばらしたいところだが、それは無理だ。

奴は用心深い。金に物を言わせて飼い慣らしている間諜が、アルトレット内部に限らずありとあらゆる地方に放たれているだろう。キルが誰かと会話をすれば、横耳聞き耳で聞かれてしまう可能性がある。

加えて、そうなってしまえばギルドマスターという地位を剥奪してくるという。ベルンは今謹慎中だが、金もしくは間諜越しに掴んだ弱みを使い、別の者にキルの地位を剥奪させることが奴には出来るだろう。

それをされたら、キルとしては非常にまずい。ギルドマスターという地位には、居続けなければならない理由があるからだ。よって、他人に協力を扇ぐという選択肢は個人的に非常に危険なため、最終手段という形になる。

さて、ここまで徹底されていては、キルとしても今は協力せざるを得ない。ということで、彼はこの二日間の準備の末、これからある行動に出るところだった。

ダークスーツを身につけ、アルトレット議事堂の五階から四階へ。霧島がいる部屋は三階なので、二階層ほど降りなければならない。ちゃんとダークスーツのカムフラージュ効果が発揮されるであろう

時間帯を選んで行動しているが、見張りや夜間勤務として狩り出されている兵士に見つければすぐにばれるだろう。

であれば、後の話は簡単だ。兵士の注意を他に引き付ければいい。

（さて、やりますか）

キルは心を決めると、手に持っていたスイッチを押す。

不意に、そこまで遠くないところで爆発が起きた。その際に発生した音は静かな深夜を消し飛ばし、やがて賑やかな喧騒を産むことだろう。

当然、見張りについていた兵士も慌て始めた。深夜であるため、エラルドやアルトレットの兵士が多くは集まらないのは明白なので、もし襲撃だったら、という風に頭を働かせられれば、彼らの一部は応援に行かなければならない、というふうに思えるだろう。

（確か、三分の一は応援に駆け付けることが決まっているはずだ。六階以上の防御はそもそも完全に魔法で固められているから、行く必要がないし、それより下は今のところ、霧島以外に守るべきものが存在しない）

アルトレットは、襲撃に対して慎重だった。庭にも魔法で編まれた防御、攻撃の罠がある。一～五階には偽の宝や貴族の影武者などを置き、六階以上にある本物に危害が及ばないようにしている。一～五階にそういったものが集中しているのを不自然に思われないよう、深夜でも兵士を置いているし、六階以上には幻術をかけ、外見だけでは五階から上は見えないようにしていて、階段も一～五階までは直通だが六階への階段は隠してある。

簡単に言えば、一～五階は好きに荒らして貰って構わない場所な

のだ。なので、兵士が襲撃に全員向かったとしても何の問題もない。だが、今霧島高貴が三階にいる。

（奴を六階以上に上げないのは、単に部外者に六階以上の存在を知られたくないからだろう。お陰で、少し手間食わされちまうが、まぁ問題はない）

そうして考えていると、兵士の間で結論が出たようだ。四階の兵士は全員下へ下りて行く。それを見て、キルは口の端を吊り上げた。

（これは多分、狙い通りだな……俺も下りるか）

キルは靴音を立てることなく階段をおりていき、先程と同じく踊場から三階の様子を見遣る。

案の定。三階に兵士が集中し、臨時で警備配置を決めているのだろう。一部の兵士はもう下りて、爆発現場に向かっているはずだ。

（本音はここで二階の兵士もちゃんとこっちに回ってくれているか見たかったが……そんなことを言ってる場合じゃねぇな。とりあえず、ちゃっちゃと片付けますか）

キルは再び、懐から小道具を取り出す。長さ十センチはある、円柱状の何かだ。

彼はそれについている詮のような物を引っこ抜き、素早く三階に投げ入れる。

すると、その缶から煙のようなものが立ち上がり、三階を侵食していく。兵士たちもそれに気付いたが、逃げることなく煙が何処から来たか突き止めようとする。無理もないことだが、地球のこういったものに対する知識はそこまで持ち合わせていないらしい。

そこで、一人の兵士に異常が見られた。突然目を閉じたかと思うと、その場に倒れ込んでしまったのだ。

それを不自然に思った兵士もまた、同じように倒れていき、最終的には三階にいた全ての兵士がその場に寝込んだ。

キルはそれを確認すると、ガスマスクを顔に付けてから三階に降り立つ。

（催眠ガス……思ったよりいいね、気に入った。また仕入れよう。にしても、思ったよりちょろかったな）

キルは眠っている兵士の間を縫い歩き、霧島が閉じ込められている部屋の前まで辿り着く。そして、その扉のとってを掴み、回した。

中は思ったより、広い。無駄に広すぎて、置かれている家具が空間の支配者になれていない。

（なんつーか、淋しいところだな）

霧島が寝ているであろうベッドは、結構隅の方にあった。キルは出来るだけそろりそろりと、そちらの方へ近づいていく。

そして、すぐ横まで来ると、キルはある違和感に気付いた。すぐさまそれを確かめるべく、布団をどける。

そこには、霧島高貴の姿はなかった。

「……あっれー？」

瞬間。キルは背後に人の気配を感じた。即座にそちらを振り向くと、そこには複数の人影があった。

一人は緑ローブに紫の髪。もう一人は、金髪に白服の剣士。続いて茶髪三十代のおっさんに、霧島高貴。

どうやら、深夜までこの部屋に残っていた面子が、爆発音がしたことで警戒態勢に入り、霧島を起こして侵入者が訪問した狙いを探っていたのだろう。

今、キルはガスマスクにダークスーツといった重装備のため、姿見で正体が割れてはいない。だが、一度魔法を使えば、すぐに誰か気付くだろう。

キルが自分達に気付いたのを見てか、緑ローブの男が声をかけてきた。

「貴方、先ほどからやけにこの世界の道具でないものを使っていますが……何者ですか？」

答えるわけがないだろう、と心の中で返事をした。キルはひとまず、この状況から脱するための条件を整える。

すると、不意に緑ローブの男の背後に、ノナで形成された拳銃が現れた。下手な動きをすれば撃つ、といったところだろう。

（……どうやら、向こうからすぐに仕掛けて来る気はないみたいだな。なら――）

キルは、そう思うや否や四人に向かって走り出した。それを見た緑ローブの男は驚き目を見開くが、すぐに拳銃から魔弾を発射する。だが、その魔弾はキルに辿り着く前に掻き消されてしまった。

「な――！」

彼らはその出来事に一瞬怯む。それを狙ってすかさず、キルは今日四つ目になる小道具を投げつけた。

それは床と接触すると、途端に閃光を発生させ四人の目を潰す。

まぁ、要するにただの閃光弾だが、この状況でのこれは彼らにとっては相当きついだろう。

キルはその隙を狙い、三人の合間を縫って霧島の腕を掴む。そして、すかさずテレポートコインを取り出し転移を開始した。

そのキルに対し、後ろから「待て！」といった声が聞こえたが、それも虚しく霧島はキルに連れられ行ってしまった。

第十七話　作戦通り

「やばい、暑いわこれ」

ベルン邸まで、あっという間に到着したキルは、霧島の腕を掴んだままガスマスクを外す。頭に被っていた黒いフードも取り、完全にリラックスモードに入っていた。

霧島は、突然目に映る景色が変わったためか、慌てて辺りを見渡している。

どうやらここは廊下のようで、床は黄土色をした石材が隙間なく敷き詰められており、その上に赤いカーペットが乗っかっている。二・五メートル程の高さの位置には、魔法だろうか、一定間隔で光源が置かれていて、その間を仕切るように、壁と同化したアーチが作られていた。壁は二・五メートル中、下の零・五メートルほどは、何かの模様が彫られた木材が貼られており、それより上は白めの壁紙が現れている。

その他、壁際には適当な位置に絵画や置物があるが、どれも見ただけで根の張る代物であると理解出来た。センスを金で買っている、そんな雰囲気だ。

霧島がそういった内装を確認していると、不意にキルが霧島に声をかけてくる。

「さて、霧島君にはこっちに来てもらうぜ。ベルン卿が待ってる」

「――――！」

ベルン、という名を聞いて、霧島はアリア国王が言っていた上司の名前を思い出した。この状況、このタイミングでベルンと言えば、あいつの指す上司であることに間違いはないだろう。

そして、何故こういった形で呼ばれたのかも得心がいった。所謂、報復をしようと言うのだ。

それを踏まえ、霧島は段々と緊張してきた。ここまで、アルトレットからどれくらいの距離があるか分からないが、アイン達が霧島がここにいると目星をつけてやってくる確立が、痛く低いからだ。だから、彼はこのままキルに引っ張られ付いていってはならない、と考える。

（……こいつは、あの侵入の時にわざわざ閃光弾なんかを使ってきた。魔法を一切使わずに。それが、騒ぎを起こしたくないからか、単に魔法が攻撃系でないのか分からないが、ここで逃げるためには仕掛けるしかないな）

キルが完全に前を向いて歩いているのを確認し、霧島は火事を起こさないようにと、敢えて魔弾を生成する。それに気配で気付いたのか、キルは足を進めるのを止めた。霧島はキルが振り向くのを待たずに、背中に魔弾を打ち込む。

腕を捕まれているとはいえ、爆風が自分にも襲い掛かっては問題なので少し距離を置いての射撃だ。それでも、魔弾が届くまでの時間は一秒にも満たない。すぐに爆風が自分にも襲い来ると思い、霧島は急いで空いた腕で顔を覆った。

しかし、そのままの状況で四秒、五秒と時が過ぎてしまった。霧島は思わず、あれと思い腕を少しどけ、相手が今どんな状態になっているかを目で確認しようとした。すると、爆風が起こっていない

どころか、キル自身に焦げ痕ひとつついていない事が分かる。驚きに目を歪めた。

「こうなった状況で逃げようとするのは、まぁ無理もないことだが。相手が悪いぜ。まぁ、今のじゃ何が起こったか分からなかっただろうがな」

キルは至って冷静に、霧島に声をかけた。霧島は納得がいかないのか、もう一度魔弾を作りキルに向ける。それを見て、彼は自分から少し距離を空けた。

その動作に、霧島は不可解に思ったが、途中で魔弾の生成を止める訳にもいかないので、そのまま魔弾を放つ。

すると、それはキルに辿り着く前に破裂し、空気中に元のノナとなって分散した。霧島は結局、それを見ても何が起こったのか訳が分からず、少し遅れて目を見開く。

キルは今の無残な様子を見ながら、少し疑問に思っていることをぶつけた。

「ただの魔弾をそうやって撃っているのは、火事でも心配してるからか？　こんな状況だってのに、お前は優しいね」

「……」

霧島はそれを聞いても、炎を使う気にはなれなかった。と言うよりも、手が離れているというチャンスを見過ごすほど馬鹿ではない、ということだ。キルが余裕な表情を浮かべているのを一目見やり、即座に踵を返す。

「あ、待て！」

キルの声が聞こえたが、それで待つわけがない。その先にある分かれ道を右に曲がろうと決意し、霧島は分岐路まで走りぬく。

が、そこで見えない壁に勢い良くぶつかった。自分でも何でこんな声が出たんだ、と思えるほどの変な声を上げ、その痛みに呻きながらうずくまる。そして、手だけを伸ばしてその壁に触った。透明ではあるが、確実にそこに壁のようなものがある。

その情けない姿の一部始終を見やって、キルは「あーあ」と同情するような声を出した。

「だから待てって言っただろ？　お前が逃げる事を考えずに手を離したと思ったか？　お前が走り出したら、そこにシールドを張って壁を作ろうって決めてたんだよ。吃驚したろ」

「あ……が……」

それでも、霧島は驚かずにはいられなかった。アリア国王によれば、あの一・五メートルほどの大きさを誇る魔弾をすぐに生成出来るようになるために年月や経験が必要だった、と言っていた。それを踏まえて考えてみると、霧島が逃げるところをみてから、瞬時に二・五メートルの大きさを誇るシールドを貼り付けた、と言う彼を見ると、驚かずにはいられない。

霧島の経験上、一応どれだけ若くても大きめの魔弾やシールドは作れると思われるが、それには時間がかかる。周りのノナを集め、魔法として現出させるまでの時間の幅が。

彼の考えの上では、長い間魔法を使えばそれに慣れが生じて、そのお陰で威力とでかさを持つ魔法をすぐに現出できるようになるの

だと考えていた。

だが、目の前の彼は、そんな考えを嘲笑うかのように、ほぼ変わらぬ年齢でこれを成し遂げた。

（さっきの現象もそうだけど……何なんだこの人）

キルはさっきからジッとしている霧島を見てから、面倒くさそうに近づいてくる。

「おいおい、大丈夫か？　見たところ歯も折れてないし、鼻血も出てない。あれだけ勢い良くぶつかったにしちゃ万々歳じゃねぇか。ほら、手ぇ貸してやるから立て」

「……はい」

自力では逃げれそうにないと悟ったのか、霧島はキルの言う事を聞いた。それでも、どうにかしてこの状況を変えようと頭を働かせる。

そして、歩くこと暫く。廊下の果てに、大きな広間に出た。

部屋の高さは、五メートルくらいはあるだろうか。横幅も相応に、七、八メートルはありそうだった。当然、赤いカーペットの規格も大きくなる。

奥には玉座があり、そこには図体のでかいのが座っていた。一応、服は赤で統一された、貴族が着そうな服ではあるが、どう見ても特注であつらえたサイズだろう。しかも頭髪がない。ただのハゲのようだ。

顔は、気持ち悪くは無い。たらこ唇でもないし、顔にできものが

ある訳でもなければ、脂ぎってもなく、別段普通。あくまでそこらへんのおっさん止まりだ。
そいつは、キルが霧島を連れているのを見て、「おお」と声を上げる。

「キルか。思ったより遅かったな。何をしていたんだ？」

「作戦を考えていたんですよ、ベルン卿。多分ご存知ですよね」

「うむ。あの誘拐の手際はそれなりだった」

「……」

やはり間諜がいたか、とキルは自分が考えていた事を確信した。
ベルンは、それはさておき、という風に霧島の方を見る。

「ところで、そこにいるのが私の顔にを泥を塗ってくれた小僧か。ッハ、いかにも姑息そうな奴だな」

あくまで、部下のアリア国王のことは引き合いに出さずに自分の事を上げてくる辺り、流石と言うべきだろうか。自分の事しか考えていないのが見え見えだ。
ひとまず、というふうにキルは話を進める。

「それで、連れては来ましたが、これからどうなさるんですか？」

「うん？　それは貴様の知る事ではない。さっさと帰るがよい。……さて、お前が戻ってきたということは、奴らもそろそろ戻ってくるか」

それを聞いて、キルは軽く反応を示した。

「奴らって、まさか間諜ですか？」

「貴様に仕事をやって貰うにあたって、個別の奴らを十人ほど雇ったのよ。報酬を受け取りにやってくる頃だろう。で、それがどうしたのだ？」

ベルンはさもうっとうしそうに、キルの質問に答えた。

そもそも、ベルン邸とアルトレット間はそこまで離れていない。キルはあの三人から逃れるためと、人に見つかりたくなかったという理由でテレポートコインを使ったが、走って移動しても時間がかかる、ということはないのだ。

だから、ベルンが放った奴らの帰りが早いのも道理である。それを踏まえて、キルの言葉は続く。

「いえ、こうも夜が更けていますからね。そんなに早くにやってくるものなのだな、と思いまして」

感心しているようなその台詞に、ベルンは「あぁ」と言った。

「そこは、奴ら欲深いからな。金を与えれば何でもこなす、卑しい豚共だ。普通なら蔑まされて生きている馬鹿どもばかりだが、まぁ、私にはきっと感謝しているだろう」

そう言いながら、玉座から立ち上がり、ベルンはこの部屋の窓まで歩み寄る。ここは思ったより高い位置にあるらしく、二階建てくらいの建物が相手なら見下す事が出来る位置だ。窓から見る辺り、ここいらにこの建物より高い建物が見当たらない理由は、霧島には

大体察しがついた。

（こいつ、死なない程度に燃やすか？　隣にこいつがいるとはいえ、炎を使えば止める事は出来ないだろう。火事になる確率も、コントロールさえ出来ればゼロに等しいし――）

ベルンの方を見やりながら、霧島が魔法を使おうと腕を動かす。だが、それをキルが腕で制した。

「まだ、待て」

「え？」

その際にキルが言った台詞に、思わず霧島は目をキルの方に向けた。それを放っておいて、キルが窓辺を見やった時、屋根の上を闊歩する人影が見えた。十人いるので、おそらくベルンの手下だろう。彼らは屋根の上を無警戒に飛び回り、こちらにやって来る。

そして、その途中で十人の内の一人が、突如落雷に見舞われた。

「……へ？」

ベルンがその光景に目を見張っていると、次の瞬間には更に別の落雷が一人、二人と正確に彼らを襲う。また、それに逃げようとする人は、走っている途中で顔と胴体が分離し、血飛沫を上げて下に落ちていく。

「これは、どういう……」

やがて十人全員が殲滅されると、ベルンの屋根の目の前にあたる

場所に、二人の人影が見えた。やけに後ろに逆立った青髪を持つ男と、金髪ツインテールの女、だ。
それを見やって、キルはふてぶてしい笑みを浮かべる。

続いて、霧島とキルの後ろの通路から、ベルンの手下である貴族が大慌てでやってきた。ベルンは目をそちらに向けて、「何だ!?」と声を上げる。

「べ、ベルン殿！　玄関に三人の侵入者が――！」

「何!?　どんな奴らだ!?」

「そ、それは――」

「――金髪白服の青年剣士に、緑ローブの学者風の青年、んでもって茶髪のオッサン。だろ?」

貴族の言葉を先読み、キルが三人の特徴を告げる。それを聞いて、ベルン、霧島、貴族の三人は自分の耳を疑った。が、ベルンはすぐに顔をトマトのように真っ赤にし叱責する。

「キル！　貴様、どういうことだ!」

「何って、見たまんまですよ。俺が仕事を終えれば、間諜が帰ってくるっていうのは今までもそうだったから覚えてたし、後ろから来るであろう三人も、テレポートコインを使った時に発生した、ノナの痕跡を調べ上げてここに辿り着くであろうことは分かってたし。
今の光景に関しては、俺をクビにするための、貴族を脅すネタを持った間諜を始末するために、ウォレクにイリリカを連れてくるよう命令しただけですよ。そうやっとけば、もうテメェを始末する上

で心配になることは何もねぇからな」

最後に、完全に自分のペースに戻ったであろうキルが本性を言い放った。それを聞いて、ベルンは怒りに満ち溢れた目の色に変え、大声で怒鳴り始める。

「貴様ぁ！　こ、こんなことをして、タダで済むと思っているのか！？」

「思ってますよ。だって、アルトレットで保護すると決めてかかった霧島に、危害を加えようとした人を倒しに行ったって言えば、上は納得してくれます。しかも、その相手が貴方だ。弱みを握られている人からすれば、アルトレットから貴方を追い払えるチャンスになるから、尚更です」

至って平静に告げるキルに対し、未だに興奮気味のベルンはまだ喰らいついてくる。

「ふん！　馬鹿が、私はまだ何もしておらんぞ！　何処に危害を加えようとした証拠があるというのだ！」

一見、誰が聞いてもごもっともだと思える言葉だったが、キルは全く不安を表に出している様子が無い。どころか、より生き生きしてベルンに言葉を返す。

「あぁ、それですか。それも問題ありませんよ。これを見て下さい」

そう言って、今度はスーツの後ろにあるポケットからある物を取り出した。見るからに地球産である、小型機械のそれを見て、ベルンは訝しげな表情になる。

「何だ？　それは」

「俺が趣味で、サマナーを使って地球の物をコレクションしてるのは知ってるだろ？　これはそのひとつで、ボイスレコーダーって言うんだ。これには音声を録音する機能があってだな、俺はこいつをいつも、帽子の裏に貼り付けてる。だから、あの時水晶で俺達がした会話がこれには録音されているんだ」

「！？」

突然の告白に、ベルンは完全に度肝を抜かれたらしい。目を盛大に見開き、口をパクパクさせている。

キルはその様子を見てほくそ笑むと、ボイスレコーダーを元の場所にしまい、「さて」と口を開いた。

「霧島、話の流れについてきているか？」

「えぇ、まぁ、なんとか」

霧島は、少しついていけれていない部分があるにはあったが、ひとまず、ベルンを追い詰めているということは分かったので、隣の彼にそう返答した。

それを聞いて、キルは再び口を開く。

「そうか。なら、ここはひとつ。あいつをやっつけるの、手伝ってくれるかい？」

「……それなら、喜んでやらせていただきます」

少し急展開に戸惑いながらだったが、その問いかけには霧島は力強く同意した。

第十八話　きっかけ

そして、間髪入れずにキルが仕掛ける。
ベルンの頭上に何か靄みたいなものがかかったかと思えば、不意にそこが爆発したのだ。

「ぬぐあぁ！」

ベルンはそれを見て、大慌ててしゃがみこむ。少し爆風の影響を受けたようだが、腕で頭を覆ってもいるので、大した事にはなっていないだろう。後ろにいた貴族は、戦いが始まったのを見て脅え、去っていった。
続いて、霧島が炎を現出させベルンに向かって放つ。

それを見て、ベルンは右腕を突き出しシールドを張ってきた。流石に、この程度の攻撃なら受けられてしまうようで、炎はシールドに受けられて拡散してしまった。ならば、効果的なのは今キルがやってみせたような遠隔攻撃だろう。

だったら、と、今度は霧島の手からではなく空中から炎を現出させようとノナを操る。だが、それの現出には時間がかかった。炎が形を成そうとしているのは何とか確認出来るのに、それが放たれるまで四秒、ベルンに襲い掛かるまで二秒かかってしまったのだ。やはり、まだ魔法を使う経験が足らないようだ。あまりの遅さに見切られ、それもまたシールドにより防がれてしまう。

「ッハッハ！　どうやら、貴様はまだ上手く魔法を使えないらしいな！　だったら！」

ベルンはそう笑うと、唯一部屋の内装にそぐわない、玉座近くにある天井からぶら下がっているロープを引く。
すると、天井が開いて、上から大勢の人影が降ってきた。

「へぇ」

「っな――」

キルと霧島は咄嗟に背中合わせになり、周りに現れた敵を見つめる。その現れた伏兵に、霧島は窮地に立たされたかのような気持ちになったが、キルは全く動じず、むしろ感心しているような雰囲気だった。増援を呼んだ事によって形勢を無理矢理自分のほうへ傾けたベルンは、彼らに向かってすぐさま命令を下す。

「そこの地球人のガキを人質に取れ！　キルの動きを封じるのだ！」

「……だってよ。なめられてるぜ、お前」

何時までも必死なベルンをよそに、至ってぶれないキルは霧島に言った。霧島はそれに「分かってますよ」と答えた後、再び炎を作り出す。だが、今度も自分の手から発射するためのものではない。そのため、技が発動するためのスピードを、強化魔法で少し上げる。

とはいえ、今の霧島の力量では、発動まで八秒はかかるであろう魔法を、二秒縮めるだけで限界だった。キルはその魔法の発動に時間がかかる事を察してか、自分もまた魔法を発動させる。

「ふむ、ちょっとごめんよ」

それはキルが地面を軽く蹴ることで発動し、自分達を中心として

リング状に爆発が起こった。襲い掛かってきていた敵兵はそれに怯み、動きを留めた。その間に、霧島の魔法が発動する。

「――燃えろ」

突然火の粉が舞ったかと思うと、キルと霧島を円形に取り囲んでいる敵兵を纏めて燃やすかのように、霧島は複数の箇所から炎を噴き上げさせた。彼らは各々で悲鳴を上げ、火柱から逃げていく。そして、炎が噴出し終えた後熱気に当てられてか地面に倒れていく。だというのに、あまり焦げ痕が見られない。何故か。

今の光景を見たら、誰もが霧島が敵を纏めて燃やしてしまったのではと思えるだろうが、実際は全く違い、直接人を燃やす事はしていない。人を避けて辺りを火で炙ることによって、彼らを熱気で参らせただけだった。その結果を見て、キルは口笛を吹く。

「あくまで殺す気はない、か。その精神は嫌いじゃないぜ」

「暫くしたらまた起きてきます。今の内に、あいつをなんとか……」

そこで、ふとベルンのほうを見やると、自分の部下の情けなさからか、思い切り地団太を踏んでいた。こうして見ていると、小物臭が半端ではない。

だが、それでも今の状況に対して何もしないほど無能ではないようだ。ベルンはそこらへんの装飾に使われている大量の金を両手で掴むと、それを投げてくる。すると、それは途中で液体となり二人を襲ってきた。それは空中で思いきり広がり、キルと霧島を捕まえようとしてくる。温度は、約二千度。

「避けろ！」

キルに言われるまでもなく、霧島は互いに背を向けた状態で前方に走り出し、液体金を避ける。直後、その金は霧島とキルが元々いた場所に収束し、大きな金の水溜りを作った。それはカーペットを焼き、回りに倒れていた伏兵も焼いた。当然、彼らは生きているため、あんまりの熱気に融けていく自分の体を見ながら悲鳴を上げる。それを聞いて、霧島が抗議の声を出した。

「おい、テメェ！　何してやがる！」

「あぁ！？　何の事だ！」

「人だ！　そこにいるだろうが！」

「ッハ、そんな使えない駒、必要ないわ！」

「――ッ！」

ベルンはそのやり取りの末に吐き捨てるように答えると、部屋の右隅にある壁と同化していた金庫を、持っていた金で溶かす。その中には、青白く光る宝石が詰め込まれていた。霧島には、それには見覚えがあった。

「ノナタイト！」

「あぁ、あれがそうなのか」

霧島とキルの反応を聞いてから、ベルンは二人に向けて笑みを浮かべた。そして、ノナタイトを媒体に魔法を発動することで、この

部屋に存在する全ての貴金属に魔法の影響が及ぶ範囲を広げる。

「集まれ、我が財宝よ！　奴らを溶かしつくせぇ！」

キルによりさきほど逃げ道を塞がれて後がないからか、見るからに勢い任せに魔法を使っていた。部屋に飾られてあった絵画の縁から、装飾から、アクセサリーから、玉座から、金が高さ三メートルほどのところに集まり、球体を象ろうとしている。おそらく、あれが完成したら一気に解き放つつもりだろう。

「お、おい！　そんなもの放ったら、ここも溶けてなくなるぞ！」

「どおでもいいわぁ！　部下も！　家も！　金がある限り幾らでも調達できる！　貴様らさえ潰せればどうでもいい！　証拠の隠滅など、金と貴族の弱みさえ握っていれば幾らでも出来るからなぁ！」

霧島の再びの抗議叶わず、ベルンは魔法を発動し続ける。ベルンの頭に描かれた魔法を、完全に形成するための材料を集めるために、大規模な範囲と量が必要だからか、ノナタイトを使っても現出に時間がかかるようだ。

だが、それでも霧島には成す術がなかった。金の沸点は三千度を超える。炎で対抗し、蒸発させようにも、金を千度上げるには時間が足りない。その前に構築が終わるだろう。無論、弾くことも出来はしない。

（やばい、やばい、やばい――！）

こうなったら、金が届かぬ範囲まで逃げるしかない。そう思い、霧島は退こうとする。そして、キルにもその意図を知らせようと声をかけようとする。

が、そこでキルの言葉が耳に入った。

「おい霧島ぁ。あれ、俺が受け持つからお前はベルンを潰してくれ」

「……はい？」

こんな状況で何を言っているのだろう、と言いたそうな表情でもって、霧島はキルを見た。加えて、ベルンもまたキルを嘲笑する。

「ハン、何をぬかしている。貴様の魔法は爆発を起こすことだろう！　そんなものでは、この魔法は破れんぞ！」

「いいや、破れるさ。どころか、久しぶりのでかい壁なんだ。挑戦しねぇでどうすんだよ！」

そう叫び、キルは自分の背後に、なんと精霊を呼び出した。続いて、その際に起こった風圧で髪が持ち上がり、髪型のお陰で見えなかった左目が露わになる。そこには琥珀のような魔石が埋まっていた。霧島はその光景に息を呑み、舌を巻く。ベルンは一瞬何が起こったか理解できずにいるのか、表情が凍っていた。その二人に構わず、キルは口を開く。

「おい、シャレイガ。力返せよ、半分くらい」

「分かっとるわい」

シャレイガと呼ばれた精霊は、身の丈三メートルほどの、肩まで伸びた金髪に、胸まで伸ばした白髭を持つでかい老人だ。着ているローブも白く、何故か神々しく光っている。

彼はキルの頭上に手を翳し、力の受け渡しを行う。キルはそれを

感じ取り、金塊に向けて右手を突き出し、二の腕に左手を添え魔法を発動させる。

「氷結爆破ぁ！」

一刹那、二秒と経たずに金は凍り破裂した。二千度もの熱を誇る金を、あっという間に氷付けにしてしまったのだ。それは破裂した後呆気なく散り、音を立てて床に落ちた。

「……すげぇ」

そうとしか言いようがなかった。霧島からしてみても、今までキルは予想以上のことを易々とやってのけていた。その見方が間違っていないのは、ベルンの表情が裏づけになっている。どう見てもあれは、恐怖しきっている顔だ。

キルはそれが終わると、精霊をしまい元に戻った。そして、右腕を後頭部に持っていき掻きはじめる。

「案外、早く終わっちまったが……ま、いいか。テメェは、もう戦意喪失かい？」

「き、貴様！　何者なんだ！　今見た限り、魔石を使った訳でもなければ、精霊の力を使った訳でもない……なのに、何故二つもの違う魔法を使っている！？」

ベルンは怯え、慌てきった声で、キルに問いかける。だが、キルはそれに答える事無く、黙ったままベルンを見やった。

「ひ、ひぃぃ！」

彼はすっかり縮こまってしまったのか、キルがそうして右目で見やっただけで奥の壁に向かって走り、そこから怯えた目でキルを見た。それを見て、霧島は安全だと思ったのか少し前に出て来て、キルに言葉をかける。

「あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。それより、さっさとあの野郎と始末つけてこい。俺は変な行動しないか見張ってるからさ」

「は、はい」

キルの後ろ盾を得た状態で、霧島はベルンに近づく。かといって、あんまり近づくと反撃されてしまいかねないので、距離は置いているが。そのベルンは危機的状態で錯乱しているのか、いきなり大声を上げてくる。

「お、おいお前ら！　いつまで寝ているんだ、さっさとこいつらを殺せぇ！　金ならいくらでもやる！　地位も名誉もくれてやる！　だから、さっさと起きろぉ！」

声が掠れながら、裏返りながら、ベルンは今倒れている十人の部下に向かって縋るように命じた。だが、誰一人として起き上がる気配がない。それを見て、彼は言葉を続ける。

「な、何故だ！？　何故起きない！？　お前たちは私の部下だろうが！　今起きないでどうするんだ、このゴミ共があぁぁぁ！」

「……そりゃあ、簡単な話ですよ」

その悲痛な叫びに、聞くに堪えないと思ったのか、霧島が変わりに返答をした。一旦、ベルンの口が閉じる。

「確かに、仕事をする上で報酬は魅力的だ。誰だって給料のいい仕事に就きたいし、中には、高い地位が喉から手が出るほど欲しい奴もいる。

だけどな。今のアンタを見ていたら、ついてくる奴なんて誰もいやしないよ」

「ハァ！？　貴様のようなケツの青いガキになぁにが分かると言うのだ！？　金欲しさだけで人は幾らでもついてくる！　奴隷だって買えるではないか！」

「そういう事じゃねぇよ。どんな形で従えたって、そいつは人なんだよ。気遣いも優しさもねぇ、傲慢で我侭で理不尽な上司に、誰がついていきたいと思うかよぉ！」

霧島が台詞を言い終えた直後、彼は自らの腕に炎を纏わせ、腕を突き出す。それと同時に炎が無尽蔵に発射され、ベルンを襲う。だが、彼には全く動じている様子がなく、また炎を受け止めようとシールドを張った。これで通算、三度目の衝突になるが、おそらく、今の霧島がどれだけ頑張ったとしても、ベルンが作る壁を壊すことは出来ないだろう。

それを踏まえても、霧島は止まらずに炎を撃ち続ける。意地でも、ここで退く気はないようだった。

（こいつだけは、倒す。絶対に――！）

勢いと気持ちを、ベルンを倒す方向に傾けて炎を操る。そうして

いると、不意に後ろから声が聞こえてきた。

「あんまり、勢いだけで行動しない方がいいですよ。勝ち目のなさそうな相手なら尚更です」

「え……」

一刹那、ベルンのシールドに向けて何か針のようなものが飛んでいったかと思うと、それは彼のシールドに当たると貫通して後ろの壁に当たり、散った。

「へ？」

またもや予想外の事が起きたお陰で、ベルンは間抜けな声を上げた。その後、シールドは形を維持出来なくなり、パラパラと形を崩していく。それによって、シールドにより勢いがせき止められていた炎が、ベルンに襲いかかる。

「ちょま」

ベルンの抵抗の声は虚しく、次の瞬間には炎により掻き消されてしまった。炎の上から、影だけだがベルンが炎の勢いの餌食になって仰け反っているのが見える。そして数秒の後、炎は止まり、白目を向いているベルンの姿が露わになった。こちらもまた死んではいないようだが、焦げ後が見られる辺り、先ほどの手下達とは別扱いらしい。

霧島はそれを終えると後ろを振り向き、そこにいる人に話しかける。

「いつからいたんですか、アインさん」

「さっき来たばかりですよ。彼に力づくで案内して貰ったんです。後の二人なら、襲い掛かってきた貴族連中を倒してる途中ですよ」

そう言ったアインの背後には、先ほどアイン達が来た事を報告しに来た貴族が、愛想笑いを浮かべて並んでいた。霧島はそれを見やって、気になったことを口にする。

「ところで、今のは……」

「ちょっとした魔具を使っての援護射撃ですよ。銃弾に貫通効果を加えただけです」

確か、アインの魔法はラックと似ていて、ノナで拳銃を作り出すことだったはずだ。霧島が今まで見た中で一番魔法使いっぽい格好をしているというのに、そぐわない魔法を持っているなと思ったのを覚えている。

その後、霧島はキルの方に目を向けた。だが、そこに彼の姿はない。

「あれ、あの人は……？」

「こっちだ」

声の聞こえた方に、霧島が首を向けると、今まさに窓を開け放って風を取り入れてようとしているキルの姿があった。彼は窓の方を向いていたが、すぐに霧島の方を見てニヤリと笑う。

「今回の件、中々面白かったぜ、霧島君。珍しく退屈しない事件だ

ったよ。……それはさておき、お前にひとつ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

「なんですか？」

突然の問いかけに、霧島は不思議がった。キルはそれに、「なぁに簡単なことだ」と言ってから続ける。

「お前はこっちの世界に来たばかりだというのに、アリア国王を倒した。その理由が聞きたくてね」

それを聞いて、霧島は少し間を空けてから言う。

「……嫌いだから、です。ああいう奴らみたいに、平気で悪事を働く輩が」

「ふぅん。それには、過去に何か酷い目にあったとか、理由がある訳？」

「ありません」

「無いのか」

「無いです。物心ついた時から、ああいうのを見ると、むかつくというか、なんというか」

キルの質問に、霧島はどこか曖昧な感じで答えた。それを聞いてから、キルは先ほどの光景に思いを馳せながら言う。

「それにしては、随分な説教だったがな。もしかしたら、他に理由

があるかもわかんねーぜ？」

「……どういうことですか？」

思わぬ事を言われた、というふうに、霧島はキルに言葉を返した。キルは、「そうだなぁ」と言葉を選び始める。

「まぁ、要するにだ。ただ単に『悪が嫌い』っていうだけが、お前の行動理由じゃねぇ気がするんだよ。もしそうなら、いくらお前が論理的な行動しか出来ない奴だったとしても、誘拐をしたからっていう理由で、俺に攻撃か説教のひとつでも来ないのは納得がいかない。あの時攻撃してきたのは、逃げるためだったろ？」

「……」

図星をつかれ、霧島は言葉に詰まった。すると、キルは諭すように言葉を続ける。

「興味があるんなら、本当に自分が嫌いなのは何か、探してみたらどうだ？　いつまでもそんな曖昧な看板掲げてちゃ、聞かれた時面倒臭いだろ」

そう言われ、霧島は少しでも、ベルンやアリア国王など、その他もろもろの犯罪者と対峙した時に起こった気持ち悪さや、わざわざ潰したくなる理由を知りたいと思った。一方のキルは、霧島が何も言わないところに、まともに自分の言葉を受け取ってくれたと考え、もう一度口を開ける。

「ま、そういうわけで。おせっかい焼きはここで退散しますよ。また会えるといいな」

「待って下さい！　貴方は、一体――」

直後、霧島は今までキルに対して思っていた疑問をぶつけた。それに対し、キルは窓から飛び去ろうという場面で、首だけを霧島の方に向けて言う。

「キル・ゴッセル。八大精霊の内の一体であるシャレイガを身に宿した、ギルドマスターの一角だ。それじゃあな、あばよ！」

キルはそう言い残し、隣の家の屋根に飛び移り、イリリカ、ウォレクの二人と何処かへ行ってしまった。

その後、ベルンは改めてアルトレットから解任され、霧島達にはアルトレットからお詫びとして、随分な報酬を受け取ることになった。地球の金額に換算すると、三千万にはなるという。

また、この事件を通じて霧島高貴は更にこの世界に名を知らしめる結果になったが、これが引き金となり、後に大事件を引き起こすことになろうとは、誰も知る由がなかった。

第十八話　きっかけ（後書き）

皆さん初めまして。そしてこんばんは。駄得島アキトです。
一区切りついたということで、少し言う事がありますのでこの場を借りて言わせて頂きます。

と言うのも、次の部から目次の注意に書いてある、グロ注意がようやく生きてくるのです。
また、ホラーや鬱も段々と増えてきます。なので、流れが今までの、ただ悪役をぶっ飛ばすだけが全てでなくなる可能性があるので、少し断りを入れておこうと思った次第でございます。
それにつれて、勿論展開も激化致しますので、楽しめる方には楽しんで頂けることと思います。

また、この作品についての感想、もしくは誤字・脱字・誤表現がありましたら、頂けると幸いです。
それでは、お目汚しすみませんでした。これからも『異世界渡来伝』を宜しくお願いします。

第十九話　翌日

どこからか、刃物を磨ぐ音が聞こえる。

霧島達がベルン邸から帰った時間から、報酬を受け取った朝までの間の深夜。とある男女の集団は、夜の街を練り歩いていた。なんらかのパーティーの後で、二次会、三次会とだれているのか、男が女をたらしこんでいるのか、知るところではないが、その内の一人が、この刃物の音に気付く。

「なぁ、何か聞こえね？」

「？　どうしたのユーくん」

「どんな音だ？」

その男の声に、軽くも他の男女も耳を済ます。女は、「あ、ほんとだ」と相槌を打ち、「なんだろうね」と話を合わせた。

「気にすることはねぇよ。どっかの料亭のおっさんが包丁研いでるだけだろ？　昼間磨いてたら怖いしな」

前を歩いていた四人目が、どうでもいいからさっさといこうぜ、といったノリで言った。ユーくんと呼ばれた彼は、その言葉に、それもそうだな、と答え四人目に追いつこうとする。

一刹那、そんな彼の目の前に、巨大なハサミが現れた。

「へ？」

男がそれに気付いた時には、既に遅く、他の皆が気付くよりも早く、男の首が飛んだ。
体はそれに気付かずニ、三歩だけ自然に歩いたが、やがてバランスを崩してこけた。その拍子に、グラスからワインがこぼれるように、勢い良く血が流れ始める。

その光景の中、五人目の登場人物が現れていた。どこか鋭さのある赤い長髪を持った男だ。荒々しいような、歪なような、異様な雰囲気を持っているが、注目すべきは、両手で持っている巨大なハサミだろう。その刃には、首を切った際に付着した血が付いていた。

女はそれを見て恐怖に言葉を失い、男は突然のことに、ただ目を見開くことしか出来ない。

「ひ、ヒィ！」

ただ一人、四人目の彼だけは離れた位置にいたので、にげれる、と思ったのか走り始める。

「あ、オイ！　置いて行くなよ！」

「うるっせーよバーカ！　テメェらはとっとと死んでろ！　ヒーハハハ」

四人目は本心ぶちまけながらフィーバーし、すぐそこの曲がり角を曲がる。
すると、その直後に誰かにぶつかってしまい、痛い目を見てしまった。四人目の青年は、恐る恐るそいつを見る
そこには、日本風の喪服を着た男が立っていた。表情はニコニコ

としており、ついでに少し弱々しそうなイメージが付き纏う。

「だ、誰だよ、テメェ……」

四人目は、それなりに敵意を剥き出しにしながらその男に問い掛けた。その問いを受けた彼は、鞄から少し厚みのある本を取り出して言う。

「君、血液型は？」

「……へ？」

まるで予想外のことを聞かれ、四人目は目が点になる。だが、しどろもどろだが、それに答えた。

喪服男はそれを聞いて、神妙に頷くと、その本のページをめくり始める。それをただ見ていた四人目だが、男があるページで目を止めたところで、何を見ているのか気になり出し口を開く。

「な、何を見てらっしゃるんですか？」

「君の今日の運勢を見ているんだ。中々に悪かない」

こんな状況で何を言っているんだ、というふうな顔になった後、四人目は何か思いついた風に男に向かって言う。

「な、なぁそれよりアンタ！　強いんならさ、あの男をやっつけてくれよ！　実は、他の皆がやられちゃってさ、その内の一人が、命からがら俺を逃がしてくれたんだよ。だから、死ぬ訳にはいかないんだ」

ひとまず同情を誘い、あの男と戦ってくれるよう仕向けようと必死になった。男は「ふむ」と言って、今度は別の本を持って一言告げる。

「嘘つきは泥棒の始まり」

「あ？　何言って――」

直後、四人目の腕が無意識に伸び、男の鞄を掴もうとした。男はその手をはたいてきたが、四人目には何が何だか分からない様子でそれを見ていた。

それの後、目の前の男はどこか寂しそうな目で四人目を見遣って、ゆっくりと口を開く。

「貴方の今日一日はラッキーデイ。何を聞かれても正直に答えれば、今日は最高の日になるでしょう」

「え？　な、何？」

「……今、嘘ついただろ。今日はたまたま占いにそう書いてあったから読んだけど、基本、僕は嘘つき野郎が大嫌いだ」

その後、男は間髪入れずに四人目の顔に拳をねじ込む。それにより四人目は吹っ飛び、建物の壁に背中からぶつかった。その痛さに思わず呻くが、すぐに表情に怒りの色が浮かび上がる。

「ッ、何すんだテメェ！」

四人目は掌を開いた状態で前に突き出し、そこから太さ十センチほどのレーザーを放出した。それは真っ直ぐに男に向かって行く。

「焼石に水」

直前、男はそう言った、そしてものの数秒で、レーザーが男を捕える。それが証拠のように、男の体から煙が大量に立ち込めた。それを見て、仕留めたと思い四人目は口を開く。

「ッハ、ざまぁみろ。んじゃ、さっさと逃げて――」

「青菜に塩」

「――!?」

だがそうはならず、今すぐにでもと四人目は走り出そうとしたが、男のその声が聞こえた瞬間、体から力が抜けた。

「っ、な、に……」

四人目が恐る恐る、男の方を見遣ると、そこには全く持って無傷の彼がこちらを向いている。

「何、で……?」

搾り出したかのような四人目の声に、どこか呆れた風で喪服男は言う。

「言葉の意味をよーく考えたら分からないことではないと思うんだけどなぁ。ま、いいや。それより、君が言ってたのは彼かい?」

「え?」

そう言われ、四人目はゆっくりと首を動かす。すると、そこには巨大なハサミを構えた例の男が立っていた。どうやら、もうさっきの二人は殺し終えたようで、ハサミには血がべっとりついている。

四人目は、その様子を見ながら引き攣った笑みを浮かべて口を開く。

「あ、あの……見逃し」

「やだね」

そして、肩から斜めにハサミで切り込まれた。二つに裂かれた胴体は、力無く地に伏しその場を血で染める。切断面からのぞく内臓が生々しい。

それが終わると、特に事後処理はせずに二人はその場を後にした。

◆

天空を、ドラゴンが飛ぶ。

その胴体二十五メートル、両翼それぞれニ十五メートルちょっとの、尻尾の長さ十五メートル。鱗に覆われたようなのとは違う、爬虫類のような肌を持ち、全体的に青緑色のドラゴンだ。

そんな魔物を迎えるべく、ノーレには丁度降り立つべきところがあった。一辺の長さが三十メートルほどの、正方形の台だ。

ついでに、そのドラゴンの隣には、比率が小さくなっただけの、

そっくりなドラゴンがいた。見るからに親子であることを思わせる。

彼らは集まった民衆に、自分の存在をアピールするかのように、優雅にぐるりと滑空する。そして、翼を動かし地に風を当てることで、体の急な落下を防ぎつつ、その台の上に降り立つ。子供ドラゴンの方も安全に着陸出来たようで、親ドラゴンも安心しているだろう。

その後、霧島が話を聞いた限りでは、子供ドラゴンが残り、暫く皆の目に晒すという。

竜神の儀式。精霊の内の一体であるウンディーの使い魔として飼われているドラゴンが、アルトレットでその立場を子供に譲る儀式を行う行事だ。

その役割を与えられたドラゴンは、ウンディーの目となり脚となり、この世界を巡回し平和を見守るらしい。まだ、霧島は巡回中のドラゴンを見たことはないが、ノーア中の人が集まっているところを見ると、結構な信頼を寄せられているようだ。

子供ドラゴンを一目に晒すのはその一環で、これからこの姿を見ることがあれば、そこはウンディーの監視の元にあると思って間違いないと、皆に知らせるために必要なことらしい。

こういった見世物の類も、霧島は大嫌いだったが、精霊には借りがあるので手を出せる訳もなかった。

ついでに行われたお偉いさんの話も一応聞いたが、この世界にそくした話だったので理解が及ばなかった。過去の大戦、という言葉だけは耳に残った。

そこで、霧島は自分を呼んでいる声がある事に気付く。そちらを

振り向くと、リナがいた。どうやら脚の怪我が完治したからやってきたらしい。
そういう霧島は、未だ右手の包帯はとっては駄目なのだそうだ。昨日の無茶で、よく包帯に何もなかったなと、自分で褒めてやりたいところだった。
リナは人混みを避けながら霧島のところまで辿り着くと、早速話しかけてくる。

「昨日のこと、聞いたわよ。正確には、今日だけど」

「あの時、お前いなかったな。どうしてたんだ？」

「寝てたわよ。何時だったと思ってたわけ？」

「……まぁ、そうだよな」

それを除いても、多分脚を理由に連れて行ってもらえなかっただろうが、それは言わないことにした。
リナの言葉は続く。

「ところで、昨日キルさんに会ったの？」

「え？　あぁ、会ったよ。知り合い？」

思ってもなかった名前を出され、少し戸惑うがすぐに答えた。リナは何か考えるような仕草をしてから言う。

「知り合いというか。元々お父さんのところにいた一人よ。ギルドマスターになってからは、メインギルドの方に移ったみたいだけど」

「てことは、あの人も孤児で、拾われたってことか？」

「そうみたい。でも、赤ん坊とかじゃなくて、十歳くらいの時にやってきたわ。色んな意味で凄い人だった」

「あれは、凄いな。世辞ぬきで。一体なんなんだ？」

「詳しくは私も知らないわ。知ってるとしたら――」

リナがそう言って、顔を扉の方へと向ける。

何だろう、と思ってそちらを見遣ると、いつの間にかアベルさんがリナの後ろに立っていた。どうやら、今までの会話は聞こえていたらしく、アベルはムスッとした感じで言う。

「言っとくが。俺からあいつの話をするつもりはねーぞ、リナ」

「何で？」

「約束だからだ。それに、直接聞きに来たならまだしも、霧島を使って聞こうとしてくるような子に教えるわけないでしょうが」

「あ、やっぱしばれた？」

「おい」

アベルの言葉とリナの返答で、話のだしにされた感を出され、思わずつっこむが、聞いてなさそうだった。霧島はその様子にため息をつき、少し疑問に思っていたことを口に出す。

「ところで、アベルさん。昨日の深夜の事件、聞きましたか？」

「あぁ、ブラッドから聞いた。この儀式の日と重なるなんて、なぁ。まず間違いなく時期も狙ってるだろうなぁ」

アベルはまるで警備員の一員になったかのように、目を光らせて辺りを見た。だが、怪しい人影は見つからなかったようで、すぐに元に戻った。

深夜を歩いていた四人組が斬殺、刺殺、撲殺されていた事件が、昨日の晩に起こっているとブラッドは言っていた。魔法を行使した痕跡があったため、少しすれば名前も挙げられるだろうとの事だった。

普通に対処すれば何とかなりそうな事件ではあるが、アベルさんの言ったように時期が時期だった。そのため、犯人の顔割りも急がれているだろうし、今も怪しい人物はいないかと、エラルドの人は視線を這わせているだろう。

「ん、おい霧島。子供の方がアルトレットに向かってるぜ」

その急なアベルの言葉に意識を子供ドラゴンの方へ向けると、確かに、別の台に乗ってアルトレットへ運び出されていくのを霧島は見た。プログラムによると、今日はずっとお披露目という形で、ドラゴンをアルトレットに居座らせておくらしい。

三人はその流れにつられながら、一旦アルトレットへと戻る事にした。

第二十話　身元

子供ドラゴンにつられて、霧島、リナ、アベルはアルトレットに戻る。その最中で、子供ドラゴンに寄って行く二人組が見えた。金髪ツインテールと桃色セミロングの、二十歳前後の二人組の女性だ。金髪の方は、霧島には見覚えがあった。確か、イリリカと呼ばれていた方だった気がする。

何でこんなところにいるのかと思っていたら、それなりの音量で騒いでいたのでいやでも会話内容が聞こえてきたので、状況に甘えて聞くことにした。

「おー、でっかいですなあー。どうよ、マリヤっち」

「はい！　素晴らしい重量感です！　まさに期待通り……いえ、期待以上！　キルさんに黙ってでも来たかいがありますね！」

ドラゴンがすきなのか、マリヤと呼ばれた女性は興奮気味に喋り、言ってはならないようなことまで言った。それに気付いたイリリカは、少しノリが軽いながらも止めに入る。

「おっと、マリヤっち？　周囲に人がいるの忘れたら駄目じゃん。サボってること言っちゃうなんてさー」

「あ、そうですよね！　どこかに、他にサボってきた人がいるかも――」

「いや、そういう意味じゃないけど……ま、いっか」

「……」

そのやりとりを聞いていた霧島は、イリリカがギルドマスターのキルと一緒にいたのを知っている。今の会話から察するに、いやまあストレートにサボりだろうと確信できた。
それをアベルも聞いていたのか、ポツリと呟く。
「なんか、大変な部下持ってしまったなあ、あいつも」
アベルの指すあいつ、とはキルの事だろうと思い、霧島はそれを踏まえて問いかけた。
「アベルさん。あの人はここに来てないんですか？」
「来てるだろーが、あいつらはアルトレットか警備の指定地点とか、そういう場所に張り付けだろうから、多分普通にしてたら会わないと思うぜ？」
「そうですか」
それを確認すると、霧島は彼女達の方に向かっていく。アベルがそれを止めようとしてきたが、お構いなしだった。人混みの中を毎度ながら掻き分けて行き、二人の近くまで来ると声をかける。
「あの、イリリカさんでしたっけ」
「およ？」
霧島のその声に、不思議そうに振り向いてきた彼女は、表情にはつらつとした雰囲気があった。そして、彼女は霧島を見てから少し間を空けて、「あ！」と口を開く。

「キリっちじゃん！　半日ぶりだねー。ま、会話してないけど」

「……キリっち？」

慣れない呼び名で呼ばれ、少し困惑したが、そういう人なんだなということはさっきの会話で分かっていたので、気にせずにいることにした。

そして、今度はマリヤが霧島に声をかけてきた。

「はじめまして、マリヤといいます。えっと、キリさんでいいのでしょうか」

「いえ、霧島です」

「あぁ、それでは、貴方があの地球人さん」

あの地球人、とは奇怪な呼び方だなと思ったが、ひとまずというふうに霧島は声を出す。

「というか、その。お二人は、仕事は……」

その言葉を聞いて、イリリカはばつが悪そうに微笑む。

「ありゃ、聞いてたかー。まあ、正確にはレイジっちに全部投げてきたんだけど、駄目？」

「それ、余計駄目じゃないですか？」

「だーいじょーぶだって。あの人、なんだかんだでやってくれるっ

て。きっと」

「そこはきっとをつけるべきではないですよね」

突っ込みが追いつかない、と言う風に霧島が突っかかってくるのを見てか、イリリカは気難しそうな顔をする。

「うう、キリっち冷たいぞぉ。昨日の熱さは一体何処にいったのか」

「見てたんですか？」

「特等席だったね。『テメェみてぇな奴についていく訳ねぇだろうがあぁぁ』って、まあ格好よかったよ？」

（……この人は）

今更ながら、この二人に関わるんじゃなかったと若干後悔した。すると、向こうから、男の人がやって来た。二十代半ばくらいの、黄土色の髪をした、無精髭を生やした人だ。その姿を見て、イリリカが「あ、やば」と呟く。

（ってことは、あの人がレイジさんか）

案の定、と言うべきか、彼はイリリカとマリヤを見つけて「あ！」と声を上げた。

「テメェら！　何勝手に仕事ほっぽり出してここに来てんだよ！警備のシフトさっさと変われぇ！」

そう怒鳴りつつ、レイジは人ごみの中を力づくで進んできた。

「ゲ。やばいよマリヤっち。あいつこっちに来る！」

「え！？　嫌です！　私もっとエメちゃんを眺めていたいです！」

「そうだね！　……ん？　エメちゃん？」

イリリカの問いに、マリヤは力強く答える。

「ハイ！　青緑のミニドラゴンだから、エメちゃんです！　それとも、エメくんの方が燃え……いえ、萌えますか？」

「？　どーゆーこと？　マリヤっち」

（意味が分かる自分が憎い）

霧島は、こっちの世界にも萌えの概念があることに驚いた。一方の二人は、その間にも迫ってくるレイジから逃げるように子供ドラゴンを追う。

「おいこら逃げんな！　……あーもう、ノルドやローラに何て言えばいいんだよ。ウォレクはいねぇし、キルは別のとこにいるし！」

追いつけそうにないと思ったのか、レイジはその場に止まって嘆き始めた。霧島としても、まだ会話をして足を止めておけば良かったかと思ったが、既に過ぎたことである。

霧島は後から来たリナとアベルと再び合流し、子供ドラゴンの後に続き、三人はアルトレット議事堂の庭に着いた。

そこに、子共のドラゴンは先ほどのよりも小さめの台に移動され、

飾られた。予定表によれば、午後六時まではこのまま晒すらしい。胴体や翼の大きさは十メートルより少し大きいくらいで、尾は五メートル。先ほどの親よりは小さいが、それでも人間よりは遥かにでかい。

「っへぇ～。百聞は一見に如かずってやつだ。こいつは確かにでかいね。見に来たかいがあったよ」

「そうか？　ただのトカゲだろ」

そこでふと、別の場所で声が聞こえたので、霧島はそちらを見やる。すると、喪服を着た弱々しい男と、赤髪長髪の不気味な男の二人組がそこにいた。二人は霧島に気付いてない風で、会話を続ける。

「で？　どうよ、実際のところ。見てみてビビった？」

「馬鹿言え。ちいせぇよこんなもん」

「どーだか。ドラゴンって、こんな大きさでも無茶苦茶強いらしいよ？　なんでも、ウンディーの加護を間に受けちゃってるから、生半可な攻撃じゃビクともしないって噂だ」

「くだらねぇな。所詮噂だろうが」

「……ねぇ。そんな否定ばっかりしないでさ。たまには僕の話も聞いてよ」

何だか、仲が良いのか悪いのか分からない二人組のようだった。見るからにうまがあわなさそうな、そんな彼らを見ていると、不意に後ろから声が聞こえた。

「おい、霧島ぁ！　ちょっとこっちに来い」

その声に耳を傾けると、そこにはアベルがいたので、霧島は急いでそっちに移動した。

見ると、アベルやリナの他にブラッドと、水色短髪の女の人が見えた。その人もエラルドの隊員のようで、緑主体の制服を着ている。さっきのイリリカとマリヤは、ギルド員とばれないようにか私服のようだったが。

霧島が来たのを見て、アベルが口を開く。

「おお、来たか。殺人犯の名前が分かったらしいから、知らせようと思って呼んだんだ。ブラッド」

アベルの言葉を聞いて、霧島は真面目に耳を傾け始め、ブラッドが話始める。

「犯人の名前はフィーラー・レバネックとネイヴ・バークスの二人組だ。フィーラーに関してはノナをそのまま操っただけらしいから、どんな魔法を使ったかまでは、アルトレットに申請してリスト機関に検索をかけないと分からない。だが、有り難いことにネイヴは使ってくれた。これが結構、変わっている魔法でな」

「どんなのですか？」

ブラッドの言葉を急かすように霧島が割って入るが、ブラッドは特に気にすることなく口を開ける。

「相手の脳に、ノナを通じて微弱な電波を送ることで、その瞬間だ

け人間の行動を思い通りにする……といったものでな。魔法自体はありそうなものだが、限定条件が面白い。
特定の諺を言うことで、それに即した命令を送るといったものだ」

「……なんか、本当に限定ですね」

その霧島の言葉を、アベルが拾う。

「ノナ魔法の特徴として、全く同じ魔法を扱える者がいないっていう理論の裏付けとなるのが、この限定条件なんだ。お前の魔法も突き詰めたら、とんでもなく細かいことになってるだろうよ。それで、ブラッド。外見とかに特徴はないのか？」

「ここに、リスト機関に即効で用意させた似顔絵がある。見かけたら連絡をくれ」

そう言われ、霧島はアベルに渡された似顔絵を覗き見る。そして、そこに書いてあった顔を見て、「あ」と声を上げる。

「ん？　どうした、霧島」

「この人たち、さっきそこに……」

「いたのか！？」

アベルの問いの答えから聞けた霧島の言葉に、ブラッドは目つきを変えた。霧島は彼の顔を見て、「はい」と答える。確認が終わると、ブラッドは舌を打って口を開く。

「ミネア！　隊員を集めて、急いで辺りの捜索だ！　いなかった場

合、早急に包囲網を敷くぞ！」

「分かりました」

ブラッドの指示が飛んだ。ミネアは首にかけていた笛を吹き、隊員に合図を送る。そして、一旦霧島の方を向いて口の端を吊り上げさせる。

「協力感謝するぜ、霧島君。ミネアと隊員に任せれば、尻尾を掴むのも時間の問題だろう」

「ブラッドさんはどうするんですか？」

「ちょっと、今回は危なそうなんでな。ミネアに託して、武器をとってくるんだよ。アベルさんも協力頼む」

「分かってるよ。依頼金は家に送ってくれ」

二人は言葉をかわしあわせると、お互いに自分の行動を始めた。その区切りとして、アベルが霧島とリナに向けて言う。

「もし、そいつらの狙いがあのドラゴンだったら、明日の夕方まで近場にいるだろう。儀式はその時だからな。急げば、見つかるはずだ」

「アベルさん。アインさんとラックさんにも連絡していいですか？」

今、あの二人はアルトレットの中だ。殺人事件の事は知っているだろうが、犯人の容姿は知らないので、それを知らせる意味でも行く意味はあると霧島は思った。よければ、協力もしてもらえる。

その意図を察したのか、アベルはその提案に頷いた。

「ああ、人手は多い方がいい。ひとまず二班に別れよう。お前はその二人と、俺はリナと捜す。いいな？」

「分かりました、気をつけて下さい」

「お前もな。さて、行くぞ。リナ」

「はい！」

第二十一話　追跡

アルトレット議事堂内で動きがあった頃、既にネイヴ達は外にいた。と言うのも、霧島が目を離した時点で、フィーラーが勝手に外に出て行っていたのだ。

ネイヴはフィーラーに追いつきながら後方を確認する。すると、そこで水色短髪の女がエラルドの隊員に指示を出しているところを発見した。

「あらら。もうばれちゃったよ。誰かが気付いたのかねぇ」

「もしそうなら、ドラゴン見に行こうって言ったお前のせいじゃねーかよ。どうしてくれんだ、今ハサミねぇんだぜ？」

「いや、アンタあれなくても強いじゃん」

二人は今、位置的にはノーレの中心街の真っ只中にいた。犯罪者であるはずなのに、まるで緊張感が感じられないのは余裕の現れなのか、とにかく比較的、ペースは軽い。

ネイヴは、歩きながらちらと後ろに視線を向けた後、口を開く。

「じゃあ、これからなんだけどさ。フィーラーは一度ハサミ取りに行ってくれない？」

「あ？　何だって今更」

「その先に必要なんだ。取ってきたらこの辺うろうろしててね、探しやすいし」

「それは娯楽か？　作戦か？」

「作戦、だよ。さあ、早く早く」

「……っち、分かったよ」

フィーラーはそう言うと、ネイヴと別行動を取るべくお互いに別れる。そして、ネイヴは鞄から占いの本を取り出しページをめくった。

「えーと、今日の僕の運勢は……」

ゆっくり一ページずつめくり、目的のページに辿り着く。そして、内容を見てから表情を歪めた。

「あっちゃあ、何だこれ。要約したらこれ、控えめに過ごした方がいいでしょうってこと？　ふーん。じゃ、日陰者らしく、路地でひっそりと待ちますかねぇ」

すると、ネイヴは近くにあった路地裏の方にはいっていく。それを見て、動く影がひとつ。彼はネイヴの後を追うように行動し、同じ路地裏に入っていった。

すると、そこにあったネイブの姿が突然消えてしまった。追跡者は、ネイヴが自分の追跡に気付き走って行ったのかと思った。なので、慌てて早足になり、見失ったであろうネイヴに追いつこうとする。

だが、そうして走っていたが、何処にも姿が見えないまま、この路地の行き止まりにたどり着こうとしていた。

ここは、二階以上の高さを誇る建物が連なる路地だ。そのため、ここまでは一直線の袋小路となっており、隠れられる場所など存在しない。

一体どこに行ったのかと、追跡者は途方にくれ、その場所を立ち去ろうとする。

「あっれ、もう諦めちゃうの？」

「――！？」

その瞬間に、振り向こうとした方から声が聞こえた。咄嗟にそっちを向くと、ネイヴが何食わぬ顔で突っ立ち、追跡者に視線を向けていた。それを見て、追跡者は明らかに驚いた風に表情を凍らせる。その彼の心境を知ってか知らずか、ネイヴは明るい口調で拍手を交えて言う。

「はいはいはーい。Ｍｒ．ネイヴの消失マジック。如何でしたか、お客様。ま、種と仕掛けはマジックらしくない、力技なんだけどねー」

「――ック！」

追跡者は、ネイヴのセリフを聞いている内に正気に戻ったのか、ホルスターから拳銃を抜き、ネイヴに向ける。

「動くな。貴様の身柄、こちらに預けて貰おう」

きまりきった、何の面白みのない言葉に、ネイブはセンスのなさを感じて溜息をついた。

その反応を見て、嘗められたと感じ少しムキになったのか、さっ

きよりも声を荒げる。

「貴様、今の状況が分かっているのか？　我々の服は、あらゆる魔法に対しても耐性を持てるよう、ノナそのものをあみこんだ特別製だぞ？　どのような攻撃魔法で私を襲おうが、致命傷にはならない。さあ、分かったら投降するんだ」

追跡者は、至極丁寧に自分のことについて説明したが、ネイヴはそれを聞いて、蔑むような目になり言う。

「くだらないね。あんまりそういうの、過信しない方がいいんじゃないの？」

「黙れ。次しゃべったり動いたりすれば、撃つ。今から手錠をはめてやるから、大人しくしていろ」

「……あっそ」

ネイヴは追跡者の態度に、心底つまらなそうに舌を打つ。そして、追跡者が自分を捕まえようと足を踏み出したところを見てから、ネイヴは口を開いた。

「弘法にも筆の誤り」

そして、それを言い終えると同時に走り出す。追跡者は慌てることなく、手にもっている拳銃の引き金を引いた。

だが、その弾丸は外れてしまった。ネイヴの今の言葉によって追跡者の脳に命令が与えられ、知らず知らずの内に彼が定めていた照準がずれていたのだ。

「青菜に塩」

その後、一秒の間ほど空いて、ネイヴの次の魔法が発動する。追跡者の体から力がふっとぬけていき、その場に倒れ込むように膝をついた。

ネイヴはその隙に、すぐさま追跡者の背後に回り込んで首後ろを手刀で叩く。追跡者はそれによって気絶してしまい、顔から地面に倒れる。ネイヴはそれを見届けてから、いまとなっては耳の聞こえない彼に向かって言い捨てる。

「全く、馬鹿だよねぇ。体なんかじゃなく、首から上守らなくてどーすんだっつーの」

その後、ネイヴは手袋をつけてから追跡者の持ち物を漁り始め、拳銃を始め服以外の装備を奪った。動作を終えると、それらを鞄に詰めてその場を去って行った。

◆

その頃、霧島はラックとアインに会ってこのことを話した。それを聞いて、アインは右手を顎に持って行き、考え込む仕種をする。

「事情は分かりました。ですが、貴方はアベルの方へ行った方がいい」

「？　何でですか？」

霧島の問い掛けに、アインは自分の考えを解説する。

「アベルとリナ……この組み合わせだと、いざという時にリナが自分で身を守れません。アベルが戦っている間、彼女の側に誰かがいなければ、思わぬ第三者、もしくは二人組の片割れに人質として奪われてしまう可能性があります。物質の透明化が使えそうにない場所で遭遇してしまったら、なおのこと分が悪い。アベルはリナを守りながら戦うハメになってしまいます」

それを聞いて、確かにそうだと霧島は思った。リナにはレイピアもあるが、今回の相手は二人共強いらしいので、そんなもの勘定にも入らないだろう。

「じゃあ、急いで追わないとなんですが、アベルさんが何処にいるか――」

「その点は心配いりません。伊達で案内屋をやっている訳ではないのでね」

そう言うと、アインは左袖をめくり腕を出す。そこに見えた場所には、何か小さな、エメラルドの宝石が埋まっていた。

霧島がそれを見ると同時に、アインの解説が始まる。

「これは、体内に別の魔法を発現させることが出来るものでして。多少体に負荷がかかりますが、中々に便利なんですよ」

「……一体、何の魔法なんですか？」

「ホークアイ。私が今まで行った場所の風景を、色々な角度で見る

ことが出来る魔法です。ひとさがしの場合、その人物に会ったことがあり、私の知る限りの場所にいれば、特定することが出来ます」

解説を終えると、アインは魔法を発動させる。それの証拠に、魔石の輝きが増して行くのが分かった。そういえば、ノナタイトも発動時に光っていたなと、霧島は思い出す。

それから、数秒。暫くの沈黙を打ち破るように、アインが口を開いて「見つけました」と呟いた。

「まだ、そんなに遠くへは行ってませんね。アルトレット議事堂から西へ少し行った……あぁ、道具屋があるところですね」

「道具屋？」

何でこのタイミングで、と思ったが、霧島からしてみれば知っている場所なので都合がよかった。場所を知っているからだ。

アインは念のために確認をしているのか、少し時間を置いて再び口を開ける。

「ええ、間違いありません。場所が分かりますか？」

「はい。大丈夫です」

「そうですか。でしたら、私はラックを待ってから捜索に出ます。貴方は一足先に行くといいでしょう」

「分かりました」

言葉のキャッチボールを終えて、霧島はその部屋を後にした。

その後、アインはホークアイの発動を取りやめようとする。その前に、その視界越しに何かを発見した。

近くの路地裏の方に、喪服姿の男の姿が確認出来たのだ。霧島の情報に間違いがなければ、彼がネイヴ・バークスだろうと、アインは決定付ける。

（まだ近くにいたようですね……これなら、そう時間はかからないでしょう）

こうしてホークアイで見ている上で不便なことといえば、風景が見えるだけで会話が聞こえないという点だろう。もし見ている相手の会話が聞こえるなら、もっと便利な魔法のはずであった。

そうして多少の歯がゆい思いをしながら、アインはホークアイの発動を停止し、元の視界を手に入れる。

すると、いつの間にかラックが部屋に戻ってきていたのを発見した。アインが魔法の発動を終えたのを見計らい、彼は口を開く。

「大丈夫か？　アイン。ホークアイを使っていたみたいだが」

「そうですね。まだ別状はありませんよ」

アインの何でもないといった風な言葉に、ラックは少し反応を示す。

「そうか。でも、あんまり使うなよ？　どんな魔法を発現させようと、魔石魔術は諸刃の剣だからな？」

「分かっていますよ。これを貰う時にしっかり説明を受けました。

それを承知で埋めたのですから、それで後悔は致しません。何より、役には立っていますからね」

アインはラックの問いに穏やかに答えた。そして、椅子から立ち上がって口を開ける。

「さて、我々も外に出ますよ。詳しい事は後で話します」

それを言い終え、二人もまた出陣の準備を固めた。

第二十二話　狩人

霧島アインとの会話を終えると、アルトレット議事堂から出てきた。ドラゴンの周りは未だ観光客で賑わっていた。いつの間にか屋台も出ており、こういうイベントでは決まって出てくるぼったくり値段の飲食店や、いつの間の用意したのかあのドラゴンのぬいぐるみまである。

親ドラゴンはあの後ノーレの上空を飛び回っている。霧島はあのドラゴンが異変を見つけてくれた時にどうやって知らせ、どうやって駆逐するのかが気になった。まさか、こんな人混みの中ブレスを吐いたり着陸してくるわけではないだろう。

そこで、ふと子供ドラゴンのほうを見やる。そのドラゴンの周りには、何か薄い幕のようなものが張っているのが見えた。おそらく、防御シールドだろう。先ほどは無かったことを考えると、アルトレットはネイヴとフィーラーの事を軽視しているわけではないようだ。

その裏では、ミネアがエラルドの隊員を引き連れて警備を担当している。そんな感じで霧島は辺りの様子をうかがった後、アベルやリナがいるであろう、道具屋に向けて出発した。

ノーレを出ると、そこも賑やかな状態となっており、ほとんどの店がこの日を待っていたといわんばかりの熱気を見せている。明日の夕方までこのテンションが続くのだと思うと、ネイヴとフィーラーに限らず揉め事は尽きなさそうだなと思った。

今の光景に感想を述べていると、今度は霧島の視界の隅のにアベルとリナの姿が見えたので、急いで首をそっちに向ける。

「リナさん、アベルさん！」

そして、声を上げて自分の存在に気づかせようとすると、声は届いたらしくアベルも手を上げて反応してくれた。

「よう、霧島君。よくここがわかったな」

「アインさんに言われて来たんですよ。自分はいいから、アベルさんのほうを助けて来いって」

リナに関しての理由は、霧島の中では言うべきではないなと思った。確実にリナを傷つけてしまうこと請け合いだ。それを察したわけではないだろうが、アベルは「ふぅん」と言うだけで特に突っ込みは入れてこなかった。

それからは、ひたすら歩くだけだ。昨日と同じグループではあるので、話はそれなりに続いてくれた。

「そういえば、道具屋へは何をしに行っていたんですか？」

「ん？　あぁ、成り行きとはいえ臨時収入が入ったからな。リナの言っていた欲しいやつっていうのを買いにいっていたんだ。昨日の時点であったんだが、何分、あれ思ったより高くてな」

「あれって、巾着袋のことですか？」

「そうだ。流石に知ってたか」

そのことは、霧島も覚えていた。あのカリバーと話す前にリナが見ていた巾着袋の事だろう。あれの事は霧島は詳しく聞いていないので分からないが、ただの巾着袋という訳ではないらしい。ついでにそれについてリナに聞いてみたが、「今度見せてあげる」とあしらわれてしまった。

それからは霧島も辺りを見渡してみたが、あの付近にいないのならもうこの近くをウロウロしている事はないのではないかと思った。狙いがドラゴンであって、明日顔を出すのなら、明日まで捕まる訳にはいかないだろうという推測の元だ。

だから、今日の発見に関しては大して期待せずに、明日どうやって待ち構えるかだけを霧島は考えていた。その、ながら探しの最中だったが、ふと、霧島の視線が一点で止まった。それを感じて、アベルとリナも足を止める。

「どうした？　霧島」

「アベルさん、あれ」

そう言って霧島が指を指した先には、赤髪長髪の彼、フィーラーが人混みの中に穴を開けて歩いていた。と言うのも、今度はさっきと違い巨大なハサミを背負っているため、人々が『近づいて怪我したくない』と思った結果、彼の周りには人が来ず、穴が開いたかのような感じになっている。

そのあまりにも堂々とした態度に、アベルもリナも思わず表情を凍らせた。

「なんだありゃあ……何で殺人事件のあった後にあんな物騒なモン持ち歩こうなんて考えたんだ？」

「逆に怪しくない、とでも思ったのかしら」

「かもなぁ。あんまり頭は良さそうに見えないし」

アベル、リナ、霧島と会話のバトンを渡した果てに、アベルが「どうする？」と声をかけてきた。

「折角見つけたんですから、捕まえるチャンスなんじゃないですか？」

「そーいう事にしとくか。おい、そこの赤いの」

「あ？」

アベルの呼びかけに、フィーラーが振り向く。赤いの、で通じたようだ。

「なんだ？　テメェら」

フィーラーの問いに、アベルは必要事項だけ伝える。

「『なんでも屋』のアベル・ホーストンだ。エラルドからお前とネイヴを捕まえるよう、言われている」

「……へぇ」

目の色が変わった。今の声色からも推測すると、アベル達に興味

を持ったようだ。それを察し、アベルは対応を続ける。

「大人しく捕まる気があるならそれに越したことはないが、どうせ抵抗するつもりだろ」

「だったらどうした。今ここでやり合おうってのか？」

アベルの言葉に対して、フィーラーは挑発で返す。背負っているハサミに右手を持っていったところを見ると、思いきり戦う気分らしい。

それに対して、リナはレイピアを構えようとする。だが、アベルはリナの目の前を右手で遮った。止めろ、ということらしい。

リナが動きを止めたのを見て、アベルは話を続ける。

「戦ってもいい。そっちの方が手っ取り早いからな。だが、人のいないところで、だ。お前も、明日の前にでかい騒ぎを起こしたくないだろう？」

「……！」

明日、とアベルが言った瞬間にフィーラーの眉が上がった。その反応を見て、霧島は彼らの狙いがドラゴンであると確信する。

それから、フィーラーは少し考えるそぶりを見せ、口を開いた。

「いいぜ。その提案、乗ってやる」

「なら、行こう。近くに人気のないところがあるんだ」

そのアベルの言葉を皮切りに、四人は移動する。アベルが先頭、

フィーラーが真ん中、リナと霧島が後ろだ。
他の人は状況を察してか、四人を追いかけて野次馬になろうとはして来ない。いや、一人だけいた。ネイヴだ。

（上手く囮作戦にかかってくれた。エラルドが釣れなかったのは残念だけど、『何でも屋』と霧島高貴の実力を計れるだけで、まあ良しとするか）

ネイヴは考え、そして不自然に見えないよう、路地裏から遠回りに移動した。

◆

（まさか、また来ることになるとは……）

霧島が昨日、八人の黒ずくめに襲われたあの広場。そこに、今四人でいた。彼らの視界上には、人っ子一人見当たらない。
フィーラーは辺りを見渡すように首を動かし、口を開く。

「ハッ、本当に三人しかいねぇようだな」

「ああ。来るとしたら、偶然ここを通りかかる連中か、向こうにいた奴らが呼んだエラルドの奴らか。ま、とりあえず今のところは邪魔が入らないっていうのは保証してやる」

「……クッ、ククク。面白い奴だな、おっさん」

「アベルだ」

「そーかい。んで？　誰から戦ってくれるんだ？」

フィーラーは、戦いを目の前にして高揚しているようだった。その様はまさに、戦闘狂という代名詞がよく似合う。

そこで、アベルが一歩前に出た。ここはやってくれるということらしい。それを見て、フィーラーが眉を寄せる。

「サシか。いいね、そういう潔いのは好きだぜ」

「口には気をつけろ、若いの。一応俺が年上だぜ？」

「ぬかせ。そんなことぁ知ったこっちゃねぇよ」

二人の間に火花が散る。フィーラーの獲物はニメートルくらいの巨大ハサミ、対してアベルは一・三メートルのバスタードソード。間合いはフィーラーの方が圧倒的に長いため、正面からまともにやりあってはアベルが負ける。

だが、勿論アベルはそんな馬鹿一直線の戦いをするわけがない。

（まずは、様子を見る）

アベルはそう思い、剣を両手で持ち、右斜め後ろに構え、勢いにのせて左斜め上に上げながら振るう。

直後、剣を振り切ると同時に前方へ、轟音を上げながら飛んでいく振動波が生まれた。

アベルの魔法は、簡潔に言えば振動を起こす事である。最初にア

ベルが霧島と会ったときには、地面を這うように振動を起こすことで亀裂を前方へ伸ばす、地割れまがいのことをしていた。
そして、今は空気振動を起こし、それでフィーラーを叩こうとしている。当然、当たれば痛いでは済まされない。

フィーラーはその振動破が地面から浮いているのを利用して、走りながらくぐり抜ける。そして、その屈んだ姿勢から立ち上がると同時に、片手でハサミを振り上げた。
アベルはそうして足元にやって来た刃を、後方に飛ぶことでかわす。そして、ハサミを振り切ることでフィーラーが無防備になったので、アベルはすかさず踏み込み、肩に峰を叩き込む。

フィーラーはその攻撃を、ハサミを持ち上げ、アベルの刃の軌道上に刃の部分を持って行くことで受け止める。振り切った後だとはいえ、動けないということはないようだ。
そして、フィーラーは下、アベルは上という、フィーラーが不利な状況での競り合いとなる。だが、ハサミを片手で扱っていることから、おそらくフィーラーの方がアベルより力が上だろう。このまま競り合っていて、フィーラーに負けないという保証がない。

アベルはとにかく反撃される前にたたこうと、全体重を乗せて押しにかかる。フィーラーはその力に押し負けるように、だんだんと足を曲げていく。だが、そこでフィーラーはひるむことなく踏ん張り、やがてハサミがアベルの剣を押し始めた。

（何だ……どこにこんな力がある！）

アベルは巻き返されそうになる状況に驚きながらも、力を緩めずにフィーラーに対抗する。だが、フィーラーに押され続けるという現状は変わらなかった。

互いに限界まで力をこめているようで、表情には見るだけで必死さが伝わるほど迫力があり、歯を食いしばっている。足の踏ん張り方にも力が入っており、フィーラーは姿勢が姿勢なので全身に力が入っているのが伝わる。

やがて、なんとフィーラーがハサミを振り切りアベルを負かした。その際、少しアベルの腹部が切れ、鮮血が散る。

「お父さん!?」

「掠った程度だ、心配すんな。それより――」

今のを境に、今は互いに距離を置いている。その間に、アベルは口を開いた。

「お前、何だ？　あの状況で押し返すなんざ、普通じゃねぇ。魔法か？」

「さぁな。魔法といやあ、テメェこそ振動はどうした？」

「……さぁな」

あの競り合いのとき、アベルは振動を使わなかった。あの至近距離で使えば、まず間違いなく自分も巻き込まれるからだ。

フィーラーはまだそれに気づいていないのか、問いかけを投げてきた。

ひとまず、アベルは二度とフィーラーとぶつかり合うつもりはなかった。今のを押し切られては、どんな形であれ力比べでは負けてしまうだろう。

となれば、とアベルは再び剣を構え、空を裂く準備をした。それを見てフィーラーは何が来るのか察したのか、少し後ろに下がる。また見切るつもりなのだろう。

そうはさせまいと、アベルは早急に剣を振るい、振動波を起こした。今度は先ほどよりも、範囲が広い。

フィーラーはそれを見て、ちょうど自分の体を覆うレベルの高さだと確認すると、右足をバネに跳躍した。

「……っな！」

一回の跳躍によって、フィーラーは振動波を難なく飛び越え着地する。標的を巻き込むことなく直進したそれは、コンテナとぶつかって轟音を上げるだけに終わった。

そして、フィーラーが口元に笑みを浮かべて言う。

「どうした？　こんなもんか？」

「……」

アベルの魔法は一見凄そうに見える。だが結局の話、範囲外に出てしまえば届かない。

彼の手持ちは剣と振動がメインだ。その両方を対策されては、挽回は見込めないだろう。フィーラーの力にどんな原理があるかは分からないが、根本的にアベルと相性がいい。

「ま、相性が悪かったと思って、勝つのは諦めてくれや。アベルさんよ」

その事実を肯定するかのように、フィーラーは一言告げた。その

結果にアベルは舌打ちし、「そうみたいだな」と認める。
後は霧島かリナにバトンが回る訳だが、ここでリナという選択肢を選ぶのは、アベルの中では無い。

（不本意だが……任せるしかない、か？）

せめてもの、どのような魔法を使えるか分かれば良かったのだが、と思いながらアベルは霧島の方を見ようと後ろを見やる。

「その心配はねぇよ」

だが、途端に何処かから声が聞こえてきた。それが自分たちが通ってきた道の方から聞こえてきたと分かると、四人はそちらを向いた。
そこには、金の装飾を施された青い槍を持った、ブラッドがやって来ていた。アベルはその登場に驚いて名前を呼ぶ。

霧島とリナはブラッドがそこにいたことよりも、その青い槍を彼が持っているということに驚き声を上げる。

「カリバーさん！？」

その反応に、ブラッドは眉を上げた。

「あ？　何だ、お前ら知ってるのか」

「おお、誰かと思えば昨日の若い衆じゃないか。元気そうで何よりよ」

カリバーは一日しか経っていないのに、さも懐かしそうにそう言

った。
一方のフィーラーは、ブラッドを見て早速口を開く。
「アンタ、エラルドの人間だな？」
「だったら何だ？　フィーラー」
突然の介入にも、ブラッドは言葉に詰まる事無く返した。対して、フィーラーの口元が緩む。
「……嬉しいぜ。まともな戦いなんて、暫くしたことがなかったからな」
次いで、ハサミを両手で持ち直して言う。
「来いよ。手加減なんてのは無しだぜ？」

第二十三話　使い方

ブラッドは、それに答えるようにカリバーを両手で持ち、フィーラーの出方を伺う。先程の戦いを見ていた彼は、直接の競り合いになったら勝ち目がないことは理解していた。
それを確認するように、カリバーは一言告げる。

「おいブラッド。たのむから、ハサミと対抗しようなんて思うなよ？　腰に響く」

「腰ねぇだろ」

カリバーの放った言葉に、ブラッドはすかさず突っ込みを入れた。それから数秒、フィーラーはハサミを自分の右側に持ち、ハサミを少し開いて、縦に構え突っ込んで来た。このまま突っ込まれれば、腹部と肩の位置に刺し傷を入れられるだろう。

ブラッドはそれを見て、カリバーをフィーラーに向け、槍先の部分を発射する。

「は？」

唐突かつ予想外の攻撃。当然、かわすことなど出来る訳がない。それはフィーラーの腹部に当たり、鈍い音がなって顔は苦痛に歪む。同時に足が止まったかと思うと、二、三歩後ろに下がっていった。
彼は腹部に当たった槍先が地面に落下したところで、思わず自分の腹を見たが、傷は入っていなかった。例え槍でも、ブラッドのは形だけのものであるため、刺さりはしないようだ。良く見れば、完全に尖っている訳ではない。

次いで槍先が飛んできた先――柄の方を見てみると、槍先は柄と鎖で繋がっていた。そして、その柄の中には、鎖を収納するための空洞があった。それをフィーラーが確認した矢先、ブラッドは槍先を鎖ごと、まるで掃除機のコードを戻す感じで回収する。

フィーラーは痛みにうずくまりながら、その一部始終を見ていた。

「随分変わった武器だな、オイ」

「お前もそれなりに変わってるだろうが。言われる筋合いはないぞ」

「本当にの。巨大バサミなぞ、産まれてこのかた見たことないわい」

カリバーは自分のことを棚に上げて、フィーラーの武器に感想を言った。その言葉が終えると同時に、フィーラーはゆっくりと立ち上がる。

「なんだ、まだ立つのか。捕まえるために殺さないようやるの、面倒なんだがな」

「……いい気になるな、クソッタレが」

ブラッドの完全に嘗めきったようなセリフに、殺気を伴った言葉で言い返した。続いて、フィーラーは攻撃方法を魔弾に変える。だが、それはブラッドが槍を使って振り払うことで打ち消された。

直後。フィーラーは先ほど突っ込んできたときとは比べ物にならないほど速く、ブラッドの元へ突っ込んで行く。

「――!?」

その手にあるハサミは閉じており、ブラッドの右半身を貫こうと迫ってくる。ブラッドは咄嗟に、足で地を蹴ると同時に思いきり体を左後ろへ捻った。

結果、ハサミは右袖をかすっただけで終わり、ブラッドはフィーラーの右側に移動する。急に動いたせいか、ブラッドは移動した後も、勢いを押し殺すために数歩後ずさった。

また、先ほどの急な攻撃に驚いたのもあってか、ハサミで思いきり突いてきた際に生じた隙を突くことが出来ず、態勢の立て直しを許してしまう。再び、互いに武器を構えた。

そして、ブラッドは槍先を射出する。対してフィーラーは、同じ攻撃は喰らわないと言う感じにハサミでそれを弾いた。

次いで、ブラッドに一撃与えようとハサミを構え直す。だが、次の瞬間、弾いたはずの槍先が、空中で急遽向きを変えフィーラーに向かって来る。

「うおっ――！」

その不意打ちに、思わず首から上をのけ反らせ、盾のようにハサミの側面を向けて攻撃を弾いた。

軽快な金属音が響き、再び槍先は落下した。そうして地面に落ちるかと思えば、また槍先の向きがフィーラーの方に変わり襲い掛かる。

ホーミング。その単語がフィーラーの脳に浮かぶまで、実に十数回は弾いただろうか。このままでは、フィーラーの体力だけが地味に削られてしまう。

（だったら……）

フィーラーは次なる槍先を、一旦大きく弾く。少し長く向こうに吹っ飛んだが、あれも戻ってくるだろう。それを機会に、フィーラーはハサミを盾にした状態から、普通に構え直した。

直後、案の定槍先はフィーラーに向かってくる。それを見て、彼は軽くほくそ笑んだ。

ブラッドはその違和感に気付いたが、何をしようとしているかは分からなかった。そのまま、もう何度目かのハサミと槍先の衝突が起ころうとしていた。その時。

フィーラーが、槍先をブラッドに向けて弾いて来た。

「――ッ！」

それはブラッドの顔面を捉える。槍先はカリバーの元に戻り、ブラッドは顔を赤くしながら後ずさった。少し鼻血が出ている。

続いて、してやったり顔のフィーラーは、ハサミを思いきり振り上げてブラッドを襲った。

「ぐっ！」

痛みに呻きつつも、彼はフィーラーのハサミの軌道上にカリバーを置くことで、それを凌ぐ。

不覚にも、競り合いの状態に持っていかれてしまった。フィーラーはこの状態ならば自分が勝つことを分かっているようで、表情が実に生き生きしている。

外野からは、心配してくれているのか声援が飛んできた。ブラッドはその声援に応えられるよう、競り合いに向けて力を入れた。

だが、最初ブラッドが心に決めた通り、フィーラーと競り合いをするつもりはなかった。

「カリバー！」

突如、ブラッドが槍の名前を叫ぶ。それに答えるように、カリバーの槍先が上空に発射された。ほんの数秒もすれば、槍先がフィーラーに向かって降って来るだろう。

彼はその状況に、苛立たしそうに表情を歪め、一歩後ろに下がった。それによりハサミも下がったため、ハサミに向けて力をかけていたブラッドは、前のめりに体制を崩す。

そのブラッドの腹部に、フィーラーは蹴りを入れ後ろに下がらせた。これで競り合いが解除されたので、自由になったフィーラーは槍先が襲い掛かる直前に、なんとか後方に飛びそれをよける。

槍先はフィーラーがいた地面に頭からぶつかり、「痛！」と悲鳴を上げる。ハサミと対峙していた時は、鉄とぶつかると分かっていたからこそ、我慢出来ていたようだ。

槍先が空振りした後は、すぐにそれはカリバーの元に戻る。これを境に、ちょっとした間が訪れた。

ブラッドは顔にダメージを負っていたが、まだ互いに、息はそこまで上がっていない。

（こいつ……随分と強いな）

打ち合いをしての、ブラッドの感想。やはり殺しをやるだけあって、命を懸ける戦いには慣れているようだ。ブラッドもそれなりだが、技量でフィーラーに負けている点は、彼も認めざるを得ない。

「どうした？　さっきのはそんなに痛かったか？」

「お前こそ、腹が痛んできたんじゃないのか？」

「さっきのは痛かったぞ赤いの」

対抗心の応酬。カリバーの言葉は無視し、三度目の武器の構え直しだ。

そして、それを影で見ていた霧島は、ただその応酬に見入った。何よりも恐ろしいのは、フィーラーがまだハサミしか使っていないという点だった。

ブラッドの方は、カリバーの性能を露呈させて戦っている。だが、その状況で押されているのだから、次には魔法をつかわざるを得ない状況のはずだ。

そう考えると、フィーラーはハサミひとつで二人の手の内を晒させた上で、まともにやり合っている勘定になる。本当に、強い。

（せめてあの馬鹿力の源が、ハサミの能力なのか、フィーラーの魔法によるものなのか、分かればいいんだが……）

素人目の霧島にも分からないどころか、玄人目のアベルにも分からないというのが、なおのこと異質さを漂わせている。

霧島がそうして思考していると、次にブラッドが動いた。槍先を射出したのだ。先程弾かれて痛い目を見た後に放たれたこの攻撃は、誰の目から見ても怪しい。

（囮か）

フィーラーはそうそうに見切りをつけ、ブラッドから目を離さな

いよう、気をつけつつ槍先を弾こうとハサミを構える。
その、直前。ブラッドが無理矢理、槍の柄を振った。それにより鎖も動き、連動して槍先の軌道が変わる。これでは、何処から攻めてくるか分からない。

「甘ぇよ」

だが、フィーラーはブラッドが柄を動かしたのを見ていたため、軌道が変わることは分かっていた。フィーラーが槍先に視線を移すと、丁度軌道が変わる瞬間だった。
それを狙い、フィーラーはハサミを振るい、槍先についていた鎖を絡め取る。槍先はそこで動きを封じられ、ハサミに絡み付いたまま動けなくなった。

それを見ていた外野は、各々で表情を歪め、声を出す。フィーラーの口元には、笑みが浮かんでいた。

「まぁ、悪くはなかったがな。残念ながらここまでだ」

フィーラーはブラッドに対して一言、勝利宣言をした。
だが、ブラッドからの返事は無かった。それどころか、良く見ると不敵な笑みを浮かべてフィーラーを見ていた。フィーラーは眉を寄せる。

「……何がおかしい」

思わず、という風にフィーラーが口を開けた。すると、ブラッドは槍の柄を強く握り締める。

その、一刹那。鎖から放電が確認出来た。フィーラーがそれが何

か確認したとき、驚き目を見開いたが、既に遅い。
次の瞬間には、カリバーとハサミを通じて、フィーラーに電撃が流れていた。

「がああああああ――！」

フィーラーの、始めての悲鳴が上がる。

これが、ブラッドの魔法だった。要するに、自分が手に持った物質に電撃を流す、という魔法である。当然だが、アベルの振動のように万物に通じる訳ではなく、電気を通さない物質――地面とかに流しても効果はない。水のあるところでは随分強いが、自分も水に入っていた時に発動すれば自身も感電してしまう。

だがこの特殊な槍ならば、鎖の届く範囲であればこうして巻き付けることで、安全に、一方的に電気を流す事が出来る。
つまりカリバーは本来、槍でも打撃武器でもなく、相手を捕えるための武器という、本来の目的で容易に相手の意表をつける代物なのだ。これに引っ掛からなかった者は、そういない。

これなら、このまま感電死まで持って行くことも出来る。だが、ブラッドの目的はフィーラーを捕まえることだ。殺してしまえば元も子もない。
故に、ブラッドは途中でその攻撃を取りやめた。ハサミから手を離さなかったのは、電撃にやられてものを考えられなかったからだろう。フィーラーはそのまま膝を折る。

「ッハァ、ハァ……」

呼吸が荒い。まともに電撃を流されたのだから、相当なダメージ

のはずだ。

（勝ったか……？）

霧島は、その状況を見てそう思った。フィーラーは痺れているから暫くまともに動けないだろう、という根拠からだ。

ブラッドも、その痺れ具合を狙っていたに違いない。電流を流し終えてすぐに、カリバーを元の槍に戻したのだから。

ブラッドがゆっくりと口を開く。

「終わりだ、フィーラー。俺が連絡すればすぐに応援が来るし、その状態で逃げようにも、四人も相手に出来ないだろう」

次いで、カリバーが口を挟む。

「ところで、ブラッドよ。ネイヴとやらの居場所を聞かなくていいのか？」

「大丈夫だろ。後でゆっくり聞くさ。ひとまず、二人は先にアルトレットに――」

そこまで言ったところで、不意にフィーラーからくぐもった声が聞こえた。全員がそちらを向くと、含み笑いをしているフィーラーの姿があった。

霧島は何事かと眺めていたが、そこでブラッドが口を開く。

「やめとけ。それ以上動いたら体が持たないぞ」

敵に対して、とは思えない言葉がブラッドの口から出た。だが、

その気持ちを嘲笑うかのように、フィーラーはゆっくりと立ち上がる。それと同時に、段々と笑い声が高くなっていった。

「ハッハハハハハハ！　やっぱり戦いってのはこうじゃなくちゃな。結構良かったぜ、今のはよお！」

「うるせぇよ」

フィーラーの高らかなテンションによる言葉に、ブラッドは言う。そして、気絶させないといけないようだと思ったのか、魔弾を生成し、フィーラーに向けて放った。

すると、その魔弾はフィーラーに辿り着く前に消失する。その光景を見て、霧島は目を見開いた。

（今の、キルさんの時にもあった――）

直後、霧島は、ブラッドもまた今のに驚いているのを見た。初見、という感じではない。彼はその表情のまま、ゆっくりと口を開く。

「……お前、何でそれを使っている？」

「あぁ？　『鎧』の事か？　使えたって別に不思議じゃねぇだろ？」

フィーラーの言い草に、ブラッドは大声で叫び返す。

「違う！　そのノナの操作方法は、アルトレットに関係のある奴しかしらないはずだろうが！　何でお前が知ってる！」

「さーな。さて、楽しくなってきたところなんだが、俺はここで退散させて貰うぜ。今日はあんまり戦うの、ＮＧなんだよ」

「ッ、待て！」

ブラッドの静止虚しく、フィーラーは走りだし、コンテナの上に飛んで逃げていく。

「アベルさん！　追いかけるのを手伝ってくれ！」

「分かった！　霧島はリナを連れて、先に戻っててくれ。頼んだぞ」

「え、ちょっと待ってよお父さん！」

アベルはそれだけ霧島に告げると、ブラッドの後を追ってさっさと行ってしまった。残されたリナと霧島は、ただ二人の背中を見送った。そして、見えなくなったくらいの時に、ポツリと呟く。

「……また、おいていかれちゃったなぁ」

霧島は、何も言えない。言葉をかけてやりたいとは思ったが、そのための言葉が、リナの慰めになるような言葉が見つからなかった。そうして、哀愁に浸っていると、不意に後ろから足音が聞こえてきた。何の変哲もない普通の足音。ただの通行人だと思えてもおかしくないそれを聞いて、霧島はなんとなしに振り返る。

すると、そこには喪服を着た弱々しい男が立っていた。

第二十四話　自信（前書き）

予想以上に長くなってしまった。
でも分割出来るところが見当たらなかったのでそのまま投稿します。

第二十四話　自信

「ネイヴ！？」

霧島は庭や写真で顔を見たことがあったので、自然に名前を出すことが出来た。その言葉に釣られるように、リナも振り向く。

「あっらー。やっぱりもう名前と顔、知れ渡ってる？　はっははは」

呼ばれたネイヴは無駄に関心したような声を出して、少し笑う。霧島は対峙しながら、状況の事を考えた。

今はブラッドもアベルもいない。ネイヴと戦って勝てるかと問われれば、難しいところだった。とりあえず遅れをとらないようにしようと、霧島は戦いが始まる前に身構える。だが、ネイヴのセリフはまだ続いた。

「さて、それにしても酷いよね。大人って奴には、子供の事を分かろうとしない奴がいるからさ。ほんっとそういう家庭に来ちゃったのは残念だったねー」

何かに同情するような声色。それが耳に届いたのか、リナが少し反応を示した。

霧島はそれを見て、良くない流れを感じたのか、即座に炎を作り出す。

（魔法を使われる前に、やる――！）

ベルンのときみたく、熱気でネイヴをまいらせるために炎を放つ。すると、口上を続けていたネイヴが、笑みを浮かべて言った。

「焼石に水」

「――！」

直後、ネイヴに炎が当たる。だが、今の諺から察して、霧島の中にはあまりいい予感がなかった。

やがて彼を覆っていた炎が消えると、その予感が当たったのを霧島は確信した。ネイヴに焼けている様子がない。それを見て、苦々しく表情を歪める。

「厄介だな……諺の数だけ手があるのか？」

「そうだねー。ちなみに今のは焦がせって命令を、焦がすなに変えただけだ。ま、意味と言葉は頑張って合わせるからさ、察してね、お二人さん」

からかうように、右手をひらひらとさせて言う。その態度は相手を煽るためのものだろうと、霧島にはなんとなく想像がついた。なので、挑発には乗らずに次の手を考える。

だが、次は自分の番だと言わんばかりにリナが突っ込んで行ったため、その思考を中断した。良く見ると、リナはレイピアに透明化の魔法を使っている。

「え、おい！」

霧島の大声の静止虚しく、リナは霧島を追い越しネイヴに向かった。

「脳ある鷹は爪を隠す」

次の瞬間、ネイヴの魔法が発動する。すると、リナがレイピアにかけていた透明化の魔法が解けた。

リナはそれに驚き入るが、ネイヴは彼女が正気に戻るまで待ってくれない。リナのレイピアを軽くかわし、腹に思いきり蹴りを入れた。

「ッ、は――！」

肺から酸素が搾り出されたような掠れ声を上げ、リナは少し吹っ飛ぶ。霧島は何とか彼女を受け止めると、ゆっくり地表に降ろして声をかける。

「大丈夫か？」

「ケホッ、ゲホッ……へ、平気、よ！　有難う」

相当強く蹴りが入ったらしく、それからも三度軽く咳込んだ。ネイブはその姿を見て声を出す。

「随分、威勢のいいじゃじゃ馬だなあ。もうちょっと慎重になろうよ。フィーラーもそうだけど、どうしてジーっと待ってくれる人がこう少ないわけ？　産まれてくる時代間違えちゃったかなー」

後半が愚痴に変わっていたが、霧島は聞く耳持たずである。それより、どうやってネイヴに攻撃を与えられるか、考える事を続ける。

「お、いいね。その真面目な感じ。若い時の辛労は買ってもせよ、って言うし。君はいい見本になれるよー」

それが顔に出ていたのか、ネイヴがまたもやからかうように言ってきた。霧島はそれに対して苦笑いを浮かべる。

「そりゃ、どうも。というか、貴方は何しにここに出て来たんですか？」

隠れて様子を見ていたであろう相手がわざわざ出てきて、戦い来たにしては消極的、話に来たにしては愚痴ばかりなので、目的が読めないのだろう。ネイヴはそれを察して、口を開く。

「一つは、真面目に君達がどんな戦いをしてくるのか見たかっただけ。もう一つは、おいてかれて、寂しい思いをしているはずの君達の相手をしてやろうかと思ったんだ。どう？　優しいだろ、ネイヴおじさん」

「あんたみたいな趣味の悪い奴は知り合いにいらねーよ」

霧島はあくまで姿勢を崩さずにネイヴに反論した。それを聞いて、ネイヴは尚一層のこと表情に笑みを浮かべる。

「随分張り切ってるじゃない。ま、やってみなよ。暫くは相手してやるからさ」

完全に嘗めきったネイヴの態度に、霧島は少しカチンときた。それに伴い、リナに声をかける。

「いいか、リナ。むやみには突っ込んじゃ駄目だ。あいつは何をしてくるか分からない」

「でも、それじゃあ――」

「大丈夫だ。少し考えがある。ちょっと聞いてくれ」

リナはその言葉に、しぶしぶだが頷いた。そして、霧島はリナにひとつ指示を出した。直後、再び炎を作り出す。それを見て、ネイヴは「芸が無いね」と霧島を一蹴した。

「焼石に水」

すると、また霧島が放つ前にネイヴが次の言葉を言い出す。その魔法が発動するのを承知の上で、霧島は炎を使った。おそらく、もう既にこの炎は期待出来るほどの攻撃力を持っていないだろう。それは、先程ネイヴが焼けなかった事が証明している。

だからこそ、霧島はネイヴにはそれを撃たなかった。と言うのも、ネイヴに当たる前に炎の向きを変えたのだ。そして、その炎はネイヴの回りを囲い始める。熱気も攻撃力も無いものだが、それはネイヴの視界を塞ぐには十分のものだった。

（これは……）

ネイヴは、炎の動きを見てから、霧島がわざわざこうした理由を考える。

すると、そういえばとひとつ思い当たる理由があった。数秒経ち、ネイヴの思索が終わりを告げ、同時に炎も止む。

直後、背後で足音が聞こえた。

ネイヴが即座に振り返ると、炎が消えたのを見て近づいて来ようとするリナの姿が見えた。不意打ちをする算段だったのだろうが、

今の音のお陰でネイヴに位置がばれてしまった。

「あ――」

「青菜に塩」

そうして先の展開に予想をつけた矢先に、ネイヴが諺を言った。
リナの体から力が抜け、その場にへたった。直後、ネイヴはリナを見下ろしながら告げる。

「危ない、危ない。今、後ろからレイピアで刺そうとしてきたでしょ。でも、足音を鳴らしちゃったのは失敗だったね。じゃじゃ馬さん」

「う……」

自分の失態であるために、リナはネイヴに言い返せないでいた。
折角チャンスを作ってくれたのにと、霧島に対しても申し訳ない思いを持っているだろう。一方、霧島は仕方ないと思考を切り変え、リナがひきつけている間にと、次の策を練る。

ネイヴの魔法は、今までのアリア国王やベルンの力押しの魔法に比べて、偉くやりづらかった。
どんな形でも行動を制限され、まともにダメージを与えることが出来ない。それでいてネイヴは、霧島達を殴り倒そうと思えば出来る状況だった。

そうして思索に耽っているとやがて、リナが立ち上がった。どうやら特に別状はないらしく、強気な表情でネイヴを睨んでいる。それを彼はニヤニヤしながら眺めていた。

だが、ここで霧島が一失報いに入る。今、ネイヴは自身の背後にいたリナの方を向いているため、霧島に背を向けている状態なのだ。これを逃す手はなかった。

だが、互いに距離をとってしまっているため、霧島が魔法で仕掛けては気付かれて対処されてしまうだろう。直接走って向かって行っても、足音で気付かれてしまう。

そこで、霧島は持っていたナイフを投げることにした。武器ならば投げた後に精神操作されても、狙いが変わることがない。

霧島は距離差を縮めるべくじりじりと近づいて行く。ネイヴはまだリナと向き合っているので、好機はある。

そして、近づきすぎず、通すぎずといった距離まで来て、ナイフを取り出した。狙いを右足に定め、霧島は投擲（とうてき）に入ろうとする。

だが、その投げかかった瞬間に、ネイヴは不気味な笑みを浮かべて振り返りながら、口ずさむ。

「弘法にも筆の誤り」

「――！」

直後、言い終わられてしまった。霧島はその寸前で、ナイフから手を離すのを踏み止まる。そして、不意をついたはずの攻撃に対応されたことに愕然とした。ネイヴはあくまで飄々（ひょうひょう）と言う。

「いやぁ、ほんと。君には油断も隙も見せられるものじゃないね。今のは地味に危なかったよ。投げナイフなんて、想像もしてなかった」

「じゃあ、何で……」

霧島の最もな問いに、ネイヴはリナを指差して応える。

「彼女の目だよ。暫くは僕の隙を伺おうと頑張ってたみたいなんだけどさぁ。急に瞳が君の方を向いたから、君が何かしてくるなって思ってね。何が来てもいいようにってことで、さっきの諺をいいながら、外せって命令出して振り返ったんだ。

いやあ、つくづく恐ろしいね、君は。僕の魔法の弱点の突き方とか、隙を見逃さない観察力。戦いの少ないあの星からやって来たっていうのが、本当に信じられないくらいだ」

その言葉は、霧島を少しばかり震撼させた。ネイヴが相手を見るのに長けているということを認識したのだ。

そして、ネイヴは再びリナの方を向いて言う。

「それに比べて。君は足引っ張ってばかりだよねぇ。ほんとにこの世界の人なの？」

「――！」

ネイヴの言葉により、リナの中にあった不安感が増幅された。自分のせいで霧島に迷惑をかけている、という不安感がだ。その上で、ネイヴの声は続く。

「さっき、僕は置いてけぼりをくらった君達に同情しちゃったけどさ。あの時の、アベルの君達をアルトレットに返すっていう選択、正解だったんじゃないかって思えてきたよ。だって、こんな足引っ張るだけの存在、いるだけ無駄だもんねぇ」

「いるだけ、無駄……」

ネイヴは、リナの戦意を削ごうとしている。霧島には、それが分かった。

だが、今までのコンプレックスを肯定されたリナに、そんなことを考える事は出来なかった。ただ、言い返せないまま、ネイヴに精神を揺さぶられるしかない。

「止めろ！」

霧島はそれを止めるべく、ネイヴに駄目元で走り突っ込んだ。

「青菜に塩」

一刹那、有無を言わさぬ、といった速さで霧島を止めた。それにより、霧島は膝をつく。それを見計らい、ネイヴは霧島の側まで歩くと、腹に蹴りを喰らわせてきた。思わず、咳込むように声が出る。

リナはそれを見て、心配そうに彼の名前を叫んだ。すると、ネイヴが意外そうな表情で彼女に言う。

「あれ？　助けに来ないの？」

「――え」

奇を衒（てら）ったその言動に、リナは、何を言っているんだといったふうに声を漏らす。それに対し、ネイヴは熱弁を奮った。

「いや、だからさ。君は多分、役に立ちたいって思っているんだよね？　それはずっと持っている気持ちのはずだ。偽りはない、いい気持ちだと思う。嘘がない素直な気持ちは大好きだ。

でも、だ。そうだというのに、君は僕が彼に攻撃をした後も見て

るだけ。彼は君を助けようと動いたのに。
あれ？　おかしいな。何やってんの？」

「――」

一言一言が、一々心に刺さった。最初の言葉で一度心意気を持ち上げているから、尚更だ。そして、ネイヴの言葉が堪えたリナはとうとう黙り込んでしまった。暗い表情で俯いている。

霧島はそれを見やってから立ち上がった。その動作に、リナはビクッと体を震わせる。怒られるかとでも思っているのか、目が怯えていた。ネイヴは痛めつけ終えたからか、リナを警戒対象から外し霧島の方を見ている。

その霧島は、ネイヴではなくリナの方を見た。

「リナ、大丈夫か？」

「あ、え、あの、私……」

声をかけただけで、この怯えようだった。予想以上に利いている。霧島は、とにかく励ますべく言葉を繋ごうとする。だが、そのタイミングでネイヴが攻めて来た。霧島に向かって走り出し、肉弾戦を仕掛けてくる。

霧島は口を閉じ、慌てて応戦し始める。ネイヴが繰り出してきた腹部を狙った低姿勢からの右ストレートを、霧島は後ろに飛びながら左手で受け止める。そして、右手で持ったナイフを刹那のタイミングでネイヴの肩に向けた。だが、彼は自分の体を左に捻ることでそれをかわし、霧島のその手を掴み捻り上げる。その痛みに、霧島

は短く悲鳴を上げた。

そのまま、霧島はナイフを落としてしまった。ネイヴはそのナイフを蹴り飛ばし、何処か遠くへやる。直後に霧島の腕を解放すると、彼の横っ腹に思いきり蹴りを喰らわせた。霧島は声を上げて痛みを訴えながら、一メートルくらい吹っ飛ぶ。

「霧島君！」

その様子を見て、リナは声を出す。そして、何かないかと思索した。確実に、今の状況を脱出できる何かを考え始めた。

そこで、ふと、今日買ったばかりの巾着袋に目が行った。一瞬、リナはそれを使おうと手を伸ばすが、すぐにその手が止まってネイヴの言葉が脳内再生される。

（これを使ったら、いい方に働いてくれる？　霧島君の状況がこれ以上悪くなったりしない……？）

疑心暗鬼は止まらない。だからこそ、ネイヴは言葉を上手く扱い、疑心暗鬼に陥るように操作する。魔法といい、手口といい、精神と心の内面を操る彼は、マイナスの方に人を良く知っていた。

一度悪い方に転ぶと分からせれば、大体の人はそれを避けようと行動する。二度と同じ失敗はしないと意気込んで。リナは自分が役に立てないのではと思い込んでいる、思い込まされているが故に、ネイヴはリナがすぐに行動を起こさないと踏んでいた。

「さて、どうしよっかなー。霧島君、もう手詰まりかい？」

ネイヴの陽気な発言に、霧島は痛みで歪んだ表情のまま、睨みつ

けるように彼を見る。今の蹴りが相手ならば、おそらく肋骨にも大分ダメージがいっているはずだ。燁のひとつくらいならば入っているかもしれない。

そして、策が何も思い浮かばないのか、霧島は黙り込んだままである。その様子を見て、ネイヴは口を開く。

「そうか、何も無いか。でも、まだ時間じゃないんだよなー。どうしようかなあ」

（時間……？）

霧島は、何気ないふうにネイヴが言った言葉の一部分に違和感を覚えた。

（こいつは、何かを待っているのか？　一体何を――）

戦いを中断している霧島は、一時思索に没頭するが、考えるための材料が少ない上、思い当たるものがないためにそれはすぐ終わった。

（ひとつだけ、確実なものはあるが……そうだとしたら、何故こいつが待たなければいけないんだ？）

霧島がそうして考えていると、不意にネイヴが目の前に現れる。

「ねぇ、ごめんなんだけどさぁ。ちょっとサンドバッグになってくれない？」

「――！」

思わず、息を呑んだ。

そう言ったネイヴは、霧島の返事を待たずに攻撃を仕掛ける。先程蹴った横腹とは逆の腹を蹴ってきた。それにより霧島を少しの距離を飛ばした。そして、ネイヴは霧島の側まで行き襟首を掴んで持ち上げると、正面の腹にも拳を埋める。それを喰らって苦しそうな表情を霧島を見て、リナは動揺していた。

ネイヴは今の一撃で霧島がぐったりしたのを見て、立っていた木の方に叩きつけた。霧島はその反動で一瞬のけ反り、そのままずるずると地べたに落ちる。その時、彼の指先に何かが触れた。

（駄目……このままだと、私が何もしなかったら霧島君が……）

一方、リナはその光景を見て、迷っている暇はないと覚悟を決め、心境を無理矢理回復させる。

（不安は拭えないけど、やるしかない！）

そうして、リナは巾着袋を開けた。

瞬間、巾着袋の中から風が出てきた。それと同時に、黄緑色の様々な長さの線も現れ出る。それらはリナの隣に集まり、立体の切り絵のような感じで、何かの形を作っていく。

「っ、これは……」

ネイヴと霧島が見ている中、数秒を要して出来上がったそれは、切り絵で書かれたような虎だった。そいつは周りに風を纏っており、体長はニメートルと少し。それを見て、ネイヴは舌を打つ。

「よりにもよって魔獣を召喚したのかよ……流石に想定外だな、こりゃ」

ネイヴは、思わぬところから出てきた敵に苦々しい顔をした。

霧島の魔法は、タングネスを元にしているとはいえ、魔法自体の構成は霧島の脳で行っているので、ネイヴの魔法の干渉を受ける。だが、今リナが召喚した魔獣は違った。魔獣というのは、何処かの魔法使いが自分の魔法を使って作った魔法生物であり、ネイヴの魔法が干渉出来る脳が存在しない。

勿論、リナはそんなことはいざ知らず。ただ何かに使えないかと思って召喚しただけだった。

「行って！　エアタイガー！」

「チィ！」

ネイヴは、まともにエアタイガーとぶつかった場合に勝てる気がしなかった。ネイヴ自身の筋力を上げる方法なら存在するが、何の助けになるか危うい。

そのため、彼はあんまりにまずいようなら、筋力を上げて全速力で逃げることに決めた。

だが、その覚悟は無駄に終わることになる。

リナがエアタイガーに命令をしてから暫く経つが、そのエアタイガーが動く気配が全くないのだ。それに気付いたリナは、恐る恐るエアタイガーの方を見やり、呟く。

「動かない……？」

リナが見たところでも、エアタイガーは一歩も動いていない。「ここは何処だ？」というふうに首をゆっくり動かしてはいるが、今すぐ戦おうとする雰囲気は感じられなかった。

（やっぱり、躾をする時間が無かったから……？）

そのエアタイガーの様子を見て、ネイヴは何か思い当たったのか、リナに向けて言葉を放つ。

「ひょっとして……まだ、躾てないのかい？」

「――！」

気付かれた。その事に驚いた彼女は大きく目を見開き、ネイヴの方を見た。

それは、ネイヴの言葉を肯定したも同然だった。それから少しの間が空いて、段々ネイヴの方から笑い声が聞こえてくる。

「アッハハ、ハハハハハ、アッハハハハハハハハハ！　成る程ね、だから最初から使わなかったのか！

躾が済んでないなら、そいつはまだ君の言う事は聞いてくれない……ただのでっかい木偶人形じゃん！」

最後の頼みの綱を小馬鹿にされ、リナは憤ったふうに表情を変えた。ネイヴはそれを嘲笑うように笑みを浮かべ、さっきまで弱気になっていた自分を一瞬で引っ込める。

「でも、万が一があるかもだし？　君も少し、いたぶってあげるよ」

そのネイヴの宣告に、リナは戦慄を覚えた。今の彼女ではどう足掻いたとしても、ネイヴに勝てる事は出来ないのは瞭然としていたからだ。それに構わず、ネイヴは手を抜く気無しでリナに近寄ろうとする。その、一刹那。

「――させねーよ」

ネイヴの右足を、刃が襲った。

「……え？」

斬られた右足の感覚が消えたので、その違和感を感じつつネイヴが振り返ると、そこにはダガーを持っていた霧島高貴がいた。直後、足の方を見ると血が溢れ出ており、数秒してから痛みが彼にやってきた。ネイヴは苦痛に耐え切れず歯を食いしばりながら、霧島に問いかける。

「な、んで……！」

「……何でダガーなんて持っているのかって？　生憎、これは持ってたんじゃなくて、今俺の後ろにある茂みから拾ったんだよ。まさか、こいつが役に立つときが来るなんて思いもしなかったが」

なんの謙遜も悪びれもなく、霧島は笑みを浮かべて語った。その過程で昨日の暗殺者のことを思い出したのは、言うまでもない。そして、続けざまにもう片方の足にもダガーを指しこもうとする。

「ぐっ……！」

それを見たネイヴは、言葉では遅いと判断したのか、直径五セン

チ程度の魔弾を速攻で作り出し、霧島がダガーを持っている手に向かって撃つ。それは霧島の手にあたると軽く爆発を起こした。それで受けた痛みに、霧島は思わずダガーを手から離してしまった。そして左足で、摺り足でダガーを蹴り、霧島の手の届かぬところへ追いやる。

　すると、重心が少し右に寄ったがために、傷口が上半身に押さえつけられ、血が絞られたように溢れ出てくる。再びネイヴの右足に激痛が走った。悲鳴を上げるのを堪え、とにかくと力の重心をを左足の方へと持って行く。リナが召喚したエアタイガーは、微動だにせずその様子をじっと見ていた。

　ネイヴは痛みに呻きながら、僅かに口を開く。

「あー、くそ。油断したぁ……運も実力の内ってやつかよ。めんどくせぇ……」

　ぶつぶつと愚痴を垂れながら、霧島やリナに一瞥くれてから言葉を続ける。

「本当はエラルドの連中がやってきてから言いたかったんだけど。片足怪我した状態じゃ、エラルドから逃げ切る自信ないし。今の内に逃げるから、伝言を頼まれてちょーだい」

「伝言？」

　思わぬことを聞いた、というふうにリナが問い返す。

「そだよ。直接言えた方が面白いし、信憑性もあったから、エラルドがここでの喧嘩に気付くまで遊ぶつもりだったけど。思わない反

撃、喰らっちゃったんでね」

それを聞いて、霧島は有り難いと思った。例え片足を奪ったとしても、ネイヴの魔法には太刀打ち出来ないし、霧島自身もう戦える気がしなかったからだ。

「それで、何を伝えればいいのですか？」

そこで、自分から話してくれるよう促すと、ネイヴはすぐに答えてくれた。

「明日、時期竜神を殺すから、せいぜい頑張って止めてみろ。それだけだよ」

「……子供とはいえ、あれだけでかいドラゴンを、敷かれているであろう警備をすり抜けて、ですか？」

「そうだよ。それだけ伝えてくれればいい。んじゃ、もう行く。これが結構痛いんだ」

ネイヴは簡単にそう言うと、片足を引きずって去って行く。二人は彼を追う事はせず、ただ見送る事にした。仮にくらいついて行っても、魔法で足止めを喰らって、万が一でもやられてしまえば元も子もない。また、別の伏兵がいる事も考えると、動かない方が賢明だ。リナはそれを見てから、霧島の側に駆け寄る。

「大丈夫？　結構殴られてたけど……」

「あー、大丈夫大丈夫。これくらいなら、まだ地球でやった喧嘩よりは温いよ」

そう言って、霧島は立ち上がってみる。だが、胸部に痛みが走り、またうずくまる結果になった。それを見て、リナは霧島を心配そうに見ながら辺りを見渡し始める。誰か来るまでここに残るべきか、人を呼びに行くべきか悩んでいるようだ。

「そんなに心配しなくてもいいぞ、リナ。上を見てみな」

「え？」

そこで、リナは霧島の言うとおり上空を見上げた。そこには、先ほど見た青緑色のドラゴンが、二人の真上で旋回していた。それをリナが確認したのを見ると、霧島は言葉を続ける。

「どうやってあのでかいドラゴンが異変回りにを伝えるのか、ずっと疑問だったんだが……ああやるんだな。暫くしたら、エラルドの人達がやってくるはずだ。それと、最後は助けようとしてくれてありがとな」

「ううん。結局、何も出来なかったわよ……私は」

「そんな事はねーよ。お前があの時ひきつけてくれたから、ネイヴに一発喰らわせる事が出来たんだ。それだけで十分だよ」

「……そう、かな」

「ああ」

リナはその霧島の言葉を聞いて、先ほどまでの暗い気持ちが消えていったような感覚に包まれた。気持ちばかり空回りしていた自分

自身の行動が褒められた事が、今まで全くといっていいほどなかったからだろう。
それからエラルドの人がここに駆けつけてくるまでの間、リナはずっとその余韻に浸っていたのだった。

第二十五話　知らせ（前書き）

ちょっと急ぎの出来。後で少し手を入れます。

第二十五話　知らせ

「これより、明日行われる竜神の儀式についての会議を開始する」

あれから数時間、子供ドラゴンのお披露目が一時終了を告げ夜更けに入った頃。キルやブラッドは会議室に呼ばれ、明日についての話合いに参加することになった。霧島によって伝えられたネイヴの宣戦布告が今日の議題を占めるのは、ここにいる全員が承知している事だろう。

（全く……随分な状況になってきたな。目的がさっぱり読めないのが痛いところだ）

ウンディーはこの世界の監視を一番積極的に行っている精霊だ。使い魔だって、今回儀式に取り上げられているドラゴンだけという訳ではない。一番強い使い魔であるかどうかならば今回のドラゴンになるが、監視を逃れて殺人をしたいという単純な狙いで事件を起こすとは考えにくかった。

（必ず何かある。はずなんだがなぁ。分からんなぁ）

そうして思索に耽りながらいると、会議が進み始めた。懐かしくない顔の老人が声を上げる。

「まず、明日の儀式について簡単に解説して貰う。皆もうご存知だとは思うが、今一度聴いて頂きたい。では、今回の儀式を統轄しておられるアニエス殿に、宜しくお願いする」

その言葉を受け、老人の近くに座っていた知的な女性が立ち上がる。

「明日の十七時頃、親ドラゴンが再びあの台座に飛んできます。その時までに、アルトレットから台座まで、子供ドラゴンの移動を完了させておきます。

そして、二匹のドラゴンが向き合えば儀式が開始します。親ドラゴンの持つ精霊石より精霊ウンディーが現れ、少しばかりの挨拶をなされるでしょう。その後、精霊石の引き継ぎが行われます。これを終えれば、子供ドラゴンが正式にウンディーの使い魔となります。

その後、子供ドラゴンが精霊石の力を上手く引き出し、空へ飛び立つ事が出来れば、儀式は完了。親ドラゴンとウンディーはそれぞれ帰って行くことでしょう」

アニエスがそうして説明を終えると、老人が軽く頷き、「質問がある者はいるか？」と皆に問い掛ける。すると、真っ先にキルが手を挙げた。

「キル・ゴッセル。何かな？」

「子供はどうやって連れていくつもりだ？」

その問いに、アニエスは事務口調で答えを述べる。

「周りにエラルドから派遣された警備員を置き、子供ドラゴンの回りには攻撃を寄せ付けないよう防御シールドを張ります。観客があつまるであろう左右には見えない壁を張り、人の侵入を防ぎ、その上で町中にエラルドの隊員を置きます。各種ギルドからの応援も駆け付けて下さいますから、人手不足にはならないでしょう」

「……成る程。随分と厳重ですね」

キルの呟いた感想に、アニエスは「当然です」と胸を張った。その様子を、老人は笑みを浮かべて見ている。

「それだけかね。何か考えた事があるなら、早めに言っておいた方がいいぞ？」

その言葉の雰囲気から察するに、どうやら老人にはキルの考えている事が分かっているらしい。それは別に老人だけに限らず、一部の人を除いて大体の人が察しているようだ。

キルはその上で、代表になったつもりで言う。

「ネイヴとフィーラーの二人が、どのタイミングで仕掛けて来るかを考えていました。先程の話を聞いただけでは移動中にも狙えるものかと思い、アニエスに質問させて頂きました。ですが、今聞いた限りでは、むしろ移動中狙うのが一番難しいです。突破する際の障害が厳しい。あの二人が狙えるタイミングは、子供ドラゴンが飛んだ後でしょう」

「うむ、そうだな。親ドラゴンやウンディーもいなくなる瞬間でもあるその時を、奴らが見逃すはずがない。アニエスよ、子供ドラゴンが飛行するところを、具体的にお願いする」

「了解しました。子供ドラゴンは精霊石を貰った際、親ドラゴンのいる方とは逆の方角、南方へと飛ぶことになっています。そこから時計回りにぐるりと、一定の周期で各地方へ渡ります」

「ということは、ノーレの南方からカトレアまでの道のりに奴らが現れる、で間違いない訳か」

キル、老人、アニエスの繋ぎの後に、堅物そうな男が頷いた。結構な年輩のエラルドの人だ。ブラッドの上司か何かだろう。

その後、老人が彼に声をかける。

「アニエス、ご苦労。さて、フドシャックよ。明日の警備体制について、ご説明をお願いしたい」

「は。多少の取り決めを行い次第、先程挙げた道すがらに存在する高い建物を中心に、路地という隅すらも抑えた上で、ギルドの方々にも協力して頂く所存でございます。詳しい配置決めはこれからですが、部下を総動員させ、必ず儀式までに包囲網を敷いてみせましょう」

「うむ、期待しておるぞ。他に何か言いたいことがある者はいるか？」

そこで、ブラッドが手を挙げて発言しようとした。老人はそれを促し、耳を傾ける。

「ブラッド、用件はなんじゃ？」

「敵の二人組が『鎧』を使っていた、という事についてです」

「――！」

そのブラッドの言葉によって、辺りの空気が変わった。先程よりも張り詰めた雰囲気で、皆が驚いて口を閉じている。

やがて、老人が口を開く。

「それは真か？　ブラッド」

「はい。現に魔弾が打ち消されました。間違いないと思います」

「……となると、誰かあいつらに鎧の操り方を教えた者がいる、ということになりますね」

その言葉をキルが拾い、決定づける。続いて、老人がアニエスに聞いた。

「今、鎧の出し方を知っているのはどれくらいだ？」

「アルトレット、エラルドの上層部、そしてメインギルドの一部メンバー……いずれも最高クラスの者しかしりえないはずです。その者達の誰かが、鎧の出し方を誰かに教え、それがあの二人組に知れ渡った……」

「いや、そんなに生温い事じゃないかもしれませんよ」

「？　どういう事だ、キルよ」

アニエスの言葉に対するキルの発言に、老人が問いかけた。すると、キルは神妙な面持ちでとんでもない事を言ってのけた。

「……その鎧を教授したどっかの誰かさんが、この事件の黒幕なんじゃないかってことですよ」

◆

「お手」

「いや、虎にお手ってどうなんだよ」

アルトレットにある病室で、戦いから帰ってきたリナは早速エアタイガーの躾に取り掛かっていた。とはいっても、地球で言うペットのように触れ合うだけだが。

この魔獣は、前述した通り脳がない。が、ノナを伝って人から奪った意識や学習能力は持っているので、脳はなくても普通の生き物として接することが出来る。勿論こちらの言葉も分かるが、何よりも自我を持っているというのがくせ者だ。これを生成する際に、自我や意識を与える魔法使いの手が加わっていれば、尚更、魔獣には独立した意思があることになるので、主人の言うことを全く聞かない者が出てくる可能性もゼロではない。

だが、リナのエアタイガーは見た感じだと外れではなく、むしろ懐いているようだった。最初に召喚された時は、エアタイガーも流石にいきなり戦う事になるとは思わず混乱していたのだろう。

今も、霧島の反論虚しく、虎なのにお手をやってのけた。霧島は「やるのかよ」とほぼ呆れ気味に薄笑いを浮かべ、リナは嬉しそうな顔で虎の頭を撫でている。

「……あれ？　撫でる実態があるのか？」

「透明で見えにくいけど、ちゃんと表皮みたいなのはあるわよ。触る？」

「是非」

霧島は今、布団の上に寝たきりになっているので、エアタイガーから近づいて来てもらった。左手を伸ばして、額に触れる。

「どう？」

「……ほんとだな。生き物の皮膚って感じがある。周りの風も気持ちいい」

本当にそこに本物の虎がいる雰囲気だが、切り絵のような模様の内側は空っぽだ。霧島が撫で終えたのを見るや、エアタイガーはすぐにそっぽを向いてリナの方へ行ってしまった。霧島は彼女と違って好かれてはいないようだ。

「ところでよ、名前決めないか？　いつまでもデフォルトで呼ぶ訳にもいかないだろう」

「んー、考えてるんだけど。中々しっくりくるのが浮かばないのよね」

「例えば？」

「バイオレンサー、とか」

「泣くぞそいつ」

そうやって他愛ない会話をしていると、この部屋に付けられていた扉が開いた。外から女の人が三人ばかりやってくる。

「はーい、怪我人はここですかー？　って、お？」

けだるそうなトーンボイスを発して来たのは、中央ポジションをとっている、女の中でも背丈が小さめの人だった。水色髪のサイドテールで、同じく水色の瞳。表情は声質に違わずだるそうだが、目鼻立ちははっきりとしている。ちなみに、三人共白衣だ。

その彼女は、霧島を見た後にリナに目をやる。

「……病室に女連れ。いちゃいちゃする気か？」

「しません」

即答だった。リナはリナで、素早く首を横に振る。一瞬顔が赤くなっていたが、特に気にせず女の人は溜息をつく。

「なんだ、つまらん。……まぁいい。それで、お前が霧島高貴か？具合はどんなもんだ？」

「腹に強い蹴りが幾つか入った程度ですよ。詳しい具合がどこまでのものかは分かりませんが」

「ふうん。ま、でも一応かわいい後輩の頼みなんでな。診させてもらうぞ。シーラ」

その言葉に、水髪の女の人の右隣にいた気の強そうな女の人が霧島の側に来た。そして、仰向けに寝ている霧島の腹部に左手を押し当てると、額に埋めてあるサファイアのような魔石を光らせる。集中しているのか、そのまま暫く目を閉じていた。

「どうだ？　具合は」

「……微々たる箇所に、軽い罅が入っているのを確認しました。治療の余地有りです」

「そうか。来たのが無駄にならなくて良かったよ」

シーラは目を閉じながら後ろの女性に返答した。どうやら、体の症状を見破れる魔法を持っているようだ。

その言葉に、後ろの二人も霧島の側によってきて、それぞれ霧島の左右と頭の上に立った。三人は互いに自らの右手を霧島の上に翳す。

『チェーン・ヒーリング』

直後、三人の掌から青白い光が溢れ出て、霧島を覆った。同時に、彼の体中から疲れが消し飛んでいき、腹部の骨も修復されていく。それを確認出来たのか、シーラが頷き二人に合図した。短い時間の治療が終わり、青白い光の供給が終わりを告げる。

水色髪の女の人が口を開く。

「これでもう、動いてもいい。一人で治療していた場合は回復に時間がかかってしまうが、この方法なら数秒で完治出来るんだ。右手の包帯も外して問題ないぞ」

そう言われ、霧島は起き上がって腹部を撫でてみた。彼にとっては信じがたいことに、蹴られたときの痛みも綺麗さっぱり消えている。

「有難うございました。あの、ところで後輩というのは？」

「キル・ゴッセル。赤い帽子を被った天才君さ。会った事あるだろう？」

「……ああ、はい。赤い帽子は初耳ですが」

キルと初対面したとき、彼はダークスーツを着ていたため、本来の服装は知らないでいた。勿論、それを彼女は知らないので、「あれ？　被ってなかったっけ」と記憶を混乱させる羽目になってしまった。だが、すぐに「まあいいや」で思考を切り、今度はリナに向き合う。

「さて、お譲さんも診るか。シーラ」

その命令を受け、シーラはリナを抱え上げた。驚いたリナは多少声を上げたが、そのままされるがまま、別のベッドの上に寝かされる。そして、再びシーラは魔石魔術を使った。

「……外傷、内傷、共に無し。どうやら、そこまで戦闘の被害は受けなかったようですね」

「そうか。それはそれで何よりだったな。これで二人とも、外に出られるぞ」

「？　外に何かあるんですか？」

霧島の問いかけに、水色髪の女性は「そりゃあ」と何かを言いかけた。だが、そこで再び来客が現れる。青い制服に赤い帽子。キル・

ゴッセルだ。その姿を見て、リナが声を上げる。

「キルさん！　久しぶりね」

「おお、そーだな。随分大きくなったじゃねーか」

「そりゃあ、もう三年になりますから」

まるで親戚同士が行う会話に、霧島はこの二人が本当に知り合いなんだなと認識した。キルはリナとそうして言葉をかわした後、水色髪の女性の方を見て声をかける。

「セイラさん、治していただけましたか？」

「おう。ま、たまには楽しんで来い」

「分かってますよ。霧島、お前もな」

「……えっと、何の話ですか？」

二人の会話内容についていけてない霧島は、その会話に割って入った。それで霧島が何も知らない事を察したのか、キルは顔に笑みを浮かべて言う。

「前夜祭だ！」

第二十六話　力比べやりまショー

アルトレット議事堂前の大通りは、数えきれない数の夜店で賑わっていた。
地球で見るようなものも幾つかあるが、霧島にとって新鮮なのはやはりこちらの世界にしかないお店だろう。

キャタピラの丸焼き。風と水の演劇。この世界にいる魔物を使ってのリアルオバケ屋敷。どれもこれもその人が使用できる魔法や才能を使って人々を楽しませようとしていた。

「んじゃま、適当に回りますか」

「キルさんは、行きたい店とかないんですか？」

「んー、ギルドマスターになってからはもっぱら監視する側だったからなぁ。久しぶりだし、楽しめりゃ何でもいいよ」

霧島の問いに答えながら、普段着に着替えているキルは辺りを見渡した。彼なりの面白いを探しているのだろう。

「リナは特に無しか？」

「見てから決めるわ。本当にお店の数が多くて、どこから回ったものかって感じだけど」

「確かにそれはあるな。まぁ、でも早く行かないと時間過ぎるから、気になったらそこ行こうぜ」

「そうね。……って、あ」

「？　どうした？」

「……あそこ」

リナが指差した方向を見やると、そこには店番をしているアベルがいた。とにかく「いらっしゃい」と叫んでいる。それを見て、霧島は口を開く。

「仕事中、なのか？」

「それにしては何も聞いてないわよ」

リナの言葉に、キルは「あー」と何か言いにくそうに言葉を濁す。

「霧島、触れなくていいぜ。多分またやらかしたんだと思うから」

「やらかした？」

キルの言い草に、霧島は問いを投げたがスルーされた。少し釈然としない風だったが、黙って二人に着いて行く。そこで、別のところから呼び声が聞こえたので、霧島は振り返ってそちらを見た。

「おう、兄ちゃん。キャタピラ焼き食っていかないか？」

「キャタピラ？」

どっかのおじさんの言う事を聞いて、霧島は思わず聞き間違いかと思い聞き返した。だが、「そう、キャタピラ焼き」と、上手い事

疑問に思った部分が念押しされる。そこで、どんなものか気になって屋台の方へ目を向けた。

そこには、二メートル強の芋虫が丸焼きになって展示されていた。

「なっ……」

いきなり目の前に飛び込んできたそれを見て、霧島は意表を突かれた。屋台では、キャタピラと呼ばれるその芋虫を解体して、身の部分を串に刺してから売っている。

「えっと、おいしいんですか？」

「おう、旨いぞ！　食ってみるか？」

「……あー、じゃあ、一切れ？　だけ」

「あいよ！　じゃ、ちょっとまってな」

勢いに押されるように、霧島はそれを買った。渡された物は思ったより小さかったので、食べきれるのかといった意味合いの悩みはなくなった。とはいえ、食べる事には少し抵抗があった。

（芋虫、だよな？　これ）

見た目思ったよりも美味しそうな焼け具合に、牛とか豚とかの方の肉が連想された。そして、買ってしまったのだから食べてみようと、霧島は試しに齧ってみる。

（……あれ？　旨くね？）

すると、案外味は悪くなかった。噛んでみたところの弾力に癖があり、焼き具合も絶妙である。多少鳥肉に似た感じはあるが、鶏肉、虫肉と互いに別ジャンルに加えられないほど近い味ではない。

「おーい、霧島ぁ！　こっち来いよ」

そうして予想外の味を堪能していると、キルから呼び声がかかった。何か面白いものが見つかったのかと思い、足早にそちらへ向かう。

そこには、やけにだだっ広い野外ステージのようなものがあり、看板には『力比べやりまショー』とある。

（……センスねぇなおい）

心の中でそんな感想を抱いていると、席が段々に扇状に並んだ程度の客席から声がした。そちらを見ると、キルとリナが席をとって座っていた。素早くそちらへ向かう。

その途中でステージの方を見やると、やけに図体のでかい筋肉男が、上半身裸のままゴリラみたいに胸板を叩いて大声を上げる事で、力強さをアピールしている。観客もそれに答えるように声を出していた。ステージの隅には“六人抜き達成”と立体表示されていた。あれもおそらく、魔法の類だろう。

「キルさん。これは何ですか？」

「見ての通り、力比べだよ。勝ち抜き戦の、魔法有りのガチバトル。見てる分にはこれほど楽しいのはねぇよ」

「……という事はあの人、六人と連続で戦って元気が余ってるってことですか？」

「そーだな。今までの奴らが弱かっただけかもしれねーが、ここで来る挑戦者なら強者しかいないだろ。次はそれなりにいいものになると思うぜ？」

それを聞きながら、霧島はキルの隣に空いていた席に座った。リナは霧島の反対側で、飲み物を飲みながらステージを見ている。

「キルさんは行かないんですか？」

「馬鹿言うな。俺が行ったら誰も挑戦に来やしねーよ。仮にもギルドマスターだからな」

キルの言葉に、それもそうかと相槌を打ちながらキャタピラの肉片を口に入れた。一方で、ステージの方では対戦者を待っている。司会らしき服装の男が、蝶ネクタイの位置を直してからマイクに手をかけた。

「さあさあ！　観客席の熱気が十分高まったところで、次の対戦者に登場願いましょう！　果たして、このバルハルト・リーツェルン選手に勝てるのか、否か！　いざ参りましょう！　イリリカ・シャマル選手の入場です！」

「……うん？」

司会が選手名を言い終えたところで、キルが反応を示した。それを聞いて、霧島はまさかと口端をピクピクと反応させる。

すると、出てきたのは案の定、金髪ツインテールのあの人だった。

両手に黒いトンファーを持ち、バルハルトと向き合う。

「わー、レイジから聞いてサボってるのは知ってたけど。相変わらず堂々としてんなぁ、あいつ」

「それで済ませていい問題なんですか？　これ」

「え？　何？　二人とも知り合い？」

「知り合いっつーか、仕事仲間っつーか。まぁ、止めても聞かねぇだろうし。今は観客としてゆっくり見よーや」

「結構寛容ですね、キルさん」

リナの質問に歯がゆい感じに答えたキルだったが、表情は楽しそうだった。多分、面白くなりそうだとか思いながら見ているのだろう。霧島も、流石にそれ以上は突っかかる事無くステージの方へ目を向ける。

こうして遠目で見ると、イリリカの体型はスラリとしている。ごついバルハルトと比べたら、その体型は今にもへし折られそうなほど華奢に見えるが、表情はこれ以上ないくらいに生き生きしていた。

そのバルハルトの方は、出てきたのが女でしかも体型が体型だからか、多少参ってる雰囲気だった。どこからどう見ても、自分が負けることを考えてもいないといった仕草だ。

それを見ても、イリリカは全く動じていない。観客からも色々とどよめきの声が聞こえたが、それも気にしていない風だった。司会の声が響く。

「おっとぉ、これは予想外の対戦カードだが、果たしてどんな戦いをしてくれるのか！　どちらにせよ、このタイミングでの登場だ、相当腕に自信があるようです！　期待に胸を膨らませましょう。それでは、勝負開始です！」

直後、地球で良く聞くようなベルの音が鳴った。そこは魔法じゃないのか、と心で突っ込みつつ、霧島はステージから目を離さないようにする。

「なぁ、お譲ちゃん。怪我しねぇ内に帰ったらどうだ？　今なら降参を認めてやってもいいぜ？」

「へぇ、優しいね。でも、それを言うには早いんじゃない？」

それを言い終えるや否や、イリリカの回りに数十の小さな光球が現れた。それらは帯電しており、ステージの上を漂っている。

「おっと、これは……？」

司会が疑問符を浮かべた後、電球が四つ集まりイリリカの手前で正方形を形どった。イリリカはトンファーでその正方形の中央を叩きつつ、命令を与える。

「テトラポッド！」

すると、その叩いた部分から、破裂音と共に電撃が飛び出しバルハルトを襲う。彼は咄嗟に腕を目の前でクロスさせ、ガードの体制をとった。それにより、電撃はバルハルトの腕に命中する。あたった瞬間に乾いた音が鳴り、両腕から薄く煙が出てきたが、すぐに止んだ。そして、バルハルトは姿勢を崩し、こんなものかと軽く笑み

を浮かべると、右拳を振り上げて突っ込んできた。

「三段トリガード！」

続いて、イリリカの言葉が飛ぶ。それにより、三角形の形を作った電球が三セット、中央に薄い膜を張ってイリリカの前に立ちはだかる。

「しゃらくさいわ！」

そして、バルハルトの声と共に拳が繰り出され、イリリカの盾と衝突した。トリガードなるそれは、耐久値でも減っているのか、その瞬間から辺りに放電しだした。多少の電撃はバルハルトにダメージとしていっているはずだが、ダメージを受けている様子は無い。相当にタフなようだ。

イリリカはそれを見て、今度はバルハルトの背後に電球をまわす。十つもの電球が一直線に並ぶと、トリガードが崩れる前にとイリリカは声を上げる。

「デカショット！」

電球の直列配列による電撃の放出。それは先ほどのテトラポッドよりかはそれらしい雷音を上げ、バルハルトを貫いた。流石に今度は効いたようで、拳の威力が弱まり、よろめく。それと同時にトリガードも解除され、イリリカの笑みがバルハルトの視界に入った。

「ぐぅっ……！」

それを見て、バルハルトは一直線に突っ込んでは駄目だと感じた

のか、少し後方に飛び退き、相撲のように右足でステージを踏む。直後、ステージ上に添ってイリリカに向かい一直線にやって来る、風の刃がその衝撃から産まれた。

だが、所詮は地を這う攻撃。イリリカはやってくるタイミングを狙ってジャンプし、次の攻撃を仕掛けようとする。

すると、そこでイリリカは背後の、衝撃波が立てる過ぎ去る筈の音が再び近づいてきている事に気付き振り返った。今度は、その衝撃波が地から飛び上がり、イリリカに向かって急降下してくる。

「うわっ！」

イリリカは紙一重でそれをかわし、その衝撃波の行方を見る。すると、衝撃波は床に当たるとそれを粉砕はせずに着地し、イリリカの方へUターンしてくる。

「エア・シャークだ。こいつから逃げ切れるかどうか、試させて貰うぜ。それもういっちょ！」

再びバルハルトは地を踏み、再び衝撃波を産む。それはまるで生きている鮫のように、イリリカに向かって突進してきた。そして、二匹同時に飛び上がり、空からイリリカを切り裂こうと突っ込んでくる。

それをイリリカは、前転して懐に潜るようにして避けた。そこで電球に命令を与えようとするが、エア・シャークの三匹目が現れたためにそれを避ける方に意識を向ける。

「暴走しないんですね」

その戦いを見て、霧島は一言呟いた。キルは一瞬何の事かと霧島

を見たが、すぐに合点がいったのか答え始める。

「あの魔法も、バルハルトって奴の魔法も自立型だからな。魔法を一度発動すれば意識を向けなくても、その後で口で命令を与えるだけで勝手に動いてくれるんだよ」

「魔法にタイプがあるんですか？」

「あるぜ。ま、詳しい事は明日辺り教えてやるよ」

キルはそう言って、再び観戦に没頭し始める。霧島もそれに習うように見やると、イリリカがエアシャークの合間を縫ってバルハルトに突っ込んで行くところだった。

「ッハ、面白い。やろうってのか」

その動作を見て、バルハルトが両拳を構える。イリリカもまた、トンファーを握りなおして走っていく。そして、イリリカがバルハルトの間合いに入ると、早速ごつい右腕が動き始めた。イリリカを狙って真っ直ぐに飛んでくる。

イリリカはそれを飛んでかわし、右腕の上に着地した。バルハルトが驚く間を与えぬまま、その上を走る。彼はすぐに右腕を動かし払おうとするが、それを狙ってイリリカは更に高いところへ飛び上がった。直後、彼女はバルハルトの頭上で一回転しつつ、逆さの状態でトンファーを後頭部に叩き込む。

その衝撃にバルハルトが参って目を閉じる。そして、目を開けてイリリカの方へ振り向こうとすると、そこでこちらに向かってくる三つのエアシャークが視界に入った。バルハルトは咄嗟に避けよう

と体を動かす。

「モノバレット、脚部集中！」

そのタイミングを計り、イリリカは全ての電球に命令を与えた。数十ある電球から、弱い電磁波が一斉にバルハルトの両足に向けて放たれる。それにより、バルハルトの足が痺れ、動けなくなる。

「ヒッ……！」

流石に表情から強がっている感じが消えた。それに構う事無く、エアシャークがバルハルトに構わず、その後ろにいるイリリカに向かうべくかかってきた。不幸な事に体型の差がきいて、飛び上がったエアシャークはそのままバルハルトの胸板へ突進してくる。

そして、エアシャークがバルハルトの分厚い筋肉を切り裂いた。雄たけびに勘違い出来るほど、盛大な悲鳴を上げ、エアシャークの犠牲になる。血飛沫が出ていないということは、別段斬れると言うわけではないらしい。

それでも相当なダメージにはなったようで、バルハルトはそのまま白目を向いて気絶した。三匹のエアシャークも、ノナの供給が止まったからか風のように消えていった。そこで司会がバルハルトの側により、気絶を確認した瞬間、高らかに声を上げる。

「破ったあああ！　イリリカ選手、六連勝を誇ったバルハルト選手を見事撃墜！　魔法の特徴とその身軽さを生かした戦いで、パーフェクトな勝利を上げましたあああ！」

一刹那、観客席から勝利を祝う盛大な声援が飛んだ。あまりのう

るささに耳を塞ぎたくなるほどだが、イリリカは両手を上げて、笑顔でそれに答える。

「凄い……」

その戦闘を見て、霧島は一言呟いた。リナも同じ感想を持っていたようで、観客に混じって名前を叫んでいた。キルはキルで、座ったままだが拍手を送っている。

そこでイリリカは何かに気付いたのか、少し目を見開いた。かと思うと、不意に司会に声をかける。

「ねぇ、司会さん。次の相手なんだけど、観客から指定してもいい？」

「は？　え、ええまぁ、相手がお受けすれば可能ですが……誰か戦いたい方が？」

「勿論！」

そこで、イリリカは観客席のある席に向かって指を指す。

「そこの、赤い帽子の人よ」

「――！」

「……へぇ」

イリリカが出した宣言に、観客は一斉にどよめきキルの方を見た。どうやら、赤い帽子がキルの代名詞にでもなっているようで、キルを見てから驚いた風ではなかった。今のを聞いたキルは、不敵に口

元を歪ませ、イリリカの方を見た。

それから、観客席はキルの方を見たまま静まり返る。全員、何故ギルドマスターがここにいるのか、といった感じではなく、返答の方を気にしている感じだった。しばしの静寂の後、その期待に満ちた視線を一つ身に受け、キルは立ち上がって口を開く。

「いいぜ。その勝負、乗った」

瞬間、客席が一気に沸いた。

第二十七話　第三者の視点から

「これはなんということでしょうか！　イリリカ選手が指定したのはあの北方のギルドマスター、キル・ゴッセル氏です！　一体どのように戦いが展開するのか、期待して見守りましょう！」

その司会のナレーションの最中に、キルは座席からステージに移動していた。高まる歓声を背に、ゆっくりと、堂々と定位置に歩み寄る。

「さてと、やるからには勝たせて貰うぜ。イリリカ」

「望むところ！　今日は絶対勝つ！」

イリリカはトンファーを握り、キルは素手のままでイリリカと向かい合った。その二人の状態を見ながら、リナが口を開く。

「イリリカさんって、キルさんのギルドの人なんだよね？　普段もあんな感じなのかな」

「あぁ、あんな感じに破天荒だと思う」

その言葉を霧島は適当に拾い、ステージの様子に気を向けた。すると、もはや言う事なしと言う風に、早速司会が試合開始のセリフを言った。同時にベルが鳴る。

「ペンタバインド！」

直後、イリリカの言葉と同時に、電球が互いに電流の糸を伸ばし

五角形を作った。それはイリリカの手前で作られ、そのままキルに、フリスビーのように向かってくる。が、キルは素早く地を蹴り、屈みつつ走る事でそれを潜った。そしてイリリカの方へ駆けつつ顔を上げると、その目の前には十つに連なる電球が待ち構えていた。

「デカショット！」

来る雷撃。キルは無理矢理体を右に捻りそれも避けた。そのまま床の上を二回転がり、足と手を床についてバネにすることで軽く飛び上がる。キルはその後、着地と同時に右腕に火球を作り出しイリリカに放った。イリリカはそれの軌道上に電球を集め、その火球にぶつけ自爆させる。多少、黒煙が舞った。

キルはそれに構わず、煙の中に走って突っ込んで行きつつ拳を作り、イリリカの腹部を殴らんとする。火球を無闇に撃たないのは、打撃の方が力の加減がしやすいからだ。

黒煙の中を潜っての奇襲になるが、イリリカは突然現れたキルの拳にも慌てる事無く、左のトンファーを合わせ受け止めた。すかさず、右のトンファーを持ち手を軸に横回転させ、キルの胸部に叩き込もうとする。

その動きを見つつ、キルは左腕で横から来るトンファーを受け止めた。普通なら激痛を伴うはずの打撃だが、その袖口からは、手首より下に巻かれてある籠手が覗いていた。プライベートでも、緊急時に対して軽めの装備はしているらしい。それを見て、今度は左のトンファーを縦回転させキルの顎を狙う。すると今度は、そのトンファーが顎に当たる直前に、右手でそれを掴んできた。

「なっ――！」

その無謀な行動にイリリカは驚きの声を上げたが、立て続けすぐに悲鳴を出した。今度はキルが、イリリカの腹部に蹴りを喰らわせたのだ。図らずとも、イリリカがそれで後退したため、互いに距離を置く形となる。

「どーした。遠慮なんていらねーぞ？」

「遠慮してるつもりは、ない！」

キルの挑発にイリリカは言葉で返し、次は魔法で攻撃しようと口を開く。それに伴い、既にイリリカの目前には、電球同士が電流で互いを繋ぐ事で形作られた正方形が四つ並んでいた。

「テトラポッド、四重層！」

続いてその正方形の中央をトンファーで殴る事で、威力が掛け算された電撃がキルに向かって放たれる。キルは即座に左手を突き出しシールドを作りそれを受け止めた。だが、すぐにシールドに罅が入ったのが見えたので、受け切れない事を早急に悟った。直後、電撃がシールドをぶち破りキルに襲い掛かる。

キルは咄嗟に、左腕の籠手を盾にするようにして電撃を受けた。シールドである程度は威力が落ちていたので、大したダメージにはならなかったが、袖が焼けて籠手の存在が露わになった。そうして攻撃が通った事により、イリリカは少し笑みを浮かべる。対して、キルはすぐに指を鳴らし、イリリカの背後で爆発を起こした。

「――ッ！」

流石にその急すぎる攻撃には対応出来ず、イリリカはその爆風に

少し吹っ飛ばされた。キルは続いて、再び右拳を握り締める。連撃を喰らうわけにはいかないと感じたのか、その迫ってくる拳が来る前に、何とか足を地面につけキルの右に回った。

そして、隙の出来た右側にトンファーを叩き込むべく、イリリカはキルに突っ込んで行く。それを横目で見たキルは、自分とイリリカの間に火球を出現させ、すぐに爆発させた。イリリカは怯んだが、煙を払うようにトンファーを振り、キルがいたであろう位置にも振りかかる。

だが、今の爆発の隙にキルはその場から移動していた。巻き上がる黒煙の中、イリリカがキルの存在に気づいたときには、既に真横を取られていた。

直後、キルがイリリカの脇腹を蹴りつけた。イリリカは息を吐くような悲鳴を上げ吹っ飛び、倒れ、手からトンファーを離してしまう。

そして、顔を痛みに歪ませながら立ち上がろうとしたが、キルの方を向いたところで目の前に火球が出現したのを視認した。

「あ……」

「その状態なら、もうこいつの爆発はかわせねぇだろ？」

勝ち誇ったキルの声。立っていた状態ならば、後ろに飛ぶか屈むかすれば避ける事は出来ただろうが、今の彼女の状態は寝そべっているそれと変わらなかった。目の前の火球が爆発したとして、電球を盾にするにも、動くのも間に合わない。

それを悟ったイリリカは、目を瞑って息を吐き、起きかけていた

体を再び床につけ寝転がってから声を出した。

「あーあ……また負けた」

◆

それから、イリリカとキルはショーから降りて、霧島やリナと夜店巡りをすることになった。一旦キルはイリリカを仕事に戻そうとしたが、「シフト時間じゃないから大丈夫さ！」と言い切られてしまった。

「と言うか、キリっちとリナっちもいたんだねー。人が多すぎて気付かなかったよ」

「一応、キルさんの隣にいたんですけどね」

「それだったら尚更ね。私、赤い帽子だけ見て、キルっちって決めかかって勝負挑んだんだもん」

要するに、周りが見えなかったと言いたいらしい。そう思った霧島は、そこで一旦会話を切り辺りを見渡す。

すると、霧島の目がある一点に止まった。目線の先には、何やら揉め合っている雰囲気のグループがある。

（……）

「？　どうしたよ、霧島」

立ち止まってひとつの方向ばかり見ていたせいか、不思議に思ったキルが声をかけてきた。続いて、リナとイリリカもやってきて、霧島の目線を追う。そして、キルが口を開く。

「あぁ、揉め事か。どうすっかな、近くに誰かいたらそいつに……」

「俺が行きますよ」

「え？」

キルが首を回して、軽くエラルドかギルドメンバーを探していると、霧島がそう言った。それからキルが静止をかけたが、「辺りに誰もいないようですから、行かないと手遅れになりますよ」とあしらわれてしまった。三人はその様子を見て、仕方なしという風に霧島に着いていく。

「あの、何かありましたか？」

霧島はいがみ合いをしている三人の男の側に行くと、早速そう声をかけた。見たところ、一人客が二人の店員に抗議しているようだった。一瞬、三人は霧島を見て怪訝そうな顔をしたが、客の方が今の一声に乗っかり、味方につけようと説明を始めた。

「なぁ、聞いてくれよ坊主。こいつ等、店のアトラクションでズルをしやがったんだ」

「ズル？」

そして、その客の言い草に今度は店員が反応する。

「おいおい、言いがかりはよせよ。つか、赤の他人まで巻きこんでんじゃねぇ。迷惑だろうが。なぁ？」

立場上なのか、因縁をつけられた側は正論を言って霧島をこの場から退けようとしてきた。が、自分から首を突っ込む予定だった霧島はその言葉に反し、客の方に話しかける。

「ちなみに、どんなお店なんですか？　ここは」

「なぁに、内容自体はしけたもんだよ。輪投げだ」

そう言われて霧島が店の中を見てみると、確かに、見た目は普通の輪投げだった。床に置かれた木の板の上に、三×三で棒が設置されており、真ん中が百点と、一番奥が五十点、中央の残り二つが三十点、一番手前が十点。「お子様はここから投げてください」の線までつけられている。どこにも細工が出来そうなところは見当たらない。

だが、それは霧島の世界での話だ。一見仕掛けがなさそうでも、この世界ではいくらでも、どうとも出来てしまう。故に、霧島はまず、客の言うようにイカサマがあるのかどうか、という所から確認してみることにした。

「あの、すみません。やってみてもいいですか？」

その霧島の台詞を聞いて、店員はうっとうしそうな顔を浮かべた。やらせない気なのだろう。だが、そこでキルが割って入る。

「すみませんねー。こいつに輪投げ、やらせて貰ってもいいですか？」

「――ッ！？」

瞬間、店員の二人は盛大に目を見開き息を呑んだ。ギルドマスターがこんなところにいるのだ、もしイカサマをしているようなら、二人はここで怪しまれる可能性のある選択を取れなくなった。つまり、霧島に輪投げをやらせるしかないようになってしまった。

「え、ええ。勿論ですとも。そりゃあ、やっていって下さい……」

店員はすっかり弱気になり、霧島に輪を五つ渡して、そそくさと隅っこに逃げていく。明らかな怪しさを漂わせた動作に、霧島は勿論、キルも二人を怪しみだした。そこで、キルが一言耳打ちする。

「見たところ、この板と輪には魔法の痕跡がない。イカサマをやっているとしても、やってみない事にはどんなのか分からん」

霧島はそれを聞いて頷き、早速一つ目を投げてみた。すると、上手い事百点の棒に輪が引っかかる。

「おー、何だキリっち。上手いじゃん。輪投げプロ？」

「違いますよ。たまたまです」

そう言いながら、霧島は今度は五十点めがけて輪を投げた。すると、そこで霧島から見て違和感を感じれる事態が起こった。輪の高度が少しだけ下がったのだ。

（……？）

それはほんの少しの違いだったので、実際に投げた霧島ですら、「あれ？」としか思えない違いだったが、確かに高度が変わったのだ。だが、霧島が投げた輪は、結局のところギリギリで五十に届いた。

（気のせい、か？）

六人の人が見つめる中、霧島は三つ目を投げる。今度は、一つ目と同じ力加減で百点を狙ったようだ。本人にも、これは確実だと手ごたえのある一投だ。

だが、そこで大きな変化が起きる。確実に、少し大きく高度が変化したのだ。それを見て、霧島は大きく目を見開く。そして、案の定と言うべきか、霧島の狙いは外れ、百点と十点の間に輪が落ちた。

これで、霧島の中ではあの二人がイカサマをしているという事がはっきりした。だが、キルの言葉によれば、板と輪自体に魔法の痕跡はないと言う。

（何か、別の要因があるのか？）

そう思いながら、霧島は残り二つの輪を見やる。この輪自体は使い古されているのか、塗装が少し剥げていた。

（……あれ？　これは……――）

そこで、何か考え付いたのか、霧島は少し思索を始める。

（……板と輪には魔法の痕跡がないなら、あってるかもしれないな）

霧島は少しして、意を決したように百点を狙いに行く。すると、やはりというべきか、高度が下がった。今度は機を張っていなければ、気付けるかどうかという、絶妙な変化具合だった。点は、十点。

続いて、間を空けずに最後の輪を投げた。直後、輪が板の上を通った辺りで、霧島は自分の魔法を発動させる。すると、輪は垂直に急降下し、板に張り付くように落ちた。それを見るなり、各々が表情に反応を示す。

「霧島、今魔法を使ったみたいだが、何したんだ?」

「魔法を強化したんですよ。その板の下にいるどっかの誰かさんの魔法を」

「っな……!」

今の霧島の台詞を聞いて、客と店員、リナとイリリカが驚きの声を上げ、キルは素早く板の側に駆け寄りそれを持ち上げる。すると、そこには急な事で驚いている男と、少し大きめの磁石があった。霧島の説明が続く。

「さっき輪を見た時、塗装が剥がれていたのを見て、そこから覗いているのが鉄っぽかったんですよね。ついでに言えば、塗装に更に薄い木を張ってカムフラージュしてたみたいですけど、それも剥がれてました。

加えて、今までの高度の変化が下がるのみだったのも考えてみると。それに鉄に限って作用する魔法という条件が追加される訳ですから、それで一番最初に頭に浮かんだ、『磁力を強化する魔法』というのを、さっき強化したんです。他にも、鉄にだけ作用する重力

魔法かなとも考えましたが、どうやら、いきなり当たったようですね。

磁力で輪を一定の場所に引き寄せたり、高度を落としたりして、得点を狙えなくしてたんでしょう」

その説明を聞いて、店員だった二人組はあんぐりと口を開けていた。まさか、こんな形で見破られるとは思ってもいなかったのだろう。

「いやー、やっぱり凄いなお前は。あっという間だったじゃねーか」

説明を終えたところで、潜っていた一人を連れたキルがやってきた。口元がニヤついている。

「俺はこいつらを連れて行くからよ。とりあえず、お前は景品でも貰って、夜店を楽しめ」

「景品、ですか？」

「おう、向こうに並んでるだろ？　じゃ、俺は行くぜ」

言うだけ言って、キルはテレポートコインを使って去って行った。霧島はそうしてキルが帰っていくのを見送ると、先ほど彼が指差した方を見やる。そこには、得点表と色々な種類の人形が丁寧に並べられていた。ストラップ、キーホルダーとして加工されているものもあれば、普通なもののややけにでかい代物もある。満点のところには、予想通りというべきか、高そうなものが別の物が並んでいた。

（……別に欲しくないんだがな）

霧島はその人形の並びを一通り見やってから、リナとイリリカの方に戻ろうと方向転換した。

「あれ？　貰わないの？」

「ああ。人形には興味ないしな」

「……そう」

そのタイミングでのリナの言葉を、霧島は適当にあしらうが、その後の残念そうな溜め息を聞いて足をピタリと止めた。ふとリナの顔色を見やり、何を思ったのか、霧島は仕方なしという風に人形のところに戻っていく。そして、虎を象ったキーホルダー用の大きさの、柔らかそうな生地が使われた人形を手に取り、リナに渡した。

「え？」

「やるよ、それ。勝手に虎が好きなのかなーって思っての選択だけど、いいか？」

急な事にきょとんとしたリナだったが、すぐに正気に戻ってお礼を言う。

「う、うん！　有難う」

「そか。んじゃ、行くぞ」

それを終えると、霧島は特に何かを気にする事無く、夜店を回るべく歩き始めた。リナとイリリカも、少し遅れてそれに続く。その最中、人形を見つめていたリナの顔にほのかに赤みがかかったのを、

イリリカは横目で目撃していた。

第二十八話　明日待ち

キルがテレポートした先は、夜営警備を担当する警備員が待機しているテント場だ。彼はそこで知った顔を見つけてから声をかける。

「おう、ノルド。目に入った馬鹿共連れて来たぞ」

「馬鹿共？」

「しょーもないイカサマ師さ。霧島の手柄だ」

後でキル自身が彼らに聞いた話では、今までも何回か同じ事をやっていたらしい。景品には何かと人が食いつきそうなのを置いて、ある程度は配って、ある程度の人にはゼロ点に追いやって配らず、最終的に利益が出るよう調整しながら根気よく続けていたようだ。怪しまれても、魔法の痕跡が表面に出てないと告げて逃げてきたのだろう。完全に努力の方向を間違えている。

キルのその言葉を聞いて、ノルドは合点がいったという風に声を上げる。

「ああ、それなら向こうに待機しているブラッドのところに持って行けば、転送してくれる手筈になっているんだ。そこに置いといてくれたら、レイジと僕で運ぶから、キルは戻っていいよ」

「そうか。ま、今を狙って霧島に襲い掛かってくる奴がいないとも限らんから、甘えさせて貰うぜ」

ノルドの言葉に返答しながら、キルは三人をテントに置いて、そこらへんを歩いていた他人に見張りを任せて戻って行こうとする。すると、そこでノルドが呼び止める。

「ねぇ、キル。彼はどんな人なんだい？」

「ん？　霧島の事か？　何でまた」

霧島の疑問に、ノルドは説明口調で続ける。

「見ず知らずの世界に来て、普通は不安で何もしなさそうなのに、今みたいに色々やってるからさ。少しどんな人か気になったんだ」

その言葉を聞いて、キルは「成る程ね」と返した。そして、少し考えるそぶりを見せてから口を開く。

「そうだな。普通に話している分には、頭はそれなりで、性格は良く言えばクールっていったところだな。ただ」

「ただ？」

キルの区切りに、ノルドは先を促すように声を出した。そして、一拍置いてから話を続ける。

「ある一つの物事に対してだけ嫌悪感を覚えるっていう特性を持っている。それが影響してか、嫌悪感を抱ける対象、もしくはその対象と近い事をしている奴らを懲らしめているような奴だ。結果、悪に嫌悪感を抱くっていう風に気持ちを持つ事になったんだろうな。それ以外はごく普通の人間とそう変わらないよ」

「ふぅん、面白い人だね」

「他人はたいがい面白いぞ。お前も仕事ばかりしてないで、たまには外に目を向けたらどうだ？」

「そうしたいのはやまやまなんだけど、仕事以外にもやる事があるから抜けられないんだよ。研究とかでね」

その言葉にキルは「ああ」と思い出したように言う。

「ノナ魔法についてのやつか？　随分熱心だな」

「まあ、生きがいみたいなものだから」

ノルドはある研究施設でノナについての解析をしている。もっと有意義な使い道がないか、人によって発現する魔法は持ち主の人体に何かしらデメリットを与えないか、といったもの等だ。

「なら、この仕事が終わったら一旦研究所に戻るのか？」

「そうだね。出来れば、行かせてくれると助かるよ」

キルの記憶が確かなら、ノルドはここ三週間ほど研究所を休んでいた。干渉のせいで研究所にいた研究者が大勢頭痛に悩まされ、暫くまともな研究が出来なくなっていたからだ。だが、そろそろ回復も済んだ事だろう。そう考え、キルはノルドの言葉に頷いた。

「分かった。後でレイジにも言っておけよ？　じゃあな」

「うん。また」

それを最後に、キルはテレポートコインで先程の場所に戻った。見届けた後、ノルドは机にあった水晶に反応があったのを見て応答する。

「はい、こちら警備本部ですが――」

◆

「すみませーん。傷薬ありますか？」

道具屋の中に、霧島の声が響く。すると、少ししてエイラの返事が聞こえた。前夜祭中でも営業はしているようだが、客足はやはりそちらにとられているようで、店内はがらんとしている。

霧島は返事が聞こえたところで中に入り、真っ直ぐカウンターの方へ向かった。昨日と変わらぬ位置に、彼女はいた。

「傷薬ならそこだけど……貴方、今怪我なんてしてるの？」

「俺じゃなくて、リナが転びまして」

「あらまあ」

別段感心を引くこともなく、「そう、大変ね」と棒読みで言われたような感じの返事だった。当然、そこで会話は切れたので霧島はさっさと傷薬をとってカウンターへ行く。すると、そこでエイラが

口を開いた。

「待ちなさい、霧島君。ついでに何か買って行きなさいな」

「え」

何故、と霧島は問おうとしたが、先読みされたようで間髪入れず口を開けてくる。

「二日間のお買い上げ。リナが魔獣を一体、アベルが剣の研ぎ石を一つ、ブラッドが槍を引き取って、ついでに自分用の傷薬を複数。貴方だけ、何も買ってない。だから買いなさい」

霧島はその言葉に訳が分からないといった感じで、小さく反論する。

「傷薬とカードは？」

「カードはあの槍が勝手にやったこと。何よりタダ譲りでしょう？傷薬も、リナのもので貴方のものじゃないわ」

「……ちなみに、何でそんなに買わせようとするんですか？」

「買わないと、外に出さない」

「返事になってませんけど」

霧島は理不尽な押し通し異議を唱えるが、エイラはそのまま黙り込んでしまった。理由は分からないが、何か買うまで意地でも帰らないらしい。

（……まあ、欲しいものがないわけでもないが）

一先ず、というふうに霧島は陳列棚とにらめっこを始めた。相変わらず、品揃えの基準が読めない。

少しの間、霧島は財布の中身を確認しながら見て回り、幾つかの物を持ってカウンターにやってきた。

「……あら。随分持ってきたのね」

「何がいるかを考えてたら、案外ありまして」

テーブルの上にのせられたのは、魔具が二つと余分な傷薬が幾つか。そして、革製のグローブだった。グローブは指先から上が覆われておらず、キルが持っていた篭手のように手首から少し下までを保護する形になっていた。肉弾戦用のアイテムだろう。

続いて、一つ目の魔具はポーチだった。小さめで、破れず燃えずふやけず、中にある物に衝撃がいかないといった、防御面に様々な魔法が施された一品だ。

二つ目は、短剣のようだ。刃には切れ味を保持する魔法が、唾には衝撃を吸収する魔法が施されている。どれも、普通に買うなら非常に高い。

だが、今の霧島からすれば苦しい出費というほどでは無かった。財布からキャッシュで支払い、その場を後にしようとするが、そこで思い出したように声をかける。

「そう言えば、カリバーってブラッドさんの武器だったんですか？」

「ええ。ちょっとした事で少しの間私の所に置いておいたけど、あれは彼の武器よ」

「ちょっとした事？」

「口喧嘩よ。いつもの事だけど、あの二人、気があわずに喧嘩してはブラッドがここにカリバーを置いていくの」

「それで仕事は大丈夫なんですか？　彼」

「代わりの武器として鉄棒も持っているらしいわ。でも、彼はカリバーを持った方が強いわね」

「ですよね」

しょーもない事で手放すんだなあ、と思いつつ霧島はあの二人が喧嘩しているところを想像してみた。すると、これが意外と鮮明に想像出来てしまった。フィーラーと戦った時もごたごたしながら戦っていたなと、同時に思い出した。

「ところで。さっき引き止めといてなんだけど、リナの所に戻らなくてもいいのかしら？」

「ああ、そうですね。と言うか、引き止めた理由は教えて貰えないんですか？」

「状況で察しなさい」

「……はぁ」

きっぱりと、それだけの返答が帰ってきた。霧島はひとまず少し考えてから、合点がいったのか「ああ」と声を出す。

「もう少しいましょうか？」

「いいわよ。これ以上引き止めるのも悪いわ」

「そうですか。まあ、機会があればまた来ますね」

「財布は持ってきなさいよ」

「分かってますよ。それじゃ」

そうして、霧島は一人寂しく店番しているエイラに別れを告げ、少し遅れたがリナのところに早足で駆けて行った。

◆

ネイヴは足を休ませていた。一応エイリーンに治癒魔法はかけて貰っていたが、やはり回復には少し時間がかかる。

「無様だなぁおい。油断しすぎだぜ」

「うるさいなー。まぁ、確かに霧島を甘く見てたのは失敗だったね」

フィーラーのからかいに、ネイヴは取り繕う事無く汚点を言った。事実、あそこで霧島から目を離していなければこんな傷を追うことはなかっただろう。

「それより、明日は君があのドラゴンの首を斬るんだから。ちゃんとハサミ磨いでおいてよ？」

「分かってらぁよ。ところで、あいつは何て言ってたんだ？」

「くれぐれも失敗はするな、だってさ。まぁ、仮に失敗してもあいつなら上手くやるんじゃないの？　最終目的だけでも上手くやれればいいよ」

「……なんだ。えらく弱気じゃねぇか。あのガキにびびってんのか？」

ネイヴの投げやりな態度に、フィーラーが少し突っかかった。これもまたネイヴは否定せず、「まーねー」と肯定する。

「ま、とりあえず明日をゆっくり待とうよ。時間はたっぷりあるんだからさ」

続いてそう言って、ネイヴはソファに寝転がった。フィーラーも突っかかろうとはせずに立ち上がり、壁に立てかけてあるハサミを持って外に出る。

そして扉が閉まる音がした後、ネイヴは本を開いて明日の運勢を見やり、結果を鼻で笑った。

（全く……これ、何故か当たるからなぁ。今日も控えめに生きずに堂々としちゃったせいでこんな怪我負うはめになっちゃったし）

まるで運命に翻弄されているような人生に、思わず自分の運命を呪いそうになった。それから暫くは本の中身を見ていたが、やがてそれを閉じて眠りに着く。

（さて……明日はどう動こうかな？）

第二十九話　魔法

あれから、適度に夜店を見て回り、霧島達はアルトレットに帰還。十分な睡眠を取った上での起床を迎えた。

霧島は今、キルに誘われてアルトレット議事堂の庭の一カ所にいる。他のエリアには花壇、噴水、草のアーチから迷路みたいな花園など色々あるが、ここは草以外なのかを何もないところだった。そこに、キルや霧島の他、リナやアベル、そしてイリリカとウォレクがいた。

「さて、昨日はお疲れさんだったな。だが、生憎今日もしっかり働いて貰うぜ。いいな？」

「はい！」

キルの言葉に、霧島とリナが返事をした。その様子にキルは満足げに頷く。

「よし、じゃあまずは鎧の説明からいくか」

「あの、魔弾を消し去ったやつですか？」

「そうだ。まず説明すると、鎧っていうのはノナの操作をするだけで出せる――つまり、魔弾やシールドみたいに、基本は全員使えるものだ。まあ、得手不得手は個人差であるだろうが、そういうことにしておいてくれ。

んじゃ、効果についてだが。この鎧っていうのは外と中、二種のタイプがある。外に張る鎧は弱い魔法を防ぐため。内に張る鎧は筋力を上げるためと、用途が別れる。普通なら両方共使えるが、外から内、内から外へときり替えをする場合、三秒の時間がいる。と言っても、その切り替えの時に特に動作はいらないからな。奴らがどっちを張っているかは分からんから、そこはちゃんと隙を見つける必要がある」

そこまで言ったところで、霧島から質問が飛んだ。

「それ、教えてはくれないんですか？」

「俺は教えてもいいんだがな。これ以上の情報漏洩は許さんって頭の固いお人がいるんだよ。悪いな」

「いえ、そういうことなら。後、それによる強化には基準とかないんですか？」

「そいつの修練量や、ノナとの相性次第だよ。正直、あいつらがどれくらいやってくるか読めないから、鎧の強さは分からないんだ」

「そう、ですか」

それを聞いて、霧島は昨日以降の事を思い出した。ネイヴは鎧を使ってなさそうだったが、霧島をいたぶるとき使っていた可能性はあった。フィーラーに関しては、一目瞭然だ。昨日ブラッドの魔弾を打ち消したことから推測出来る。

キルの言葉が続く。

「まあ、弱い攻撃なら受けられるかもしれんが、ある程度威力があればなんでも通るはずだ。そう気を張らないで対処してくれていいぜ」

そのキルの言葉に、霧島は少し安心した。炎を掻き消されるようなら、いざ戦おうとなった時に、武器が短剣のみになってしまうからだ。しかも、その相手の攻撃が遠距離専門だった場合、目も当てられない事態になる。

「さて、鎧についてはそんなところだ。何か他にあるか？」

「私は特にないけど。霧島君は？」

リナに話を振られ、少し考える素振りを見せると、付け足すように口を開く。

「何で、鎧が限定的な人しか使えないのか、聞かせて下さい」

「ああ、そうだな。それを忘れていた」

「え――！？」

「？　どうした、イリリカ」

「キルっちが忘れるなんて……さては、別人！？」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

明らかに人として見られていない様子に、キルは思わず、というふうに聞きに行く。が、そこでイリリカが考えこんでしまった。ど

うやら、彼女の中でキルの立ち位置は無意識の内に人としての枠を越えていたようだ。

（ベルンの時に見せて貰った技と、それに対するベルンの反応からしたら、普段のこの人は他人から結構恐れられているのかもな）

そのやり取りを見て、霧島はなんとなくそう思った。アベルやリナなど、好き好んで近い位置にいる人も一応いるようだが。

キルはそのイリリカの反応に溜息をつきながら、解説の続きに戻る。

「で、えーとだな。正確には、鎧は普通だと使えないんだ」

「？　どういうことですか？」

さっきと言っていることが違うではないか、と霧島は疑問を浮かべた。すると、キルはポケットから一つ、グミのようなものを取り出す。

「要するに。こいつを口に入れれば誰でも使えるが、そうしなければ使えないってことだよ」

「それは？」

「鎧を発現させることの出来る食べ物だ。ノナ魔法について研究している機関があってな、そこで作られている。魔石の亜種と言ってもいい。問題は、これを知っている者が限られた者しかいないのに、ネイヴやフィーラーが鎧を使っているという点なんだ」

「成る程。ネイヴやフィーラーが鎧を使えるということは、その魔

石の存在を知っている、上層部と繋がりを持っているということになりますからね」

キルの言葉を、霧島は口に出して整理した。確かに、理屈としては通っている。そこで、リナが付け足すように口を開く。

「ねぇ、上層部って言ってるけど、普通にその研究所も怪しいんじゃ……」

「その通り。だから、一つ手を打っておいた」

「え？」

続いたキルの言葉に聞き返すと、彼は口元に笑みを浮かべる。

「ノルドが一旦帰るらしかったからな。レイジとローラについて行って貰って、少し探りを入れてくるよう、今朝がた頼んだんだ。多分、もう着いているだろう」

「あれ。そんなの聞いてないよ」

「誰もお前を行かせるとは言ってないぞ、イリリカ。というより、お前とマリヤはこっちでネイヴ達を倒す手伝いをしてもらうつもりだから、声をかけていないってだけの話だ」

「お、そっちのがいいね。研究所行くよりかはずっと」

イリリカはキルの提案に気に入った様子で、一目で機嫌の良さが伺える笑みを浮かべた。それで会話が切れたかと思うと、キルは話す対象を霧島に戻す。

「で、次は魔法についてもうちょっと込み入った説明をする約束だったな。タイプは大まかに分けて三つだ。操作系、自立系、スイッチ系だ。

操作系はいわずもがな、お前やリナが使っている、想像を魔法に変えるってやつだ。この時集中を切らせようものならダメージを負う。まあ、大きな魔法じゃなかったら軽い頭痛で済むさ。

次に、自立系。これはイリリカが使った魔法がそうだ。一度出現させる事が出来れば、後は命令したり、状況に応じて頭で動きを描くことで自由自在。ちなみに、頭で動きを描いている時以外、口で命令したりするだけなら魔法を使っている人間は暴走に悩まされる事がないんだ。

次にスイッチ系だが、これはネイヴの魔法だな。特定の言葉を発する、動きをする、手ぶらでいるなど、そうする事で発動する魔法の事をスイッチ系というんだ。これはそもそも、動作をした後は打ちっぱなしだからな、間違っても暴走なんてものは起きない。が、その代わり限定条件が厳しいんだよ」

「ということは、ネイヴさんの魔法にはまだ限定条件があるんですか？」

「あるだろうな。上手く隠してるみたいだが、確実に二つ以上はある。諺でなければならないのと、後一つは必ずだ」

その言葉に、昨日の戦いを出来る限り記憶の中から引っ張りだそうとした。だが、鮮明と呼べるほどに覚えてはいないのか、そのまま思考に迷い込む。

「ま、そう焦るなよ。ネイヴは最悪、俺が相手すればいい」

「？　何でですか？」

「相性ってやつだよ。ネイヴは言わないと魔法が使えないんだろ？　一秒足らずで直接爆風を食らわす事が出来る俺に、奴が勝てる道理はない」

キルは自信満々にそう言い切り、霧島の思考を辞めさせようとした。自分が勝てないと分かっている状況での助け船を断るほど、頭の固い人ではないと思っての言葉だった。だが、霧島はその言葉に喰らいついてくる。

「それはそうかもしれません。けど、俺のところにネイヴが来た場合は、俺が倒します」

「……あれ。ひょっとして、スイッチ入ってる感じか？」

「はい。思い出すだけでもう嫌ですね」

きっぱりと断言されてしまい、キルは「そうか」と一言。こうなったら止めても止まらないだろうと考えつつも、何か言わなければと思った。

「……正直、不安だが。無茶はするなよ？」

「はい。分かっています」

その「分かっています」がどの程度のもものかと不安になったが、

ひとまずキルはそこで会話を区切った。無理矢理今の事を思考から振り払い、ウォレクに言葉を投げる。

「ウォレク。お前、ブラッドから警備配置図貰ってたよな？　見せてくれ」

ウォレクはそれに頷き、平らな岩を見つけてそこに広げた。地図上にはノーレの全体図が描かれていて、南側に×印が幾つかある。次いでの数枚に、細かいところの詳細が書かれているようだったが、霧島やリナには関係性が薄そうな内容だった。

一通り、キルは目を通す。

「ふぅん。めぼしい所に置かれている兵の数が半端じゃないな。これをどうやって抜けるのか疑問だが……ひとまず、霧島には時計塔に行って貰いたい」

「時計塔、ですか？」

「ああ。ドラゴンが南方に飛行して、二番目にぶち当たる場所でな。その癖、このルートにある建物で一番高いんだ。簡単に言えば、ドラゴンと建物の高低差が一番短いところだから、ここに現れる可能性が高いんだよ」

「別の建物、ということはないんですか？」

「勿論、その可能性もある。だからこそ、お前にはそこから、テレポートコインでいつでも跳べるように待機していて欲しい。まあ、俺もリナもいるつもりだから、その時その時で考えよう。次いで、アベルはドラゴンが一番最初にあたるビルに待機してくれ。やる事

は分かってるよな？」

「ああ、問題は無い」

そのアベルの言葉を聞いて、キルは地図を持って顔を上げた。

「よし、現場で打ち合わせとかしなきゃならんからな。早速移動しよう。魔法についての説明はあんなものでいいか？」

その問いに、霧島とリナは頷く。一応、今のところは聞く必要はないと感じたのだろう。

「おーけー。じゃ、早速行くか」

第三十話　時計塔

時計塔には、大体一時間かけて歩いて到着した。時間に余裕があったので、敢えてテレポートコインは使わずの移動だ。お陰で外の体勢を見れたが、ここに当たっている人数は他と比べ物にならないほど多い。

加えて、敵に対して都合のいい条件があるというだけあって、エラルドやギルド、アルトレットの者以外は立ち入り禁止になっていた。その分余計なところがないようで、統制もとれているようだ。

霧島たちは今、その時計塔の近くでブラッドを探していた。昨日の祭りのときにいた面子にマリヤが加わった団体を、ここの警備に参加させて貰うためだ。本来なら総合責任者のフドシャックに頼まなければならないらしいが、本人は子共ドラゴンの近くにアルトレットの大御所としていなければならないそうなので、不在なのだそうだ。だから、ブラッドを通して今日のここの責任者の場所を教えて貰い会わなければならないのだいと、キルが説明してくれた。

「それにしても……でかいな」

アルトレット議事堂からならその全貌を見ることが出来るが、真下から見上げる分には高すぎて正確な遠近が掴めない。霧島が受けた説明によると、アルトレット議事堂（外見、つまり5階分の高さ）より、この時計塔は高いそうだ。一体何のためにそれだけの高さを維持しているのかと言うと、魔法で高さを隠してしまっているためにあまり景色で目立たないアルトレット議事堂の位置を、この辺りにありますよと遠方から来た人に教えるためらしい。

最も、アルトレットが高さを隠している事は霧島もリナやイリリカも知らないところではあるが。彼らは存在意義くらいはキルからの説明で納得していた。

「キルさん。ブラッドと言う方は本当に入り口で待ってくれているのですか？」

暫くして、マリヤから疑問の声が飛んだ。もう十分ほど探しているから、そう聞きたくなるのも仕方ないだろう。キルは首を回しながらその問いに答える。

「そのはずだ。向こうから言い出したことだから、忘れているなんて事は無いと思うんだが」

「いや、分かんないよキルっち。案外、そういう人に限って忘れて――」

「あ、いた」

続くイリリカの声に被せるように、霧島の声がキルの耳に届いた。それに伴い、キルは「どれどれ」と霧島の視線を追って目的の人物を探す。

いた。キルは今までと系統の付近の庭を捜していたが、ブラッドはその時計塔の入り口近くに立っている、支え柱にもたれながらジッとしていた。そして、それを見つけるなりキルはわざとらしく口を開く。

「で、イリリカ。さっき何て言おうとしたんだ？」

「……。キリっちタイミング悪すぎ」

「あー……すみません。それにしても、ブラッドさん分かりにくいところに立ってますね。もろ日陰じゃないですか」

「ここの庭園、無駄に広いからな。外で待つより見つかりやすいと思ったんだろ。もろ日陰だが」

口々にそんなことを言い合いながら、霧島達はブラッドの元へと歩み寄った。すると、ブラッドの近くに水色短髪の女性の姿が見えた。ミネアだ。警備の打ち合わせでもしているのか、口が動いている。

そんなシリアスチックな雰囲気のところに、キルが「おーい」となんとも間延びした声を投げかけた。少し距離が開いていたが、ブラッドの耳の届いたようで、首を動かしてこちらを見据えてくる。そのままの状態で距離を縮めると、やがてブラッドが背もたれから背中を持ち上げこちらに歩いてきた。

「よう、ブラッド。来たぜ」

「見りゃ分かる。責任者ならここの八階だ。つっても、入り口近くにあるポータルに入ってくれれば移動できるから、それを使ってくれ」

「あれ、案内はしてくれないのか」

「生憎、忙しいんだよ。悪いな」

「……ブラッド。雑談はその辺に」

「おう。それじゃ、またな」

キルの言葉に対し、話せそうな雰囲気ではないらしく、さっさとミネア共々行ってしまった。それを見送ってやり、言葉を繋ぐ。

「仕方ねえ、行くか。と、その前にリナ。透明化でもいいから、そのレイピアは目に触れないようにしとけ。霧島も、腰に差してある短剣はせめて上着で隠せ。まだ許可を得られていない以上、ここで目に触れる装備は厳禁だ」

そう言われ、二人は言われたとおりに装備を隠した。次いで、時計塔の内部に入っていく。すると、何人か警備員の姿が見えたが、彼らに特に用は無いので真っ直ぐポータル（光の柱みたいなもの）へと向かった。

直後、景色が一変する。すっかり掃除の行き届いた、清潔感溢れる廊下。立っている警備員の数は少ないが、少数精鋭といったところだろう。ついでに空気も重い。

「なぁ、あんた。フドシャックの代理って何処にいるんだ？」

「あちらの扉の奥になります」

キルの問いに、ごつめの顔をした男が敬語で答えた。これが霧島やリナだったら、帰れと一蹴されていたことだろう。現に、珍しくギルドの服を着ているイリリカやマリヤと違い、二人に対しては訝しげな表情を向けてきていた。

それを素通りし、キルが言われたところの扉を軽くノックした。

すると扉が開き、中から無愛想かつ不機嫌そうな青年が現れる。彼はキルの方を見やるなり目を強張らせて言う。

「何の用だ、ギルドマスター」

「参加申請に。責任者、いますか？」

「……ちょっと待て」

彼はキルを見やった後、後ろの四人をじろりと見やってから中に戻った。来客が何人で、どんな奴らか知らせに行ったのだろう。

「キルさん。今更ですけど、俺とリナもその服着てきた方が良かったんじゃ」

「着たところで、後でバンク機関に照合されたら団員じゃねーってばれるっつーの。いいから任せとけって」

霧島の不安げな言葉を、キルはいつものノリで振り払う。それを受けて押し黙ると、そのタイミングで再び今の青年が顔を出した。

「入っていい。そこの二人も客か？」

「ああ」

「なら、入れ」

キルの返答に答えながら、彼はわざわざ扉を閉めて戻って行った。どうやら、ちゃんとノックからやって入って来いと言う事らしい。キルは改めて扉の正面に立ち、もう一度ノックをすると、中から「

入れ」と声がした。先ほどの青年ではなく、それなりに年をとった男の声だった。それを受けて、「失礼します」とキルが入室する。それに続くように、霧島達も入って行った。

白い壁紙。白いタイル。正面には来賓客用のソファとテーブル、向こうに白い事務机とそのまた向こうには窓。右端隅には観葉植物に、左の壁際には暖炉、右の壁際には何もなし。そんな部屋。と言うより、事務室。

事務机には先ほどの声の主だと思われる、キルが声をかけた男よりもいかつい、白髪男がついていた。側には気難しそうな黒髪の青年が立っている。

「これはこれは、ギルドマスターのキル殿。ブラッドから貴方がやって来られるとは聞いておりましたが、お早いお着きですな」

「……貴方が、フドシャック殿の代理ですか？」

恭しいながらも、何処か皮肉をぶつけてきているかのような言い草に、キルは入り口付近に立ったままで返答した。その言葉に、男は「いかにも」と続ける。

「この度時計塔の警備の総括を任される事になりました、トラクソン・ジェガンと申します。こちらは私の下で働いてくれているニジェル・マソヌフ。その、後ろにいらっしゃる方々は？」

「二人はギルドのメンバーです。イリリカ・シャマルとマリヤ・イース。こちらの少女は何でも屋の娘の、リナ・ホーストン。そして、彼が霧島高貴です」

「ほう？」

白髪の合間に混じった黒髪が哀しいトラクソンは、キルの最後の紹介に興味を持った様子だった。目を霧島に向けてくる。

「まぁ、何よりもまずは座るといい。長旅で疲れたろう？」

「……。はい、ではお言葉に甘えて」

一瞬、キルの眉がピクリと動いたのを、隣にいたマリヤが気付いた。だが、今はそれに触れる話をする事が出来ないため、キルに続いて着席する。すると、ニジェルが右隅の小さな机の上にあった、入れ物を使ってお茶を淹れ始めた。保温の魔法でも施してあるのか、淹れられたお茶からは湯気が立ち上っている。

それに構わず、トラクソンは続ける。

「先ほどニジェルにお伺いしましたが、貴方方五人が我々に協力して下さると受け取って宜しいのですかな？　キル殿」

「そのとおりです。加えて頂けますか？」

キルがそう問いかけると、彼は考える人みたく手を顎に持っていく。

「それは構いません。聞けば、そちらの二人は彼らを知っているというのですから、断る理由がございませんからな。それで、何処の配属を希望ですかな？」

「屋上でお願いします」

そのキルの言葉に、今度はトラクソンが眉を動かした。
エラルドの警備が下に敷かれている状態で、配属を屋上と言うというのは、まるでネイヴとフィーラーが屋上までやって来る事を前提としているような言い方だからだ。要するに、彼は嘗められていると感じたのだろう。

勿論、先ほどの霧島との会話を察するにそれだけの理由で希望している、と言うわけでもなさそうだが、キルは言い換えるつもりはないらしい。トラクソンの反応を見ても、表情を一切変えないどころか口を開こうともしなかった。

「……貴方は、我々の警備では不足とお考えですかな？」

「いえいえ。むしろ十分だと思いますよ。警備としては、しっかりやっていると思います。ですが、あの二人は『時計塔に来る』ではなく、『竜神を殺す』と明言したんですよ？　絶対に警備が厳しくなるであろう状況を自ら作り出しておいて、です。なので、何処で何が起こっても対応出来そうな屋上を張るのが手だと思っただけですよ」

「っはっは。理屈としては、確かに一理あると思うがね。仮にこの時計塔にやって来た事を考えてみて下さいよ。どう足掻いても、一目につかずに屋上までやってくるのは不可能じゃないですか」

よほど自信があるのか、トラクソンはキルの言葉を払いのけた。そこで、また反論をするかと思われたが、キルは少し考える素振りを見せ、「ま、ですね」と同意する。

「ですけど、屋上を希望しときたいのですが。駄目でしょうか？」

「いや、駄目と言うわけではありません。確かに、屋上からの目も必要ですし、警備が行き届いていないと言う訳ではありませんからね。いいでしょう。早速、当たって下さい」

そう言われ、キルは「ありがとうございます」と返した。

「では、私はこれで失礼致します」

「おや？　お茶が入ったのですが、いりませんか？」

「はい。お先に断ればよかったですね。それでは」

そう、半ば無理矢理に会話を切り、キルは出て行く。霧島達はそれを見やって、習うように立ち上がり各々出て行った。そこで、早速霧島がキルに問いかける。

「キルさん。これからどうするんですか？」

「屋上を張ってるさ。あぁ、その前に何かくうか？　確か、ここは下のスペースを使って何か企業っぽいことしてるんだよ職員のための食堂があったはずだ」

「あ、それ賛成。そう考えたら、まだ大分時間あるんだね」

イリリカの言葉に、キルは「そうだな」と答える。そこで、リナが不安そうに言う。

「でも、本当に屋上まで来るのかしら。そう思えないんだけど」

「来るよ。絶対に。な、霧島君」

「まぁ、確かにきそうですね。彼らなら」

その返答に、「そういう事じゃないんだがな」とキルは小言で言ったが、「まぁいいや」と切り替える。

「じゃ、適当に時間潰しますか」

第三十話　時計塔（後書き）

ようやっと第三部のクライマックスが迫って来ました。次話から一気にいきます。

第三十一話　計画進行

時刻は今まさに四時三十分。入り口を張っているブラッドは、今しがた時計塔内部から出てきたミネアに声をかける。

「あれから、バンク機関から情報は送られてきたか？　ミネア」

「いえ、全く」

「そうか」

ブラッドは、ミネアのその報告を聞いて舌を打った。なんせ、もう儀式の時間まで十五分しかないのだから。

仮にこの時計塔に登ってくるのだとすれば、もう現れなければ時間的に間に合わないのではないか、とブラッドは思っていた。いや、もう遅いだろう。それぞれの階層には、一定のトラップのみならず、エラルドとギルドの混合軍が十人前後控えている。そもそも、登りきる事などありえそうにないのだが、来るのなら時間を逃している気がする。

（まず、空を飛ぶ魔法を持っているかどうか。奴らが二人組では無かった場合なら当て嵌まるが、一応空にも兵は飛ばしてあるから、任せよう。可能性があるとすれば、他の建物か。ドラゴンが飛行して一番最初に接触する建物に向かっているのなら、それに越したことはないんだが、それ以降の建物となると、テレポートして駆け付けるしかないな）

そうして思考しつつ、ブラッドはミネアに聞く。

「ところで、ポータルは消したか？」

「はい。既に解除させています」

「そうか。なら、俺たちが屋上に移動するにはコインを使うしかないな」

「……？　どういうことですか？」

ブラッドの確認するような今の言葉に、ミネアは疑問を浮かべた。すると、ブラッドは回りを気にしながら言う。

「実はな、俺は内部に奴らを手引しているやつがいるんじゃないかと思っているんだ」

「――！　裏切り者がいる、と？」

ミネアの慎重な言い方に、ブラッドは頷く。

「表現は飛躍しているが、要するにそういう事だ。昨日の召集の時に、キルの奴が『鎧を教えた奴が黒幕なんじゃないか』って事を言っていてな。バンク機関から情報が来ないのも、誰か上層部の奴らが手引したと考えれば、説明出来ない事はないだろう」

それを聞いて、ミネアは「成る程」と同意を示した。

「おっしゃっている事は分かります。確かにその可能性はある。ですが、だとしたら――」

「まどろっこしい警備を相手にしなくても、奴らが変装でもなんでもして、協力している奴が手引すれば、難無く屋上に辿り着けるんだよ。一応、キルが上にはいるはずだが、人数は多いに越した事はない」

ブラッドは今の言葉で、単純に今から屋上に言って安全を確かめようといっているのだろう。その意図を汲み取り、ミネアがひとつ提案をした。

「トラクソン殿に、配置の変更を申し出なくても宜しいのですか？」

「いいよ。むしろ、今の状況で協力していそうな奴っていったらトラクソンが一番怪しい。辿り着ける立場があるからな」

鎧を発現させるための物質を手にいいれるためには、確かに研究所とつながっていなければならないが、その上でも、そのありかを知っている上層部との繋がりがなければやはり手に入らない。協力者は最低でも内部に二人いるということだ。

「本当に、行くつもりですか？」

「当たり前だ。そのために俺はここにいるんだからな。動機とやらも、捕まえた後ゆっくり聞くさ。……って、お？」

そこで、ブラッドの目の前に緑色の炎が出現した。誰かがテレポートコインを使って、移動してきている証拠だ。現れたのは、緑ローブに紫髪の青年。

「アインか。どうした、こんなところまで」

「ホークアイがネイヴを補足したので、報告にと」

「――！　まさか」

アインの言葉を聞いて、今彼がここにいるという事をすぐに踏まえて、ブラッドは頭の中で嫌なビジョンを投影した。そこで、ブラッドの思ったことを肯定するかのように、アインは口を開く。

「ええ。もう、彼らは屋上の近くにいます。急がなければなりません」

「――ッチ！　おいこらじじい！　寝てるな、おきろ！」

「がっ、なんじゃい！　うるさいぞ若造！　耳元ででかい声出すなあ！」

「うるせえ！　こんなときまで暢気に寝てるテメェが悪いわ！」

（……。耳元？）

ブラッドとカリバーのやり取りに、アインはそんな疑問を抱いたが、急いでテレポートコインを展開させた。だが、そこで向こうから悲鳴が聞こえたのを見て、一時それを取りやめる。

「――ッ！」

その声により、アインは入り口近くで襲撃が起こっている事に気付いた。同時に、ミネアとブラッドは戦闘体勢に入る。

だが、目に入ったその人物達を目にして、ブラッド達は度肝を抜かれた。

彼らは各々武器を持ちこちらと対峙している。服も人間のものだし、魔法も使えている。髪の色もカラフルで、脱色している気配は無い。普通の、至って普通の人だ。

――ただひとつ。全員瞳孔が開いているということを除いて。

「おいおい……なんだこれは」

少しの観察の結果、ついでに瞬きをする気配もなければ、口からは呻き声しか出てきていないと言うことが分かった。まるで新鮮なゾンビだ。その不気味さからか、震え上がっている奴も少なくは無い。

「……アインよぉ。こんな魔物いたっけか？」

「ゾンビ系統の魔物は揃って、肉体が腐敗した種類しか確認されていませんね。新種か、それとも……」

そこまで会話が進んだところで、また悲鳴が上がった。仕方なしというふうにブラッドは会話を切り、味方の救援へ駆けつけようとする。そこで、ミネアが口を開いた。

「どうやら、始まったようですね」

「ああ、そうだな。ミネアは向こうに行ってくれ。俺はこっちを――」

「いえ。その必要はありません」

一刹那。ブラッドの腹部に痛みが走り、口と傷口から鮮血が飛んだ。

「な――」

彼は目を強張らせた状態で、目線を下にやる。すると、波打った刀身が特徴のレイピア――フラムベルクが突き刺さっているのが見えた。そして、後ろを見ようと目を首を必死に動かす。

「ミ、ネア……テメ……」

「安心して下さい、命までとる気はありません。何もしなければ、危害を加えるつもりもありません。ですから、何もしないで下さい」

そう言って、ミネアはフラムベルクを引き抜いた。瞬間、傷口から血が溢れ出、そのまま地面にうつ伏せに倒れた。アインは駆け寄ろうとしたが、すぐにミネアが牽制してきた。近づけない。

「……どういう事ですか？　貴方に殺す気はなくとも、彼、早くしないと失血死しますよ？」

そのアインの言葉を無視し、ミネアは持っていた液状の治癒薬をブラッドの傷口にかけた。すると、彼の傷口が青白い光にみるみる内に包まれていった。それに伴い、貫かれた部分が再生し、出血が止まる。どうやら、一命が失われるレベルには至らなかったようだ。それを見届けると、ミネアが口を開く。

「これでいいです。さて、前もって行っておきますが、ネイヴの邪魔をしようとは考えないで下さい」

「ほう？　案外早くに自分が関わっている事を暴露しましたね」

「隠しても無駄でしょう？　彼、放っておいたらここをすぐに片付けて真っ先にネイヴの所に行くでしょうから、それだけは避けなければなりませんので」

きっぱりと、まるで感情を表に出さず言い切った。そして、フラムベルクをアインに向けて口を開ける。

「では、全ての事が済むまで、貴方にはここにいてもらいます。宜しいですね？　アイン・ハーベスト」

◆

キル達が屋上の警備についてから、竜神の儀式まで三十分を切った。特に何もする事無く、ゆったりと上空を流れる雲を眺める。そこで、いい加減何かをしようと思ったのか、霧島が口を開けた。

「キルさん。階下の様子を見に行きたいんですけど、いいですか？」

「あ、キリっち。それ私も行きたい」

イリリカが乗っかってきた事は一旦置いて、霧島はキルの返答を待った。すると、キルは小さく、はっきりと一言だけ言う。

「駄目だ」

「え」

予想外の返答が帰ってきた、と言わんばかりの霧島の反応。だが、そこで引き下がる事はせずに、すぐに「どうしてですか？」と詰め寄る。

「何でってお前、トラクソンが怪しいからだよ。まず間違いなく、やつらと繋がっている」

「……何ですって？」

今の問いに、キルは至って平静にそう言ったが、霧島達にとっては予想外の事だったらしく、全員が驚いたようで表情の色を変えた。マリヤが口を開く。

「何故、そう思われるのですか？　キルさん」

「簡単なことだ。奴が俺たちを出迎える時に何て言ったか、覚えているか？」

「？　確か、長旅ご苦労様と。確かに、一時間も歩きましたから、疲れましたけど……」

そのマリヤの言葉に、キルは「そうだな」と答えてから言った。

「確かに、歩いたさ。時間に余裕があったしなにより、街中の様子を見るためでもあった。だがな、真っ先にあいつがそう言うのは可笑しいんだよ」

そう言って、キルは制服の胸ポケットから一枚のコインを取り出した。緑色の炎に包まれたそれを全員に見せて、キルは続けて口を開く。

「テレポートコイン。これは鎧を発現させるグミと同じで、存在を知るものは限られている。何しろ、便利すぎるからな。だが、それ故に、今大抵の上方連中はこれを使って移動するんだ。なんせどれだけ距離があろうとも、疲れることなく瞬時に移動できる代物だから。……だと言うのに、何であいつは俺がこれを使わなかったと知っている？」

「あ……」

そう、可笑しいのだ。ブラッドを通じてキルが移動すると知っていたトラクソンは、部屋に直接テレポートは出来ない事は分かっていただろう。しかし、テレポートコインとポータルを跨げば、階段を登る必要もないため、労力など微塵も必要ないのだ。

それを踏まえると、何故キルたちが歩きでこちらに来るのを知っていたのかという疑問につながる。その答えは、キルの中ではただ一つ。

「あいつは、ネイヴ達が捕まらずここに来れるよう手引きするために、あの一帯を何らかの方法で観察していたんだろうよ。とんでもない奴だぜ、全く」

呆れている様子の、そのキルの言葉に、今度は霧島が反応する。

「ですが、普通に外の警備状況を見ていただけ、なのでは？」

「ないな。奴は自分で時計塔の総括を任されていると言ったんだぜ。何故時計塔とは無関係な外を、あんな早い時間から見張る必要がある？

加えて、時計塔の総括がいるって事は、間違いなく道路警備の総括や庭警備の総括もいるだろう。となれば、だ。あいつはあの時、外の警備状況を把握し、ネイヴたちをうまく引き寄せるルートを思案していた。そこで、歩いてやってくる俺たちが物珍しくて記憶に残ったんだ。

他に協力者を彷彿させる状況証拠なら、見ろ。いるはずだったこの警備員、休憩をとってから戻ってきてないぜ」

「――！」

言われて、霧島は辺りを見渡し始めた。すると、そこにはキルが言っていた通り、自分達五人以外誰もいない。

「あの、彼らは休憩をとってからどれくらいの間いないのでしょうか」

「二時間くらいだな。暇すぎて、時間の感覚が消えちまってたか？」

「……そう、みたいです」

キルの言葉に、霧島は迂闊だったと言わんばかりの雰囲気で呟いた。

その、直後。不意に時計塔の屋上と屋内を繋ぐ扉からノック音が

聞こえてきた。思わずその音に、リナは吃驚したように体を跳ねさせる。同時に全員が、その音に、扉に釘付けになった。そんな中、扉の方から野太い声が聞こえてきた。

「あー、ワシだ。トラクソンだ。簡潔に用件を伝える。ネイヴ達は、アルトレット議事堂から見て三番目の建物に現れた。至急、応援に向かって欲しい」

それを聞いて、咄嗟に霧島がキルの方を見た。彼は今の霧島の動作を合図にするかのように立ち上がり、扉の前まで歩いて行き、それを開けた。そこにはトラクソンが立っていて、突然現れたキルに訝しげな視線を送る。

「うん？　どうした。急がないと奴らが――」

「ていっ」

そして、トラクソンが何か言いかけようとしたところ、キルがふざけた掛け声と共に彼を押し、階段から突き落とした。その時に彼が見せた驚きの表情と、落ちていくときに聞こえた断末魔は、それを見ていた霧島の目と耳に深く焼きつくはめになった。

キルはそれを終えると、すぐに階段をジャンプし、二十段はあるそれを一回で飛び降りた。普通なら、痛いですまされないほど怪我をしているはずだが、なんのそのでキルは着地地点から辺りを見渡し、目的の人物を見つける。

「よぉ、初めましてだな。ネイヴ」

「……あらら。ばれちゃってたのか」

第三十二話　調子に乗って（前書き）

ギリギリクオリティ。

第三十二話　調子に乗って

時計塔屋上より一階分下に、ネイヴはいた。キルの側で倒れているトラクソンを尻目に、彼は確認するように聞く。

「さて、僕がいる事、一体何で分かったんだい？」

「トラクソンが怪しいと思っていた状況で、急にあいつが別の場所にお前が現れたと言ってきたもんだからな。すぐに誘導させるつもりだなと思ったよ。
俺達がさっきの言うことを真に受けてテレポートした後に、屋上へ出てくればいいだけだもんな」

「ふぅん……どうやってトラクソンを怪しんだのか気になるけど、まあ置いとくよ。それで？　君は僕を見つけた訳だけど、どうするつもりなんだい？」

「当然、捕まえるさ」

そう言って、キルはネイヴに近づき始める。既に負ける事など頭にない様子で、その足取りはゆっくりと、堂々としていた。
対してネイヴは、表情に焦りの色を浮かべる事無く、後ろに下がろうとはしない。ただキルの方を見据えている。互いの距離は着実に狭まっていた。

そのまま互いの距離が一メートルほどに差し掛かると、不意に、ネイヴの後ろに鋭く光る刃物が現れた。どうやら後ろに誰かいるようで、刃物は切っ先をキルに向けたまま、ネイヴの左側から突き刺

して来ようとしてくる。

キルはその攻撃を難無く右に避け、刃物の形状を確認した。それは巨大なハサミだった。実に刀身がニメートルはあるだろうか。こんなものに突き刺されては、穴どころか空洞が開くだろう。

不意打ちが失敗したであろうそれを、キルは片手で掴み取ろうとしたが、そのハサミはすぐに引っ込められ、代わりに電球の光がない暗闇から赤い髪の男が現れる。

「フィーラーか。本当に二人ともここに来るとはな。どうやったんだ？」

「協力者は一人じゃないのさ。八階まではポータルを使わせてもらっただけだよ。そもそもエラルドとは戦っちゃいない」

「成る程ね。何人で行動しているかは知らないが、結構いるみたいだな」

キルはそうネイヴに返事を返すと、後ろから来る気配に向けても視線を送る。すると、そこにはキルを忌ま忌ましげな目で見つめて来ているトラクソンの姿があった。

「貴様……よくも……」

彼の目は、ただ怒りをキルに訴えてきていた。階段の二十段ほど上の階から突き落とされて立ち上がるとは、打ち所がよかっただけなのか、それとも別の要因か。

だが、今のキルにとってそんなものは気を引く対象にならないよ

うで、見向きもしなかった。その様子をみやって、トラクソンは頭に血を登らせ、キルにしつこく突っ掛かる。

「おい、聞いているのか！　俺にこんなことをして、ただで済むと――ぶぁあ！」

それがうるさかったのか、キルはトラクソンの罵声の途中で、彼の顔の目前で爆発を起こした。それにより、トラクソンの顔面は焼け、床上に倒れた事だろう。キルはそれを見届ける事無く、ネイヴとフィーラーから目を離さずにいた。

だが、そこで後ろが青白く光ったのを視界が捕らえたので、すぐに振り向くと、目の前に拳が迫っていた。

「――！」

キルは驚きつつもそれを右腕に巻いてある籠手で受け止め、後ろに下がると同時に、床を蹴り飛び階段の八段目辺りに着地した。そこで振られたフィーラーのハサミは、先ほどキルがいた場所を横切る。どうやら、隙を狙っていたらしい。

そして、キルが拳の主に向けて視線を送ると、やはりと言うべきかトラクソンだった。顔面に爆風が当たったはずだが、焼け爛れた様子も焦げた様子もない。無傷である。

（さっきの青白い光……ヒーラーがいたのか？）

キルは、さっきの間ネイヴの方ばかりを向いていて、トラクソンの背後に誰が控えていたかがみえていなかった。この分だと、もう一人や二人、いてもおかしくないだろう。

（となると、このままもう一回降りて挟み撃ちの状態で戦うのは危険か……不本意だが、屋上に上げるか、それとも――）

少し思考し、やがてキルは再びジャンプし屋上に舞い戻った。それを見てネイヴ達は、屋上に自分達をおびき寄せるために上がったのだろうと、すぐに思った。フィーラーがその誘いを受けるべく、すぐに階段へと足を踏み入れようとする。だが、そこでネイヴから「待て」と声がかかった。

「何だよ。折角屋上に誘ってくれてるんだぜ？　いかねーのか？」

「行くさ。　他の建物からじゃあ、おそらくドラゴンには届かないからね。ただ、少し待ってくれればいい」

命令口調になってきたネイヴの言葉に、渋々といった雰囲気でフィーラーが一歩下がった。次いで、ネイヴが先に、単独で階段を上がってくる。

「……うん？」

それを見て、キルは思わず疑問を浮かべた。彼は、別に上がって来たところをまとめて奇襲する気など毛頭なかったために、変に勘繰られているような感じがしたのだ。

すると、その変な気はすぐに命中する事になった。ネイヴが跳躍してキルに蹴りを加えようとしてきたのだ。

キルはそれを見て右腕を突き出し、迫り来る足を掴み、すぐに投げ飛ばした。ネイヴは捕まれた時は予想外だというふうに表情を歪めていたが、着地は上手く決めた。

直後、次はフィーラーがネイヴに倣うように奇襲を仕掛けた。キルは爆発でフィーラーを止めようかと思ったが、向こうにヒーラーがいるというのならば、ここで怪我を負わせて階段から突き落としても、すぐに回復されてしまうのは目に見えていた。

だからといって、逃げる時間もなく、フィーラーのハサミが迫ってきた。丁度キルを射程内に収めたフィーラーは、ハサミを開き、彼を真っ二つにしようと閉じてくる。それを、キルは両手で両刃を掴み受け止めた。どうやら、階段を飛び降りていた時から既に、肉体に鎧を施していたらしい。

「青菜に塩！」

それを悟ったか、キルの力を弱めるべくネイヴが魔法を発動させた。もはやお馴染み、人一人の力を抜く魔法だ。証拠に、徐々にハサミの両刃を抑えきれなくなっているように見える。イリリカは、ネイヴの言った事は理解できなかったが、直感で危ないと感じ電球を展開する。

「モノバレット！」

そこで、すかさずフィーラーに雷撃を放った。が、ネイヴがそれを先読み、フィーラーの目の前にシールドを展開させ、モノバレットを防ぐ。フィーラーは勝ちを確信し、ハサミに籠める力を強めた。ギャラリーから声が飛び交う中、キルはハサミを受け止めている状態で辛そうな表情を浮かべている。おそらく、このままではキルの胴体は真っ二つになり、床に血をぶちまけ死ぬことになるだろう。そんな絵を思い浮かべつつ、フィーラーは勝った、と思った。

「……なーんてな」

「あ？」

と、そこでキルが表情を一変させ、ハサミの両刃を少し押しやった。続いて地面を蹴って縦回転し、フィーラーの顎に蹴りを当てる。

「がっ……」

同時にハサミから両手を離し後方に飛び着地。フィーラーのハサミは空を切るだけに終わった。その一部始終を見やって、ネイヴは表情を強張らせる。

（魔法が……効いてない！？）

ネイヴの魔法は、瞬間的なものとはいえ、発動してからも暫くは効果が継続する。そのため、フィーラーがハサミを閉じるまでの猶予はあったはずだった。それなのに、あれだけ力の入った反撃が出来たという事は、そもそもの話、キルに魔法が効かなかったという事になる。

それは一体何故なのか。考える暇も無く、キルが口を開く。

「やれやれ、悪くは無かったがな。まぁ、相手が悪かったと思って諦めてくれや」

「チィ……！」

微塵の焦りも恐怖もない、余裕綽々といった雰囲気に、逆にネイヴが焦りを覚え始めた。すると、そこで霧島達がキルの背後に近づ

いてくる。

それに対し、何事かと思っていると、不意にイリリカがトンファーでキルを殴ってきた。

「……あれ？」

キルだけでなく、ネイヴとフィーラーもその様子に度肝を抜かれた表情になった。幸いにも、そこまでの威力はなかったために倒れる事無く、キルはすぐに後ろを向く。

「な、何を――」

「謝って」

「え？」

ただ、一言。イリリカがそういうや否や、他の三人も続けて口を開く。

「なーにが『なーんてな』、ですか。無駄に心配かけさせないで欲しいんですが」

「最低です。イリリカさんが援護までしたのに」

「出来るんなら始めからやって下さい。私ですら危ないと思ったじゃないですか」

「いや、今それどころじゃ――」

そこまでキルは言いかけたが、無言の圧力に圧され口を閉じた。
そして、全員が求めているであろう言葉を口にする。

「あの、申し訳ありませんでした」

「……イリリカさん？」

その後、霧島に話を振られたイリリカは、至って普通のテンションで答える。

「うん、まあ。今はそれどころじゃないし、二度と調子に乗らないだろーから、今回はこの辺でお開きって事で」

とりあえず言う事だけ言わせると、イリリカは気を取り直して戦闘態勢に入る。キル含め、他の四人もそれに合わせフィーラー達と向き合う。ネイヴの表情が軽くニヤけていたところを見ると、今のを見て楽しんでいたらしい。そして、こちらもまた仕掛けようとする。

「待て、貴様ら」

そうして彼らが攻撃を仕掛けようとしたところで、トラクソンから静止の声がかかった。階段の方を見遣ると、のっそりとトラクソンが現れる。

「キルは俺が相手する。お前達は後ろの四人を叩け」

「……おいおい。こんな狭いところで一対一か？　普通に無理だろうが」

その言葉に、キルは意味が分からないといった雰囲気で答えた。普通なら余裕そうに挑発をしそうな状況であるのに、それをしないというだけで反省している雰囲気が伝わってきた。そして、そのキルの言葉を鼻で笑うように言う。

「ふん、世界の広さを知らん若僧が。身の程を教えてくれる！」

そう言って、トラクソンは床に右手をつけて叫んだ。

「招待するぞ、キル・ゴッセル。インスタントエリア！」

瞬間、キルとトラクソンが青白い光に包まれたかと思うと、その場から姿を消した。消滅した場所には、青白い小さな光の玉が消滅の証として残っていたが、それもまたすぐに消える。

「あれ」

「き、キルさん？」

その光景に、思わず霧島とリナは驚き入った。だが、長く怯む時間は与えてくれないようで、ネイヴとフィーラーが早速表情に余裕を取り戻して、攻撃しようとしてくる。

「……キリっち、リナっち。今はとにかく目の前の二人の事を考えて。あいつは大丈夫だから」

状況を判断してのイリリカの声に、霧島が前方を見遣ると、イリリカは既に電球を張り終えトンファーを構えていた。マリヤも、何かの格闘技のものなのか、構えの姿勢をとっている。

霧島とリナは少し遅れてだが、二人とも自分の武器を取り出した。

霧島のは、ナイフではなく新顔の短剣の方だ。そして、ネイヴの方を見て話かける。

「ネイヴ。一ついいか？」

「答える義理ないけど、どうぞ。こっちも実際、あいつが飛ぶまで体力使いたくないんだよね」

ネイヴの差すあいつ、とはドラゴンの事だろう。儀式開始まで後二十五分といったところだ。時間に余裕を持たせている分、やはり霧島達と対峙することを考えていたのだろう。

「簡単な事だ。昨日、あんたは何故無駄にリナを挑発したりしたんだ？　ただ戦うだけでも、時間は過ぎていたはずだ」

「……ああ、何だそんなこと？　簡単なことだよ。僕は、口で人を惑わすのが好きなだけ。希望を描いたりしてる奴に水を差したり、足引っ張ってる奴いじったり。そんで壊れてくれたら、尚いい。爪先から頭まで怖がって、臆病になって、そんな奴をガタガタ震わせて、僕が踏み潰すんだ。これ以上に楽しい事はないぜ？」

自慢するように、ネイヴは霧島の問いに答えた。それを聞いて、改めて霧島は実感する。

「そうか。……やっぱり、俺、アンタ嫌いだわ」

「……へ？」

変な事を言われた、と言う風にネイヴが呆気にとられたような顔をするが、構わず霧島は言葉を繋いだ。

「来いよ。今までの暇な時間で、もうアンタの突破策は編み出してある。昨日のようには、絶対にいかないから、覚悟しろよ」

第三十三話　開放

「ふぅん」

霧島の言葉を聞いて、ネイヴは怪訝に思い、言葉を紡ぐ。

「君さ、そんなこと言っちゃったら、僕が君を相手にしない可能性があるって分からない？」

「分かりますよ。ただ、俺を無視したら焼ける事になると言える」

「……」

その言い方に、ますますネイヴの心証が悪くなったようで、目つきが変わっていった。どうやら、相当自信があるらしい。

（あー、参ったな。滅茶苦茶警戒されてるね。厄介な魔法を使って来るからって、始めから挑発して一身で僕を引き受けようって訳だ）

次いで、フィーラーに対して三人をぶつける事で、確実に勝つつもりであると、ネイヴは先読む。同時に、それは上手くいかないことであると軽く蹴飛ばす。その考えを肯定するように、階段の方から足音が聞こえてきた。

「？　誰だ？」

霧島達が今から聞こえる足音の主に疑問を抱く中、ネイヴはようやくかとで迎えた。上がって来た人は二人で、片方はブルーグレー

の髪に赤みがかった瞳を持った女に、気難しそうな顔をした青年、ニジェルだ。

（……ここで新手か）

トラクソンの下についているというニジェルの登場により、霧島は隣の女性も敵であると容易に認識できた。彼はけしてこの展開を想定していなかったわけではないが、はじめに現れなかったことから、もしかしたら来ないんじゃないかと期待していた。

一方の女性は、霧島達の方を眺め、口を開く。

「トラクソンは行ったのですか？」

「行ったよ、エイリーン。これで、ギルドマスターを相手取る必要はなくなった」

女性の問いに、ネイヴは振り返らずに答えた。女性はそれを聞いて「そう」と息を吐くように言う。

「じゃあ、さっさと済ませちゃいましょう」

直後、彼女が右手を前に突き出すと、そこに氷で作られたショーテルが具現化した。ショーテルは物によって湾曲に仕様が違うが、これはそこまで大きく曲がってはいない。

それを生成し終えた彼女は、妖しく微笑むと単一で突っ込んできた。一人だけ武装をしていないマリヤの方へ一直線である。

仕掛けられたマリヤはかかってきたエイリーンと、これから振るわれるショーテルの軌道に目を向けた。曲がっている先で彼女の首

を突き刺すように、それは右側からやって来る。一瞬懐にもぐろうと踏み込んだが、断念して後ろに下がって刃をかわした。そこからも二振り、三振り、四振りとエイリーンはマリヤを襲うが、今のところは全て避けられていた。

続いて、フィーラーとニジェルもまた、己の敵を決めて襲い来る。ニジェルはイリリカ、フィーラーはリナだ。だが、イリリカの方はまだしも、戦闘に関しては素人のリナにフィーラーが行ったのは非常にまずい事態であるといえる。案の定、自分のほうに来るフィーラーを見て、レイピアを構えてはいるが内心怯えているのが手に取るように分かる。

（――仕方ない）

霧島はそのリナを庇うように前へ出、迫り来るハサミの一閃を短剣受け止め、競り合いの状態になる。

「リナ！」

彼女はその霧島の行動に驚いていたようだったが、霧島の声を聞いて我に返った。同時に、意を決したように無防備なフィーラーにレイピアを差し向ける。

その展開に彼は苦い顔をすると、一旦力を抜いて霧島に自身のハサミを弾かせる事によって自由になり、後ろに飛び退いた。もし霧島がハサミを受けつつ、短剣を滑らせて攻めてきていたようであれば、この手は使えなかった。

リナはそれを見て前進を止め、霧島の隣でレイピアを構えなおす。そこで、直ぐ隣の霧島から何か、熱気が伝わってくるのを感じた。

（何……？）

一体何をしているのだろうと彼女は横目で霧島の方を見やるが、別に炎を出している気配はなかった。短剣の付属効果と言うわけでもないようだ。

それに気をとられていると、不意に霧島が攻めた。短剣を構えフィーラーのハサミを狙って斬りかかる。互いの刀身の長さに酷く差が出ているため、それを埋めフィーラーに斬りかかるためだろう。

だが、その特攻をネイヴが見逃すはずが無かった。

「急いては事を仕損じる」

その言葉が言われた途端、霧島に向けて命令が向けられた。これで霧島は短剣でハサミを受ける事に失敗し、その体に刃が埋まっていく事だろうと、ネイヴは踏む。

一方フィーラーは、一体どのような命令が言われたか分かったのか、こちらもまたハサミを構えて霧島の胴体めがけて振るう。だが、ハサミが霧島の胴体に触れた瞬間、そこにあったはずの霧島の象が歪んだ。

「――！」

咄嗟にそれに異常を感じたフィーラーだったが、そのハサミが振られてすぐに、遅れて霧島が姿を現した。フィーラーはもう既にハサミを振り切っているので、今の隙を狙われるわけにはいかないだろう。

今の現象を不思議に思いながら、フィーラーは持ち手の部分を上げて霧島の短剣を受け止めた。そこを、蜂のようにリナが突く。同時に、巾着袋からエアタイガーが飛び出し、ネイヴに噛み付こうと迫る。

ネイヴは舌を打ちながら後ろに下がる事で三秒を稼ぎ、鎧を発動させた。噛み付いてくる虎をかわし、すかさず蹴りを入れそいつを飛ばす。フィーラーはハサミを盾にしながら姿勢を変える事でレイピアから逃れ、短剣を受けたまま持ち手の方を振り回し霧島とリナを払う。

（何だ？　今、奴は何をした？）

フィーラーはその後、霧島のほうを見てさっき起きた現象に思考を向けた。だが、考えるのはネイヴの専門だと言わんばかりに、すぐに余計な考えを脳内から追い出し、ハサミを構えた。

（……二人を相手取るには、一本じゃあ厳しいか）

そして彼は何を思ったか、ハサミの止め具を外し、二本の片刃剣としてそれを両手に持った。どうやら、相手によって使い方を分けているようだ。

「え……」

それを見て、霧島は軽く怯んだ。もし、二鋏流が本領だった場合の事を踏まえても、二本持たれると隙を見出すのが難しくなるからだ。短剣で片方を受け止めても、横からもう一本に攻められてそれを避けられるほど、流石にそこまで霧島の身体能力は達者じゃない。

彼がそうして苦い顔をしていると、今度はフィーラーが攻めてきた。右に握った鋏刃が振るわれるのを見て、霧島は後ろに下がりそれをかわす。続いて左の鋏刃が上から下に振るわれリナを襲うが、それを彼女はなんとか横にかわした。おかげで空ぶったハサミは床に叩きつけられ、その床を少し砕く。

そこで霧島は、今度は炎を使ってフィーラーを倒そうと考えた。左手から放出された炎は、変わらずフィーラーを完全に燃やすためのものではない。フィーラーはその一直線に迫ってくる炎を右にかわし、それに気付き、恐れる事はないと再び突っ込んでくる。

右の鋏刃が、右から左に振るわれた。だが、これもまた空気のような手ごたえを与える像でしかなく、鋏刃が当たると消え去っていった。フィーラーは標的を見失った事に戸惑い辺りを見渡す。

すると、今度は先ほどの像から左斜め後ろに当たる位置からダガーが投擲された。フィーラーは左の鋏刃でなんとかそれを弾くが、急な攻撃のお陰で僅かな怯みを見せる。それを狙って、霧島は再び炎を放ちフィーラーを焼きにかかった。

「チィ……！」

例え燃やす気のない炎であっても、まがりなりにもそれは炎だ。さっきみたく避けてから突っ込む分には、炎に直接突っ込んでいる訳ではないので熱にやられる程度でなんとかなるが、このまま突っ走れば霧島の意志に反してフィーラー自身が焼け死ぬ事になるだろう。

それを察したフィーラーは、霧島が放つ炎を跳躍して避ける事に

した。彼は次いで、シールドを張ろうかとも考えたが、炎を受け止めるほど幅広いシールドを一瞬で張るには、まだ経験が足りない。それでも空を飛ぶという事は、相手にわかりやすく隙を晒すという事なので、彼自身はあまりしたくはない行為だったが、止むを得ないと思っての事だろう。。

対して、霧島は戦っている時であっても、常人以上に頭を使う。自分に力が無い事を自覚した上で、相手の手の先を読もうと必死に頭を働かせる奴だ。それを、フィーラーはネイヴが一撃傷を負ったという事から、なんとなく思っていた。

そして、その例から漏れる事はなかった。霧島はまるで読んでいたかのように、跳んで避けたフィーラーめがけて自分のナイフを放つ。それは見事にフィーラーの肩を捉え、血飛沫を上げさせた。

「ぐっ……！」

その痛みにフィーラーは顔を歪ませ、着地と同時にナイフを引き抜いた。霧島自身にもう持ち手はないが、これで片腕の動きを制限できたので、上々と言っていいだろう。

「おい、お前……ほんとにただのガキかよ」

「ネイヴさんにも言われましたね、それ」

霧島はその言葉に、嘗められていると感じたのか不足そうに答えた。彼のその自信は何処から来るものなのか。暇な間にフィーラーに対しての戦闘手段も考えていたのか、確実に戦闘慣れしている動きだ。

「――らぁ！」

直後、背後からネイヴの掛け声が聞こえてきた。今の今まで虎と戦っていたのか、拳を振るい、足を使い、今のところは優勢で甚振っている。

だが、生憎な事に。魔獣の一番厄介なところは、打撃を、魔法を、どれだけその身に受けても、タイムリミットまで現存し続けるところにあるのだ。いかにネイヴが退けたとしても、決して、彼はこのエアタイガーに勝てる道理がない。

それを分かっているのか、実に不愉快そうな表情で、起き上がって来るエアタイガーを見つめていた。

「くそっ……！　いつまで生きてるんだよ、お前は！」

対して、エアタイガーは不屈の闘志を主張するかのように咆哮する。続いて、何処かから雷撃音が響き渡る。

「テトラポッド！」

電球に象られた正方形から放たれた雷撃が、ニジェルに向かって飛んで行く。そのニジェルは、目の前に青白い渦を作って受け止めた。そして、テトラポッドが放ち終えたのを見るや、その渦からテトラポッドを発射する。

イリリカは横に転がりそれをかわし、今度は後ろに六つ、一直線に電球を寄せ集める。

「ヘキサストレート！」

デカショットの劣化のようなそれを、ニジェルは渦では間に合わないと判断したか、シールドで防ぐ事を試みた。しかし、ヘキサストレートはそのシールドを貫通し、ニジェルに電撃を与えた。

「ッ――！」

「っよし！　一発与えた！」

イリリカはニジェルに攻撃が通った事を喜び、思わず跳ねた。何しろ、今まで反射されるか受け止められるかのジリ貧だったのだ。攻撃思考のイリリカからすれば、その分今までイライラしながら戦っていた事だろう。

そして、今度は氷が砕ける音が聞こえた。マリヤが拳で氷のショーテルを粉砕したのだ。エイリーンはそれに怯む事無く、今度は氷で剣を生成し、マリヤに向けて振るう。

彼女はそれをかわし、氷の剣に拳をあて粉砕。そして、空いた方の拳でエイリーンに打撃を与えた。

明らかに、劣勢だった。個々の力量もあるし、役割、相性、前半のフィーラー戦に関しては二人のチームワークもあっただろう。正確に全員の実力を計り比べれば、差は僅差かもしれないが、少なくとも、今はネイヴ側が負けの一本道を辿っていた。

それが故に、ネイヴはフィーラーに向かって告げる。

「フィーラー。もう、使え。ドラゴンが飛ぶまで取っておくつもりでいたけどさぁ、もうこれは見得張ってる場合じゃあ、ない」

「……そーだな」

そして、そのネイヴの言葉を受け、フィーラーは意を決したように、次の動作に移った。

第三十四話　僅かな道

上で交戦している頃、ミネアの言葉にアインは呆れたように溜め息をついた。

「貴方、手を出すなと言っていますがね。後ろのあいつらが見えないんですか？　このままだと私と彼どころか、貴方も危ないですよ？」

「その脅しは、無駄。あいつらは私達の仲間のペット。こっちまで来ない」

「……成る程。やけにこの時計塔に集中しているのは、アルトレット側に悟らせないようにするためですか」

「そう。だから、テレポートできる貴方たちは足止めする。中にも仲間が控えている。他にコインを持っている者がいても、転移する前にそれを壊してしまえば転移できない」

普通ならこれだけの惨事、報告にいってもおかしくない。だが、敵に人を操れる術を持つ者がいるのなら、この辺りを野次馬を装った人形で埋め外界から隔てさせる事も可能だし、空の警備兵も身内であれば報告は行かない。加えて、こちらの世界の通信道具といえば水晶くらいしかないので、それで通信する手間を与えられないほどの襲撃があれば報告はいかない。

アルトレット側は今日の儀式の日を中断するつもりは無いが、ネイヴ達の居所は割り出し、捕まえる気でいた。しかしこれでは、異

常があること自体分からないだろう。いつから根回しをしていたのか定かではないが、用意周到過ぎる。

（それにしても、彼らはドラゴンを殺すためだけに行動を起こしているようですが……たったそれだけの目的で彼らの言う人員が集められるとは、到底おもえませんね。一体何が行動原理となっているのか、気になるところです。無論、エラルドを味方につけるための、架空の目的を掲げている可能性も十分にありますが……とりあえず、かまをかけてみますか）

アインは今までの材料と解釈を元にそう考え、尋問しようと口を開く。

「あなた方は、何のためにこんな事をしているのですか？」

「黙秘します」

「黙秘？　可笑しな事をいいますね。あなた方の目的は、竜神の儀式を失敗させる事で、今となっては隠す必要すらないはずですが……何か他に、隠さなければならない事でも？」

「あ……」

「やはり、別の目的があるようですね。貴方がそれに個人的に関わっているのかは量りかねますが、それは聞かせては――」

「黙秘します」

またか、と思いつつ溜め息をつき、アインは次の手を考える。

（幸運な事に、隠し事が得意な人でなさそうですね。ならば、少し強引な手段に入っても問題はないですかね……）

そうして、アインは自らの魔法を発動させ、ノナでおよそ二十挺の銃器を生成した。瞬間、発砲。その銃器の内の一挺から放たれた魔弾はミネアの右肩を貫き、血飛沫を上げさせる。

「貴方は、そうやっている事で私の足を止めたと勘違いしていたようですが、残念なことに私の魔法はご覧の通りです。剣で脅すのは失敗でしたねぇ。せめて、ブラッドを治療した後にすぐ、拳銃のひとつでも取り出せばよかったものを」

「ぐ……」

「おっと、動かないで下さい。なに、幾らか質問に答えてくれるだけでいいですよ。それだけで命は助かる」

痛みに表情を歪めているミネアを相手に、アインは言葉を投げかけた。次いで、返答を待つ事無く口を開く。

「では最初の質問です。貴方はドラゴンを殺した後、何をするつもりですか？」

「……」

だが、ミネアは無言のままでアインを睨みつけるだけだった。その強情な部分に、アインは軽く、二度目の溜め息をつく。

「だんまり、ですか。状況を理解した上でその態度……利口ではありませんね」

「何とでも言えばいい」

「そんな事をおっしゃって。貴方が死ねば、私達のテレポートを止める者がいなくなりますよ」

「私がいなくなれば、後ろの彼らが貴方を襲う。それで問題は無い」

「……ふむ、確かにそうだ」

アインは反論をあっさり認めて引き下がると、二十丁の拳銃の向きを後ろに変えた。そして、ミネアから目を離さずにホークアイを使う。

次いで、モノクルの表面に数字の羅列が現れた。上から下に、計算式のようなものが流れていく。

（距離測量、完了。それに伴い角度修正。全ての銃器からの弾丸の着弾位置を計算開始……）

脳内でモノクルに現れた演算処理の画面を整理しつつ、正面にいるミネアに笑顔を向けた。

「ならば、消しちゃいましょう」

そして、計算が終わり、今か今かと控えていた銃器が一斉に火を噴いた。弾痕は敵の四肢に刻まれていき、目にも止まらぬ速さで動きを封じていく。

もはや動く事が叶わなくなった彼らは血を流ながら地べたを這った。これでは、アインに危害を加えるのは難しいだろう。

仮に魔法を使おうとしても、未だ健在のエラルドの隊員に後処理を任せれば脅威は消える。ミネアの頼みの綱は、一瞬にして消え去ったのだった。

「そん、な……」

彼女は目の前で起きた出来事に目を見開き、今の状況で警戒すべき対象を誤った事に今更ながらに気付いた。ブラッドばかりにかまけていて、周りが見えていなかった。

それを悟ったのは良かったのかもしれないが、時は既に遅し。アインは五体満足な敵がいない事を確認してから、ホークアイを解除した。

「では、もう一度言います。あなた方の目的を聞かせて貰えますか？」

これでもう喋る以外に手はないはずだと、確信しての言葉だった。それを受け、ミネアは言う。

「……言えません」

「何ですって？」

「言え、ません！」

その強い拒絶の声に、アインは思わず表情を険しくした。嘘をつけるような性格ではないからこその強情さと言うべきだろうか。もはや、これが最後の意地だとばかりにしがみついている。

（やれやれ、ここまでだとは。ですが、これは逆に彼女が持ってい

る目的は、知られてはネイヴ達が困るような内容と見て間違いないでしょうね）

強い確信ではないが、アイン自身はそう踏んでもいいものに思えた。それ故に、アインは近くを通ったエラルドの人間を呼び止める。

「心を読む事が出来る魔法使いを知りませんか？　彼女、何か重要な事を隠しているようなのです」

「は！　すぐにこちらにお連れ致し――」

その、一刹那。アインがエラルドの隊員と話している僅かな隙の間に、ミネアの方で閃光が走った。アインは思わず腕を顔の前に持ってきて、光から目を守るようにする。そして、彼女がいた方を見やると、そこにはおらず時計塔の中に入っていくのが見えた。

「――逃がすか！」

すぐさまアインはミネアを追うべく、銃器を従え中へ向かった。取り残されたエラルドの隊員は、急な事に驚きながらも、言われた事を為すべく仲間のところへ走って行った。

◆

「何だ、ここ」

その頃、キルはトラクソンに妙な場所に連れて来られていた。

やけにだだっ広いが、その立方体の空間には何も存在しない。壁や天井には時計塔に使われていたタイルと同じような素材が使われている。

（このただの四角い空間……トラクソンが触れた物質を元に構成されるのか）

キルはひとまず、今いる場所に検討をつけてから正面四メートル先にいるトラクソンに声をかけた。

「なぁおい、これがお前の魔法か？」

「いかにも。このインスタントエリアに閉じ込めたからには、お前は精霊から力を引き出せない。覚悟するんだな」

「へぇ……そりゃまた用意周到な事で」

わざわざの説明に、わざとらしく感心したふうを装う。しかし、キルにとって今さりげなく言われた言葉は、かなりの痛手になっている事だろう。

それを分かってか、今の態度にトラクソンはそう関心を示さず鼻で笑った。

「強がっていられるのも今の内だぞ、キル。すぐに目にもの見せてやる」

「それはこっちのセリフだ」

思いきり粋がっているトラクソンに、キルは言葉を返して魔法を発動する。今度は、容赦なしに前後左右に爆発を起こし、爆風で挟

み焼いた。さっきダメージを与える事に成功しているので、これでケリはついたなとキルは欠伸をする。

だが、そこで異変が起こった。突然黒煙の間から数秒の間青白い光が漏れて出たかと思うと、その煙の中から無傷の状態でトラクソンが歩み出て来たのだ。その光景に、キルは思わず表情を強張らせる。

「……あれ？」

「ふっふっふ、効かんな」

勝ち誇ったかのような笑い声。キルはそこで、試しにもう一度トラクソンの背後で爆発を起こした。これなら今度は、黒煙に紛らわされる事無く何が起こったのかを見ることが出来るだろう。

そして、トラクソンの体――正確には、爆風を受けたであろう背中側が青白く光った。かと思うと、爆風によって出てきた炎が、その背中に吸い込まれていった。

（吸収――！？）

キルはそれを一目見ただけで特性を見抜き、トラクソンの体に魔石が埋め込まれている事を知る。

（あれ？　という事は、これまずくね？）

次いで、階段から突き落としたのに始まり六度の爆撃を与えた事に、キルは若干の危機感を覚えつつあった。それを肯定するように、トラクソンは笑みを浮かべている。

「何だ？　もう終わりか。なら、次はこっちからだ」

「――ッ！」

彼はキルが攻撃しなくなったのを確認すると、その場で拳を握りキルめがけて振る。すると、その拳の大きさの数十倍の大きさはある衝撃砲が放たれた。

キルはそれを避けようとするが、大きさと速さのお陰で間に合わず、それをまともに体で受ける事になった。

鎧を張って肉体強化をしていたお陰で気絶するほどではなかったが、それを喰らった事で三メートルは吹っ飛んだ。息が搾り出されたかのような悲鳴を出しつつ、それでもと空中で回転し着地を決めた。それを見て、トラクソンは感心したように口を開く。

「ほう？　伊達でギルドマスターをやっているという訳ではないようだな」

「……まーな」

僅かばかりの敬意が籠もった賞賛を受け取り、キルはトラクソンを睨みつける。だが、攻撃が吸収されているのでは次の手に打とうとしても意味が無い。

（まいったな。随分広いとはいえ、ベルン邸とは違ってここは完全な密室だ。一酸化中毒引き起こす前に、後何回攻撃出来る……？）

打撃が当たるならまだ救いようはあっただろうが、おそらく打撃も同じように衝撃を吸収されて終わりだろうと、キルは踏む。する

と、あまりキルに残された手段はない。

（氷結爆破やその他もろもろはあいつがいないと使えない。今のままでも使える属性のレパートリーはあるが、奴の魔法の限定条件を見破らない事には始まらねぇよなぁ）

少なくとも、一つは突破口があるはずだとキルは考える。そして、それを見つけなければ勝てない事も自覚した。

そこまで考えたところで、トラクソンの声がキルの耳に届く。

「くっく。ぐーたら考えとらんで、ちまちま攻めて来たらどうなんだ？　うん？」

「……」

彼はもはやキルに打つ手がないと考えているのか、挑発をし始めた。一方のキルはだんまりのまま、トラクソンを見据えている。すると、不意にキルの口元に笑みが浮かんだ。

「ぅうん？　何がおかしい」

「いいや、何。いい感じに苦戦できそうな相手だと思ってな。少し気分が高まってきたところだ」

「何だと？」

トラクソンは意気揚々とした彼の雰囲気に、訝しげな視線を送った。対して、キルは軽い微笑からふてぶてしそうな笑みへと移る。

「さぁ、かかって来いよ。お前がどんな手使おうと、悉く凌駕して

やるからよ」

第三十五話　魔人（前書き）

物凄く短時間の出来。文がおかしいかもしれないです。

第三十五話　魔人

不意にフィーラーが動きを止めたかと思うと、彼の足元から影が広がり始めた。
夕方に差し掛かり、すっかり赤く照らされた上から更に塗りつぶすように、その影はこの屋上を侵食し始めていく。

（何だ……？）

これが魔法である事は間違いようがない。だが、どんな魔法かが分からない。
それ故に、霧島はフィーラーをずっと睨んだまま動かないでいた。

「あ、あれ……？」

影が広がっていくに連れ、突然リナの声が霧島の耳に届いた。

「どうした？　リナ」

「透明化の効果が消えたわ。エアタイガーも」

「え？」

その言葉を聞いて、霧島はネイヴの方、リナの方と見やる。すると、影に侵食されていく事で、リナの遣っていた魔法が消えてしまったのだと推測できた。
それに驚いていると、イリリカの電球もやがて消えていき、マリヤによって砕かれたエイリーンの魔法である氷の武器も消えていく。

「魔法を消す魔法……？」

「ご名答。流石だね霧島君。フィーラーの魔法は、他人がノナを行使出来なくなる空間を創る事。最も、彼は正々堂々が好きらしいから、あんまり使わないみたいだけどね」

霧島の呟きに、ネイヴが勝手に解説を挟んだ。随分簡単に口を開いた事に違和感を覚えながらも、霧島はそれに甘んじて別の事を聞いてみる。

「これで、どうやってドラゴンを殺すんだ？」

「おっと、結果だけ急ぐなよ。まぁ、これがあればドラゴンを覆っているシールドみたいのは気にしなくてよくなるから、不必要って訳じゃないけど。

むしろ、彼の本領はここからだ。よく見ておくといい」

その余裕たっぷりの態度に、霧島はネイヴに訝しげな視線を送った。

続いて、これから現れる本領とやらの登場を待つべくフィーラーを見やる。そして、霧島は短剣を構えてフィーラーに飛び掛った。

瞬間、銃声。異世界独特のものではなく、地球で馴染みのある破裂音がした先には、拳銃を握っているネイヴがいた。

「ま、そう来るよね。でも折角なんだ。ちゃんと見て行ってくれないとさ、フィーラーをけしかけた意味がない」

ここで、霧島はナイフもしくはダガーを投げたいところだったが、さっきの戦闘で使ってしまった。このまま短剣で進撃をすれば、次

は間違いなく撃たれて終わる。
イリリカのトンファーは飛び道具としては心もとないし、リナはレイピア、マリヤは素手。全員、拳銃に勝てる手立てを持っていなかった。

それからやって来た暫しの沈黙を察してか、ネイヴは笑みを浮かべて言う。

「へぇ、どうやらもう打つ手ないんだね。じゃあもうこいつ一挺で終わらせちゃってもいいのかな」

実に愉快そうな表情を浮かべながら、ネイヴはわざとらしく銃口をこちらに向けた。リナが一瞬ビクッと跳ねて、それを彼は見て笑う。

「とまあ、冗談は止めとくよ。今から君たちはフィーラーに殺される。今やっちゃ、面白くないし芸がない」

今やっている戦いに面白いも芸もないと霧島は言いたかったが、初めて会った時からネイヴというのはそういう奴だった。常に自分が勝つ事を疑わず、どうでもいいことに固執する。

そうして話をしている最中に、いつの間にかフィーラーが動き始めていた。どうやら、影の展開が終わったらしい。
見てみると、この時計塔の屋上を囲うように、薄い黒い球状の何かが存在した。おそらく、結界のようなものだろう。この中にいる以上、魔法は使えない。

だとしても、各々はきちんと自分の武器を持っていた。それに、魔法が使えないという条件はネイヴ達も同じなはずなので、霧島は

より一層現状をいぶかしんだ。
そう思っているのを見破ったのか、ネイヴは口を開く。
「そう心配するなよ。今からなんだからさぁ。な、フィーラー」
フィーラーはその問いには答えず、精神統一でもしているかのように目を瞑り、石像のように動かない。唯一、風にたなびく髪だけが、彼の生を物語っていた。
そんな中見守っていると、不意にフィーラーの髪先の色が赤から黒へと変色していった。それは徐々に、赤色を侵食するように広がっていった。何事かと思っていると、霧島は色素が消えていくに連れ、フィーラーに微弱な変化が現れているのに気付く。
（まさか……赤色を吸い取っているのか？）
そう言われれば、といった程度だが、確かに赤色が頭皮に吸い込まれていっているように見えた。
侵食、もとい吸収が進んでいく中、ネイヴが小さく言葉を繋ぐ。
「なぁ、突然だけどさ霧島君。君はこの世界にどれだけのものがいるか……聞いたことがあるかい？」
「え？」
「今まで人ばかりだった癖に、昨日になってから急にドラゴンが登場した。一気に別世界色が濃くなったと思ったはずだ。
それの期待は裏切らずに、現にこっちには異様な奴らがたくさんいてさ。フィーラーもその内の一人……いや、一体かな？　リスト

機関から与えられた情報を仲間に受け取らせて処分させて、今日までこいつの正体は隠してたんだけどね。

だから、改めて紹介するよ。彼は君の世界で言うところの、バンパイアに最も近い存在だ」

「え……」

それを聞いて、霧島は思わずフィーラーを見る。赤かった髪は既に黒髪になっており、先ほどとは違った、静かな雰囲気を出していた。

「バンパイアって……日中行動出来なかったりする、あれですか？」

「君の世界では、そうだね。でも、こっちのバンパイアはそっちの世界の常識に全く当てはまらない。

にんにくや十字架とか苦手って話は聞かないし、何よりどれだけ日が照っていようが行動出来てる。

何より、自分の血液型に最も合う血しか吸わな――」

「おい、うるせぇぞネイヴ。そろそろ静かにしろ」

やがて、フィーラーから静止の声がかかった。閉じていた目は開いており、眼球の色は黒、瞳の色は赤に変色している。いつの間にか、傷も塞がっていた。

ネイヴはその声を聞いて、「あー、はいよ。時間稼ぎのつもりだったんだけど、やりたいならどうぞ」と少し面白くなさそうに言った。

それを聞いて、フィーラーは二鋏刃を構える。

霧島は、雰囲気でだが、さっきよりも力が上がっているのだろうなと推測した。このタイミングでの異様な行動といえば、パワーアップ以外に思い当たる節がないようだ。

（さっきの赤い髪を吸収したのは……色素じゃなくて、あそこに溜めていた血を吸収したってことか）

想像力を膨らませ、出来る限り事実に近い憶測を仕立て上げ、霧島は短剣を構えた。魔具の機能は回りにノナがあって始めて機能するものだが、この短剣には外に触れない中に魔石が埋められているため、機能は残っている。

今のところ、まともに鋏と打ち合えるのは霧島か、イリリカかといったところだろう。リナも打ち合えるだろうが、戦闘経験が足りない上、リーチでも負けている。霧島かイリリカの助けが無ければ立ち回るのは難しいだろう。

「さぁ、行くぜ。断っとくが、手加減するつもりはねぇからなあ！」

瞬間、フィーラーは先ほどよりも一層素早く霧島に襲い掛かってきた。

霧島は右から迫る鋏刃をなんとか短剣で受け止めるが、それを見越していたのかすぐに左からも、足払いをかけるように鋏刃が迫る。

霧島は短剣から力を抜きつつ地面を蹴り、後ろに飛んで二枚の刃を間一髪でかわした。飛んだ時は丁度、足が上下の刃の間の位置に収まっていたため傷無しで済んだ。そこから彼は地面に降り立ち、後ろ回りの要領で転がり、フィーラーが次の手に出る前に立ち上がる。

次いで、両刃を振ったために腕がクロスした形のまま、フィーラーはそのままバツの字を描くように両刃を振るう。霧島は短剣の刃の部分を、二つの刃の軌跡上に置く事で、自分から短剣が両刃によって挟み撃ちにあう状態になるようにして鋏刃を受け止めた。フィーラーはそのまま刃を退いて距離をとる。

そこから間髪入れずに、フィーラーは左の鋏刃で霧島を突きにかかってきた。霧島はそれをかわそうと左に動くが、今度はスピードに負けて横腹を掠る結果になった。続いて、フィーラーが右に握った鋏刃で刺そうとしてくる。

と、そこで横からイリリカが割り込んできた。鋏での攻撃が大振りでなくなってきたところで距離を詰め、横からトンファーで殴りかかったのだ。不意打ちだったためか、それはフィーラーを捕らえ攻撃を途中で中断させる。

フィーラーはその介入に目の色を変え、持っていた両刃を使い床を思いきり叩いた。同時に、タイルや石材の破片が飛び散る。おかげで、二人は多少の傷を負いつつ距離をとらざるを得なくなった。そこで霧島が怯んだところをすかさず、フィーラーは鋏刃で襲おうとしてきた。

だが、これも短剣が阻み攻撃を受けきる。短剣自体に衝撃を吸収する能力がなければ、今頃霧島は刃の勢いに乗せられて吹っ飛んでいるに違いない。

そして、先ほどの経験からか霧島はそこからすぐに距離をとり、追撃への対応に余裕を持たせようとした。

だが、それは失敗に終わった。フィーラーにそれを読まれていて、

飛んで距離を一気に詰められ膝蹴りを喰らわされたのだ。

それを見てか、仲間から名前を呼ぶ声が聞こえてきた。心配だ、という気持ちを思いきり前面に押し出すように声は張りあがっている。

霧島はそのまま飛んで行き、屋上を囲っているフェンスに背中から思いきりぶつかった。そして、そのままずるずると落下する。相当効いたのか、すぐに立ち上がろうとする気配はなかった。

「随分必死に避けてくれたが……ま、ここまでだな」

フィーラーはその結果を見て、さも当然だという風に声を出す。イリリカ含む三人はそれを見てフィーラーに襲い掛かろうとするが、そこで階段の方から声が聞こえてきた。敵の増援かとイリリカは思ったのか、すぐに何者か確認するべく視線を動かす。

そこに立っていたのは、金髪青目の白剣士……ラックだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8719x/

異世界渡来伝

2011年12月7日02時55分発行